

中野遺跡発掘調査報告書

防災集団移転記進事業（崎浜地区）関連遺跡発掘調査

2015

大船渡市災害復興局集団移転課
(公財)岩手県文化振興事業団

（公財）大船渡市災害復興局集団移転課
（公財）岩手県文化振興事業団

2015

中野遺跡発掘調査報告書

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第636集

中野遺跡発掘調査報告書

防災集団移転促進事業（崎浜地区）関連遺跡発掘調査



中野遺跡遠景（南から 手前が越喜来湾、奥が吉浜湾）



調査区全景（南から 道路より右側が平成24年度調査区。左側が平成25年度調査区）



平成24年度調査区全景（直上）



平成24年度調査区南側遺構群（東から）



平成25年度調査区全景（北から）



平成25年度調査区堅穴住居群（東から）



平成25年度調査区東端竪穴住居跡群（北西から）



縄文時代中期後～末葉の土器

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多くのござれております。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料であります。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らねばなりません。

一方、県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要とされます。それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財の保護との調和も求められるところであります。

(公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行ない、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は大船渡市における防災集団移転促進事業（崎浜地区）に関連して平成24年度ならびに平成25年度に発掘調査された、中野遺跡の調査成果をまとめたものであります。中野遺跡は平成24年度に新規登録された遺跡で、今回の調査成果によって縄文時代中期後葉から末葉を主体とする集落遺跡であることが分かりました。特に平成25年度調査では、石畳炉、複式炉を伴う竪穴住居跡が64棟みつかっており、中野遺跡が同地域における拠点的な集落であったことが判明しました。中野遺跡の発掘調査成果は該期の社会様相を知る貴重な資料となりえます。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての关心や理解につながると同時に、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました大船渡市灾害復興局、大船渡市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成27年3月

公益財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 菅野洋樹

例　　言

- 1 本報告書は、平成24年度、平成25年度に行った中野遺跡（大船渡市三陸町越喜来字仲崎浜121番地1ほか）の発掘調査の成果を収録したものである。
- 2 今回の調査は、防災集団移転促進事業（崎浜地区）に関わる事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課と大船渡市災害復興局との協議を経て、(公財)岩手県文化振興事業团埋蔵文化財センターが担当した。
- 3 遺跡台帳に登録されている遺跡番号は「NG22-2150」である。
- 4 遺跡略号、発掘調査期間、担当者、調査面積、委託者名は以下の通りである。

〔平成24年度〕

遺跡略号：NN-12

調査期間：平成24年10月1日～11月26日

調査担当者：須原 拓・小野寺純也

調査面積：3,050m²

委託者：大船渡市災害復興局集団移転課

〔平成25年度〕

遺跡略号：NN-13

調査期間：平成25年4月4日～9月13日

調査担当者：須原 拓・小野寺純也・久保賢治・野中裕貴

調査面積：9,000m²

委託者：大船渡市災害復興局集団移転課

- 5 室内整理期間と担当者は、以下の通りである。

〔平成24年度〕

整理期間：平成25年1月4日～平成25年3月31日

担当者：小野寺純也

〔平成25年度〕

整理期間：平成25年11月1日～平成26年3月31日

担当者：須原 拓・小野寺純也・野中裕貴

- 6 調査および整理における委託業務については次の機関に依頼した。

〔平成24年度〕

基準点測量：株式会社 中井測量設計

航空写真撮影：株式会社 東邦航空

遺構図版編集：株式会社 リッケイ

石材鑑定：花崗岩研究会

炭化物年代測定（AMS）：株式会社 加速器分析研究所

[平成25年度]

基準点測量：株式会社 中井測量設計

遺構図面の写真解析図化および遺構図版編集：株式会社 リッケイ

石器実測：株式会社 ラング

石材鑑定：花崗岩研究会

炭化材同定：木炭協会

炭化物年代測定（AMS）：株式会社 加速器分析研究所

- 7 本遺跡の調査成果は、すでに『平成24年度発掘調査報告書』（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第620集）・『平成25年度発掘調査報告書』（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第630集）において発表しているが、内容については本書が優先する。
- 8 土色の色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修1993）を使用している。
- 9 本報告書の執筆は須原 拓・小野寺純也・久保賢治・野中裕貴が行い（文末に氏名を明記）、編集は須原が行った。
- 10 本報告書で使用した地形図は、国土地理院発行1:25,000「起喜来」「陸前千歳」を使用している。
- 11 野外調査ならびに室内整理作業、報告書作成に際し、次の方々からご協力、ご指導いただいた。記して深く感謝いたします。（敬称略）
岩田貴之（北上市教育委員会）、大船渡市教育委員会、神原雄一郎（盛岡市教育委員会）、宮島 宏（フォッサマグナ・ミュージアム）、町田賢一、町田尚美（公益財團法人富山県文化振興財團 理蔵文化財調査事務所）
- 12 本遺跡の調査で得られた一切の資料、出土遺物・撮影写真・遺構実測図・遺物実測図は岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

凡　　例

1 遺構について

(1) 本文中の図版縮尺

以下を原則とし、各図版にはスケールを付している。

竪穴住居跡・住居状遺構の平面・断面：1/60・1/40　　土坑の平面・断面　　：1/30

竪穴住居跡の炉の平面・断面　　：1/30・1/20　　焼土遺構の平面・断面：1/20

(2) 遺構断面の土層注記

野外調査の際、土層の観察記録については以下の項目を基本とし、記録した。

色調（『標準土色帖』（農林水産省農林技術会議局監修）を基準とする）

粘性（4段階表示：強い、やや強い、やや弱い、弱い）

しまり（4段階表示：密、やや密、やや疎、疎）

混入物の有無（混入量は5段階表示：微量　1～10%・少量　11～20%・中量21～30%・やや多い31～40%・多量41～50%）

2 遺物について

(1) 本文中の図版縮尺は以下を原則とし、各図版にはスケールを付している。

縄文土器：1/4（立体）・1/3（破片）　　土製品：1/2

剝片石器：2/3　　礫石器：1/3・1/4・1/5

(2) 遺物図面のアミかけについては凡例図（2）に示した通りである。

(3) 観察表の表記項目について

出土地点・層位、器種、残存部位、外面文様（描線、縄文、手法）、内面調整、色調（外・内面）、焼成、土器型式（時期）について観察し、記載している。

文様：口縁部（「口」・「口縁」と表記）、胴部（「胴」と表記）、底部（「底」と表記）に分けて記載している。なお、無文の場合は特に記載していない。

焼成：土器の断面を観察し、断面内の黒色層を基準として土器の焼成具合を4分類した。

良　　好→断面に黒色層がみとめられず、断面の色調が橙色を帯びるもの。

やや良好→断面に明瞭な黒色層は認められないが、土器の内外面色調と比べ、やや暗い（黒色味がかっている）もの。

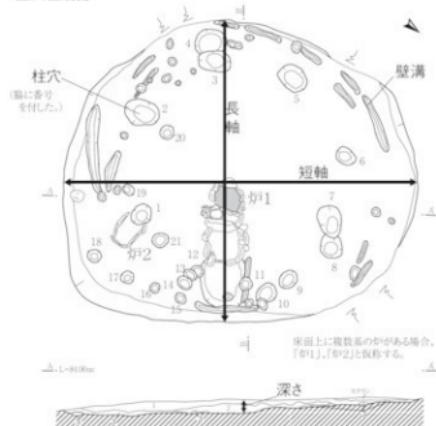
やや不良→断面の中央部にのみ黒色層がみとめられるもの。

不　　良→断面の半分以上に黒色層が認められ、焼成の際の火回りが悪いもの。

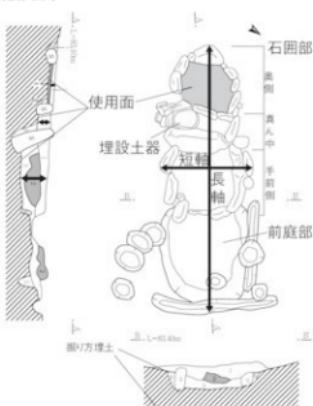
色調：外内面については『標準土色帖』（農林水産省農林技術会議局監修）の色調を基準とした。

【各遺構の規模・呼び名について】

竪穴住居跡



炉(複式炉)



【本文中の竪穴住居跡の規模について】

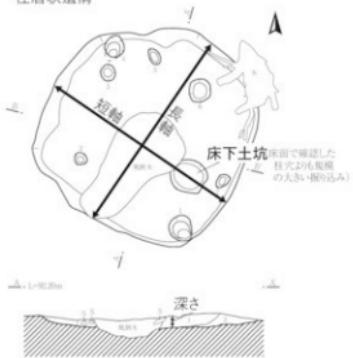
長軸：炉の長軸方向の延長線上を計測した。

短軸：上記の長軸に対し、直交方向を計測した。

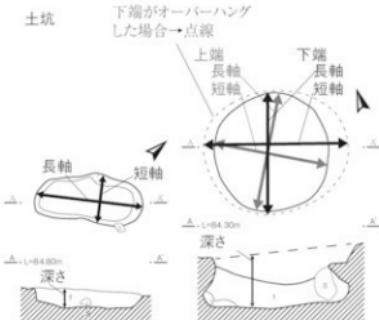
深さ：断面で確認できる範囲のうち、最も深いところを計測した。

※壁・床面が消失している場合は残存する範囲を計測し、(○cm)と記した。

住居状遺構



土坑



※焼土遺構、性格不明遺構も上記に準じる。

【表記について】



…土器片、埋設土器

…礫

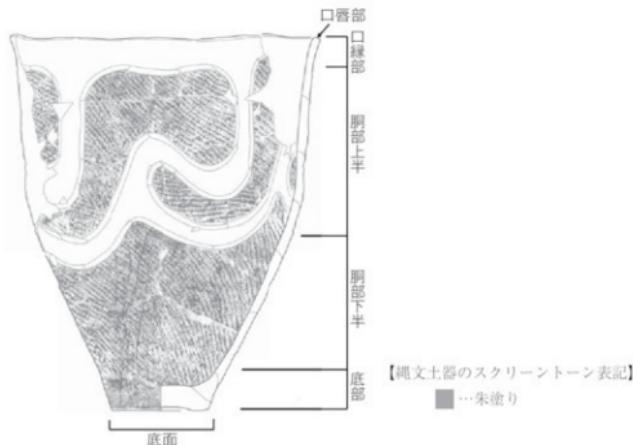


…焼土上の堆積、あるいは地山が焼成により、焼土化（赤色化）した範囲。



…炭化物の広がり。

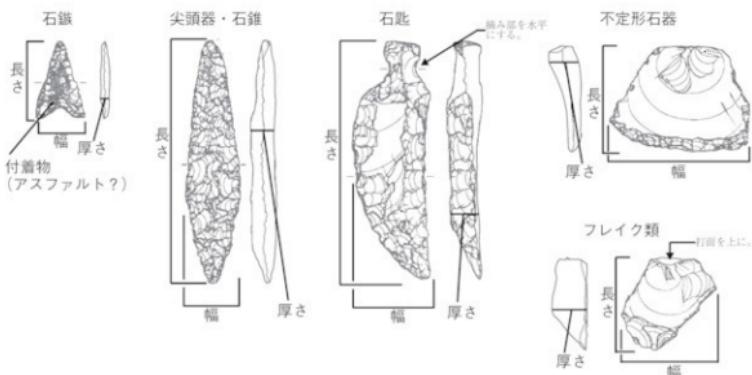
縄文土器



【縄文土器のスクリーントーン表記】

■ …朱塗り

石器



敲撃器類・石皿・台石

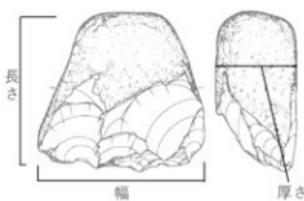


長も長いところで「長さ」を測量し、それの直交方向の「幅」を測量した。
「厚さ」は最も薄いところを測量した。

磨製石斧



礫器



【石器のスクリーントーン表記】

■ …磨痕

■ …敲打痕

目 次

I	発掘調査に至る経緯	1
II	遺跡周辺の地理的環境	1
1	遺跡の位置	1
2	遺跡の立地	3
III	遺跡周辺の歴史的環境	3
1	大船渡市内の遺跡	3
2	中野遺跡周辺の遺跡	3
IV	調査の経過と方法	5
1	平成24年度調査について	5
2	平成25年度調査について	6
V	出土遺物の分類	9
1	縄文土器	9
2	石器	10
VI	平成24年度調査	15
1	概要	15
2	検出遺構と出土遺物	18
VII	平成25年度調査	56
1	概要	56
2	検出遺構と出土遺物	64
VIII	自然科学分析	358
1	平成24年度分 放射性炭素年代測定(AMS測定)	358
2	平成25年度分 放射性炭素年代測定(AMS測定)	361
IX	総括	364
1	調査全体の概要	364
2	出土遺物について	364
3	検出遺構の時期変遷と特徴	371
	報告書抄録	512

図版目次

第1図	遺跡位置図	2	第44図	8号住居跡	71
第2図	周辺の遺跡	4	第45図	8号住居跡出土遺物	72
第3図	グリッド配置図	8	第46図	9号住居跡（1）	74
第4図	縄文土器分類図	13	第47図	9号住居跡（2）・出土遺物	75
第5図	石器分類図	14	第48図	10号住居跡	76
第6図	調査区地形・基本土層	16	第49図	10号住居跡出土遺物	77
第7図	平成24年度調査区遺構配置図	17	第50図	11号住居跡（1）	79
第8図	1号住居跡・出土遺物	18	第51図	11号住居跡（2）・出土遺物	80
第9図	2・3号住居跡重複関係・2号住居跡	20	第52図	12号住居跡（1）	81
第10図	2号住居跡出土遺物	21	第53図	12号住居跡（2）	82
第11図	3号住居跡	23	第54図	12号住居跡出土遺物（1）	83
第12図	3号住居跡出土遺物（1）	24	第55図	12号住居跡出土遺物（2）	84
第13図	3号住居跡出土遺物（2）	25	第56図	13号住居跡（1）・出土遺物	85
第14図	4号住居跡（1）	26	第57図	13号住居跡（2）	86
第15図	4号住居跡（2）	27	第58図	13号住居跡（3）	87
第16図	4号住居跡出土遺物（1）	28	第59図	14号住居跡	89
第17図	4号住居跡出土遺物（2）	29	第60図	14号住居跡出土遺物	90
第18図	4号住居跡出土遺物（3）	30	第61図	15号住居跡	91
第19図	5号住居跡	31	第62図	15号住居跡出土遺物（1）	92
第20図	5号住居跡出土遺物	32	第63図	15号住居跡出土遺物（2）	93
第21図	1～6号土坑	35	第64図	16号住居跡・出土遺物	94
第22図	7～13号土坑	36	第65図	17号住居跡	96
第23図	14～21号土坑	37	第66図	17号住居跡出土遺物	97
第24図	22・23号土坑、土坑出土遺物	38	第67図	18号住居跡	98
第25図	1号焼土遺構・出土遺物	39	第68図	18～23号住居跡の重複関係	99
第26図	柱穴内出土遺物	40	第69図	19号住居跡	101
第27図	遺構外出土遺物（1）	42	第70図	18・19号住居跡出土遺物（1）	102
第28図	遺構外出土遺物（2）	43	第71図	18・19号住居跡出土遺物（2）	103
第29図	遺構外出土遺物（3）	44	第72図	18・19号住居跡出土遺物（3）	104
第30図	遺構外出土遺物（4）	45	第73図	18・19号住居跡出土遺物（4）	105
第31図	遺構外出土遺物（5）	46	第74図	20号住居跡・出土遺物	106
第32図	遺構外出土遺物（6）	47	第75図	21・22号住居跡（1）	108
第33図	遺構検出面を覆う礫	56	第76図	21・22号住居跡（2）	109
第34図	調査区地形	57	第77図	21・22号住居跡出土遺物（1）	110
第35図	基本土層	58	第78図	21・22号住居跡出土遺物（2）	111
第36図	遺構配置図（全体）	59	第79図	21・22号住居跡出土遺物（3）	112
第37図	遺構配置図（分割1）	60	第80図	23号住居跡・出土遺物	114
第38図	遺構配置図（分割2）	61	第81図	24号住居跡（1）	115
第39図	6号住居跡（1）	65	第82図	24号住居跡（2）	116
第40図	6号住居跡（2）	66	第83図	24号住居跡出土遺物	117
第41図	6号住居跡出土遺物（1）	67	第84図	25号住居跡（1）	118
第42図	6号住居跡出土遺物（2）	68	第85図	25号住居跡（2）・出土遺物	119
第43図	7号住居跡・出土遺物	69	第86図	26号住居跡（1）	121

第87図	26号住居跡（2）	122	第132図	37号住居跡（1）	173
第88図	26号住居跡（3）・出土遺物（1）	123	第133図	37号住居跡（2）・出土遺物	174
第89図	26号住居跡出土遺物（2）	124	第134図	38号住居跡（1）	175
第90図	27号住居跡・出土遺物（1）	126	第135図	38号住居跡（2）	176
第91図	27号住居跡出土遺物（2）	127	第136図	38号住居跡出土遺物（1）	177
第92図	28号住居跡（1）	128	第137図	38号住居跡出土遺物（2）	178
第93図	28号住居跡（2）	129	第138図	39・40号住居跡重複関係	179
第94図	28号住居跡出土遺物（1）	130	第139図	39号住居跡（1）	180
第95図	28号住居跡出土遺物（2）	131	第140図	39号住居跡（2）	181
第96図	29・30号住居跡重複関係	132	第141図	39号住居跡出土遺物（1）	182
第97図	29号住居跡（1）	133	第142図	39号住居跡出土遺物（2）	183
第98図	29号住居跡（2）	134	第143図	40号住居跡（1）	185
第99図	29号住居跡出土遺物（1）	135	第144図	40号住居跡（2）	186
第100図	29号住居跡出土遺物（2）	136	第145図	40号住居跡出土遺物	188
第101図	29号住居跡出土遺物（3）	137	第146図	41号住居跡	190
第102図	30号住居跡（1）	139	第147図	41号住居跡出土遺物（1）	191
第103図	30号住居跡（2）	140	第148図	41号住居跡出土遺物（2）	192
第104図	30号住居跡出土遺物	141	第149図	41号住居跡出土遺物（3）	193
第105図	31号住居跡・出土遺物	142	第150図	42号住居跡（1）	194
第106図	32～36号住居跡重複関係	143	第151図	42号住居跡（2）	195
第107図	32号住居跡・出土遺物（1）	145	第152図	42号住居跡出土遺物	196
第108図	32号住居跡出土遺物（2）	146	第153図	43号住居跡・5・6号住居状遺構重複関係	197
第109図	32号住居跡出土遺物（3）	147	第154図	43号住居跡	198
第110図	32号住居跡出土遺物（4）	148	第155図	43号住居跡出土遺物	199
第111図	33号住居跡（1）	149	第156図	44号住居跡	200
第112図	33号住居跡（2）	150	第157図	44号住居跡出土遺物	201
第113図	33号住居跡出土遺物（1）	151	第158図	45号住居跡	202
第114図	33号住居跡出土遺物（2）	152	第159図	45号住居跡出土遺物（1）	203
第115図	33号住居跡出土遺物（3）	153	第160図	45号住居跡出土遺物（2）	204
第116図	33号住居跡出土遺物（4）	154	第161図	45号住居跡出土遺物（3）	205
第117図	33号住居跡出土遺物（5）	155	第162図	46号住居跡	206
第118図	33号住居跡出土遺物（6）	156	第163図	46号住居跡出土遺物	207
第119図	33号住居跡出土遺物（7）	157	第164図	47号住居跡（1）	209
第120図	33号住居跡出土遺物（8）	158	第165図	47号住居跡（2）・出土遺物（1）	210
第121図	33号住居跡出土遺物（9）	159	第166図	47号住居跡出土遺物（2）	211
第122図	33号住居跡出土遺物（10）	160	第167図	48号住居跡	212
第123図	33号住居跡出土遺物（11）	161	第168図	48号住居跡出土遺物	213
第124図	33号住居跡出土遺物（12）	162	第169図	49号住居跡	214
第125図	34号住居跡	164	第170図	49号住居跡出土遺物（1）	215
第126図	34号住居跡出土遺物（1）	166	第171図	49号住居跡出土遺物（2）	216
第127図	34号住居跡出土遺物（2）	167	第172図	50号住居跡	217
第128図	35号住居跡（1）	168	第173図	51号住居跡・出土遺物	218
第129図	35号住居跡（2）・出土遺物	169	第174図	52～58号住居跡重複関係	219
第130図	36号住居跡（1）	171	第175図	52号住居跡（1）	220
第131図	36号住居跡（2）・出土遺物	172	第176図	52号住居跡（2）	221

第177図	53号住居跡（1）	222	第219図	42~47号土坑	271
第178図	53号住居跡（2）	223	第220図	1号性格不明遺構	272
第179図	52・53号住居跡出土遺物（1）	224	第221図	土坑・1号性格不明遺構出土遺物	273
第180図	52・53号住居跡出土遺物（2）	225	第222図	2~4号焼土遺構・出土遺物	275
第181図	52・53号住居跡出土遺物（3）	226	第223図	柱穴第2集中地点・出土遺物	277
第182図	52・53号住居跡出土遺物（4）	227	第224図	遺構外出土遺物（1）	281
第183図	54号住居跡（1）	228	第225図	遺構外出土遺物（2）	282
第184図	54号住居跡（2）	229	第226図	遺構外出土遺物（3）	283
第185図	54号住居跡出土遺物（1）	230	第227図	遺構外出土遺物（4）	284
第186図	54号住居跡出土遺物（2）	231	第228図	遺構外出土遺物（5）	285
第187図	54号住居跡出土遺物（3）	232	第229図	遺構外出土遺物（6）	286
第188図	55号住居跡	234	第230図	遺構外出土遺物（7）	287
第189図	55号住居跡出土遺物	235	第231図	遺構外出土遺物（8）	288
第190図	56号住居跡（1）	236	第232図	遺構外出土遺物（9）	291
第191図	56号住居跡（2）	237	第233図	遺構外出土遺物（10）	292
第192図	56号住居跡出土遺物（1）	238	第234図	遺構外出土遺物（11）	293
第193図	56号住居跡出土遺物（2）	239	第235図	遺構外出土遺物（12）	294
第194図	56号住居跡出土遺物（3）	240	第236図	遺構外出土遺物（13）	295
第195図	56号住居跡出土遺物（4）	241	第237図	遺構外出土遺物（14）	296
第196図	56号住居跡出土遺物（5）	242	第238図	遺構外出土遺物（15）	297
第197図	57号住居跡・出土遺物	243	第239図	遺構外出土遺物（16）	298
第198図	58号住居跡・出土遺物	244	第240図	遺構外出土遺物（17）	299
第199図	59号住居跡	245	第241図	遺構外出土遺物（18）	300
第200図	60・61号住居跡（1）	247	第242図	遺構外出土遺物（19）	301
第201図	60・61号住居跡（2）	248	第243図	遺構外出土遺物（20）	302
第202図	60・61号住居跡（3）・出土遺物（1）	249	第244図	遺構外出土遺物（21）	303
第203図	60・61号住居跡出土遺物（2）	250	第245図	遺構外出土遺物（22）	304
第204図	62号住居跡・出土遺物	251	第246図	遺構外出土遺物（23）	305
第205図	63号住居跡・出土遺物	253	第247図	遺構外出土遺物（24）	306
第206図	64号住居跡・出土遺物	255	第248図	遺構外出土遺物（25）	307
第207図	1号住居状遺構・出土遺物	257	第249図	遺構外出土遺物（26）	308
第208図	2号住居状遺構・出土遺物	258	第250図	遺構外出土遺物（27）	309
第209図	3号住居状遺構・出土遺物	259	第251図	遺構外出土遺物（28）	310
第210図	4号住居状遺構	260	第252図	織文土器集成	365
第211図	5号住居状遺構	261	第253図	石器の分析	367
第212図	5号住居状遺構出土遺物	262	第254図	土製品・石製品	369
第213図	6号住居状遺構	263	第255図	集落の変遷（1）	372
第214図	6号住居状遺構出土遺物	264	第256図	集落の変遷（2）	373
第215図	7号住居状遺構・出土遺物	265	第257図	炉の変遷	374
第216図	24~29号土坑	268			
第217図	30~35号土坑	269			
第218図	36~41号土坑	270			

表 目 次

第1表 遺構名変更表	7	第6表 平成24年度出土遺物観察表	48
第2表 フレイク集中範囲出土フレイク母岩一覧	12	第7表 平成25年度出土遺物一覧	62
第3表 平成24年度出土遺物一覧	15	第8表 平成25年度土坑一覧	267
第4表 平成24年度土坑一覧	34	第9表 平成25年度柱穴一覧	278
第5表 平成24年度柱穴一覧	40	第10表 平成25年度出土遺物観察表	311

写真図版目次

写真図版1 基本土層・1号住居跡(1)	380	写真図版37 47・48号住居跡	416
写真図版2 1号住居跡(2)・2号住居跡	381	写真図版38 49~51号住居跡	417
写真図版3 3号住居跡	382	写真図版39 52・53号住居跡	418
写真図版4 4号住居跡	383	写真図版40 54・55号住居跡	419
写真図版5 5号住居跡	384	写真図版41 55・56号住居跡	420
写真図版6 1~4号土坑	385	写真図版42 57~59号住居跡	421
写真図版7 5~8号土坑	386	写真図版43 60・61号住居跡	422
写真図版8 9~12号土坑	387	写真図版44 62・63号住居跡	423
写真図版9 13~16号土坑	388	写真図版45 64号住居跡	424
写真図版10 17~20号土坑	389	写真図版46 1~4号住居状遺構	425
写真図版11 21~23号土坑・1号焼土遺構	390	写真図版47 5~7号住居状遺構・24号土坑	426
写真図版12 6~7号住居跡	391	写真図版48 25~28号土坑	427
写真図版13 7~8号住居跡	392	写真図版49 29~32号土坑	428
写真図版14 9~10号住居跡	393	写真図版50 33~36号土坑	429
写真図版15 10~11号住居跡	394	写真図版51 37~40号土坑	430
写真図版16 12~13号住居跡	395	写真図版52 41~44号土坑	431
写真図版17 13~14号住居跡	396	写真図版53 45号土坑・1号性格不明遺構	
写真図版18 15~16号住居跡	397	・2・3号焼土遺構	432
写真図版19 16~19号住居跡	398	写真図版54 繩文土器(1)	433
写真図版20 18~20号住居跡	399	写真図版55 繩文土器(2)	434
写真図版21 21~23号住居跡	400	写真図版56 繩文土器(3)	435
写真図版22 24・25号住居跡	401	写真図版57 繩文土器(4)	436
写真図版23 25・26号住居跡	402	写真図版58 繩文土器(5)	437
写真図版24 27・28号住居跡	403	写真図版59 繩文土器(6)	438
写真図版25 28・29号住居跡	404	写真図版60 繩文土器(7)	439
写真図版26 29~31号住居跡	405	写真図版61 繩文土器(8)・石器(1)	440
写真図版27 32・33号住居跡	406	写真図版62 石器(2)	441
写真図版28 33・34号住居跡	407	写真図版63 繩文土器(1)	442
写真図版29 34・35号住居跡	408	写真図版64 繩文土器(2)	443
写真図版30 36・37号住居跡	409	写真図版65 繩文土器(3)	444
写真図版31 37・38号住居跡	410	写真図版66 繩文土器(4)	445
写真図版32 39・40号住居跡	411	写真図版67 繩文土器(5)	446
写真図版33 41・42号住居跡	412	写真図版68 繩文土器(6)	447
写真図版34 42・43号住居跡	413	写真図版69 繩文土器(7)	448
写真図版35 44・45号住居跡	414	写真図版70 繩文土器(8)	449
写真図版36 46・47号住居跡	415	写真図版71 繩文土器(9)	450

写真図版72 縄文土器 (10).....	451	写真図版103 縄文土器 (41)	482
写真図版73 縄文土器 (11).....	452	写真図版104 縄文土器 (42)	483
写真図版74 縄文土器 (12).....	453	写真図版105 縄文土器 (43)	484
写真図版75 縄文土器 (13).....	454	写真図版106 縄文土器 (44)	485
写真図版76 縄文土器 (14).....	455	写真図版107 縄文土器 (45)	486
写真図版77 縄文土器 (15).....	456	写真図版108 縄文土器 (46)	487
写真図版78 縄文土器 (16).....	457	写真図版109 石器 (1)	488
写真図版79 縄文土器 (17).....	458	写真図版110 石器 (2)	489
写真図版80 縄文土器 (18).....	459	写真図版111 石器 (3)	490
写真図版81 縄文土器 (19).....	460	写真図版112 石器 (4)	491
写真図版82 縄文土器 (20).....	461	写真図版113 石器 (5)	492
写真図版83 縄文土器 (21).....	462	写真図版114 石器 (6)	493
写真図版84 縄文土器 (22).....	463	写真図版115 石器 (7)	494
写真図版85 縄文土器 (23).....	464	写真図版116 石器 (8)	495
写真図版86 縄文土器 (24).....	465	写真図版117 石器 (9)	496
写真図版87 縄文土器 (25).....	466	写真図版118 石器 (10)	497
写真図版88 縄文土器 (26).....	467	写真図版119 石器 (11)	498
写真図版89 縄文土器 (27).....	468	写真図版120 石器 (12)	499
写真図版90 縄文土器 (28).....	469	写真図版121 石器 (13)	500
写真図版91 縄文土器 (29).....	470	写真図版122 石器 (14)	501
写真図版92 縄文土器 (30).....	471	写真図版123 石器 (15)	502
写真図版93 縄文土器 (31).....	472	写真図版124 石器 (16)	503
写真図版94 縄文土器 (32).....	473	写真図版125 石器 (17)	504
写真図版95 縄文土器 (33).....	474	写真図版126 石器 (18)	505
写真図版96 縄文土器 (34).....	475	写真図版127 石器 (19)	506
写真図版97 縄文土器 (35).....	476	写真図版128 石器 (20)	507
写真図版98 縄文土器 (36).....	477	写真図版129 石器 (21)	508
写真図版99 縄文土器 (37).....	478	写真図版130 石器 (22)	509
写真図版100 縄文土器 (38).....	479	写真図版131 石器 (23)	510
写真図版101 縄文土器 (39)	480	写真図版132 石器 (24)・陶磁器・砥石・錢貨	511
写真図版102 縄文土器 (40)	481		

I 発掘調査に至る経緯

中野遺跡は、「防災集団移転促進事業崎浜地区」の宅地等造成工事に伴い、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

防災集団移転促進事業（崎浜地区）は、平成23年3月11日に発生した東日本大震災により被災した住民の生命、身体及び財産を災害から保護するため、安全な高台に住居の集団的移転を促進するための事業である。事業対象地域である「崎浜地区」においては、大船渡市と地域の被災住民間で協議を重ね、復興まちづくりに向けた合意形成がなり、国土交通大臣に協議し、平成24年9月24日にその同意を得て、集団移転促進事業計画が策定された。

この間、事業の対象地域に係わる埋蔵文化財の取り扱いについても協議が重ねられた。岩手県においては市町村が主体となる開発に関連する埋蔵文化財調査は市町村教育委員会が担当することとなっているが、復興関連調査の増大と調査員不足の状況から、県教育委員会が協議・調整を行い、本調査においては公益財團法人岩手県文化振興事業団の受託事業とすることとなった。

当事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、大船渡市災害復興局集団移転課から平成24年5月17日に大船渡市教育委員会に対して試掘調査の依頼を行った。

依頼を受けた大船渡市教育委員会は平成24年6月5日から6月22日にかけて試掘調査を実施し、工事に着手するには中野遺跡の発掘調査が必要となる旨を平成24年7月5日付け教生第115号「防災集団移転促進事業に伴う埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」により通知した。

その結果を踏まえて大船渡市災害復興局集団移転課は岩手県教育委員会及び大船渡市教育委員会と協議し、調整を受けて平成24年9月25日付けで公益財團法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

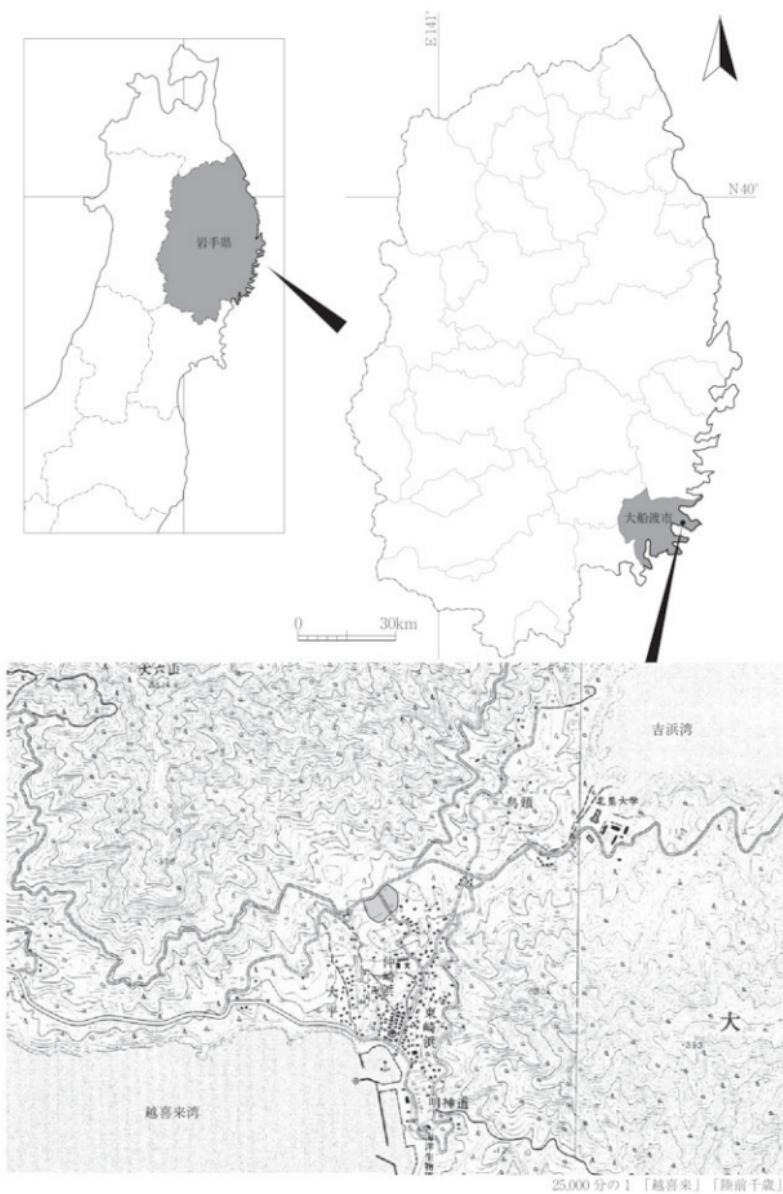
(大船渡市災害復興局集団移転課)

II 遺跡周辺の地理的環境

1 遺跡の位置

中野遺跡は大船渡市三陸町越喜来字仲崎浜121番地1ほかに所在し、起喜来湾から北へ約3kmに位置する。座標では北緯39度37分17秒、東經141度54分45秒付近に相当し、国土地理院発行の5万分の1地形図「綾里」の図幅に含まれる。

今回、本遺跡は東日本大震災後における高台住宅移転に伴い、発掘調査が実施されることとなった。調査前の現況は森林・荒地であったが、昭和初期ごろまでは水田・畑地として利用されていた。そのため、後述する通り、本来は斜面地であったものを水田開発のため、ひな壇状に開析した形跡が見受けられ、それに伴い遺跡の一部が激しく削平されていた。



第1図 遺跡位置図

2 遺跡の立地

中野遺跡はリアス式海岸にあたる起喜来湾と吉浜湾に挟まれた半島の中央、大六山（514.8m）から続く南東向き斜面上に立地する。この半島には、岬側にもう一つ名称の無い山地（443.7m）があり、中野遺跡が立地する斜面地は、この二つの山に挟まれた谷地形である。したがって中野遺跡は眼前に越喜来湾が広がる、日当たりの良い、集落が展開するには好条件な環境を備え、かつ、半島のほぼ中央にいながら、吉浜湾と越喜来湾とを容易に往来できる要所でもある。

調査区の標高は60～90m前後を測る。海（起喜来湾）まで約3kmと、近い距離にありながら、標高は100m近くまで上り下りするという、狭い半島に山地がそびえる特徴的な地形である。中野遺跡が立地する斜面地は、そのなかでも比較的急斜面地である。

III 遺跡周辺の歴史的環境

1 大船渡市内の遺跡

大船渡市からは多数の遺跡がみつかっており、時代ごとに概観してみても縄文時代早期から近世に至る各時代の遺跡が確認されている。なかでも縄文時代の遺跡は多い。大船渡市域では特に大船渡海岸において多く、国指定史跡である蛸ノ浦貝塚や下船渡貝塚、大洞貝塚など著名な遺跡が存在する。これらの貝塚からは多量の縄文土器や石器が出土しているほか、鹿角製の釣針やモリなどの漁具や、食料とされた貝や魚の骨などがみつかっている。みつかった貝や魚骨のなかにはアサリやカキ、ホタテのほか、マグロ、ブリ、カツオなどが出土し、当時の海の豊かさをうかがい知ることができる。

一方、中野遺跡の所在する旧三陸町に目を転じると、遺跡は73箇所で確認されている。こちらも縄文時代の遺跡が多く、また確認されている73遺跡中、14遺跡は貝塚である。ただし調査事例は少なく、宮野貝塚、田代遺跡、中村遺跡のみである。

2 中野遺跡周辺の遺跡

上述の通り、旧三陸町内の発掘調査例が少なく、中野遺跡の周辺ではその全容が確認できた遺跡は少ない。ここでは調査事例のある宮野貝塚、田代遺跡、中村遺跡について触れておく（第2図）。

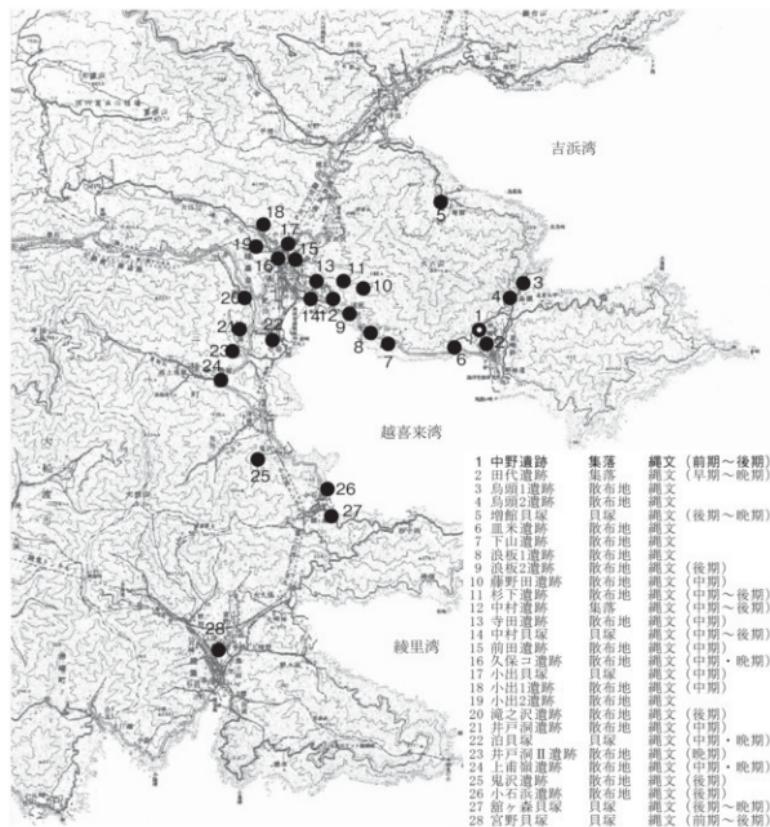
宮野貝塚（28）は三陸町綾里字宮野に所在する。昭和15年の大山柏氏らによる発掘調査を皮切りに、たびたび調査が行われている。主に貝層が調査され、縄文時代前期から弥生時代にかけての土器などが出土している。特筆すべき点として、イノシシの犬歯を使ったネックレスをした壮年女性の埋葬人骨や寛骨に石鎚が刺された熟年男性の全身人骨の発見がある。近年では貝層周辺も調査され、中期～後期の堅穴住居跡がみつかっており、貝層を形成した集落についても明らかになりつつある。

田代遺跡（2）は中野遺跡の南西側に隣接する遺跡である。大船渡市教育委員会により平成20年度以降、数回にわたり調査が行われてきた。遺跡の標高は60～65mを測り、斜面がわずかに海岸へとせり出す丘陵地形上に立地する。田代遺跡からは縄文時代早期から後期の遺物が出土しており、また縄文時代中期初頭、中期後葉～末葉の堅穴住居跡が複数棟ずつみつかっており、中期のながきにわたり存続する集落遺跡であることが判明している。また行われてきた調査はそれぞれごく限られた範囲を

対象としつつも、出土遺物量が多く、大きな規模の遺跡であることが予想される。出土遺物量は特に南斜面下方部に向かうにつれ多くなる傾向にあるので、未調査範囲にかなり大規模な縄文集落が存在することも推測されている。

中村遺跡（12）は三陸町越喜来字波板に所在する。越喜来湾にほど近い場所にもかかわらず、標高は45m前後を測る、南向き緩斜面地上に立地する。平成25年度に発掘調査が行われ、縄文時代中期後葉（大木8aから8b式期）の堅穴住居23棟、同時期と推測される貯蔵穴31基がみつかっている。

さて中野遺跡は平成24年度新規登録された遺跡である。したがって遺跡の内容については今回の調査以前は知られていない。ただし、周辺には縄文時代の大きな遺跡が点在し、特に近接する田代遺跡は縄文時代中期の大規模集落である可能性が高い。そして、中野遺跡では表探、試掘等で田代遺跡からの出土遺物と同時期の遺物が出土しており、中野遺跡も田代遺跡と同等の遺跡であるものと推測されていた。



第2図 周辺の遺跡

IV 調査の経過と方法

1 平成24年度調査について

(1) 野外調査

本調査に先立ち、大船渡市教育委員会により試掘調査が実施され、委託者との協議を経て調査区が設定されている。

平成24年10月1日（月）より調査を開始した。調査員2名、野外作業員17名体制で行った。

重機（バックホー 0.45m³、キャリアダンプ 6t）を用いて表土除去を行い、その後、人力による遺構検出作業から行った。検出した遺構は、規模や性格により、適宜に4分法と2分法を選択し、精査を行った。各遺構については平面と断面、また必要に応じ遺物出土状況の実測および、写真撮影を行った。遺構図の実測には、CUBIC社製遺構実測ソフト「遺構くん」を用いて光波トランシットによる測量を行った。遺物の取り上げについては出土量が多い場所は5m四方に設定した取り上げグリッドを設定し、取り上げを行った。出土量の少ない場所はトータルステーションを用いて座標を確認しつつ取り上げを行った。なお、報告書掲載の遺物については第3図に示したグリッドに変換し、観察表に表記している。

写真撮影は主に、デジタルカメラ1台（キャノンEOS50D）と6×9判カメラ1台（モノクローム）を使用し、同角度のデジタル写真・銀塩写真両方を撮影している。またセスナ機による航空撮影を用いた全景写真撮影を行った（株式会社 東邦航空に委託）。

平成24年11月19日（月）に委託者、県教育委員会立ち会いの下、終了確認を受けた。以降、残務を片付けつつ、11月26日（月）に調査を終了し、撤収した。

(2) 室内整理

平成25年1月4日から平成25年3月29日の期間に室内整理作業を行った。調査員1名、室内作業員1名体制である。

遺物は概ね野外作業の段階で水洗を終えており、室内作業ではそれ以降の工程（仕分け・注記、接合復元、実測、トレース、図版作成、収納）を作業員が分担した。調査員は、原稿執筆、遺物観察表作成、実測図や図版のチェックを行った。

遺物の写真撮影は当センターの写場において写真技師が撮影を行った。撮影にはデジタルカメラ（EOS 1ds）を用いている。

遺構図面の整理は、（株）リッケイに業務委託しており、野外調査時に作成した図面（「遺構くん」による平面図データと手作業により作成した断面図）から、調査員の指示のもと、第2原図作成および遺構図版作成を行った。

遺構・遺物図版の作成にはAdobe社「IllustratorCS5」を使用し、デジタル図版を作成した。

なお本報告書作成にあたり、各遺構名を野外調査時から変更した。本報告書に記された遺構名を優先する。遺構名の変更については第1表の通りである。

2 平成25年度調査について

(1) 野外調査

平成25年4月4日（木）から調査を開始した。調査員4名、野外作業員30名体制で行った。

重機による表土除去は、バックホー（0.7m³・0.45m³）、キャリアダンプ（6t）・ダンプトラック（4t）を用いて堆土運搬まで効率的に行なうようにしている。なお調査面積が広いこともあり、調査開始当初から約2か月間は人力による遺構検出作業も並行して行った。

遺構の精査については、基本は平成24年度調査でのやり方を踏襲している。ただし遺構の実測方法については、遺構数が多いことと調査期間の短縮のため、デジタルカメラ（Canon PowerShot S60）を用いた写真解析測量を活用した（撮影は調査員が行い、解析作業および、図化作業は（株）リッケイへ委託した）。

写真撮影は主に、デジタルカメラ1台（キヤノンEOS50D）と6×7判カメラ、35mm一眼レフカメラ（モノクローム）を使用し、同角度のデジタル写真・銀塩写真両方を撮影している。またラジコンヘリによる全景写真撮影を行った（株式会社 リッケイに委託）。

なお調査区北側3,300m²については、7月1日に部分終了確認を経て調査終了とした。これは8月に調査区北側範囲で、宅地造成に関連して地質調査に関わるボーリング調査が行われることになり、先だって調査終了とする必要性が生じたことによるものである。

また残りの調査範囲については、想定されていたよりも遺構検出数量が多いことから9月半ばまでの調査期間の延長を願い出、8月21日に委託者から承認を得た。

普及活動の一環として、8月3日に現地説明会を開催した。地元住民を中心に約80人が来訪し、遺跡を見学した。

また調査期間中、震災被害者を対象とした地元向けの新聞を発行する以下の機関から取材を受けている。

NPO法人 夢ネット（『復興ニュース』紙発行）

（株）ジャパンクリエイト（『大船渡仮設住宅支援員新聞 はまらい』紙発行）

9月5日に委託者、県教育委員会立ち会いの下、残り5,700m²についての終了確認を受け、調査終了が確定した。

9月13日にすべての調査業務を終了し、撤収した。

(2) 室内整理

平成25年9月1日から平成26年3月31日の期間に室内整理作業を行った。調査員2名（3月は3名）、室内作業員7名体制である。

遺物は主に室内作業員により、9月1日から10月末までの段階で水洗と注記を終え、11月以降は遺物仕分け、接合復元、実測、トレイス、図版作成、収納を分担した。またその間、調査員は原稿執筆、遺物観察表作成、実測図や図版のチェックを行った。

遺物の写真撮影は当センターの写場において写真技師が撮影を行った。撮影にはデジタルカメラ（EOS 1Ds）を用いている。

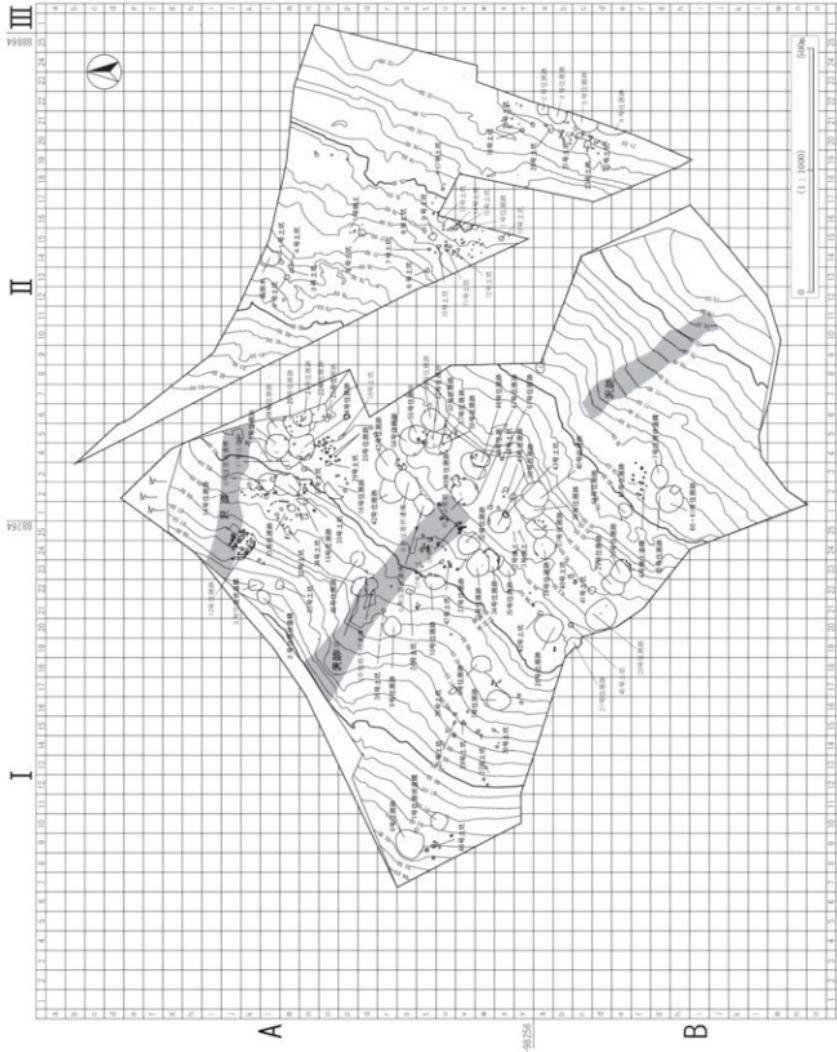
遺構図面の整理は、（株）リッケイに業務委託し、野外調査時、写真解析により作成した図面から、調査員の指示のもと、第2原図作成および遺構図版作成を行った。

遺構・遺物図版の作成にはAdobe社「IllustratorCS5」を使用し、デジタル図版を作成した。

第1表 遺構名変更表

遺構名	旧遺構名	遺構名	旧遺構名	遺構名	旧遺構名
1号住居跡	SI1	41号住居跡	SI51	11号土坑	SK2
2号住居跡	SI3	42号住居跡	SI23	12号土坑	SK7
3号住居跡	SI4	43号住居跡	SI24	13号土坑	SK8
4号住居跡	SI2	44号住居跡	SI39	14号土坑	SK3
5号住居跡	SI5	45号住居跡	SI50	15号土坑	SK4
6号住居跡	SI6	46号住居跡	SI64	16号土坑	SK9
7号住居跡	SI8	47号住居跡	SI60	17号土坑	SK11
8号住居跡	SI9	48号住居跡	SI65	18号土坑	SK19
9号住居跡	SI10	49号住居跡	SI61	19号土坑	SK20
10号住居跡	SI31	50号住居跡	SI62	20号土坑	SK21
11号住居跡	SI32	51号住居跡	SI63	21号土坑	SK18
12号住居跡	SI20	52号住居跡	SI66a	22号土坑	SK23
13号住居跡	SI19	53号住居跡	SI66b	23号土坑	SK22
14号住居跡	SI27	54号住居跡	SI56	24号土坑	SK24
15号住居跡	SI16	55号住居跡	SI57	25号土坑	SK26
16号住居跡	SI15	56号住居跡	SI67	26号土坑	SK27
17号住居跡	SI18	57号住居跡	SI68	27号土坑	SK28
18号住居跡	SI13b	58号住居跡	SI69	28号土坑	SK31
19号住居跡	SI13a	59号住居跡	SI70	29号土坑	SK32
20号住居跡	SI12	60号住居跡	SI43	30号土坑	SK30
21号住居跡	SI11b	61号住居跡	SI45	31号土坑	SK37
22号住居跡	SI11a	62号住居跡	SI47	32号土坑	SK38
23号住居跡	SI17	63号住居跡	SI46	33号土坑	SK40
24号住居跡	SI14	64号住居跡	SI48	34号土坑	SK41
25号住居跡	1 - 2号埋設土器	1号住居状遺構	SI7	35号土坑	SK39
26号住居跡	SI28	2号住居状遺構	SI21	36号土坑	SK50
27号住居跡	SI29	3号住居状遺構	SK35	37号土坑	SK51
28号住居跡	SI30	4号住居状遺構	SI22	38号土坑	SK53
29号住居跡	SI59	5号住居状遺構	SI25	39号土坑	SK54
30号住居跡	SI49	6号住居状遺構	SI26	40号土坑	SK55
31号住居跡	SI33	7号住居状遺構	SI33	41号土坑	SK56
32号住居跡	SI35	1号土坑	SK17	42号土坑	SK57
33号住居跡	SI34	2号土坑	SK13	43号土坑	SK58
34号住居跡	SI37	3号土坑	SK15	44号土坑	SK59
35号住居跡	SI36	4号土坑	SK16	45号土坑	SK60
36号住居跡	SI41	5号土坑	SK1	46号土坑	SD01
37号住居跡	SI58	6号土坑	SK6	47号土坑	SK36
38号住居跡	SI42	7号土坑	SK12	2号地上遺構	SF01
39号住居跡	SI39	8号土坑	SK10	3号地上遺構	SF02
40号住居跡	SI55	9号土坑	SK14	4号地上遺構	SF03
		10号土坑	SK5	1号性格不明遺構	SK01

なお本報告書作成にあたり、各遺構名を野外調査時から変更した。本報告書に記された遺構名を優先する。遺構名の変更については第1表の通りである。



第3図 グリッド配置図

V 出土遺物の分類

1 繩文土器

本遺跡出土の縩文土器については、以下のような基準を設け、時期、土器型式を判断した。以降、出土遺物に関する記載も同様である。

〔前期〕

前 期 前 葉

胎土に纖維が混入し、単節斜行縩文が施文される一群。口唇部は平縁が多いが、波状や刻みが巡るものもある。また底部尖底や内面にも斜行縩文が施文されるものがあるが、どれも小片で全容が定かではなく早期末葉に該当する可能性もあるが、該期に含む。また「縄の束」回転文や組縩文も認められる。

大 木 1 式

胎土に纖維が混入し、口縁部に環付末端回転文（ループ文）が施文される一群、また非結束羽状縩文が横位に展開する一群。

大 木 2 a 式

胎土に纖維が混入し、口縁部に結節回転文が巡る一群。胴部には単節斜行縩文や結束羽状縩文が施文される。また単軸絡条件5類（網目状撚糸文）や組紐が施文されるものも該期に含んだ。

大 木 3 式

単節斜行縩文を地文とし、沈線による円文、幾何学文やジグザグの沈線文などが施文される一群。本遺跡出土に関しては胎土に纖維は含まれない。

大 木 4 式

胎土に纖維を含まず、単節斜行縩文を施文し、口縁部に細い貼付隆帯を波状や幾何学状に施文する一群。

白 座 式

胎土に纖維を含まず、口唇部直下に幅広の刻み、口縁部に多段の結節回転文、胴部には組紐が施文される一群。前期大木式土器との並行関係は不明である。

〔中期後葉～末葉〕

大 木 8 a 式

点数は少ないが、口縁部を隆帯で区画し、区画内に縩文原体を押圧して文様を描く一群。

大 木 8 b 式

口縁部から胴部上半にかけ、単節斜行縩文を地文とし、隆帯や隆沈線による渦巻き文が描かれる一群。渦巻文からは2条1単位とした隆帯が付く。

大木9式古段階

口縁部に沈線や隆帯による渦巻文を施文、口縁部下半から胴部には隆帯による方形や梢円形の区画文が縦位に描かれる一群。区画内には磨消技法により単節、あるいは複節斜行縩文が施文される。

大木9式新段階

口唇部直下は無文、口縁部から胴部にかけ沈線による梢円形区画文が縦位に描かれる一群。区画内は磨消技法による単節、あるいは複節斜行縩文が施文され、まれに棒状工具による刺突文が充填

される。

大木10式古段階

口唇部直下は無文、口縁部から脣部上半にかけて棒円形あるいは弧状の区画文が施文される一群。区画内には斜行繩文が施文されるが、充填技法が主体。まれに磨消技法も見受けられる。脣部下半は波状沈線により脣部上半と区画され、斜行繩文が施文される。

大木10式中段階

口唇部直下は無文、口縁部から脣部上半にかけては「S」字状、クランク状の区画文が連鎖状に描かれる一群。区画内には充填技法による斜行繩文が施文される。脣部下半は古段階と同様である。

大木10式新段階

口縁部は無文、脣部は斜行繩文を地文とし、細隆帯による円形や弧状の区画文（区画内無文）が描かれる。また隆帯による弧状の区画文が縦位に垂下する一群もあるが、隆帯の上部に鱗状突起が付されるものが多い。脣部下半は中段階までみられた波状沈線文による区画がない。

〔後期初頭、前葉〕

門 前 式

口縁部から脣部上半にかけ連鎖状隆帯が垂下する一群。小片が多く定かではないが、脣部にいわゆる「帶繩文」を施文する一群も含める。

三十種場式系統

口縁部は無文で刻みを施す隆帯のみが垂下、脣部は単節斜行繩文を地文とし、上半のみ棒状工具による「花弁状割突文」を充填する一群。北越地方、後期初頭の「三十種場式」に類似するが、形態や文様構成など相違点も多く、「系統」とした。

2 石

器

中野遺跡からは中コンテナ約22箱分の石器が出土している。器種の内訳は石鎌・尖頭器・石錐・石匙・両極石器・不定形石器・磨製石斧・礫器・敲磨器類・石皿・台石・石核・ユーズドフレイク・リタップドフレイク・フレイクである。

石 鎌

扁平で、二次加工により銳角な先端部が作り出され、長さ5cm以下のもの。出土した石鎌は形態から以下のように4分類でき、ほかに製作途中（未成品）がある。

1類：円基無茎鎌 2類：平基無茎鎌 3類：円基鎌 4類：尖基鎌あるいは棒状

尖 頭 器

二次加工により両端を銳利に作り出した長さ10cm大のもの。数が少ないので細分していない。

模 形 石 器

形態は方形基調で、上下方向、もしくは上下左右方向に打撃による階段状剥離が連続するもの。階段状剥離から2分類した

1類：上下方向のみ。 2類：上下左右方向にみられるもの。

石 锥

二次加工により錐状の端部が作出されるもの。形態から以下のように分類した。

1類：棒状を呈する。 2類：摘み部より錐部の方が短いもの。

3類：摘み部より錐部の方が長いもの。 4類：摘み部の無いもの。

石匙

突出した摘み部を作出し、また二次加工により幅広の刃部が作出されたもの。刃部の向きで3分類した。

1類：刃部が縦方向に付くもの。 2類：刃部が横方向に付くもの。

3類：刃部が斜方向に付くもの。

不定形石器

定形化した形状をもたず、扁平で縁辺部半分以上に刃部作出と考えられる二次加工を施しているものを一括した。刃部角度や刃部の形状から3分類した。

1類：刃部の角度が60°以下のもの。所謂、「削器」。

2類：刃部の角度が60°以上のもの。所謂、「搔器」。

3類：刃部作出の二次加工が、粗いものまたは不連続であるもの。

ユーズドフレイク（以下、Uフレイクと表記）

フレイクの中で、縁辺に微細剥離が連続するものや二次加工が縁辺の一部にしか連続しないものを、不定形石器や後述するフレイクとも区別し、Uフレイクとした。

リタッヂドフレイク（以下、Rフレイクと表記）

フレイクの中で、最終剥離面において刃部作出とは考えられない二次加工が施されているものを、後述するフレイクとは区別するためRフレイクとした。

礫器

礫または大形の剥片を素材とし、周辺の一部に大きな剥離を連続的に加え、刃部としたもの。

磨製石斧

平面形が撥形、長方形を呈し、剥離や敲打によって整形された後、研磨を施して仕上げられた石斧。

敲磨器類

大きさは長軸あるいは長径が10cm以下で、磨痕、敲打痕、凹痕が確認できた礫石器。所謂「磨石」、「凹石」、「敲石」を一括した。使用痕の種類や組み合わせで7分類した。

1類：正裏面ないし、側面において磨痕のみが確認されるもの。磨面が複数になるものも含む。

2類：端部や側面に敲打痕のみを有するもの。複数の敲打痕をもつものも含む。

3類：磨痕、敲打痕どちらも見受けられる者もの。複数面に有するものも含む。

石皿

扁平な大型の礫石器で、長軸、短軸とともに10cm以上。正裏面で磨痕、敲打痕などの使用痕跡が確認できたもの。

台石

厚みのある大型の礫石器で、長軸、短軸とともに10cm以上。主に上部で敲打痕や磨痕などの使用痕跡が確認できたもの。

フレイク

上記の分類項目全てからはずれた剥片石器。打面と背面の形状から以下のように分類した。

まず打面の調整具合で3分類した。

1類：自然を打面とするもの。 2類：1度剥離作業を行った面を打面とするもの。

3類：2回以上、剥離作業を行った面を打面とするもの。

また、背面にみられる自然面の残存状況により3分類した。

a類：背面全てが自然面（剥離なし） b類：背面の一部に自然面残るもの。

c類：背面に自然面が見られないもの。

これらの組み合わせで9分類を構成する。また打面が欠損しているものなど、分類不能なものについては、以下のように2分類した。

4 a類：いずれかの面に自然面が残るもの。 4 b類：自然面が全く残らないもの。

石器の石質に関して

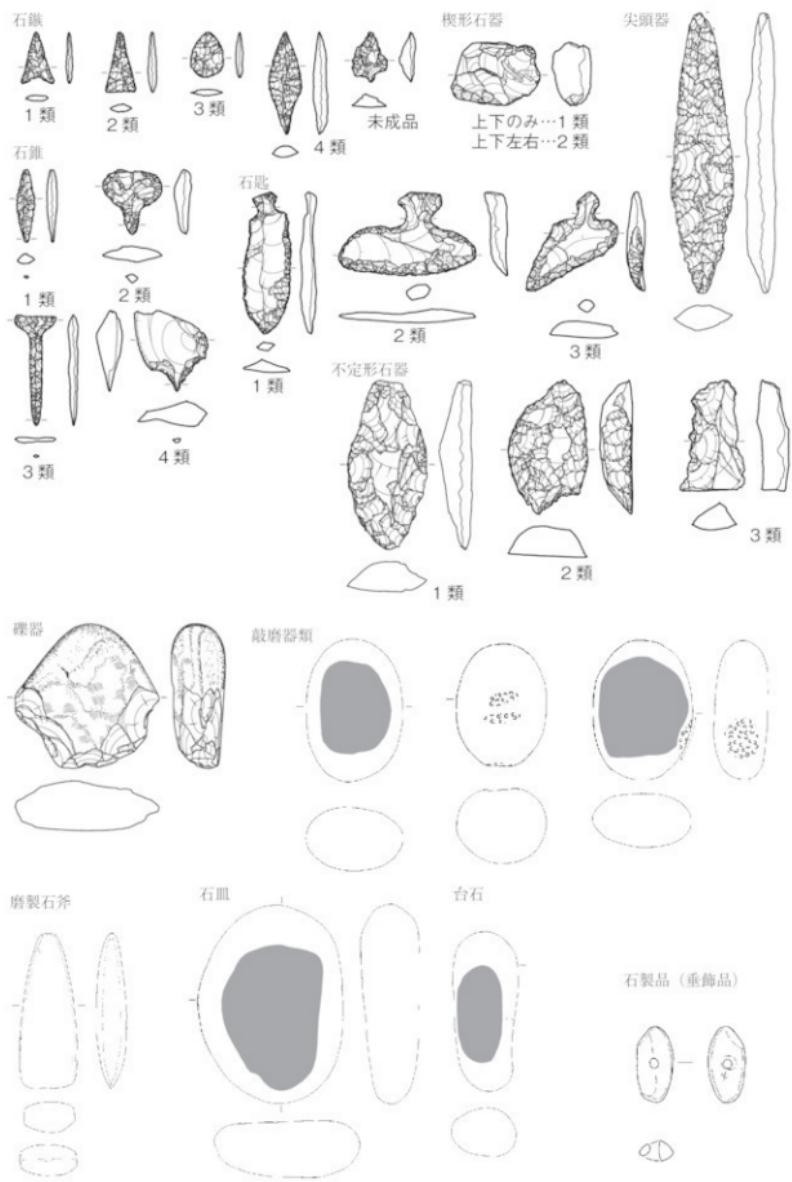
出土した石器については、花崗岩研究会によりその石質を鑑定し、掲載資料に関しては観察表に記した。また後述する34・35・56号住居跡床面や壁溝内から見つかったフレイク集中範囲のフレイクに関しては、全て頁岩であるが、その接合関係を検討する際、母岩分類を試みている。その中で38の母岩が確認されている。以下はフレイク集中範囲出土のフレイク、母岩一覧である。

第2表 フレイク集中範囲出土 フレイク母岩一覧

母岩番号	剥離面	自然面	特徴
1	黒色 (5Y2/1)	不明	光沢あり、フルフル
2	黄灰色 (2SY5/1)	暗灰黄色 (2SY5/2)	光沢なく、ザラザラ
3	黄灰色 (2SY4/1)	浅黄色 (2SY7/3)	光沢なく、ややザラザラ
4	黄灰色 (10YR4/1)	にふく黃褐色 (10YR7/2)	光沢あり、フルフル。白色粒混じる
5	黄灰色 (2SY6/1)	浅黄色 (2SY7/3)	光沢あり、ザラザラ。白色粒混じる
6	灰白色 (10YR4/2)	不明	光沢なく、ややザラザラ
7	黒褐色 (10YR3/1)	明黄褐色 (10YR6/6)	光沢あり、灰黒褐色の縦横雜入る
8	褐褐色 (10YR4/1)	にふく黃褐色 (10YR7/3)	光沢あり、フルフル。白色粒混じる
9	褐褐色 (10YR4/1)	不明	光沢あり、極わずかに白色粒混じる
10	灰色 (5YR6/1)	灰白色 (5YR7/1)	光沢なく、ややザラザラ
11	灰黒褐色 (10YR5/2)	灰黄色 (2SY6/2)	光沢あり、フルフル。黒斑混じる
12	黄褐色 (2SY5/3)	施脂赤褐色 (2SY9/2)	光沢あり、フルフル。やや透明
13	灰色 (5Y6/1)	にふく黃色 (2SY6/3)	光沢なく、ややザラザラ
14	黄灰色 (2SY4/1)	不明	光沢あり、灰黒色の縦横雜入る
15	オリーブ黑色 (5Y3/1)	オリーブ黑色 (5Y3/1)	光沢あり、フルフル。白色粒混じる
16	にふく黃褐色 (10YR7/3)	不明	光沢あり、フルフル
17	灰黒褐色 (10YR4/2)	浅黃褐色 (10YR8/3)	光沢あり、フルフル。白色粒混じる
18	灰黒褐色 (10YR5/2)	にふく黃褐色 (10YR7/2)	光沢あり、フルフル
19	褐褐色 (10YR4/1)	にふく黃色 (2SY6/4)	光沢なく、ザラザラ。透明粒混じる
20	灰白色 (5Y7/1)	淡黄色 (2SY8/4)	光沢なく、フルフル
21	黄灰色 (2SY4/1)	黄褐色 (2SY5/4)	光沢あり、極わずかに白色粒子が混じる
22	灰色 (5YR1/1)	灰オリーブ色 (5YR4/2)	光沢があり、ややフルフル
23	灰黒褐色 (10YR4/2)	不明	光沢があり、ややフルフル。白色粒子混じる。
24	褐灰色 (10YR4/1)	にふく黃色 (2SY6/3)	光沢あり、わずかに透明粒混じる
25	灰黒褐色 (10YR5/2)	明黄褐色 (2SY6/6)	光沢なく、ザラザラ。極わずかに白色粒混じる
26	褐褐色 (10YR4/1)	オリーブ黄色 (5Y6/4)	光沢あり、透明粒混じる
27	黄灰色 (2SY5/1)	淡黄色 (2SY8/3)	光沢なく、ザラザラ
28	黄灰色 (2SY4/1)	灰黄色 (2SYB6/2)	光沢なく、ザラザラ。透明粒混じる
29	黒褐色 (2SY3/1)	淡黄色 (2SY8/3)	光沢あり、フルフル
30	灰オリーブ色 (2SY3/3)	淡黄色 (2SY8/4)	光沢あり、白色粒が混じる
31	灰黒褐色 (10YR4/2)	灰黄色 (2SY6/2)	光沢なく、ザラザラ。白色粒混じる
32	黄灰色 (2SY5/1)	灰白色 (5Y7/2)	光沢なく、フルフル。透明粒混じる
33	黄灰色 (2SY4/1)	浅黄色 (2SY7/4)	光沢なく、ザラザラ。白色粒混じる
34	暗灰黄色 (2SY4/2)	オリーブ黄色 (5Y6/3)	光沢なく、フルフル。白色粒混じる
35	黄灰色 (2SY5/1)	灰白色 (7SYR8/2)	光沢なく、フルフル。透明粒混じる
36	灰黒褐色 (10YR5/2)	灰黄色 (2SY7/2)	光沢あり、ややザラザラ。白色粒混じる
37	浅黄色 (2SY7/3)	明黄褐色 (10YR7/6)	光沢なく、フルフル。透明粒混じる
38	褐灰色 (10YR4/1)	灰白色 (5Y7/1)	光沢あり、フルフル。白色粒混じる。



第4図 縄文土器分類図



第5図 石器分類図

VI 平成24年度調査

1 概要（第6・7図）

調査範囲は北東から南西へのびる二等辺三角形を呈し、約100m×30mを測る。

調査区の北側が最も標高が高く、調査区全体が最も低い南側へと傾斜している。調査区のうち北側半分は比較的傾斜がきつく、また山から崩れてきたものと考えられる50~100cm大の花崗岩が遺構検出面上に露出していた。そのため調査区北側は遺構遺物共に希薄であった。一方、調査区のほぼ中央から南側にかけては狭小であるが平坦面が広がり、その範囲には下記の遺構が集中している。本遺跡における集落の立地環境としては、きつい斜面傾斜や巨礫の露出など、良好な条件とは言いがたいが、そのような環境においても良好な場所を選地し、遺構を構築、集落を形成していた様相が見て取れた。基本土層は調査区内の2か所で確認している（第6図）。

I層は表土である。層厚は10~100cmで以前利用されていた畠地の耕作土と推定される。

II層は黒褐色のシルト層で粒子が細かい。南側の標高の低い調査区以外は削平を受けており、II層土は認められない。出土量は少ないが、層下位から縄文時代中期の土器が出土しているのでII層は縄文時代中期の包含層と判断した。

III層は暗褐色～褐色のシルト層で粒子が細かい。調査区ほぼ全域で見つかっているが、層厚は5~20cmで、比較的薄い上に、場所によってインボリューションしており、一定ではない。本来はこの層上面で縄文時代中期の遺構を検出したいところだが、上述の理由から遺構検出は困難であった。なお層中には前期前葉の縄文土器が含まれており、したがってIII層自体は縄文時代前期の包含層もあると判断した。

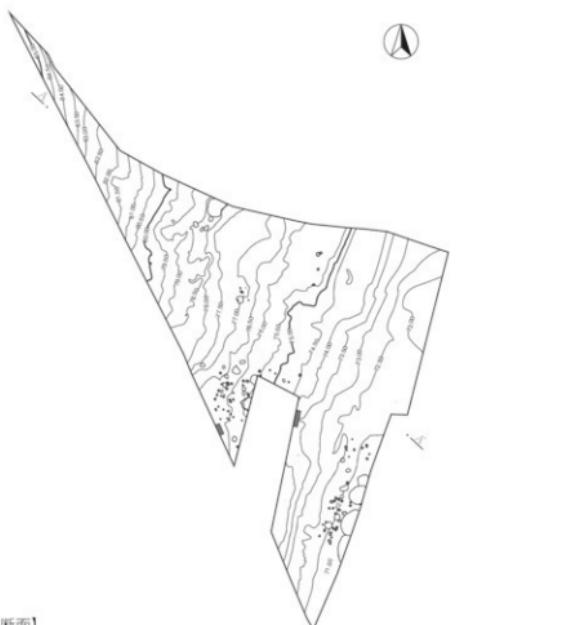
IV層は黄褐色のシルト層で粒子が細かい。混入物が認めらず、また遺物も包含されていない。層上面でII層あるいはIII層類似土を埋土とした遺構を検出している。従ってIV層上面が今回の遺構検出面であり、IV層土を「地山」とした。以降、「地山ブロック」と呼称する土はこのIV層土が崩落し、ブロック状となって遺構埋土に混入したものと指す。

V層は砂礫層である。粒子が粗く、5~20cm大の礫が多量に混入する。遺構を検出したIV層上面からは1m近く下がっており、また層中からは遺物は出土していない。人間の生活の痕跡が認められないので、これ以上の掘り下げは行っていない。したがって今回の調査ではIV層上面の1面のみが遺構検出面と判断した。

検出遺構は縄文時代前期前葉及び中期末葉の竪穴住跡5棟、土坑23基、焼土遺構1基である。出土遺物は土器が大コンテナ箱で4箱、石器が中コンテナ2箱分である。比較的出土遺物は少ないものの、それらの時期は縄文時代前期初頭～前葉・中期後葉～後期初頭とやや幅が認められる。また縄文時代前期前葉、中期末葉の遺物は遺構に伴われて出土するものが多い。出土遺物については第3表に示した通りである。

第3表 平成24年度出土遺物一覧

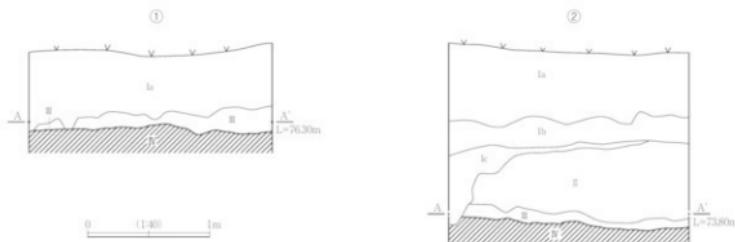
	縄文土器・土製品 (g)						石器・石製品 (点)										
	埋土上位	埋土下位	床底	室内	石鏡	石鏡	石器	楔形	不定形	鍬形	磨斧	敲削器	打削斧	石皿	砥石	UF	フレイク
1号住居	91.2	55.5															1
2号住居	420.6	838.2															1
3号住居	254.2	198.0	1915.6	2731.9	1												2
4号住居	1636.6	653.5	94.1	2332.1				3					2			2	9
5号住居	1044.9	197.6	28													1	
土坑群	762.8				1	1					1					1	1
遺構外Ⅱ～Ⅲ層	8541.8				1	1	1	1	1	1	4	14	1	1	13	40	1
遺構外Ⅱ層上面	3906.1																
柱穴内	131.1															1	



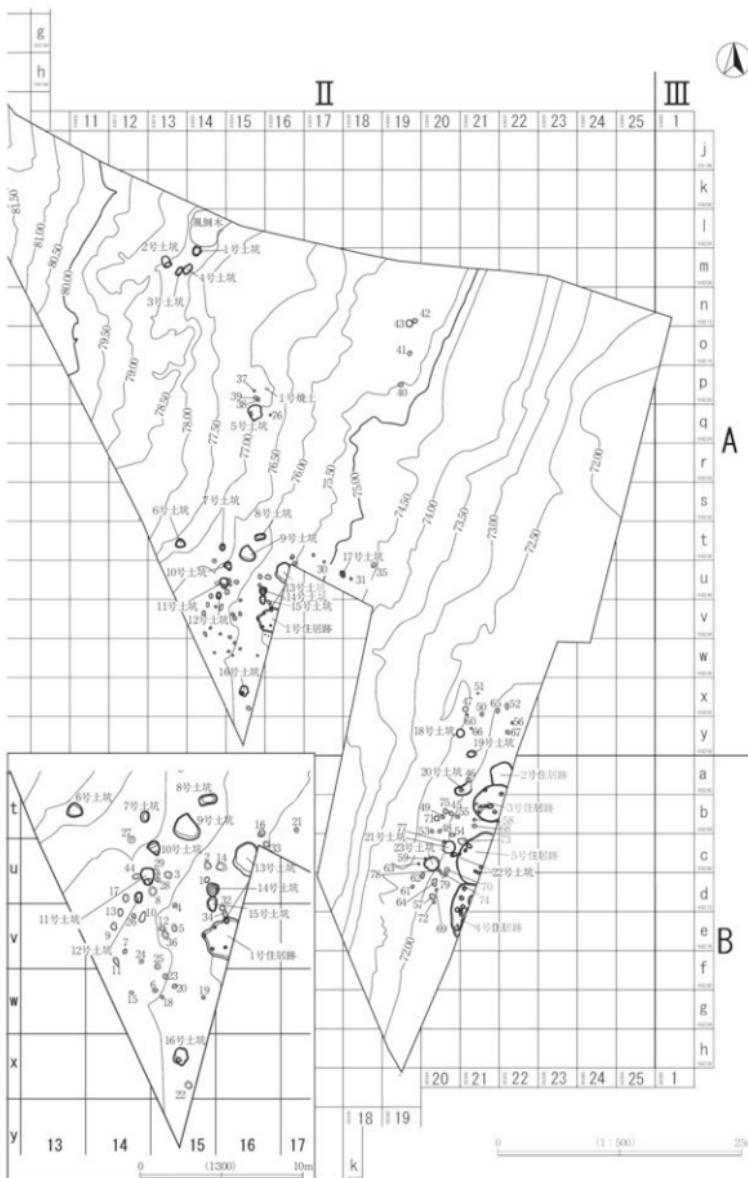
【調査範囲の地形断面】



【基本土層】



第6図 調査区地形・基本土層



第7図 平成24年度調査区遺構配置図

2 検出遺構と出土遺物

(1) 壴穴住居跡

1号住居跡（第8図、写真図版1・2・56）

【位置・検出状況】調査区中央西寄り、II A15～16vグリッドに位置する。IV層上面で検出した。東側の一部は調査区外に及んでいるが、元々後世の削平により消失している可能性が高い。

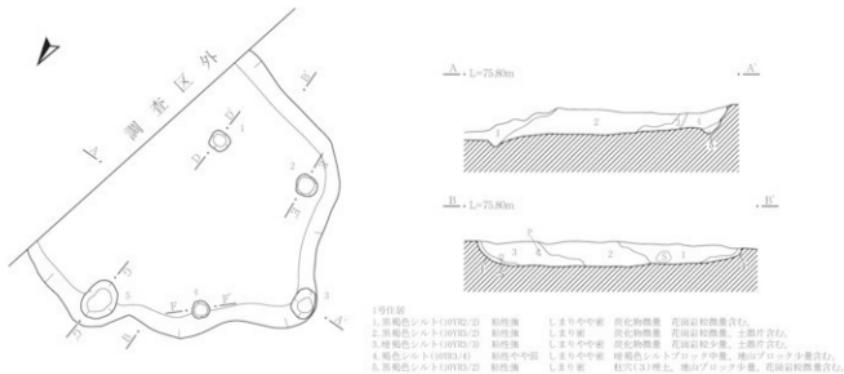
【その他の遺構との重複】なし。

【平面形】歪な五角形か。【規模】長軸250cm・短軸(155cm)・深さ20cm

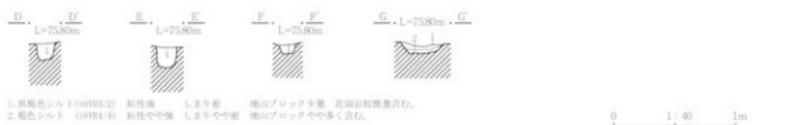
【埋土】3層からなる。黒褐色シルトを主体とし、炭化物が混入する。堆積状況からみて自然堆積と推測する。

【床面・壁】床面はIV層土が露出した面を床面とした。概ね平坦である。壁は調査区外の東壁を除き、全周する。緩やかに広がりながら立ち上がる。

【附属施設】炉や焼土範囲は確認できなかった。



柱穴



出土遺物



第8図 1号住居跡・出土遺物

柱穴5個（1～5）を確認した。柱穴2～5は、壁際の近くに配されており、主柱穴とも考えられるが、調査区外に及ぶ東側の様相が分からず、定かではない。柱穴の深さはいずれも10～30cmの範疇に収まり、やや浅い。規模は柱穴1・2・4は径10cm大、柱穴3・5は径50cm大と二分できる。

〔出土遺物〕 埋土中から縄文土器片が出土している。いずれも小片で、流れ込みの可能性もある。

3点図示した。1は深鉢の胴部片で、非結束羽状縄文が横位に展開する。繊維の混入はわずかである。2は深鉢の胴部片で、結束羽状縄文が斜位気味に展開する。繊維が混入する。3は深鉢の底部片で、外へと大きく開く形態である。無文で繊維の混入も認められず、時期については定かでない。

以上のように、3については時期については不明であるが、1、2は紋様の特徴と胎土への繊維混入から縄文時代前期前葉、大木1～2式の範疇に収まるものと判断した。

〔時期〕 出土した土器の年代から縄文時代前期初頭と判断した。（須原）

2号住居跡（第8・9図、写真図版2・56・61）

〔位置・検出状況〕 調査区の南東、ⅢB21a・ⅢB22aグリット境界上に位置している。IV層上位で検出した。東側の一部は調査区外へと及んでいる。

3号住居跡のベルトを延長し、北側に広がる暗褐色土のプランを掘り下げたところ、住居壁面とみられる立ち上がりや、壁崩落に伴う三角堆積を確認したため、竪穴住居跡と判断した。

〔他の遺構との重複関係〕 3号住居跡と重複している。土層断面の観察から、埋土の暗褐色土が3号住居跡に切られているため、本遺構のほうが古いと判断した。

〔平面形〕 隅丸方形。 〔規模〕 長軸（247）cm・短軸（197）cm・深さ20cm

〔埋土〕 3層からなる。暗褐色～黒褐色シルトが主体であり、埋土上位に炭化物が微量混入する。自然堆積。

〔床面・壁〕 底面はIV層土が露出した面を底面とした。概ね平坦である。壁は調査区外東側を除き、全周する。緩やかに外傾している。

〔炉〕 検出していない。

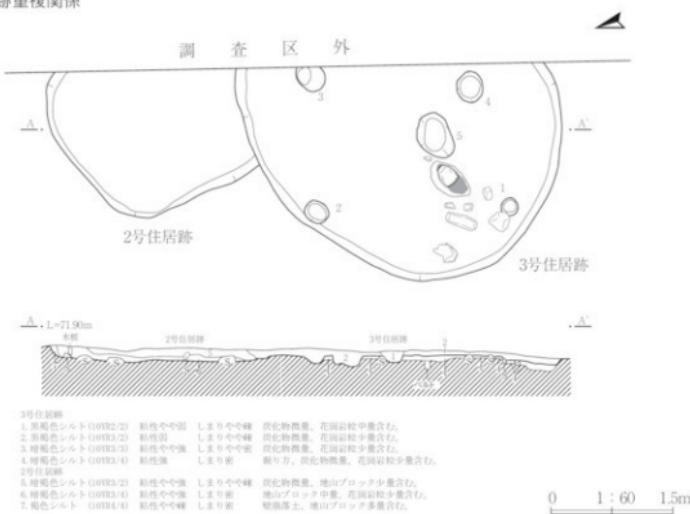
〔付属施設〕 検出していない。

〔出土遺物〕 出土遺物は縄文土器1258.8g、石器2点である。縄文時代中期末葉の土器が住居の埋土下位から出土しており、縄文時代前期の土器が出土している埋土上位と大きな時間差がある。縄文土器は、22点図示した。ほとんどが小破片である。4、7、9、19、20は胴部片で、4、7、19、20には繊維脱痕が見られる。縄文時代前期に比定される土器。25は口縁部片で、口唇部直上に縄文原体による圧痕がみられる。16は結束回転縄文。17は口縁部片で、口唇部側面に工具による刺突が施されている。5、6は環付末端回転縄文である。18は結束回転縄文。9は非結束羽状縄文。これらは大木1～2式に比定される土器。10、11、21、22、24は器面に縄文を施し、沈線による区画文を形成のち、磨消を施す。12は口縁部片で、隆帯上に刺突を施した区画体と円孔を持つ。胴部は撫糸文で施文されている。13、14は胴部片で、12と同様に縦位の撫糸文を施文している。大木10新段階に比定される土器。

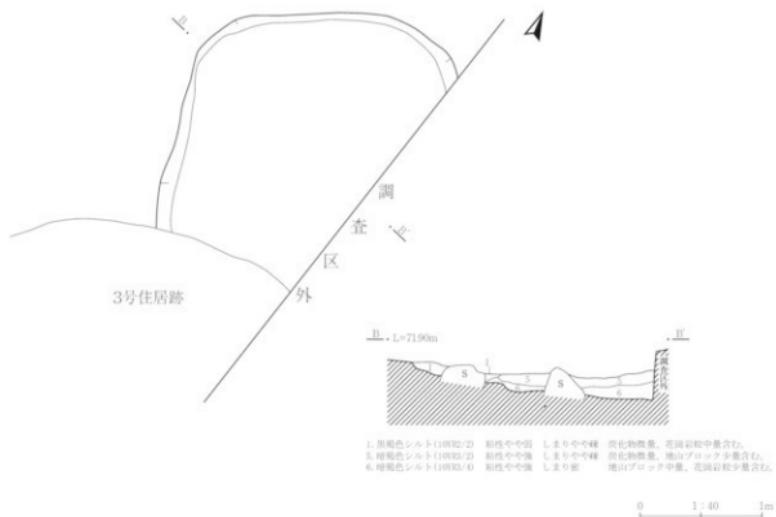
石器は1点図示した。26はUフレイクで、両縁辺の刃部使用痕にそれぞれ差異が見られる。縦位で、節理面を持つ。

〔時期〕 遺構の時期は、出土土器に大きな時期幅があるが、埋土下位からの出土土器より縄文時代中期末葉、大木10式新段階と判断した。（小野寺）

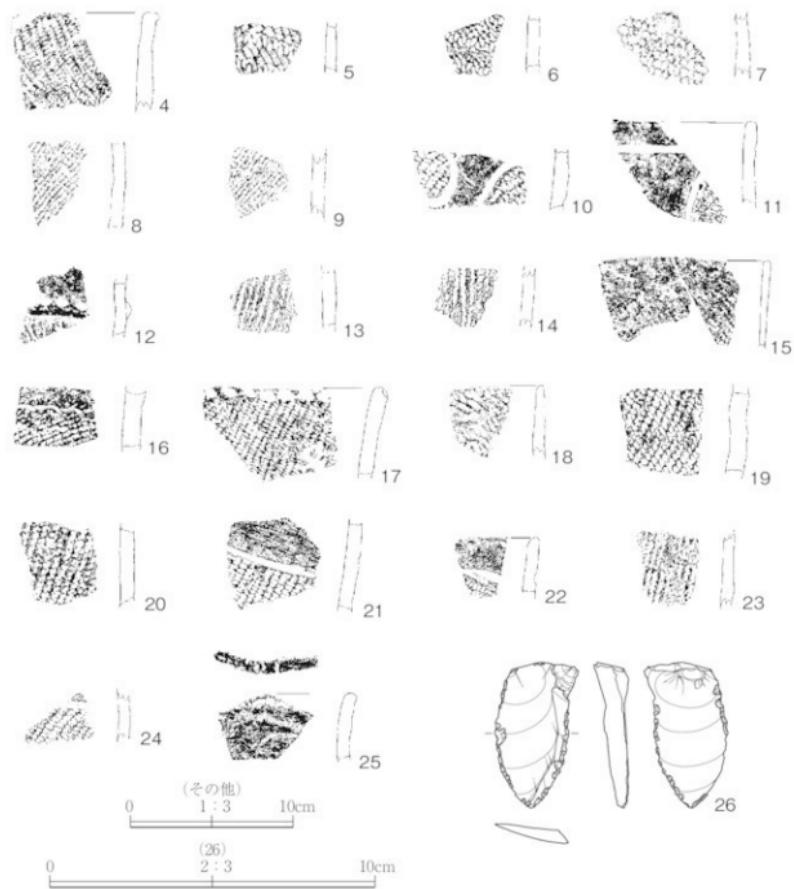
2・3号住居跡重複関係



2号住居跡



第9図 2・3号住居跡重複関係・2号住居跡



第10図 2号住居跡出土遺物

3号住居跡（第8・10～12図、写真図版3・56・57・61）

【位置・検出状況】調査区の南東、ⅢA21a・ⅢA21bグリット境界線上に位置している。IV層上位で検出した。東側の一部は調査区外へと及んでいる。

重機で表土掘削を行った際に、38の土器が一部出土しており、この土器を含んだ暗褐色の半円形プランに、ベルトを設定して掘り下げたところ、土器埋設炉を検出した。また、住居壁の立ち上がりを確認できため、竪穴住居跡であると判断した。

【他の遺構との重複関係】2号住居跡と重複しており、土層断面の観察から、埋土の黒褐色土が2号住居跡を切っているため、本遺構のほうが新しいと判断した。

【平面形】楕円形。【規模】長軸（388）cm・短軸（259）cm・深さ9cm

【埋土】2層からなる。黒褐色～暗褐色シルトが主体であり、埋土上位に炭化物が微量混入する。自然堆積。

【床面・壁】壁は緩やかに外傾し、床面は概ね平坦である。

【炉】土器埋設炉を検出した。住居中央より南西側に設置されている。平面形は楕円形で34×57cmを囲む。掘り方は、埋設部と焼土範囲のみである。土器埋設炉周辺には、礫が散乱しており、複式炉とも想定したが、明確な石組部や前部が確認できなかった。

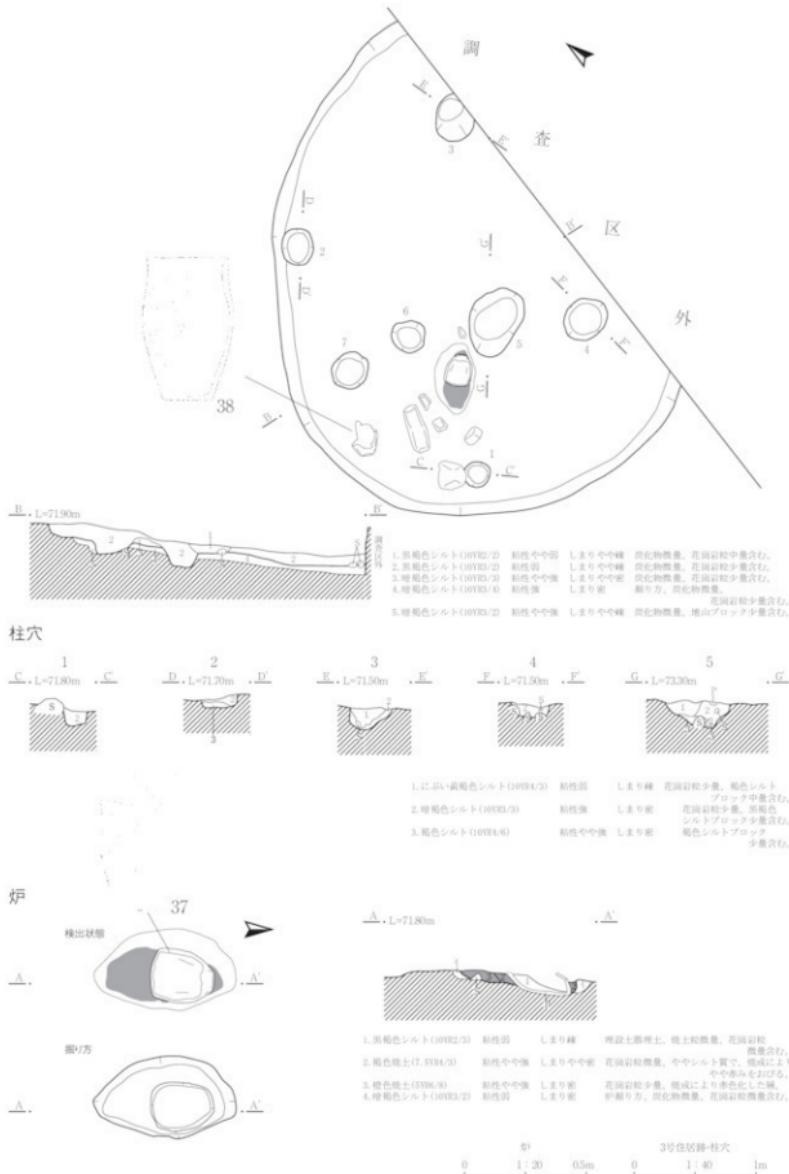
【付随施設】柱穴7個を検出した。柱穴には規則性がなく主柱穴については不明である。

【出土遺物】縄文土器50997g、石器4点である。縄文土器は、埋設土器ほか20点図示した。32、33は胴部片で、縦維脱痕が見られる。縄文時代前期に比定される。27、29～31は深鉢土器の胴部片で環付末端回転文によって施文されている。28は口縁部片で、口縁部上面に工具とみられる刺突文を施し、胴部は、結束回転縄文によって施文されている。41はP1から出土しており、縄文を横位に施文している。大木1～2式に比定される土器か。34、35は深鉢土器の破片で、撚糸文を縦位に施文しており、34の破片には沈線による区画文が見られる。37は埋設土器で、胴部には縄文が地文として施文され、沈線による区画文内を磨り消している。また、口縁部が、切りそろえられたように欠損している。39、40は27の炉埋設土器の口縁部に密着する形で出土した胴部片で、地文に縄文を施文し、沈線による区画文内を磨り消している。37とは別の個体である。44～46は、43と同一個体とみられるが、接合することができなかった。38は、住居内南西の壁付近で出土した。口縁部、底部付近の器厚は厚く、口縁上部はナデ調整される。胴部から底部まで縄文が施文されるが、沈線などによる区画文などは無いため粗製土器と判断した。大木10式新段階に比定される土器である。

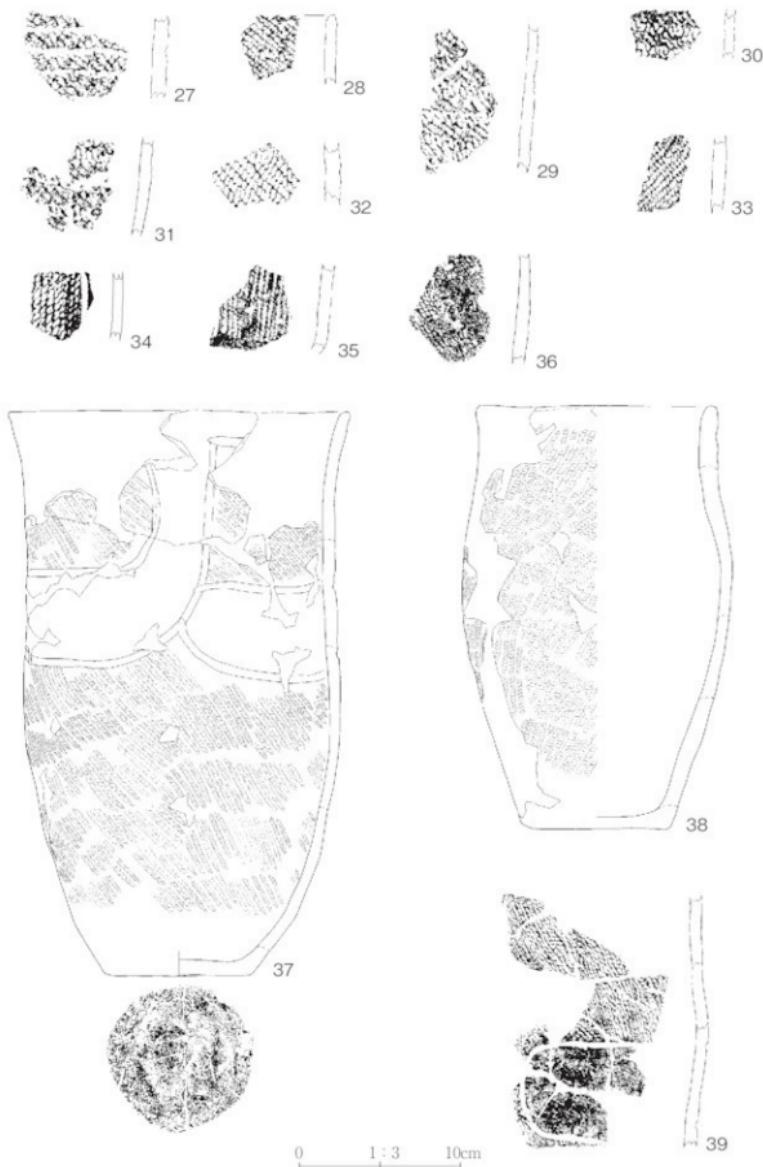
石器は1点図示した。47は無茎の石鏃である。

【時期】炉内に埋設された土器や遺構検出面などから縄文時代中期末葉、大木10新段階と判断した。

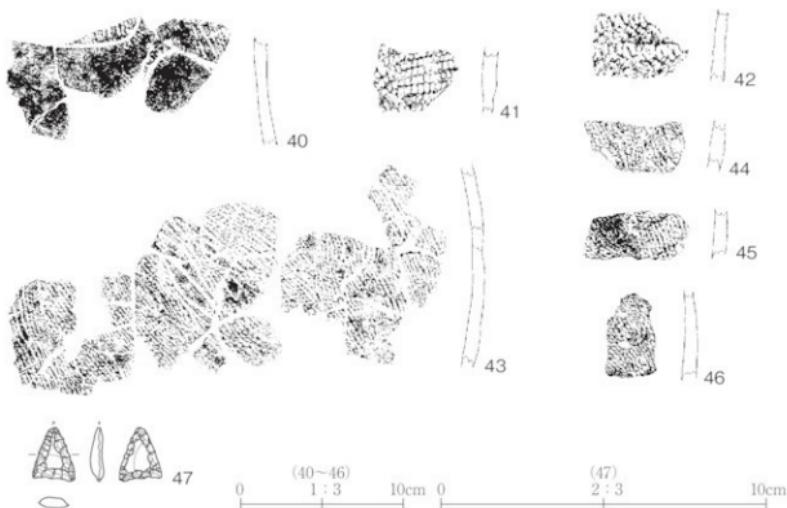
(小野寺)



第11図 3号住居跡



第12図 3号住居跡出土遺物（1）



第13図 3号住居跡出土遺物（2）

4号住居跡（第14～18図、写真図版4）

【位置・検出状況】調査区南端、Ⅲb21d・eグリッドに位置する。IV層上面で検出した。本遺構は南側半分以上が調査区外に及んでいる。

【その他の遺構との重複】なし。

【平面形】不整な楕円形 【規模】長軸650cm・短軸(135cm)・深さ20cm

【埋土】7層からなる。黒褐色シルトを主体とし、炭化物が混入する。堆積状況からみて自然堆積と推測する。

【床面・壁】床面は炉を検出した面を床面とした。概ね平坦である。壁は調査区外の南側を除き、全周する。やや大きく広がりながら立ち上がる。

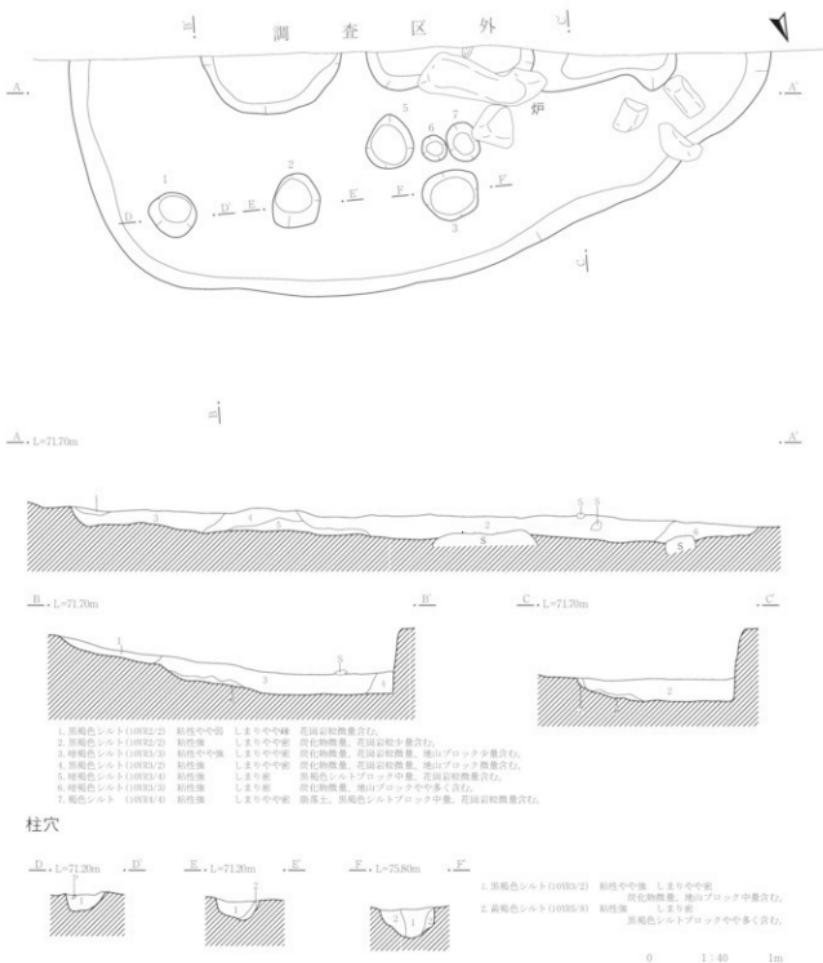
【炉】西壁寄りで検出した。炉の大部分が調査区外に及んでいるため、全容は明らかではないが、石圓部、前庭部で構成される複式炉ではないかと考える。石圓部は大型の花崗岩を炉石としている。ただし炉の東側は炉石が確認されないので、抜き取られた可能性がある。炉石自体は風化が進んでおり、非常に脆い。石圓内にはわずかに焼土が堆積しているが、積極的に火を使った痕跡は見受けられない。また石圓部内には大型の炉石に直交するようにやや小型の炉石が添えられており、石圓内部を間仕切りしていた可能性がある。前庭部は楕円形の浅い窪みで硬化面は認められない。

【附属施設】柱穴7個を確認した。そのうち3個（1～3）は長軸方向に並んでおり、主柱穴と考えられる。調査区外にも同様に並んでいれば、主柱穴は6本であるものと推定する。

【出土遺物】縄文土器、石器が出土している。埋土上位から出土するものが多く、土器では小片がほとんどである。

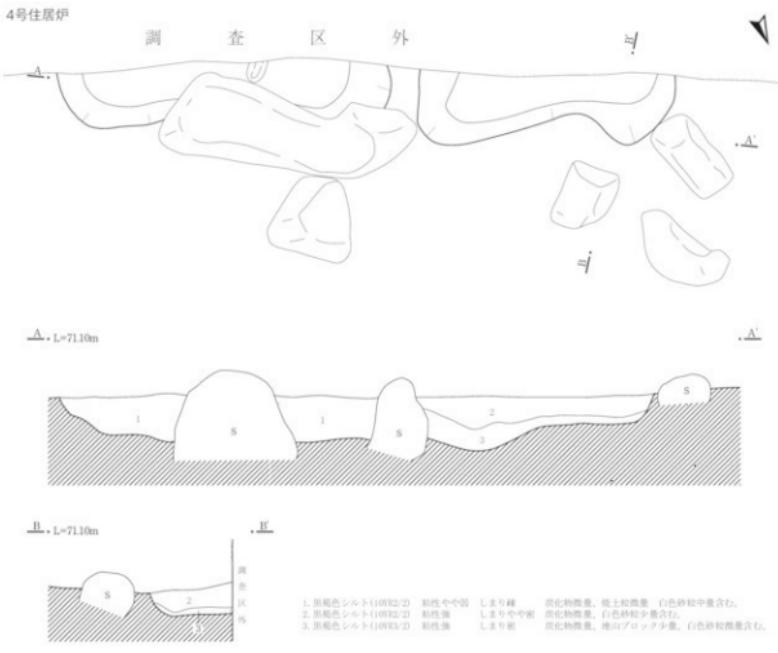
縄文土器は51点図示した。48、51、52、70、74、75は前期に比定される土器片である。48は纖維が混入し、環付末端縄文が横位に巡る。大木1式に相当する。51も纖維が混入し、やや粗い単節LRが施文される。尖底土器の胴部片の可能性が高い。52は深鉢の大型破片で、胴部中央から口縁部にかけてわずかに内湾する形態である。付加状縄文が継位に施される。纖維の混入は見受けられないが、前期に比定されるものと判断した。

53~98は中期に比定される。こちらもおおむね小片であるが、なかには65や83、92のように大型の

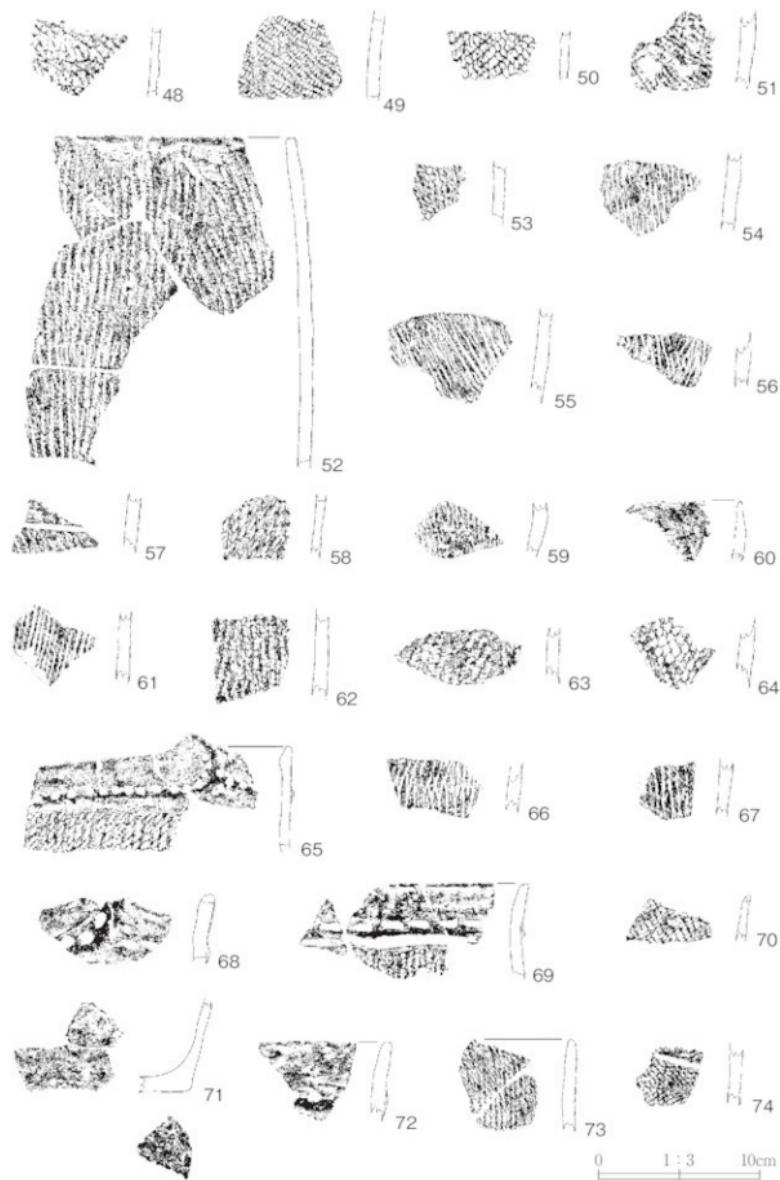


第14図 4号住居跡 (1)

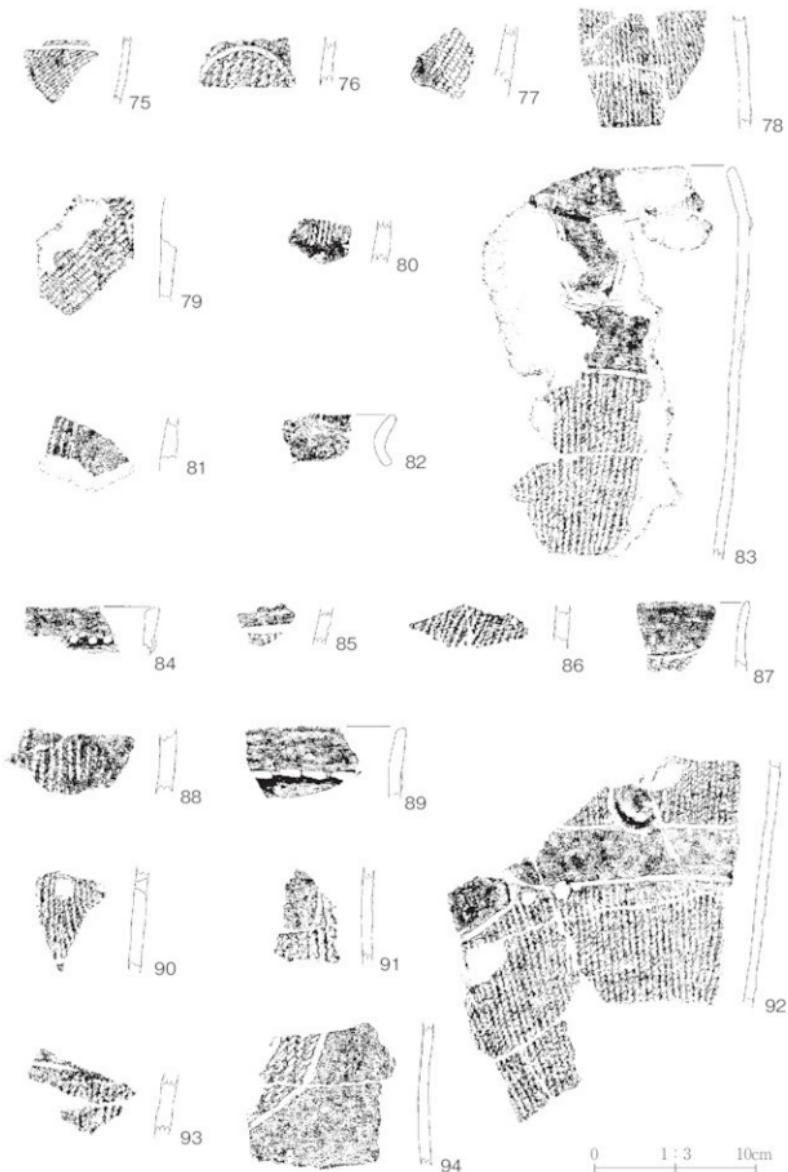
破片も含まれている。65は深鉢の口縁部片で、口縁部は無文であるが、胴部との間に円形刺突文が施された隆帯が巡る。大木10式新段階である。69も同様な文様である。76は円形、あるいは楕円形区画文が施文されるが、区画内の縄文は充填技法で施されており、大木10式に比定されるものと考える。83は外面の剥離が激しいが、口縁部から胴部の大型破片で、口縁部がわずかに内湾する。口縁部下には隆帯が横位に巡り、胴部上半はクランク状の区画文が施文される。胴部下半は縦位の縄文（単軸絡条帶）が施文される。大木10式新段階。84・89は口縁部片で口縁部は無文、胴部との境に刺突を施した隆帯が巡る。92は胴部の大型破片で、大木10式新段階に比定される。胴部中央から上半にかけて帯状の区画文が施文され、その上下には縄文（単軸絡条帶）が縦位に充填される。また胴部上半には鰐状突起が付く。胴部中央で対となる補修孔2箇所を確認した。96も比較的大型の胴部上半の破片である。隆帯を付した区画文が施文され、区画文はクランク状を呈するので、大木10式新段階と判断する。ほかに87・91・93・94・95も区画文が施文されるが、その形状からみて大木10式であろうと判断する。縄文のみ施文される土器片についてはおおむね単軸絡条帶が縦位に施文されるものであり、同一時期、特に大木10式に比定されるものである。97は深鉢の胴部から底部である。底面が残存しており、筋状の網代痕（？）が確認できる。胴部には縄文（単軸絡条帶）が縦位に施文される。98は粗製の深鉢口縁部片で口縁部は無文、胴部は短軸絡条帶が縦位に施文する。ほかの土器群と同じ時期のものと推定する。



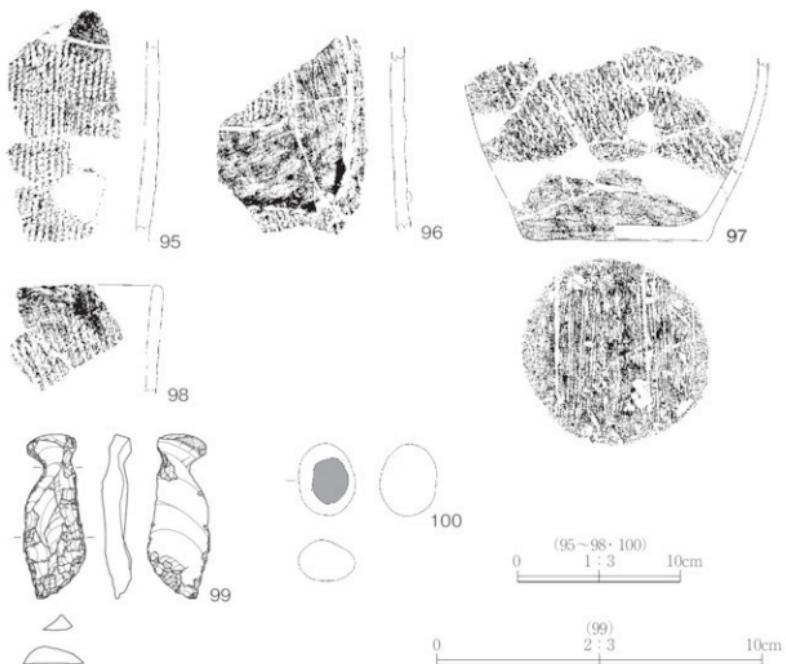
第15図 4号住居跡 (2)



第16図 4号住居跡出土遺物（1）



第17図 4号住居跡出土遺物（2）



第18図 4号住居跡出土遺物（3）

石器は2点図示した。99は1類の石匙である。縦型のフレイクを素材とし、片面は縁辺のほとんどに、もう片面は短軸の一部にのみ二次加工を施し、刃部を作出している。100は敲磨器類である。片面のみ磨痕が見受けられる。

【時期】本遺構からは主に縄文時代前期前葉と中期末葉の土器群が出土しているが、炉の形態が複式炉に類似すること、また炉の周辺から中期の遺物が多く出土していることから、本遺構の時期は縄文時代中期末葉大木10式新段階と判断した。(以降、82ページまで須原)

5号住居跡（第19・20図、写真図版5・58・61）

【位置・検出状況】調査区南端、Ⅲb2lc～dグリッドに位置する。IV層上面で検出した。本遺構は南側半分以上が調査区外に及んでいる。

【その他の遺構との重複】4号住居跡と重複し、本遺構が古い。

【平面形】不整な円形 【規模】長軸500cm・短軸(200cm)・深さ5cm

【埋土】2層からなる。黒褐色シルトを主体とし、炭化物が混入する。堆積状況からみて自然堆積と推測する。

【床面・壁】床面はIV層土が露出した面を床面とした。概ね平坦であるが、床面上にも礫が露出して

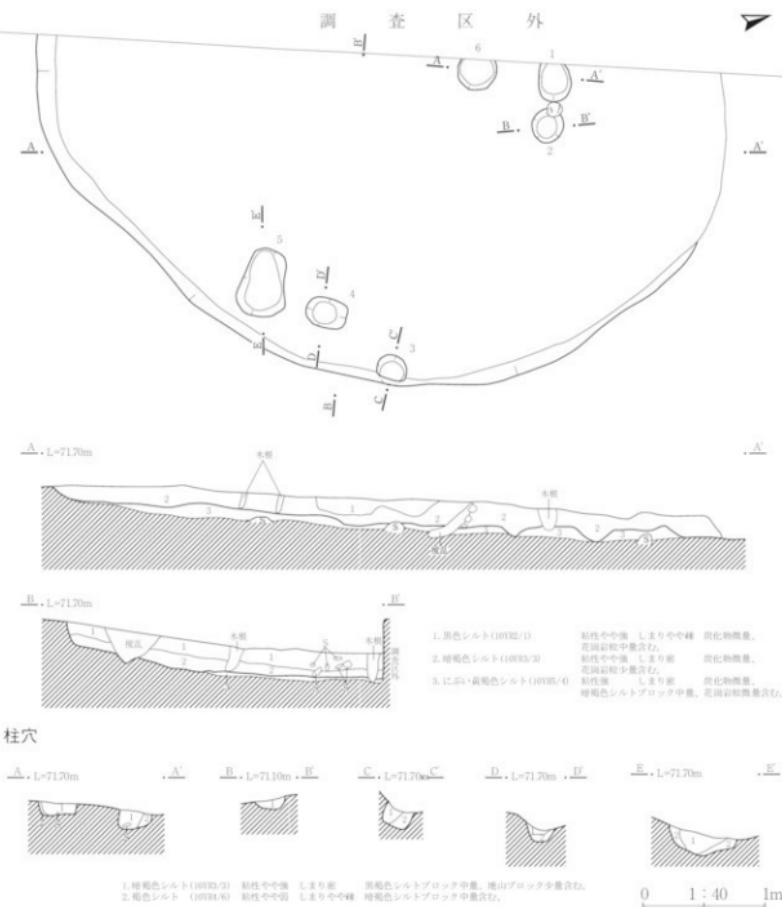
いる。壁は調査区外の南側を除き、全周する。緩やかに広がりながら立ち上がる。

[炉] 確認できなかった。調査区外に及ぶ遺構西側部分に付設されている可能性もある。

[附属施設] 柱穴6個を確認した。配列は不規則で、主柱穴の配置は推測できない。

[出土遺物] 繩文土器・土製品と石器が出土している。埋土上位が多く、また出土した縄文土器には時期幅が認められる。いずれも小片である。

21点図示した。101～103は前期初頭～大木1式に比定される。101は粗い縄文が施文され、胎土に纖維が混入する。102は口縁部片で、非結束羽状縄文が横位に巡る。大木1式。106は胴部片であるが、環付末端縄文が横位に施文され、大木1式に比定されるものと推定する。107も胴部片で非結束羽状

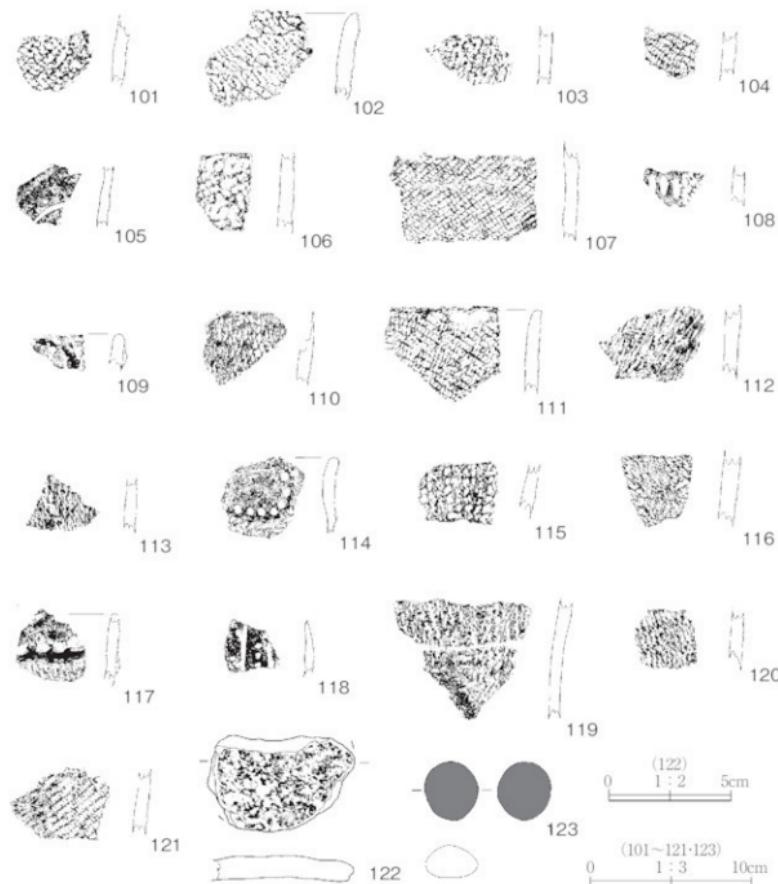


第19図 5号住居跡

縄文が横位に施文される。121も胎土に纖維が混入する前期の土器である。単節縄文が横位に施文される。その他は縄文中期後葉～末葉に比定される土器群であるが、縄文のみで、細かい時期までは分からぬものが多いため、105は胴部片で沈線による区画文が認められる。114は円形の刺突文が施される隆帶により、区画文が描かれている。117も同様に隆帶による区画文と考えられる。これらの文様の特徴から大木10式（新段階か）に比定される土器群と判断した。

土製品は円盤状土製品（122）である。1/3ほど欠損する。深鉢の胴部片を転用している。側面の磨滅はゆるやかである。

石器は敲磨器類1点（122）を図示した。122は比較的小型で、やや扁平な円盤を素材とし、全面に磨痕が見受けられる。



第20図 5号住居跡出土遺物

〔時期〕 本遺構からは縄文時代初頭～大木1式と中期末葉の土器が出土している。遺構そのものの特徴からでは時期判断は難しく、また出土した土器も小片が多いため、判断材料に乏しいと言わざるを得ないが、出土量が多い縄文時期中期末葉大木10式期の範疇に収まるものと推測する。（須原）

（2）土坑（第7・21～24図、第4表、写真図版6～11）

平成24年度の調査では23基の土坑を検出した。各土坑の属性については第4表に詳細を記しているが、後述する通り、用途や性格については明らかにできていない。

ここでは検出した土坑全体から見た傾向を概観する。

〔位置・検出状況〕 土坑の位置は調査区全体の3か所に分布が集中する。まず第1に調査区北東側（II A13、14mグリッド周辺。第7図左上）で、1～4号土坑がこれに相当する。そして第2は調査区中央西寄り（II A14t、15uグリッド周辺の第7図中央）で、5～16号土坑が集中的に分布する。第3は調査区南西側（II A21y～II B20cグリッド周辺。第7図右下）で18～23号土坑が相当する。いずれもIV層上面で検出した。

〔その他の遺構との重複〕 第4表参照。

〔平面形〕 全体的に楕円形を呈するものが多い。21号土坑のみ円形を呈する。

〔規模〕 IA15u、15wグリッド周辺の土坑はやや小さい傾向にあり、長軸2m前後に収まる。その他の土坑は長軸4～5mである。

〔埋土〕 暗～黒褐色シルトを主体とし、堅穴住居跡の埋土と概ね類似する。混入物では炭化物や地山ブロックが微～少量含まれるものが多く、堆積状況から自然堆積により埋没したものがほとんどであった。また調査区中央に位置する土坑群は花崗岩礫の混入が目立っている。

〔底面・壁〕 全体として底面形態は歪で、あまり平坦に整形されたものがない。その点が土坑群の用途・性格付けを難しくしている。壁は大きく広がりながら立ち上がるものが多い。21号土坑のみは底面は平坦で、壁は末広がりの所謂「フ拉斯コ」形を呈する。

〔出土遺物〕 1・3・5～8・13・21・23号土坑からは縄文土器・土製品の破片が出土する。いずれも小片であり、流れ込みの可能性も考えられる。縄文土器は6号土坑出土の126・127を除き、全て織維を含む前期前葉に比定される。126・127は中期の土器であり、126は大木8b～9式の胴部片で、127は大木9式新段階の胴部片である。3号土坑出土の124は土製円盤で、縁辺を欠損する。胴部片の転用例であり、残存する側面は摩滅する。

11号土坑からは2類の石匙(135)が出土している。縦型のフレイクを素材とし、片面のみ二次加工を施し、刃部を作出している。

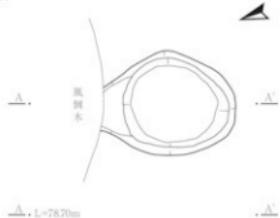
〔用途〕 形態の特徴や出土遺物からでは、ほとんどの土坑は不明である。ただし21号土坑は所謂「フ拉斯コ状土坑」であり、貯蔵穴と考えている。

〔時期〕 出土した土器の年代から6号土坑は縄文時代中期後葉～末葉また21号土坑は埋土下位から出土した炭化物の年代測定を行っており（図版-1）、中期末葉（ 4020 ± 20 yrBp）という結果を得ている。それ以外は縄文時代前期前葉と判断した。

第4表 土坑一覧表

土坑名	位置	平面形	断面形	埋土の様相	長さ×幅 (cm)	深さ (cm)	重複関係	時期	遺物	備考
1号土坑	II A14m	不整な椭円形	直状を呈し、底面は平坦	3層に分層。 暗褐色シルト（1・2層）が主体。	64× (80)	17	無し	前期	124	
2号土坑	II A13m	不整な椭円形	直状を呈し。底面は平坦だが片側が盛む	3層に分層。 黒褐色シルト（1層）が主体。	88×63	14	無し	前期		
3号土坑	II A13m	椭円形	直状を呈し。底面はわずかに盛む	3層に分層。 黒褐色シルト（1層）と褐色細砂（3層）が半々。	73×36	15	無し	前期	125	
4号土坑	II A14m	直な椭円形	直状を呈し。底面はやや直	3層に分層。 黒褐色シルト（1・2層）が主体。	89×55	13	無し	曲期		
5号土坑	II A15q	直な隅丸方形	直状を呈し、底面はほぼ平坦	3層に分層。 黒褐色シルト（1・2層）が主体。	113×101	18	無し	曲期	126	
6号土坑	II A13x	不整な円形	直状を呈し、底面はほぼ平坦	1層である。 黒褐色シルトを主体とする。	70×65	12	無し	中期	127・128	
7号土坑	II A14x	椭円形	半凹状を呈し、底面は丸い	3層に分層。 黒褐色シルト（1・2層）が主体。	50×39	22	無し	曲期	129	
8号土坑	II A15t	不整な隅丸方形	直状を呈し、底面はわずかに丸い	3層に分層。 暗褐色シルト（1・2層）が主体。	84×45	16	無し	曲期	130	
9号土坑	II A15t	直な断面形	直状を呈し、底面はほぼ平坦であるが、片側が盛む	4層に分層。 暗褐色シルト（2層）と褐色シルト（3層）が半々。	122×120	15	無し	曲期		
10号土坑	II A15u	不整な三角形	直状を呈し、底面は直である	2層に分層。 黒褐色シルト（1層）と褐色シルト（2層）が半々。	68×54	20	無し	曲期		
11号土坑	II A14u	不整な椭円形	直状を呈し、底面はほぼ平坦であるが、片側が盛む	4層に分層。 暗褐色シルト（1～3層）が主体。	77×60	19	P11	前期	136	
12号土坑	II A14u	椭円形	直状を呈し、底面はほぼ平坦	3層に分層。 黒褐色シルト（1層）主体。	50×32	9	無し	前期		
13号土坑	II A16u	直な椭円形	直状に呈し、底面は直である	4層に分層。 黒褐色シルト（1・3層）、暗褐色シルト（2層）が半々。	153× (94)	16	無し	前期	131・132	
14号土坑	II A15u	不整な円形	直状に呈し、底面は中央に向いて盛む	2層に分層。 暗褐色シルト（1・2層）主体。	60×60	10	無し	曲期		
15号土坑	II A15v	不整な椭円形	直状を呈し、底面はほぼ平坦	2層に分層。 暗褐色シルト（1・2層）主体。	69×42	11	無し	曲期		
16号土坑	II A15x	直な隅丸方形	直状を呈し、底面は中央に向いて盛む	2層に分層。 黒褐色シルト（1層）、暗褐色シルト（2層）が半々。	76×64	14	無し	曲期		
17号土坑	II A18u	不整な椭円形	半凹状を呈し、底面は平坦	4層に分層。 黒褐色シルト（1・2層）が主体。	52×35	12	無し	曲期		
18号土坑	II A23y	不整な円形	直状を呈し、底面はほぼ平坦	1層である。 黒褐色シルトを主体とする。	67×64	13	無し	前期		
19号土坑	II A23y	椭円形	直状を呈し、底面はほぼ平坦	3層に分層。 黒褐色シルト（1層）とぶい黄褐色シルト（2層）が主体。	72×50	6	無し	曲期		
20号土坑	II B21a	不整な隅丸方形	直状を呈し、底面はほぼ平坦だが、ビット状の盛みあり。	4層に分層。 暗褐色シルト（1層）主体	(130) ×79	18	P46	曲期		東端が消失
21号土坑	II B20c	不整円形	フランク式で、西側半分がオーバーハングする。底面は平坦である。	8層に分層。 黒褐色シルト（1・2・4・7層）主体	上95×89 下 99×92	52	P77	中期	134・135	AMS年代測定
22号土坑	II B20c	椭円形	直状を呈し、底面はほぼ平坦だが、ビット状の盛みあり。	3層に分層。 暗褐色シルト（1・2層）主体	49×27	18	無し	曲期		
23号土坑	II B20c	直な椭円形	直状に呈し、底面は直である	4層に分層。 暗褐色シルト（1層）主体	118×108	12	無し	曲期	133	

1号土坑



1. 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性やや強 しまりやや弱 花崗岩粉少量。
黒褐色シルトブロック微量。縫やや多く含む。
2. 黑褐色シルト (10YR2/4) 粘性やや弱 しまりやや強。
3. 黄褐色シルト (10YR4/6) 粘性やや強 しまりやや強。縫褐色シルトブロック微量含む。

2号土坑



1. 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性やや弱 しまりやや強 花崗岩粉少々含む。
2. 黑褐色シルト (10YR3/0) 粘性やや弱 しまりやや弱 9.10~20mmの縫隙有。褐色シルトブロック微量含む。
3. 黄褐色シルト (10YR4/6) 粘性やや強 しまりやや強 少量含む。

3号土坑



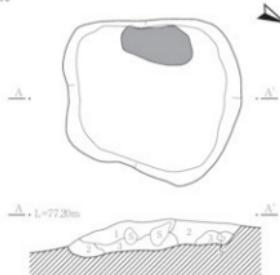
1. 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性やや弱 しまりやや強 花崗岩粉少量。
褐色シルト微量含む。
2. 黑褐色シルト (10YR2/4) 粘性やや弱 しまりやや強。
3. 黄褐色砂 (10YR4/6) 粘性弱 しまり強 花崗岩粉少々含む。

4号土坑



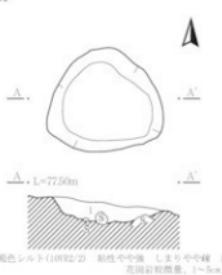
1. 黒褐色シルト (10YR2/2) 粘性やや弱 しまりやや強 花崗岩粉。
花崗岩粉微量。他の粘土無。
2. 黑褐色シルト (10YR2/3) 粘性やや強 しまりやや弱 布褐シルトブロック微量含む。
3. 黄褐色シルト (10YR4/6) 粘性やや強 しまりやや強 布褐落土。
花崗岩粉微量含む。

5号土坑



1. 黒褐色シルト (10YR2/2) 粘性やや弱 しまりやや強 固化物微量 花崗岩粉微量。
2. 黑褐色シルト (10YR3/2) 粘性弱 しまりやや強 固化物微量 花崗岩粉少々含む。
3. 黑褐色シルト (10YR3/2) 粘性やや強 しまりやや強 固化物微量 地山ブロック微量含む。

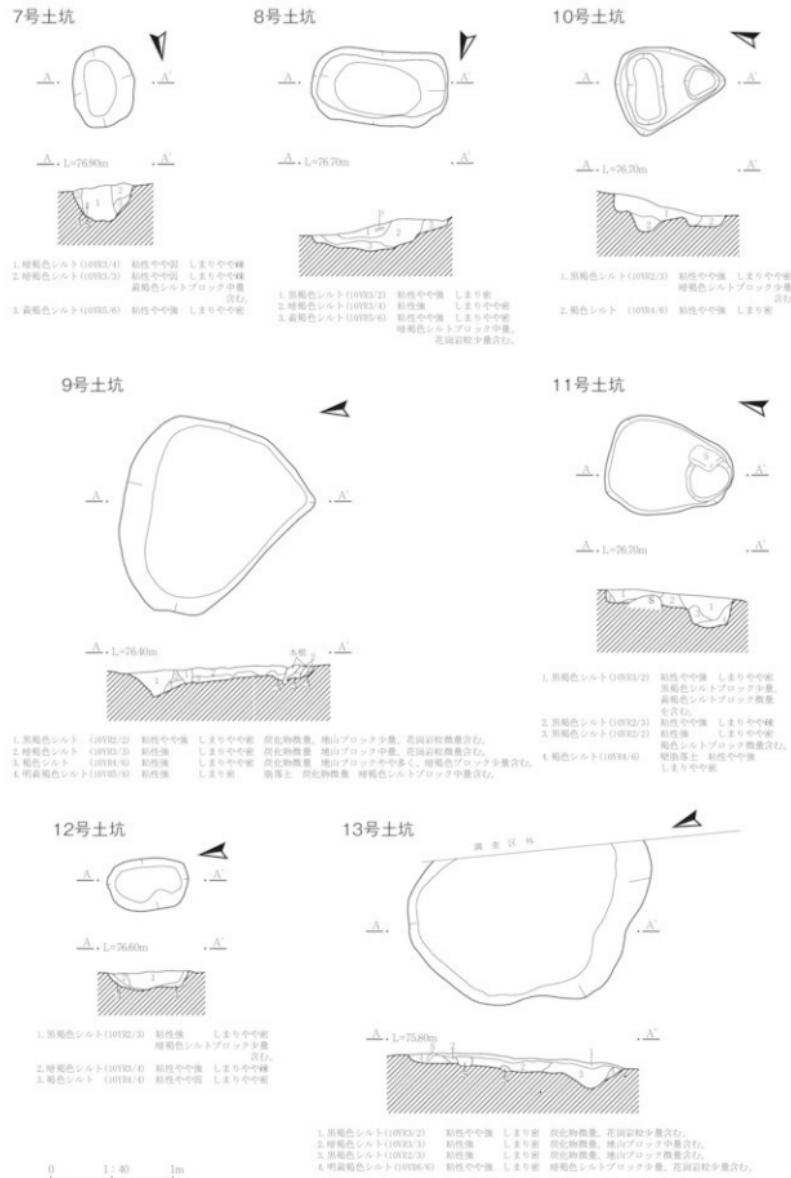
6号土坑



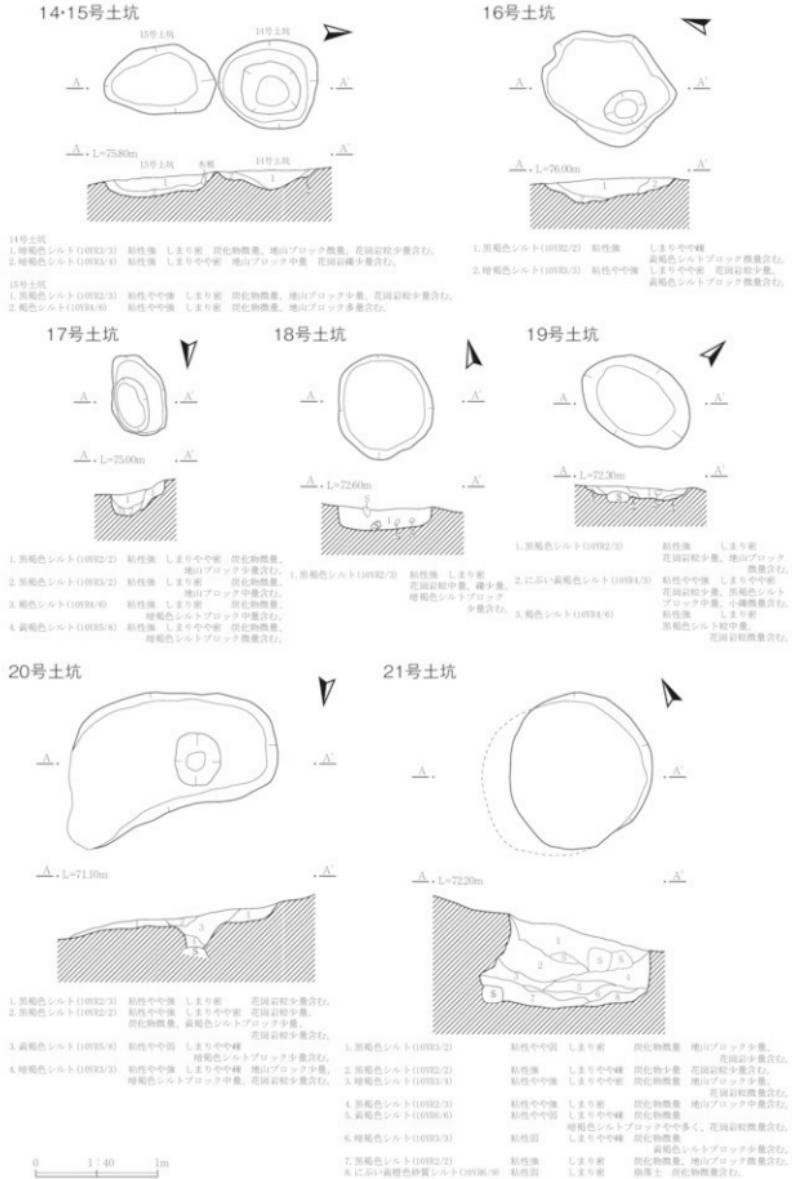
1. 黒褐色シルト (10YR2/2) 粘性やや強 しまりやや強 固化物微量。
花崗岩粉微量。1~5mm大的礫少々含む。

0 1:40 1m

第21図 1~6号土坑

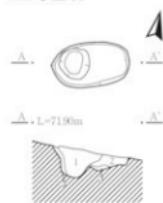


第22図 7~13号土坑



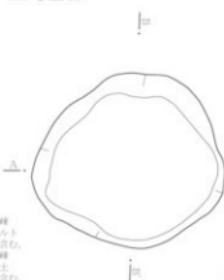
第23図 14~21号土坑

22号土坑



1. 墓褐色シルト (10YR3/3) 黏性やや中強 しまりやや硬 花崗岩粒少數、黒褐色シルトブロック中含む。
2. 墓褐色シルト (10YR3/4) 黏性やや弱 しまりやや硬 花崗岩粒少數、真褐色土塊、花崗岩粒少數、黒褐色シルト中含む。
3. 黒褐色シルト (10YR4/6) 黏性やや強 しまりやや硬 墓褐色シルトブロック中含む。

23号土坑



1. 墓褐色シルト (10YR3/3) 黏性やや強 しまりやや硬 花崗岩粒少數、黒褐色シルト粒混含。
2. 黒褐色シルト (10YR3/2) 黏性強 しまり弱 黒褐色ブロック中含む。
3. 黑褐色シルト (10YR4/6) 黏性やや強 しまりやや硬 にふい赤褐色シルト (10YR4/3) 黏性やや強 しまりやや硬 花崗岩粒少數含む。

0 1:40 1m

土坑出土遺物

1号土坑



124

3号土坑



125

5号土坑



126

6号土坑



127

128

7号土坑



129

8号土坑



130

13号土坑



131

23号土坑



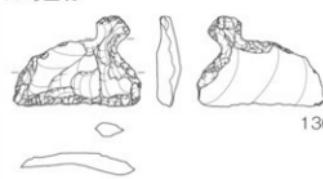
133

21号土坑



134

11号土坑



136

0 (125)
1 : 2 5cm(124・126～135)
1 : 3 10cm(136)
2 : 3 10cm

第24図 22・23号土坑、土坑出土遺物

(3) 焼土遺構

堅穴住居跡や土坑に付属しない、単独の焼土範囲を便宜的に「焼土遺構」とした。1基検出した。
1号焼土遺構（第25図、写真図版11・59）

【位置・検出状況】調査区中央、II A15pグリッドに位置する。II層中で検出しており、他の遺構とは様相が異なる。

【その他の遺構との重複】なし。

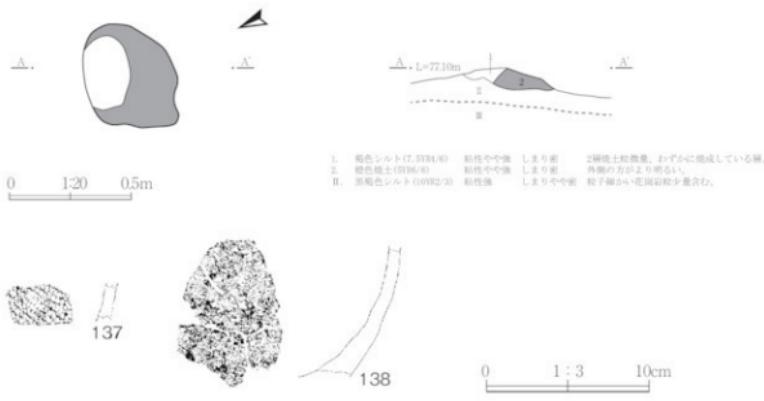
【平面形】不整形　【規模】53×24cm

【焼土状況】焼成は強く、被熱により明赤褐色に変色し、その周囲は橙色に還元している。

【出土遺物】検出面から土器片が出土している。2点（137・138）図示した。137は深鉢の胴部片で、胎土に纖維が混入する。縄文（单節RL）が施文される。138は底部片でヘラナデのような条痕が認められ、土師器にも見える。

【用途】屋外炉か。ただし、検出面がII層中でもあり、また焼土中から土師器と考えられる破片（138）も出土していることから古代以降の焼土（カマドから？）が流れ込んできているもの可能性もある。

【時期】焼土内から出土した土器（138）を基準に判断するとなれば、古代以降と推定する。ただし、本遺跡ではその時代に比定される、遺構・遺物は他に皆無であり、断定しづらい。



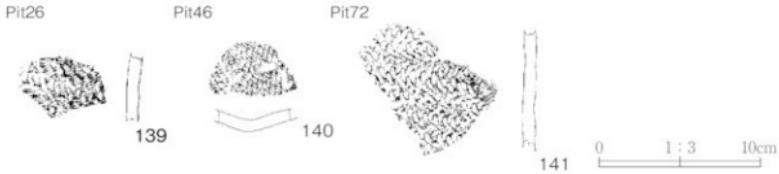
第25図 1号焼土遺構・出土遺物

(4) 柱穴状土坑（第7・25図、写真図版59）

【位置・検出状況】調査区中央西端と調査区南端に集中する。どちらも堅穴住居跡や土坑が分布する範囲である。これらの遺構と同様、V層上面で検出した。

【別の遺構との重複】柱穴状土坑どうしで重複するものが見受けられる。また11・20・21号土坑と重複している柱穴状土坑も見受けられ、いずれも柱穴状土坑の方が古いと判断している。

【規模】20~50cm大の円形および稍円形を呈する。深さは9~34cmまでの様々で規則性がない。た



第26図 柱穴内出土遺物

第5表 平成24年度柱穴一覧

柱穴名	グリッド名	色調・土質	粘性	しまり	検出面標	底面標高 (m)	深さ (cm)	流入物
1	II A15a	暗褐色シルト(10YR 3'/9b)	○	○	75.772	75.628	144	地山ブロック少量、花崗岩粒少量
2	II A15a	暗褐色シルト(10YR 3'/9b)	○	○	75.909	75.729	18.0	地山ブロック微量、花崗岩粒少量
3	II A15a	暗褐色シルト(10YR 3'/9b)	○	○	76.226	76.019	20.3	地山ブロック微量、灰化物微量
4	II A15a	黒褐色シルト(10YR 3'/9b)	○	○	75.913	75.725	18.8	地山ブロック微量、花崗岩粒微量
5	II A15v	暗褐色シルト(10YR 3'/9b)	○	○	75.870	75.630	24.0	黒色シルトブロック微量、地山ブロック微量、花崗岩粒微量
6	II A15w	黒褐色シルト(10YR 2'/2)	○	○	75.969	75.736	22.4	花崗岩粒少量
7	II A14v	黒褐色シルト(10YR 2'/2)	○	○	76.249	76.037	21.2	
8	II A15a	暗褐色シルト(10YR 3'/9b)	○	○	76.246	76.043	20.3	暗褐色粘土シルトブロック少量
9	II A14v	暗褐色シルト(10YR 3'/9b)	○	○	76.399	76.235	16.4	地山ブロック少量、灰化物微量、花崗岩粒微量
10	II A14v	暗褐色シルト(10YR 3'/4)	○	○	76.253	76.049	20.4	地山ブロック微量、灰化物微量、花崗岩粒少量
11	II A14v	黒褐色シルト(10YR 2'/2b)	○	○	76.312	76.219	9.3	
12	II A15v	暗褐色シルト(10YR 3'/9b)	○	○	75.994	75.837	157	地山ブロック微量、花崗岩粒微量
13	II A14v	黒褐色シルト(10YR 3'/1b)	○	○	76.302	76.215	17.2	暗褐色シルト少量、φ1~3mmの花崗岩粒少量
14	II A16v	暗褐色シルト(10YR 3'/9b)	○	○	75.834	75.491	34.3	地山ブロック少量、花崗岩粒少量
15	II A14w	黒褐色シルト(10YR 2'/2)	○	○	76.010	75.869	2.1	地山ブロック中量、灰化物微量、花崗岩粒微量
16	II A16t	暗褐色シルト(10YR 3'/9b)	○	○	76.255	76.248	19.7	地山ブロック中量、灰化物微量、花崗岩粒微量
17	II A14a	黒褐色シルト(10YR 2'/2b)	○	△	76.385	76.288	9.7	暗褐色シルト少量
18	II A15w	黒褐色シルト(10YR 3'/2b)	○	○	75.887	75.791	9.6	地山ブロック少量、灰化物微量
19	II A15w	暗褐色シルト(10YR 3'/9b)	○	○	75.594	75.459	13.5	灰化物微量、花崗岩粒少量
20	II A15w	黒褐色シルト(10YR 2'/2b)	○	○	75.804	75.511	29.3	灰化物微量、花崗岩粒微量
21	II A17t	黒褐色シルト(10YR 2'/2b)	○	○	75.287	75.132	15.5	地山ブロック少量、灰化物微量、花崗岩粒少量
22	II A15x	黒褐色シルト(10YR 2'/2b)	○	*	75.879	75.693	18.6	灰化物微量、地山ブロック微量
23	II A15w	黒褐色シルト(10YR 2'/2b)	○	○	75.873	75.761	9.2	灰化物微量、地山ブロック微量
24	II A14v	黒褐色シルト(10YR 3'/2b)	○	○	76.065	75.867	18.8	灰化物微量、地山ブロック少量、花崗岩粒微量
25	II A15v	黒褐色シルト(10YR 3'/2b)	○	○	75.939	75.617	32.2	灰化物微量、地山ブロック微量
26	II A14v	暗褐色シルト(10YR 2'/2b)	○	○	76.272	76.081	19.1	灰化物微量、地山ブロック微量、花崗岩粒微量
27	II A14a	暗褐色シルト(10YR 2'/2b)	○	△	76.633	76.392	26.1	灰化物微量、地山ブロック微量
28	II A15u	黒褐色シルト(10YR 3'/2b)	○	○	76.203	75.988	21.5	灰化物微量、地山ブロック微量、花崗岩粒微量
29	II A15w	暗褐色シルト(10YR 3'/9b)	○	○	76.279	75.996	28.3	灰化物微量、地山ブロック少量、花崗岩粒微量
30	II A17t	暗褐色シルト(10YR 3'/2b)	○	△	75.117	75.003	11.4	灰化物微量、地山ブロック微量、花崗岩粒少量
31	II A18o	黒褐色シルト(10YR 2'/2b)	○	○	74.663	74.352	30.1	灰化物微量、地山ブロック微量
32	II A16s	黒褐色シルト(10YR 3'/2b)	○	○	75.567	75.393	17.4	地山ブロック少量、花崗岩粒少量
33	II A16w	暗褐色シルト(10YR 3'/4)	○	○	75.542	75.359	18.3	
34	II A16v	暗褐色シルト(10YR 2'/2b)	○	○	75.488	75.344	14.3	灰化物微量、花崗岩粒少量
35	II A18a	暗褐色シルト(10YR 2'/2b)	△	○	74.470	74.226	24.4	灰化物微量、地山ブロック少量、花崗岩粒少量
36	II A15v	黒褐色シルト(10YR 2'/2b)	○	△	75.878	75.709	16.9	
37	II A15p	黒褐色シルト(10YR 2'/2b)	△	○	77.018	76.911	10.7	灰化物微量、地山ブロック微量
38	II A15p	黒褐色シルト(10YR 3'/2b)	○	○	76.912	76.823	8.9	灰化物微量、地山ブロック微量
39	II A15p	暗褐色シルト(10YR 2'/2b)	○	○	77.000	76.638	16.2	灰化物微量、地山ブロック微量
40	II A19p	褐褐色シルト(10YR 4'/4)	○	○	75.448	75.289	15.9	灰化物微量、黒褐色シルトブロック多量
41	II A19o	黒褐色シルト(10YR 2'/2b)	○	○	75.672	75.516	15.6	
42	II A19n	暗褐色シルト(10YR 3'/2b)	○	△	75.830	75.585	23.5	φ10cmの花崗岩少量
43	II A19n	黒褐色シルト(10YR 2'/2b)	△	△	75.801	75.628	17.3	
44	II A14a	暗褐色シルト(10YR 3'/9b)	○	○	76.400	76.239	16.1	灰化物微量、花崗岩粒少量
45	II B20b	黒褐色シルト(10YR 2'/2b)	○	○	72.106	71.688	41.8	灰化物微量、地山ブロック微量
46	II B21a	黒褐色シルト(10YR 3'/2b)	○	○	72.080	71.680	40.0	灰化物微量、地山ブロック微量、花崗岩粒中量
47	II A21x	黒褐色シルト(10YR 3'/2b)	○	○	72.536	72.436	9.0	灰化物微量、地山ブロック微量
48	II B20b	黒褐色シルト(10YR 3'/2b)	△	○	72.222	72.022	20.0	地山ブロックや多く、地山ブロック少量
49	II B20b	暗褐色シルト(10YR 2'/2b)	○	○	72.239	72.001	23.8	灰化物微量、地山ブロック少量
50	II A21x	黒褐色シルト(10YR 2'/2b)	○	○	72.266	72.124	22.6	
51	II A21x	黒褐色シルト(10YR 3'/2b)	○	○	72.449	72.318	13.1	灰化物微量、地山ブロック微量
52	II A22x	黒褐色シルト(10YR 2'/2b)	○	○	71.955	71.711	24.4	
53	II B20b	黒褐色シルト(10YR 2'/2b)	○	○	72.324	72.057	16.7	花崗岩粒を少量含む
54	II B20b	暗褐色シルト(10YR 3'/4)	△	*	71.933	71.209	22.4	花崗岩粒少量、φ1~3cmの花崗岩少量、黒色シルトブロック中量

粘性・しまり：×→△→□→○

柱穴名	グリッド名	色調・土質	粘性	しまり	検出面標高 (m)	底面標高 (m)	深さ (cm)	混入物
55	II B20 b	暗褐色シルト(10YR3'/b)	○	○	71.964	71.682	28.2	φ1~2mmの花崗岩少量、花崗岩粒中量
56	II A22y	黒褐色シルト(10YR2'/b)	○	○	71.722	71.530	19.2	花崗岩粒少量
57	II B20 d	黒褐色シルト(10YR 3'/b)	○	△	71.819	71.452	36.7	炭化物微量、花崗岩粒微量
58	II B21b	黒褐色シルト(10YR2'/b)	○	△	71.596	71.396	26.0	炭化物微量、地山ブロック微量
59	II B20 c	暗褐色シルト(10YR2'/3)	○	△	72.198	72.062	13.6	
60	II A21x	黒褐色シルト(10YR3'/2)	×	○	72.509	72.422	8.7	炭化物微量、地山ブロック中量、花崗岩粒微量
61	II B19 d	暗褐色シルト(10YR2'/b)	○	○	72.317	72.125	19.2	黒褐色シルトブロック中量、花崗岩粒少量
62	II B20 d	黒褐色シルト(10YR2'/b)	○	△	72.112	71.866	24.6	黄褐色シルトブロック中量、φ3~5mmの花崗岩少量
63	II B20 e	黒褐色シルト(10YR2'/b)	○	○	72.353	72.114	23.9	花崗岩粒少量、地山ブロック微量
64	II B20 d	黒褐色シルト(10YR2'/b)	○	○	71.818	71.608	20.5	
65	II A22z	黒褐色シルト(10YR2'/b)	○	○	72.082	71.896	18.6	炭化物微量、花崗岩粒中量
66	II A21y	黒褐色シルト(10YR2'/b)	△	△	72.361	72.191	17.0	燒土粒微量、花崗岩粒少量
67	II A22y	暗褐色シルト(10YR3'/b)	○	○	71.737	71.569	17.8	
68	II B21b	黒褐色シルト(10YR3'/b)	○	○	71.587	71.299	28.8	炭化物微量、花崗岩粒微量
69	II B20 d	黒褐色シルト(10YR2'/b)	○	○	71.680	71.474	20.6	地山ブロック少量、花崗岩粒少量
70	II B20 c	暗褐色シルト(10YR2'/b)	○	○	71.630	71.432	19.8	地山ブロック少量、花崗岩粒微量
71	II B20 b	暗褐色シルト(10YR2'/4)	×	△	72.333	72.155	17.8	花崗岩粒微量
72	II B20 d	暗褐色シルト(10YR2'/4)	○	○	71.615	71.439	17.6	φ2~3mmの花崗岩粒少量、黒褐色シルト中量
73	II B21 e	黒褐色シルト(10YR2'/b)	○	○	71.615	71.408	20.7	
74	II B20 d	暗褐色シルト(10YR2'/b)	○	○	71.620	71.445	17.5	炭化物微量、地山ブロック少量、花崗岩粒微量
75	II B20 b	暗褐色シルト(10YR2'/b)	○	△	72.216	71.981	23.5	黒褐色シルト粒少量
76	II A15p	暗褐色シルト(10YR3'/b)	○	△	76.734	76.511	22.3	炭化物微量、地山ブロック微量
77	II B20 e	暗褐色シルト(10YR2'/4)	△	○	71.982	71.862	12.0	花崗岩粒中量、φ3~4mmの花崗岩粒少量
78	II B20 c	暗褐色シルト(10YR3'/b)	○	○	71.807	71.578	22.9	φ3~4mmの花崗岩粒少量、黒褐色シルト中量
79	II B20 d	暗褐色シルト(10YR2'/4)	○	○	71.719	71.571	14.8	

粘性・しまり：×→△→○

だし調査区内が部分的に後世の削平を受けているので、柱穴状土坑も部分的に上部が消失している可能性がある。

【埋土】 黒褐色シルトや暗褐色シルトを主体とし、わずかであるが褐色シルト主体のものがある。色調の違いはあるものの土質や混入物に大きな差異が認められないので、それぞれに時期差はないものと考えている。混入物は炭化物や地山ブロックで人為堆積であると判断できたものは少ない。また柱痕跡の確認できたものはなかった。

【出土遺物】 全てではないが、縄文土器の小片が出土している柱穴状土坑が見受けられる。3点図示した。139はPit26から出土している。繊維が混入し、横位の結束羽状縄文が巡る。140はPit46の埋土中から出土した尖底土器の底部片である。胎土には繊維が多く混入し、底部全体に縄文（単節LR）が施文される。141はPit72の埋土中から出土した。胎土に繊維が混入し、横位に環付末端文が巡る。大木1式に比定される。

【機能・用途】 不明。配列をみると掘立柱建物跡の柱穴とは考えられない。周辺に分布する遺構群に付属する何らかの施設の可能性が高い。

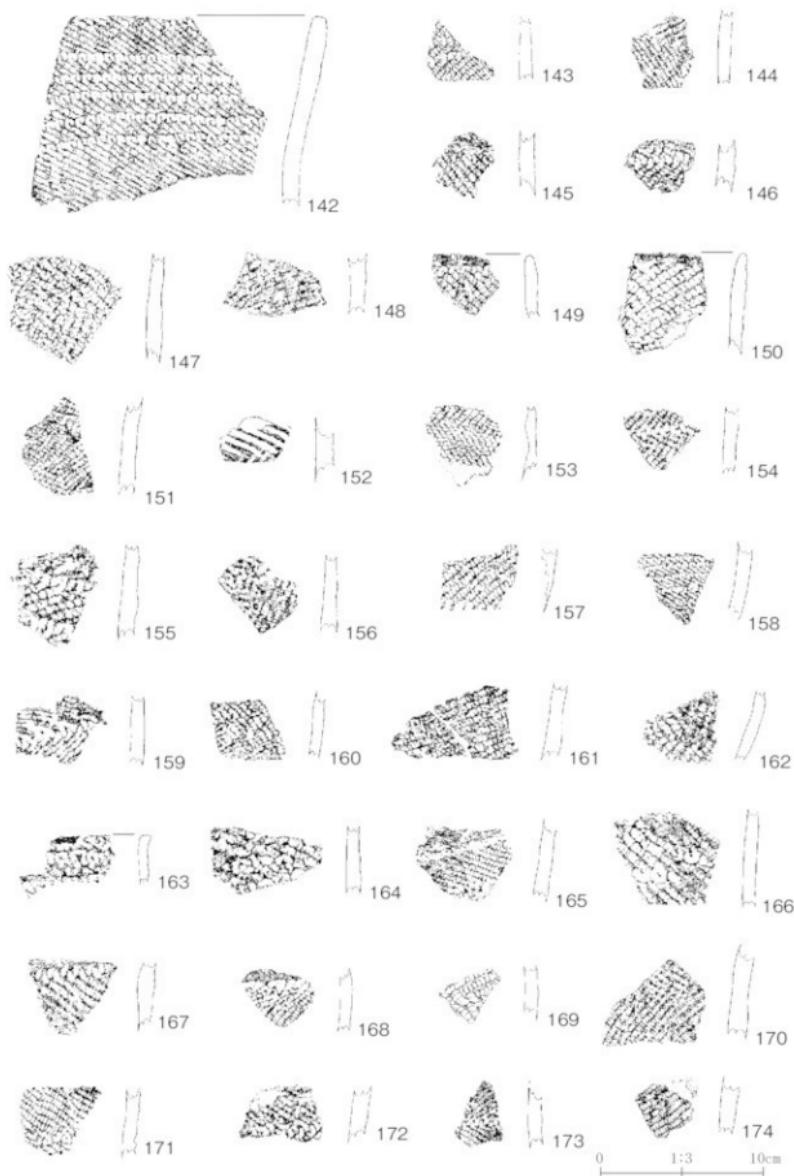
【時期】 出土した土器片を基準として判断するならば、前期初頭～大木1式に比定される柱穴状土坑群と推定できる。ただし遺物自体は流れ込みによる混入の可能性もあり、また調査区南端には中期の遺構群も分布するので、中期の範疇に収まる可能性もある。

(5) 遺構外出土遺物（第26～31図、写真図版56～60）

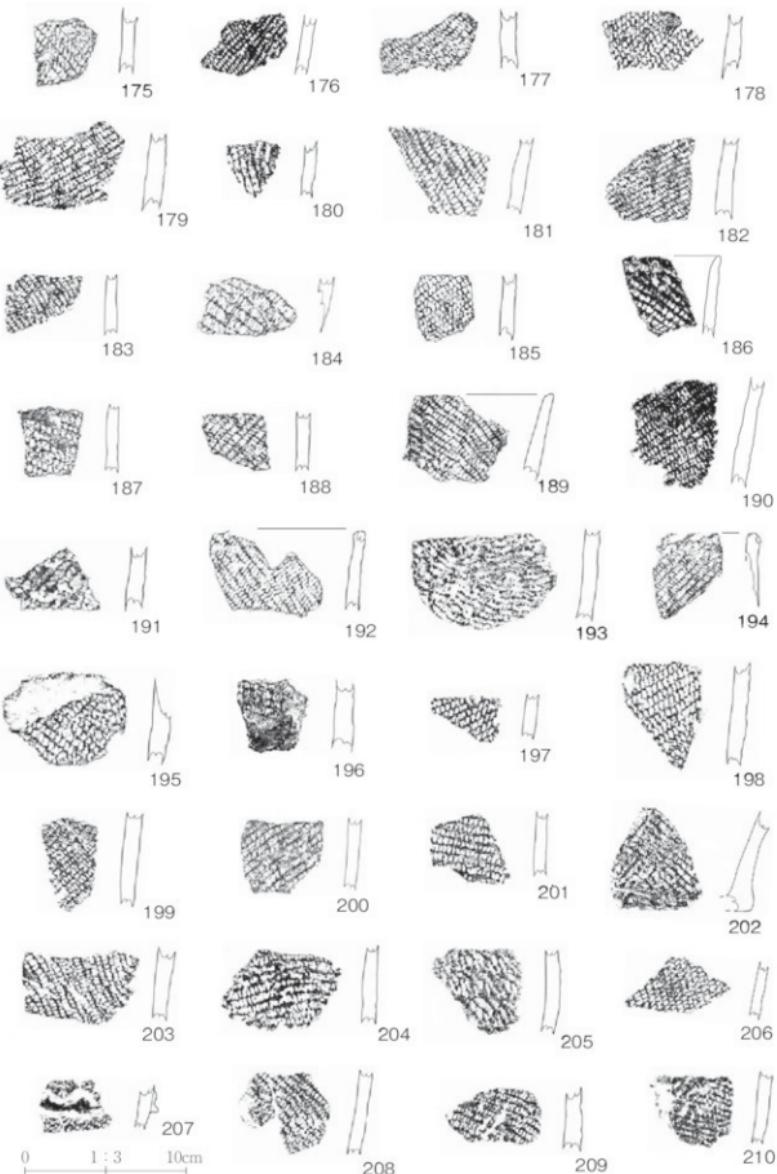
平成24年度調査においては遺構外からも遺物が出土しており、比較すると遺構内出土よりも多い傾向にある。

前述の通り本遺跡では本来、遺物包含層は2面存在した（Ⅱ層・Ⅲ層）ものと考えられ、したがって出土する遺物も2つの時期に大きく分かれのはずであるが、平成24年度調査区の広い範囲で後世の削平によりⅡ層が消失し、したがって遺構外から出土する遺物は主にⅢ層から出土する縄文時代前期前葉に比定されるものである。

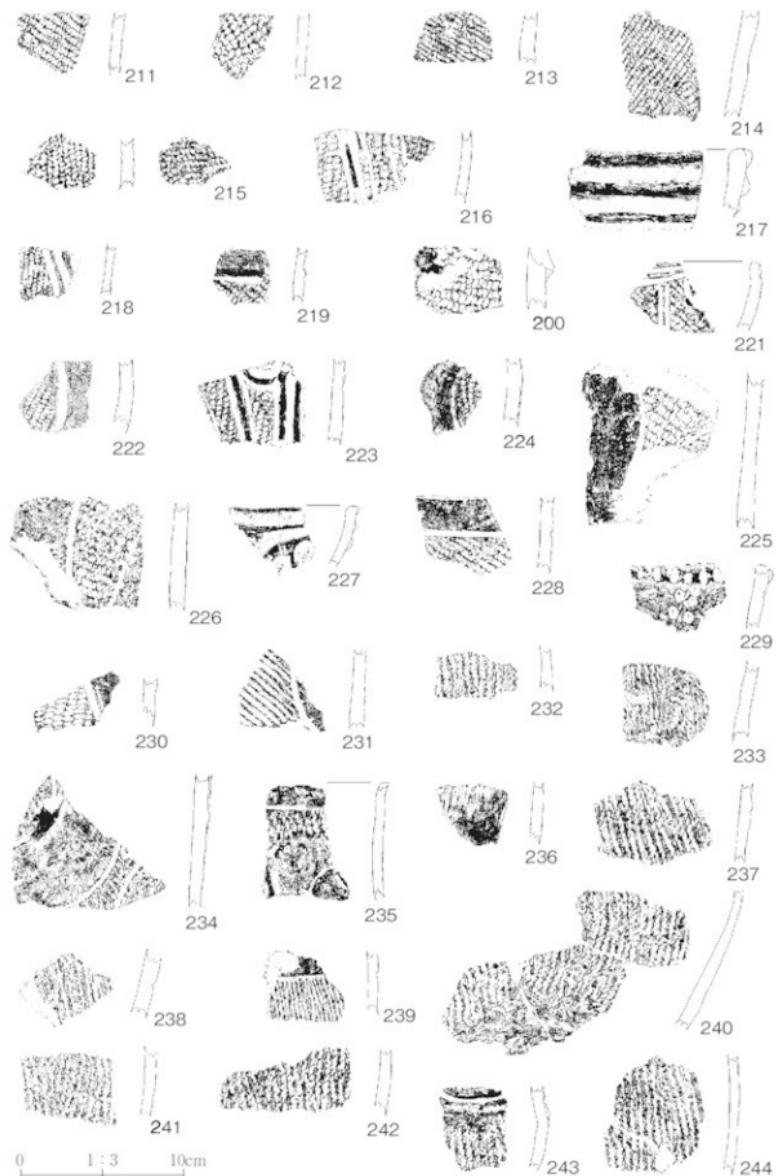
141～214は縄文時代前期初頭～大木1式に比定される土器が主体で、いずれにも胎土に繊維が混入



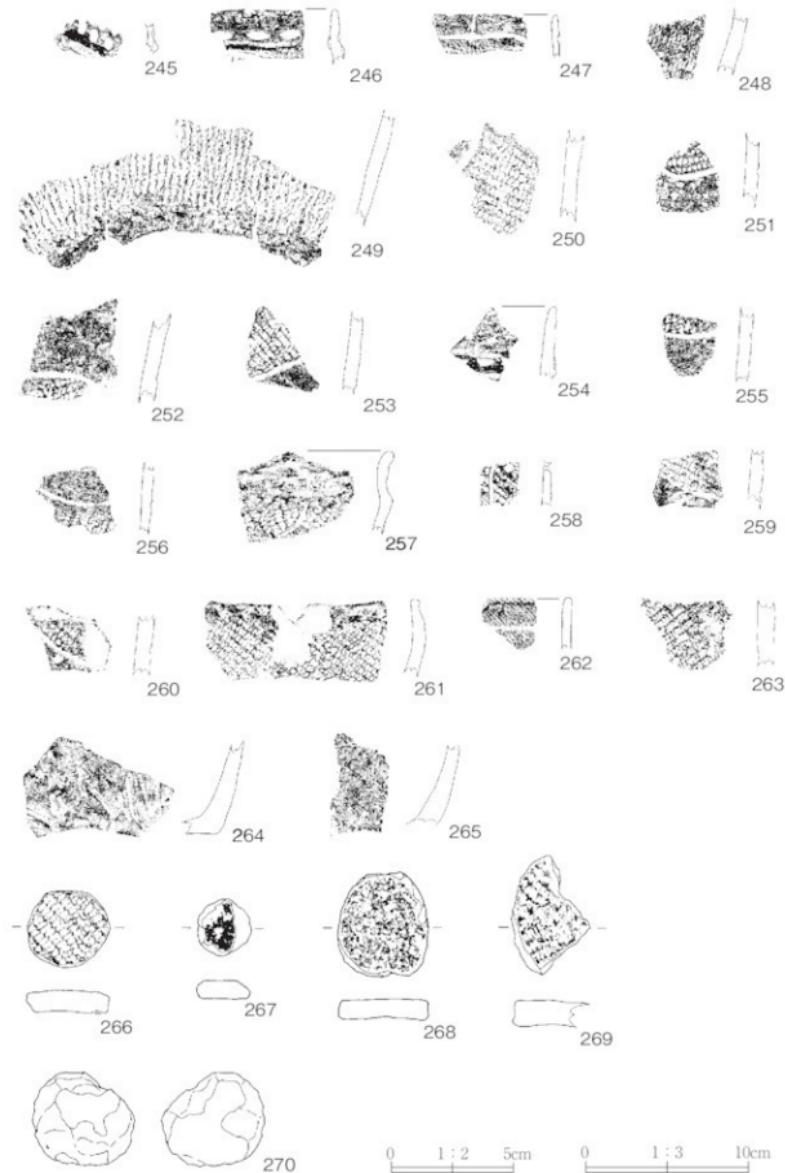
第27図 遺構外出土遺物（1）



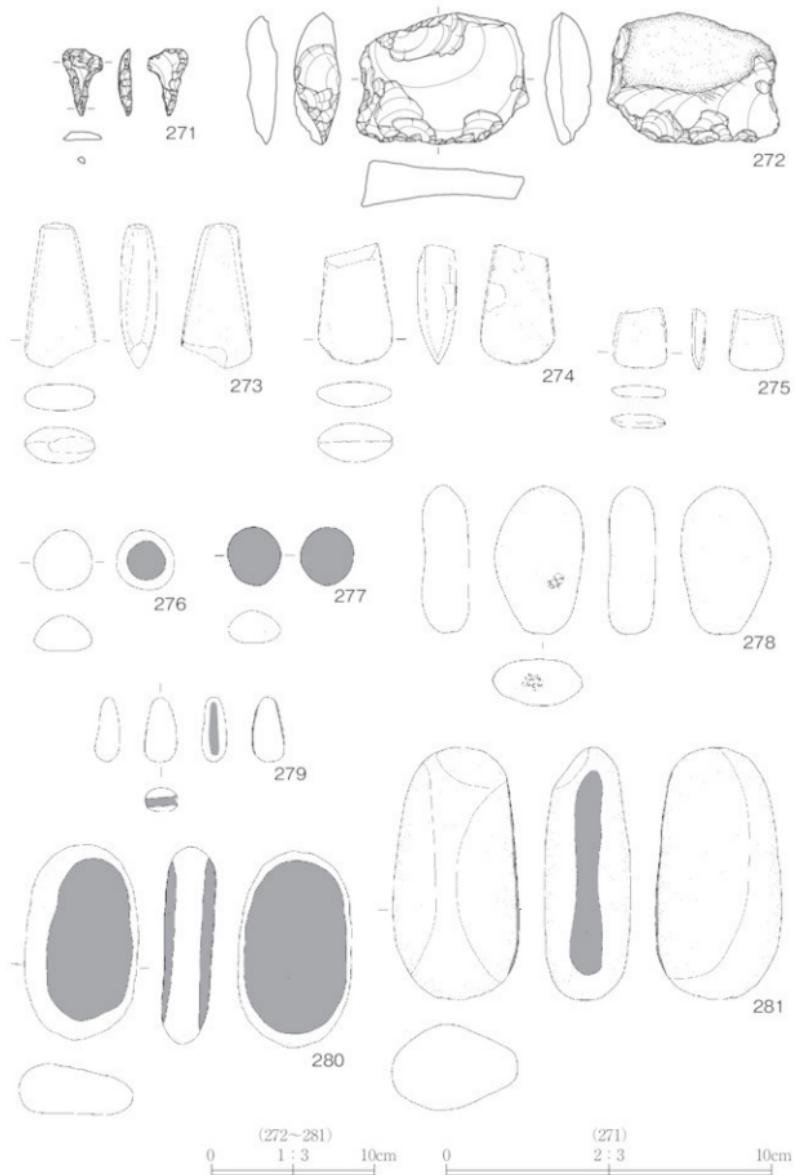
第28図 遺構外出土遺物（2）



第29図 遺構外出土遺物（3）



第30図 遺構外出土遺物（4）



第31図 遺構外出土遺物（5）



第32図 遺構外出土遺物（6）

4点図示したが、大きさに規則性はなく、また266は縁辺全周が摩滅するが、その他は部分的である。他に粘土塊1点（270）が出土している。

石器も出土しているが、散在的で、主に礫石器である。271は石錐2類で、二次加工が及んでいない箇所が見受けられる。272は両柄石器1類で、上下に方向に打撃が加えられている。273～275は磨製石斧でいずれも欠損する。276～281は敲磨器類である。276・277・279は小型で磨痕が見受けられる。278は偏平な楕円形礫を素材とし、敲打痕が施される。280・281はやや大型で偏平な礫を素材とし、両面および側面に磨痕が見受けられる。

他に近世に帰属するものと推測する砥石1点（282）がⅡ層中から出土している。立方体状をなし、長軸方向の4面が使用されている。またそのうちの1面には浅い研溝3条が確認できた。

される。141・157は大木1式の特徴である口縁部に環付末端回転文が巡る土器片である。142は大木2a式と考えられ、結束羽状繩文が施文される。169・170は非結束羽状繩文が施文される。215は内面にも斜行繩文が施文される。

221～263は縄文時代中期の範疇に収まる土器群である。216～223は大木8b式である。224は小片であるが微隆帯による区画文が見受けられ、大木9式と考えられる。225・226は大木10式古段階か。229は大木10式新段階で、円形の刺突文が並ぶ。232～244・248～263は粗製である。他に土師器片2点（264・265）が出土している。

土製品も出土している。土製円盤である。

第6表 平成24年度 出土遺物観察表
縄文土器

掲載 No	国版 番号	写真 番号	出土地点・層位	器種	残存部位	外表面形	内面調整	外表面 内面調査	焼成	型式時期	備考
1	8	56	1号住居 壁上位	深鉢	銅部片	側：非輪変羽状縞文	ナデ (横)	黒褐 にぶい黄褐	やや不良	大木1~2	縄文混入
2	8	56	1号住居 壁上位	深鉢	銅部片	側：結節回転縞文 (LR)	ナデ (横)	黒褐 褐	やや不良	大木1~2	縄文混入
3	8	56	1号住居 壁下位	深鉢	底部片	側：無文	ナデ (横)	にぶい黄褐 浅黃褐	不良	縄文時代前期	
4	10	56	1号住居 壁上位	深鉢	口縁部片	口縁：縞文 (RL)	ナデ (横) (斜)	にぶい黄褐 灰黄褐	やや不良	縄文時代前期	縄文混入
5	10	56	2号住居 壁上位	深鉢	銅部片	側：非輪変羽状縞文 (LR・RL)	ナデ (横)	にぶい黄褐 (斜)	やや不良	大木1~2	縄文混入
6	10	56	2号住居 壁上位	深鉢	銅部片	側：環付木端回転文 (RL)	ナデ (横)	にぶい黄褐 にぶい黄褐	不良	大木1~2	縄文混入
7	10	56	2号住居 壁上位	深鉢	銅部片	側：縞文 (LR) 横位	ナデ (横)	明黄褐 明黄褐	やや良好	縄文時代前期	縄文混入
8	10	56	2号住居 壁下位	深鉢	銅部片	側：縞文 (LR)	ナデ (横)	にぶい黄褐 にぶい黄褐	やや不良	大木1~2	縄文混入
9	10	56	2号住居 壁下位	深鉢	銅部片	側：縞文 (LR)	ナデ (斜)	にぶい黄褐 にぶい黄褐	不良	縄文時代前期	縄文混入
10	10	56	2号住居 壁下位	深鉢	銅部片	側：縞文 (RL) 横位→非輪変による区画文 (崩剥)	ナデ (横)	明黄褐 にぶい黄褐	やや不良	大木10 (新)	
11	10	56	2号住居 壁下位	深鉢	口縁部片	側：縞文 (LR) 沈線による区画文 (崩剥)	ナデ (横)	にぶい黄褐 明黄褐	良好	大木10 (新)	
12	10	56	2号住居 壁下位	深鉢	口縁部片	口縁：側面に刺突を施す区画帶 銅部：手取縄条体第1期 (R)	ナデ (横)	灰黄褐 灰黄褐	やや良好	大木10 (新)	
13	10	56	2号住居 壁下位	深鉢	銅部片	側：単輪縄条体第1期 (L) 環位	ナデ (横)	にぶい黄褐 規則	不良	大木10 (新)	
14	10	56	2号住居 壁上位	深鉢	銅部片	側：単輪縄条体第1期 (L)	ナデ (斜)	灰黄褐 にぶい黄褐	やや不良	大木10 (新)	
15	10	56	2号住居 壁上位	深鉢	口縁部片	側：縞文 (RL)	ナデ (横)	灰黄褐 にぶい黄褐	やや不良	縄文時代中期	
16	10	56	2号住居 壁上位	深鉢	銅部片	側：結節回転縞文 (LR)	ナデ (横)	にぶい黄褐 にぶい黄褐	やや不良	大木1~2	縄文混入
17	10	56	2号住居 壁上位	深鉢	銅部片	口縁：側面に刺突 銅部：縞文 (LR)	ナデ (横)	にぶい黄褐 にぶい黄褐	不良	大木1~2	縄文混入
18	10	56	2号住居 壁上位	深鉢	口縁部片	口縁：非輪変回転縞文 (RL)	ナデ (横)	にぶい黄褐 明黄褐	やや良好	大木1~2	縄文混入
19	10	56	2号住居 壁上位	深鉢	銅部片	側：縞文 (LR)	ナデ (横)	にぶい黄褐 にぶい黄褐	不良	縄文時代前期	縄文混入
20	10	56	2号住居 壁下位	深鉢	銅部片	側：縞文 (LR)	ナデ (横)	明黄褐 にぶい黄褐	やや良好	縄文時代前期	縄文混入
21	10	56	2号住居 壁下位	深鉢	銅部片	側：縞文 (LR) 沈線による区画文 (崩剥)	ナデ (横)	にぶい黄褐 灰黄褐	やや不良	大木10 (新)	
22	10	56	2号住居 壁下位	深鉢	口縁部片	側：縞文 (LR) 横位 沈線による区画文	ナデ (横)	にぶい黄褐 明黄褐	良好	大木10 (新)	
23	10	56	2号住居 壁下位	深鉢	底部片	側：単輪縄条体第1期 (L) 環位	ナデ (斜)	にぶい黄褐 規則	やや良好	大木10 (新)	
24	10	56	2号住居 壁下位	深鉢	銅部片	側：縞文 (LR) 沈線による区画文 (崩剥)	ナデ (横)	にぶい黄褐 黒褐	やや良好	大木10	
25	10	56	2号住居 壁下位	深鉢	口縁部片	口縁：直線上に縞文 (LR) による圧痕	ナデ (横)	にぶい黄褐 にぶい黄褐	良好	中期	
27	12	56	3号住居 壁下位	深鉢	銅部片	側：環付木端回転文 (RL)	ナデ (横)	にぶい黄褐 灰黄褐	やや不良	大木1~2	縄文混入
28	12	56	3号住居 壁下位	深鉢	口縁部片	口縁：側面に刺突 銅部：単輪縄回転 (RL)	ナデ (横)	にぶい黄褐 にぶい黄褐	不良	大木1~2	縄文混入
29	12	56	3号住居 壁下位	深鉢	銅部片	側：環付木端回転文 (RL)	ナデ (斜)	にぶい黄褐 灰黄褐	やや良好	大木1~2	縄文混入
30	12	56	3号住居 壁下位	深鉢	銅部片	側：環付木端回転文 (RL)	ナデ (横)	にぶい黄褐 規則	不良	大木1~2	縄文混入
31	12	56	3号住居 壁直	深鉢	銅部片	側：環付木端回転文 (RL)	ナデ (横)	灰 灰黄褐	不良	大木1~2	縄文混入
32	12	56	3号住居 壁直	深鉢	銅部片	側：縞文 (RL)	ナデ (横)	にぶい黄褐 にぶい黄褐	不良	前期	縄文混入
33	12	56	3号住居 壁直	深鉢	銅部片	側：縞文 (LR)	ナデ (横)	明黄褐 にぶい黄褐	やや不良	縄文時代前期	縄文混入
34	12	56	3号住居 壁直	深鉢	銅部片	側：単輪縄条体第1期 (L) 環位、孔壁	ナデ (斜)	灰黄褐 にぶい黄褐	やや不良	大木10 (新)	
35	12	56	3号住居 壁直	深鉢	銅部片	側：単輪縄条体第1期 (L) 環位	ナデ (横)	にぶい黄褐 にぶい黄褐	やや不良	大木10 (新)	
36	12	56	3号住居 壁直	深鉢	銅部片	側：単輪縄条体第1期 (L) 環位	ナデ (斜)	にぶい黄褐 規則	良好	大木10 (新)	
37	11	56	3号住居 管理設土器	深鉢	3/4残存	側：縞文 (RL) → 沈線による区画文 (崩剥)	ナデ (横)	明黄褐 にぶい黄褐	良好	大木10 (新)	土器内面下部 に保付着
38	12	56	3号住居 管理設土器	深鉢	1/2残存	側：縞文 (LR)	ナデ (横)	黄褐 にぶい黄褐	やや良好	大木10 (新)	粗質土器

掲載 No	国版 番号	写真 番号	出土地点・層位	器種	残存部位	外面文様	内面調整	外面部 内面部	機成	型式時期	備考
39	12	56	3号住居 砂利土器付近	深鉢	胴部片	胴：單輪縦条体第1類（L）・沈縫 縫位	ナデ (横) 縫位	赤褐色 縫	良好	大木10（新）	
40	13	56	3号住居 砂利土器付近	深鉢	胴部片	胴：繩文（RL）・沈縫	ナデ (縫)	縫	良好	大木10（新）	
41	13	56	3号住居P4 層上位	深鉢	胴部片	胴：繩文（LR） 縫位	ナデ (横) 縫位	にぶい黃褐色 灰黃褐色	不良	大木1~2	織羅混入
42	13	57	3号住居P5 層上位	深鉢	胴部片	胴：環付末端回転文（RL）	ナデ (横)	黃褐色 淡黃褐色	不良	大木1~2	織羅混入
43	13	57	3号住居P6 層上位	深鉢	胴部	胴：繩文（RL）	ナデ (縫)	にぶい黃褐色	良好	織文時代中期	
44	13	57	3号住居P6 層上位	深鉢	胴部片	胴：繩文（RL）	ナデ (横)	明黃褐色 明黃褐色	良好	織文時代中期	
45	13	57	3号住居P6 層上位	深鉢	胴部片	胴：繩文（RL）	ミガキ (縫)	黃褐色 明黃褐色	良好	織文時代中期	
46	13	57	3号住居P6 層上位	深鉢	胴部片	胴：繩文（RL）	ミガキ (縫)	黃褐色 黃褐色	良好	織文時代中期	
48	15	57	4号住居 層上位	深鉢	胴部片	胴：結束回転文（RL）	ナデ (横)	明黃褐色 明黃褐色	不良	織文時代前期	織羅混入
49	15	57	4号住居 層上位	深鉢	胴部片	胴：繩文（RL）	ナデ (横)	褐灰色 黑褐色	不良	織文時代中期	
50	16	57	4号住居 層上位	深鉢	胴部片	胴：非結束羽状圓文（LR・RL）	不明	黃褐色 黑褐色	やや不良	大木1~2	織羅混入
51	16	57	4号住居 層上位	深鉢	胴部片	胴：繩文（LR）	ナデ (縫)	明黃褐色 灰黃褐色	やや不良	織文時代前期	織羅混入
52	16	57	4号住居 層上位	深鉢	胴部片	胴：付加条（RL+R）	ナデ (横) 縫灰	にぶい黃褐色 灰	やや不良	織文時代前期	
53	16	57	4号住居 層上位	深鉢	胴部片	胴：單輪縦条体第1類（R） 縫位	ナデ (横)	にぶい黃褐色	やや不良	大木10（新）	
54	16	57	4号住居 層上位	深鉢	胴部片	胴：單輪縦条体第1類（r） 縫位	ナデ (横)	にぶい黃褐色 にぶい黃褐色	やや良好	大木10（新）	
55	16	57	4号住居 層上位	深鉢	胴部片	胴：單輪縦条体第1類（1） 縫位	ナデ (縫)	褐灰 にぶい黃褐色	やや不良	大木10（新）	
56	16	57	4号住居 層上位	深鉢	胴部片	胴：單輪縦条体第1類（r） 縫位	ナデ (縫)	灰黃褐色 にぶい黃褐色	やや不良	大木10（新）	
57	16	57	4号住居 層上位	深鉢	胴部片	胴：單輪縦条体第1類（R） 沈縫による区画文	ナデ (横)	にぶい黃褐色 にぶい黃褐色	不良	大木10（新）	
58	16	57	4号住居 層上位	深鉢	胴部片	胴：繩文（LR） 縫位	ナデ (横)	にぶい黃褐色 淡黃褐色	やや不良	大木10（新）	
59	16	57	4号住居 層上位	深鉢	胴部片	胴：單輪縦条体第1類（L） 縫位	ナデ (横)	にぶい黃褐色 にぶい黃褐色	やや不良	大木10（新）	
60	16	57	4号住居 層上位	不明	口縁	口縁：無文	ナデ (横)	にぶい黃褐色 にぶい黃褐色	良好	大木10（新）	括り口縁の一部 部分
61	16	57	4号住居 層上位	深鉢	胴部片	胴：單輪縦条体（R）	ナデ (横)	明黃褐色 黃褐色	やや不良	大木10（新）	
62	16	57	4号住居 層上位	深鉢	胴部片	胴：繩文（RL） 縫位	ナデ (縫)	明黃褐色 灰黃褐色	やや不良	大木10	
63	16	57	4号住居 層上位	深鉢	胴部片	胴：繩文（LR） 沈縫による区画文か？	ナデ (縫)	にぶい黃褐色 にぶい黃褐色	やや良好	織文時代中期	
64	16	57	4号住居 層上位	深鉢	胴部片	胴：繩文（RLR）	ナデ (横)	黒褐色 灰黃褐色	やや不良	織文時代中期	
65	16	57	4号住居 層上位	深鉢	口縁部片	口縁：陸帶上に刺突を施す区画帯 胴：單輪縦条体第1類（LR）	ナデ (横)	にぶい黃褐色 にぶい黃褐色	やや良好	大木10（新）	
66	16	57	4号住居 層上位	深鉢	胴部片	胴：單輪縦条体第1類（R） 縫位	ナデ (横)	にぶい黃褐色 明黃褐色	不良	大木10（新）	裏面一部剥落
67	16	57	4号住居 層上位	深鉢	胴部片	胴：單輪縦条体第1類（L） 縫位	ナデ (縫)	にぶい黃褐色 にぶい黃褐色	やや不良	大木10（新）	
68	16	57	4号住居 層上位	深鉢	口縁部片	口縁：陸帶上に刺突を施す区画帯	ナデ (縫)	にぶい黃褐色 にぶい黃褐色	良好	大木10（新）	
69	16	57	4号住居 層上位	深鉢	口縁部片	口縁：陸帶上に刺突を施す区画帯 脇半輪縦条体第1類（L） 脇空・口縁による区画か？	ナデ (縫)	明黃褐色 にぶい黃褐色	良好	大木10（新）	
70	16	57	4号住居 層上位	深鉢	口縁部片	胴：繩文（RL）	ナデ (横)	灰黃褐色 淡黃褐色	やや良好	織文時代前期	織羅混入
71	16	57	4号住居 層上位	深鉢	底部片	胴部～底部：無文	ナデ (横)	黃褐色 黃褐色	やや不良	織文時代	
72	16	57	4号住居 層上位	深鉢	口縁部片	口縁：陸帶上に刺突	ナデ (横)	灰黃褐色 にぶい黃褐色	やや良好	大木10（新）	
73	16	57	4号住居 層上位	深鉢	口縁部片	胴：單輪縦条体第1類（R） 縫位	ナデ (横)	明黃褐色 明黃褐色	良好	大木10（新）	
74	16	57	4号住居 層上位	深鉢	胴部片	胴：非結束羽状圓文	ナデ (横)	明黃褐色 にぶい黃褐色	不良	大木1~2	織羅混入
75	17	57	4号住居 層上位	深鉢	胴部片	胴：繩文（RL）	ナデ (横)	にぶい黃褐色 明黃褐色	不良	大木10（新）	
76	17	57	4号住居 層上位	深鉢	胴部片	胴：繩文（LR） 沈縫による区画文（崩壊）	ナデ (横)	にぶい黃褐色 にぶい黃褐色	やや不良	大木10（新）	

掲載 No	国版 番号	写真 番号	出土地点・層位	器種	残存部位	外面文様	内面調整	外面色調 内面色調	焼成	型式時期	備考
77	17	57	4号住居 廻上位	深鉢	胴部片	胴: 楔文 (LR) → 沈縫による区画文 継縫	ナデ (横) にぶい 黄褐色	やや良好	大木10 (新)		
78	17	57	4号住居 廻上位	深鉢	胴部片	胴: 单輪捺条体第1期 (R) 継縫	ナデ (縦) にぶい 黄褐色	良好	大木10 (新)		
79	17	57	4号住居 廻上位	深鉢	胴部片	胴: 楔文 (LR)	ナデ (縦) にぶい 黄褐色	不良	織文時代前期	織維混入 器面一部剥落	
80	17	57	4号住居 廻上位 (郊周辺)	深鉢	胴部片	胴: 单輪捺条体第1期 (R)	ナデ (横) 明黄褐色	やや不良	大木10 (新)		
81	17	57	4号住居 廻上位 (郊周辺)	深鉢	胴部片	胴: 单輪捺条体第1期 (L) 継縫	ナデ (斜) 明黄褐色 にぶい 黄褐色	良好	大木10 (新)		
82	17	57	4号住居 廻上位 (郊周辺)	不明	不明	口縁: 無文	不明	明黄褐色 にぶい 黄褐色	良好	大木10 (新)	捺り口縁の一部か
83	17	57	4号住居 廻上位 (郊周辺)	深鉢	口縁～胴 部片	口縁: 剣: 单輪捺条体第1期 (L) → 沈縫 状粘土付・沈縫による区画 (著潤)	ナデ (横) にぶい 黄褐色	やや不良	大木10 (新)		
84	17	57	4号住居 廻上位 (郊周辺甚)	深鉢	口縁部片	口縁: 隆起上に刺突	ナデ (横) にぶい 黄褐色	やや不良	大木10 (新)		
85	17	57	4号住居 廻上位	深鉢	胴部片	胴: 单輪捺条体 (R) - 沈縫	ナデ (横) にぶい 黄褐色	やや不良	大木10 (新)	-	
86	17	58	4号住居 廻上位 (郊周辺甚)	深鉢	胴部片	胴: 单輪捺条体第1期 (R) 継縫	ナデ (横) にぶい 黄褐色	良好	大木10 (新)		
87	17	58	4号住居 廻上位 (郊周辺甚)	深鉢	口縁部片	口縁: 楔文 (RL) 沈縫による区画文 (ナデ)	ナデ (横) 明黄褐色 にぶい 黄褐色	良好	大木10 (新)		
88	17	58	4号住居 廻上位 (郊周辺甚)	深鉢	胴部片	胴: 单輪捺条体第1期 (R) → 隆筋によ る区画文	ナデ (斜) 明黄褐色 黒褐色	やや不良	大木10 (新)	隆筋欠損	
89	17	58	4号住居 廻上位 (郊周辺甚)	深鉢	口縁部片	口縁: 隆筋上に刺突を施す区画帯	ナデ (横) にぶい 黄褐色	良好	大木10 (新)		
90	17	58	4号住居 廻上位 (郊周辺甚)	深鉢	胴部片	胴: 单輪捺条体第1期 (L) 継縫: 沈縫による区画文 (著潤) 一部開削あり	ナデ (横) 明黄褐色 にぶい 黄褐色	良好	大木10 (新)	穿孔による移 耕	
92	17	58	4号住居 廻上位 (郊周辺甚)	深鉢	胴部片	胴: 单輪捺条体第1期 (R) 継縫: 单輪捺条体第1期 (著潤) 沈縫による区画文 (著潤)	ナデ (横) にぶい 黄褐色	やや不良	大木10 (新)	穿孔による移 耕	
93	17	58	4号住居 廻上位	深鉢	胴部片	胴: 单輪捺条体第1期 (L) 継縫	ナデ (横) 黄褐色	良好	大木10 (新)		
94	17	58	4号住居 廻上位 (郊周辺甚)	深鉢	胴部片	胴: 楔文 (LR) 沈縫による区画文	ナデ (横) にぶい 黄褐色	不良	大木10 (新)		
95	18	58	4号住居 廻上位 (郊周辺甚) 廻上位 (郊周辺)	深鉢	胴部片	胴: 单輪捺条体第1期 (L) 継縫: 沈縫による区画文 (著潤)	ナデ (横) にぶい 黄褐色	やや不良	大木10 (新)		
96	18	58	4号住居 廻上位 (郊周辺甚)	深鉢	胴部片	胴: 单輪捺条体第1期 (L) → 沈縫・隆 筋による区画文 (ナデ)	ナデ (横) にぶい 黄褐色	良好	大木10 (新)		
97	18	58	4号住居 廻上位	深鉢	口縁部片	口縁: 单輪捺条体第1期 (L) 継縫	ナデ (横) にぶい 黄褐色	やや不良	大木10 (新)		
98	18	58	4号住居 廻上位	深鉢	胴部・底 部	胴: 单輪捺条体第1期 (R)	ナデ (横) 明黄褐色	良好	大木10 (新)	土器内面に塗 付着	
101	20	58	5号住居 廻上位	深鉢	胴部片	胴: 楔文 (RL) 口縁: 楔文に刺突 脚: 鐘付壺形回転文 (RL)	ナデ (横) にぶい 黄褐色 黒褐色	やや不良	織文時代前期	織維混入	
103	20	58	5号住居 廻上位	深鉢	胴部片	胴: 楔文 (LR)	ナデ (横) 明黄褐色 淡黃褐色	良好	織文時代前期	織維混入	
104	20	58	5号住居 廻下位	深鉢	胴部片	胴: 楔文 (LR)	ナデ (横) 明黄褐色 灰褐色	やや不良	大木10 (新)		
105	20	58	5号住居 廻下位	深鉢	胴部片	胴: 沈縫による区画文 (著潤)	ナデ (横) にぶい 黄褐色	やや不良	織文時代中期		
106	20	58	5号住居 廻下位	深鉢	胴部片	胴: 壁付末端回転文 (LR)	ナデ (横) にぶい 黄褐色 にぶい 黄褐色	不良	大木1	織維混入	
107	20	58	5号住居 廻上位	深鉢	胴部片	胴: 非結束回転文 (LR)	ナデ (横) にぶい 黄褐色	やや不良	大木1	織維混入	
108	20	58	5号住居 廻上位	深鉢	胴部片	胴: 楔文 (LR) 沈縫による区画文・短刻文	ナデ (横) 明黄褐色 にぶい 黄褐色	良好	織文時代中期		
109	20	58	5号住居 廻中	深鉢	口縁部片	口縁: 滑付状隆筋か?	ナデ (横) にぶい 黄褐色	やや不良	大木2		
110	20	58	5号住居 廻中	深鉢	胴部片	胴: 单輪捺条体第1期 (L) 継縫	ナデ (横) 明黄褐色	やや不良	大木10		
111	20	58	5号住居 廻中	深鉢	口縁部片	口縁: 楔文 (RL)	ナデ (横) 明黄褐色 にぶい 黄褐色	やや良好	大木10		
112	20	58	5号住居 廻中	深鉢	胴部片	胴: 单輪捺条体第1期 (r)	ナデ (横) にぶい 黄褐色 にぶい 黄褐色	良好	大木10 (新)		
113	20	58	5号住居 廻中	深鉢	胴部片	胴: 单輪捺条体第1期 (L) 継縫	ナデ (横) にぶい 黄褐色 にぶい 黄褐色	良好	大木10 (新)		
114	20	58	5号住居 廻中	深鉢	口縁部片	口縁: 隆筋 竹管による刺突	ナデ (横) 明黄褐色 にぶい 黄褐色	やや良好	大木10 (新)		
115	20	58	5号住居 廻中	深鉢	胴部片	胴: 楔文 (LR) 継縫	ナデ (斜) 黑褐色 にぶい 黄褐色	やや良好	大木10 (新)		

掲載 No	国版 番号	写真 番号	出土地点・層位	器種	残存部位	外表面文	内面調整	外表面 内面色調	焼成	型式時期	備考
116	20	58	5号住居 壁上中	深鉢	胴部片 横位	刷：單輪跡条体第1類（L）	ナデ (横)	にぶい黄褐 にぶい黄褐	やや良好	大木10（新）	
117	20	58	5号住居 壁上中	深鉢	口縁部片 刺突	口縁：陸帯	ナデ (横)	圓灰 にぶい黄褐	やや良好	大木10（新）	
118	20	58	5号住居 壁上中	深鉢	口縁部片	口縁：陸帶上に刺突を施す区画帯	不明	浅黄褐	良好	大木10（新）	
119	20	58	5号住居 壁上中	深鉢	胴部片	刷：單輪跡条体（L）	ナデ (横)	にぶい黄褐 黄褐	やや不良	大木10（新）	
120	20	58	5号住居 壁上中	深鉢	胴部片 横位	刷：單輪跡条体第1類（L） 横位	ナデ (横)	にぶい黄褐 浅黄	良好	大木10（新）	
121	20	58	5号住居4 壁上位	深鉢	胴部片	刷：繩文（LR）	ナデ (斜)	黄褐 にぶい黄褐	やや良好	繩文時代前期	織維混入
124	24	58	1号土坑 壁上位	深鉢	胴部片	刷：繩文（LR）	ナデ (横)	明黄褐 にぶい黄褐	良好	繩文時代前期	織維混入
126	24	58	1号土坑 壁上位	深鉢	胴部片 横位	刷：單輪跡条体第1類（L） 横位	ナデ (横)	明黄褐 明黄褐	やや不良	大木10（新）	
127	24	58	6号土坑 壁上位	深鉢	胴部片	刷：繩文（LR） 陸沈式による区画文	ナデ (斜)	にぶい黄褐 にぶい黄褐	やや不良	大木8b	
128	24	58	6号土坑 壁上位	深鉢	胴部片	刷：繩文（LR） 陆沈式による区画文（崩潰）	ナデ (斜)	にぶい黄褐 にぶい黄褐	やや不良	大木9	
129	24	59	7号土坑 壁上位	深鉢	胴部片	刷：繩文（LR）	ナデ (斜)	浅黄褐 浅黄褐	やや不良	繩文時代前期	織維混入
130	24	59	8号土坑 壁上位	深鉢	胴部片	刷：繩文（RL）	ナデ (横)	にぶい黄褐 明黄褐	やや不良	繩文時代前期	織維混入
131	24	59	13号土坑 壁上位	深鉢	胴部片	刷：繩文（RL）	ナデ (横)	にぶい黄褐 にぶい黄褐	やや不良	繩文時代前期	織維混入
132	24	59	13号土坑 壁上位	深鉢	胴部片	刷：繩文（LR）	ナデ (横)	浅黄褐 浅黄褐	やや不良	繩文時代前期	織維混入
133	24	59	23号土坑 壁下位	深鉢	胴部片	刷：繩文（RL）	ナデ (横)	にぶい黄褐 浅黄褐	不良	繩文時代前期	織維混入
134	24	59	21号土坑 壁上位	深鉢	胴部片	刷：繩文（RL）	ナデ (斜)	灰黄褐 にぶい黄褐	良好	繩文時代中期	
135	24	59	21号土坑 壁上位	深鉢	胴部片	刷：付加条（RL+R）	ナデ (横)	灰黄褐 にぶい黄褐	良好	繩文時代前期	
137	25	59	1号焼土 壁上位	深鉢	胴部片	刷：繩文（RL）	ナデ (横)	程 にぶい褐	やや良好	繩文時代前期	織維混入
138	25	59	1号焼土焼出面	深鉢	底部片	なし	内面：ナ デ (横) 外面：ナ デ (程)	明黄褐 浅黄褐	やや良好		土細器か
139	26	59	Pn26 壁上位	深鉢	胴部片	刷：結束羽状縞文（RL）	ナデ (横)	にぶい黄褐 にぶい黄褐	やや不良	大木1~2	織維混入
140	26	59	Pn46 壁中	深鉢	底部片	刷～底部下：繩文（RL） 横位	ナデ (斜)	周 にぶい黄褐	不良	繩文時代前期 尾部付茎文字	
141	26	59	Pn72 壁中	深鉢	胴部片	刷：環付末端回転文（RL）	ナデ (横)	にぶい黄褐 明黄褐	不良	大木1~2	織維混入
142	27	59	T2E層	口縁部片	口縁～刷：環付末端回転文（RL）	ナデ (横)	黄褐 にぶい黄褐	不良	大木1~2		
143	27	59	T2E層	深鉢	胴部片	刷：環付末端回転文（LR）	ナデ (横)	黄褐 にぶい黄褐	不良	大木1~2	織維混入
144	27	59	T2E層	深鉢	胴部片	刷：非結束羽状縞文（LR）	ナデ (横)	明黄褐 にぶい黄褐	良好	大木1~2	織維混入
145	27	59	T3E層	深鉢	胴部片	刷：結束羽状縞文（RL）	ナデ (横)	灰黄褐 灰黄褐	やや良好	大木1~2	
146	27	59	T4E層	深鉢	胴部片	刷：結束羽状縞文（LR・RL）	ナデ (横)	にぶい黄褐 にぶい黄褐	不良	大木1~2	織維混入
147	27	59	T4E層	深鉢	胴部片	刷：非結束羽状縞文（LR・RL）	ナデ (横)	にぶい黄褐 にぶい黄褐	やや不良	大木1~2	織維混入
148	27	59	T4E層	深鉢	口縁部片	口縁：繩文（LR）	ナデ (横)	程 にぶい黄褐	不良	大木1~2	織維混入
149	27	59	T9II層	深鉢	口縁部片	口縁：環付末端回転文（R）	ナデ (横)	にぶい黄褐 明黄褐	不良	大木1~2	織維混入
150	27	59	T7II層	深鉢	胴部片 横位	刷：繩文（RL）	ナデ (横)	浅黄褐 にぶい黄褐	やや良好	大木1~2	織維混入
151	27	59	調査区中央焼出面	深鉢	胴部片	刷：非結束羽状縞文（LR・RL）	ナデ (横)	灰褐 灰黄褐	やや不良	大木1~2	織維混入
152	27	59	調査区中央焼出面	深鉢	胴部片	刷：結束羽状縞文（R） 0多条	ナデ (横)	程 にぶい黄褐	やや不良	大木1~2	織維混入
153	27	59	調査区中央焼出面	深鉢	胴部片	刷：非結束羽状縞文（LR・RL）	不明	にぶい黄褐	良好	大木1~2	織維混入 乳白色済
154	27	59	調査区北端1層	深鉢	胴部片	刷：結束羽状縞文（LR・RL）	ナデ	黄褐 明赤褐	やや良好	大木1~2	織維混入
155	27	59	日ECOM調査区壁 II~III層	深鉢	胴部片	刷：環付末端回転文（LR）	ナデ (横)	明黄褐 黑褐	不良	大木1~2	織維混入

掲載 No	国版 番号	写真 番号	出土地点・層位	器種	残存部位	外面文様	内面調整	外面色調 内面色調	焼成	型式時期	参考
156	27	59	II A17株前面	深鉢	胴部片	刷：赤絞葉羽状彫文（RL）	ナデ (斜)	淡黄 浅黄褐色	やや不良	大木1~2	織維混入
157	27	59	II A18x株前面	深鉢	胴部片	刷：赤絞葉羽状彫文（LR）	不明	橙	不良	大木1~2	織維混入、裏面一部剥落
158	27	59	II A18o株前面	深鉢	胴部片	環付末端回転文（RL）	ナデ (横)	にぶい黄褐 にぶい黄褐	不良	大木1~2	織維混入
159	27	59	II A18o II ~ III層	深鉢	胴部片	刷：絞葉羽状彫文	ナデ (横)	にぶい黄褐 にぶい黄褐	不良	大木1~2	織維混入
160	27	59	II A19s株前面	深鉢	胴部片	刷：絞葉羽状彫文（RL）	ナデ (横)	灰黃褐色 浅黄褐色	不良	大木1~2	織維混入
161	27	59	II A19s株前面	深鉢	胴部片	刷：繩文（RL） 横位	ナデ (横)	にぶい黄褐	やや不良	大木1~2	織維混入
162	27	59	II A21x株前面	深鉢	胴部片	環付末端回転文（LR）	ナデ (横)	明黄褐色	不良	大木1~2	織維混入
163	27	59	II E21b株前面	深鉢	口縁部片	口縁：環付末端回転文（RL）	ナデ (横)	灰黃褐色 明黄褐色	不良	大木1~2	織維混入
164	27	59	II E21b株前面	深鉢	胴部片	刷：絞葉羽状彫文？（R）	ナデ (腹)	明黄褐色 にぶい黄褐色	やや良好	大木1~2	織維混入
165	27	59	II E21b株前面	深鉢	胴部片	刷：絞葉彫文（LR, LR）	ナデ (横)	にぶい黄褐 にぶい黄褐	やや不良	大木1~2	織維混入
166	27	59	II E21b株前面	深鉢	胴部片	刷：絞葉羽状彫文（LR, LR）	ナデ (斜)	浅黄褐色 にぶい黄褐	やや不良	大木1~2	織維混入
167	27	59	II A19 x 掘土中	深鉢	胴部片	刷：絞葉羽状彫文（RL）	ナデ (横)	明黄褐色 明黄褐色	不良	大木1~2	織維混入
168	27	59	II A22x株前面	深鉢	胴部片	刷：環付末端回転文（LR）	ナデ (横)	浅黄褐色 にぶい黄褐	不良	大木1~2	織維混入
169	27	59	地点不明株前面	深鉢	胴部片	刷：赤絞葉羽状彫文（LR, RL）	ナデ (横)	明黄褐色 にぶい黄褐	不良	大木1~2	織維混入
170	27	59	地点不明	深鉢	胴部片	刷：赤絞葉羽状彫文（LR, RL）	ナデ (斜)	にぶい黄褐 灰黃褐色	やや不良	大木1~2	織維混入
171	27	59	T3 II層	深鉢	胴部片	刷：繩文（RL）	ナデ (横)	明黄褐色 明黄褐色	やや不良	大木10	
172	27	59	耕土中	深鉢	胴部片	刷：絞葉羽状彫文？（R）	ナデ (横)	にぶい黄褐	不良	大木1~2	織維混入
173	27	59	耕土中	深鉢	胴部片	刷：絞葉羽状彫文（LR - RL）	ナデ (斜)	灰黃褐色 にぶい黄褐	やや良好	大木1~2	織維混入
174	27	59	風洞木	深鉢	胴部片	刷：繩文（LR）	ナデ (横)	明黄褐色 にぶい黄褐	やや不良	繩文時代前期	織維混入
175	28	59	風洞木	深鉢	胴部片	刷：繩文（LR）	ナデ (斜)	にぶい黄褐 明黄褐色	やや不良	繩文時代前期	織維混入
176	28	59	風洞木株前面	深鉢	胴部片	刷：繩文（LR）	ナデ (横)	にぶい黄褐 明黄褐色	やや不良	繩文時代前期	織維混入
177	28	59	T2 II層	深鉢	胴部片	刷：繩文（LR）	ナデ (横)	にぶい黄褐 明黄褐色	不良	繩文時代前期	織維混入
178	28	59	T2 II層	深鉢	胴部片	刷：繩文（LR）	ナデ (横)	にぶい黄褐 明黄褐色	不良	繩文時代前期	織維混入
179	28	59	T2 II層	深鉢	胴部片	刷：繩文（LR）	ナデ (横)	明黄褐色 にぶい黄褐	やや良好	繩文時代前期	織維混入
180	28	59	T2 II層	深鉢	胴部片	刷：繩文（R） 0多条	ナデ (横)	淡黄 にぶい黄褐	良好	繩文時代前期	織維混入
181	28	59	T2 II層	深鉢	胴部片	刷：繩文（RL）	ナデ (横)	にぶい黄褐 にぶい黄褐	やや良好	繩文時代前期	織維混入
182	28	59	T2 II層	深鉢	胴部片	刷：繩文（R） 0多条	ナデ (横)	にぶい黄褐 にぶい黄褐	良好	繩文時代前期	織維混入
183	28	59	T4 II層	深鉢	胴部片	刷：繩文（RL）	ナデ (横)	明黄褐色 にぶい黄褐	不良	繩文時代前期	織維混入
184	28	59	T3 II層	深鉢	胴部片	刷：繩文（LR） 継続	不明	にぶい黄褐	不良	繩文時代前期	織維混入、裏面一部落
185	28	59	T4 II層	深鉢	胴部片	刷：繩文（LR）	ナデ (横)	明黄褐色 明黄褐色	不良	繩文時代前期	織維混入
186	28	59	T4 II層	深鉢	口縁部片	口縁：繩文（LR）	ナデ (横)	明黄褐色 明黄褐色	やや不良	繩文時代前期	織維混入
187	28	59	T4 II層	深鉢	胴部片	刷：繩文（RL）	ナデ (横)	明黄褐色 明黄褐色	やや不良	繩文時代前期	織維混入
188	28	59	T4 II層	深鉢	胴部片	刷：繩文（LR）	ナデ (横)	明黄褐色 にぶい黄褐	やや良好	繩文時代前期	織維混入
189	28	59	T4 II層	深鉢	口縁部片	口縁：繩文（RL）	ナデ (横)	にぶい黄褐 にぶい黄褐	やや良好	繩文時代前期	織維混入
190	28	59	T2 II層	深鉢	胴部片	刷：繩文（LR）	ナデ (横)	淡黄褐色 にぶい黄褐	やや良好	繩文時代前期	織維混入
191	28	59	T7 II層	深鉢	胴部片	刷：繩文（LR）	ナデ (横)	にぶい黄褐 にぶい黄褐	不良	繩文時代前期	織維混入
192	28	59	T7 II層	深鉢	胴部片	刷：繩文（RL）	ナデ (横)	にぶい黄褐 にぶい黄	不良	繩文時代前期	織維混入

掲載 No	国版 番号	写真 番号	出土地点・層位	器種	残存部位	外面文様	内面調整	外面部 内面色調	焼成	型式時期	参考
193	28	60	T13検出面	深鉢	胴部片	胴: 楔文 (RL)	ナデ (横)	明黄褐色 にぶい黄褐色	やや不良	織文時代前期	織維混入
194	28	59	T13検出面	深鉢	口縁部片	口縁: 楔文 (LR) 口縁: 楔文による圧痕 (LR)	不明	にぶい黄褐色	不良	織文時代前期	表面一部剥落 織維混入
195	28	60	T13検出面	深鉢	胴部片	胴: 非結晶状彫文?	ナデ (横)	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	やや不良	織文時代前期	織維混入
196	28	60	T13検出面	深鉢	胴部片	胴: 楔文 (RL) 横位	ナデ (横)	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	やや不良	織文時代前期	織維混入
197	28	60	調査区北側検出面	深鉢	胴部片	胴: 楔文 (LR)	ナデ (横)	明黄褐色 にぶい黄褐色	良好	織文時代前期	織維混入
198	28	60	調査区中央検出面	深鉢	胴部片	胴: 楔文 (LR)	ナデ (横)	明黄褐色 にぶい黄褐色	不良	織文時代前期	織維混入
199	28	60	調査区中央検出面	深鉢	胴部片	胴: 楔文 (LR)	ナデ (横)	明黄褐色 にぶい黄褐色	不良	織文時代前期	織維混入
200	28	60	調査区中央検出面	深鉢	胴部片	胴: 楔文 (LR)	ナデ (横)	にぶい黄褐色 浅黃褐色	やや良好	織文時代前期	織維混入
201	28	60	調査区中央検出面	深鉢	胴部片	胴: 楔文 (RL) 横位	ナデ (斜)	にぶい黄褐色	不良	織文時代前期	織維混入
202	28	60	II A12検出面	深鉢	底部片	胴: 楔文 (RL)	ナデ (横)	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	やや不良	織文時代前期	織維混入
203	28	60	II A16eカ クラン 内	深鉢	胴部片	胴: 楔文 (RL)	ナデ (横)	明黄褐色 にぶい黄褐色	やや良好	織文時代前期	織維混入
204	28	60	II A18検出面	深鉢	胴部片	胴: 楔文 (LR)	ナデ (横)	暗黒褐色	やや不良	織文時代前期	織維混入
205	28	60	II A18o検出面	深鉢	胴部片	胴: 楔文 (R)	ナデ (横)	浅黃褐色 にぶい黄褐色	不良	織文時代前期	織維混入
206	28	60	II A18o II ~ III層	深鉢	胴部片	胴: 楔文 (RL)	ナデ (横)	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	やや不良	織文時代前期	織維混入
207	28	60	II A18o検出面	深鉢	口縁部片	口縁: 楔文 (RL) 隆帶	ナデ (横)	明黄褐色 にぶい黄褐色	不良	織文時代前期	織維混入
208	28	60	II A18w 検出面	深鉢	胴部片	胴: 結合法印捺文 (RL)	ナデ (横)	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	不良	織文時代前期	織維混入
209	28	60	II A19a検出面	深鉢	胴部片	胴: 楔文 (RL)	ナデ (横)	明黄褐色 にぶい黄褐色	不良	織文時代前期	織維混入
210	28	60	II A19a検出面	深鉢	胴部片	胴: 楔文 (RL)	ナデ (横)	明黄褐色 にぶい黄褐色	不良	織文時代前期	織維混入
211	29	60	II A22W検出面	深鉢	胴部片	胴: 楔文 (RL)	ナデ (横)	明黄褐色 にぶい黄褐色	やや良好	織文時代前期	織維混入
212	29	60	II A22y 検出面	深鉢	胴部片	胴: 楔文 (LR)	ナデ (横)	明黄褐色 にぶい黄褐色	やや不良	織文時代前期	織維混入
213	29	60	II A19x 掘土中	深鉢	胴部片	胴: 楔文 (RL)	ナデ (斜)	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	不良	織文時代前期	織維混入
214	29	60	拂土中	深鉢	胴部片	胴: 楔文 (LR) 縱位	ナデ (斜)	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	不良	織文時代前期	織維混入
215	29	60	調査区中央検出面	深鉢	胴部片	胴: 両面捺文 表: 楔文 (RL) 裏: 楔文 (LR) 縦位	不明	黄褐色 明黄褐色	やや不良	織文時代前期	器面両面に捺文を施す
216	29	60	T7 II 層	深鉢	胴部片	胴: 楔文 (LR) 隆沈帯による区画文	ナデ (横)	褐灰 灰黄褐色	やや不良	大木Bb	
217	29	60	拂土中	深鉢	口縁部片	口縁: 隆沈	ナデ (横)	褐灰 灰黄褐色	良好	大木Bb	
218	29	60	T13 検出面	深鉢	胴部片	胴: 楔文 (RL) - 隆帯 - 沈縫	ナデ (斜)	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	不良	大木B b	-
219	29	60	T2 II 層	深鉢	胴部片	胴: 楔文 (LR) - 隆帯	ナデ (横)	明黄褐色 にぶい黄褐色	やや不良	大木B b ~ 9	-
220	29	60	T2 II 層	深鉢	胴部片	胴: 楔文 (LR) - 突起	ナデ (横)	にぶい褐色 にぶい褐色	やや不良	大木9 (古)	-
221	29	60	調査区南端住居群 検出面	浅鉢?	口縁部片	口縁: 楔文 (RL) 沈縫による区画文 満巻状隆帯?	ナデ (横)	明黄褐色 にぶい黄褐色	やや良好	大木Bb	
222	29	60	風鈴木	深鉢	胴部片	胴: 沈縫による区画文→楔文 (RL) 光沢	ナデ (横)	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	やや良好	大木9 (古)	
223	29	60	II A18w 検出面	深鉢	胴部片	胴: 楔文 (LR) 沈縫による区画文 (網目)	ナデ (斜)	浅黃褐色 暗黒褐色	不良	大木9 (古)	
223	29	60	II A22W検出面	深鉢	胴部片	胴: 楔文 (RL)	ナデ (斜)	明小場 明黄褐色	やや不良	大木Bb	
224	29	60	T2 II 層	深鉢	胴部片	胴: 楔文 (LR) - 隆帯による区画文 (ナデ)	ナデ (横)	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	やや不良	大木9 (新)	
225	29	60	T3 II 層	深鉢	胴部片	胴: 楔文 (RL)	ナデ (横)	明赤褐色 明褐色	良好	大木9 (新)	
226	29	60	T3 II 層	深鉢	胴部片	胴: 楔文 (LR) 縱位→沈縫による区画文 (網目)	ナデ (斜)	にぶい黄褐色 明黄褐色	良好	大木9 (新)	
227	29	60	調査区中央検出面	深鉢	口縁部片	口縁: 隆沈による区画文	ナデ (斜)	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	やや不良	大木9 (古)	

掲載 No	国版 番号	写真 番号	出土地点・層位	器種	残存部位	外表面文	内面調査	外表面調 査	焼成	型式時期	備考
228	29	60	風呂木	深鉢	胴部片	脚：沈縫による区画文（崩消）→施文（RL）光地	ナデ にぶい黄褐色 (鏡)	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	不良	大木10（新）	
229	29	60	風呂木棟表面	深鉢	口縁部片	口縁：壁面上に幅広の刻み 器面に利害文	ナデ にぶい黄褐色 (鏡)	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	やや良好	大木10（新）	
230	29	60	T2Ⅱ層	深鉢	胴部片	脚：施文（RL） 継縫：沈縫による区画文（崩消）	ナデ (鏡)	明黄色 にぶい黄褐色	やや不良	大木10（新）	
231	29	60	T2Ⅱ層	深鉢	胴部片	脚：条文 沈縫による区画文（崩消）	ナデ (鏡)	明黄色 明黄色	やや良好	大木10（新）	
232	29	60	調査区中央棟表面	深鉢	胴部片	脚：單輪捺条体第1期（L） 継縫	ナデ (鏡)	にぶい黄褐色 黒褐	不良	大木10（新）	
233	29	60	調査区中央棟表面	深鉢	胴部片	脚：單輪捺条体第1期（R） 継縫	ナデ (鏡)	明黄色 にぶい黄褐色	やや不良	大木10（新）	
234	29	60	調査区南端棟表面	深鉢	胴部片	脚部：單輪捺条体第1期（R） 継縫→北側による区画文（崩消）	ナデ (鏡)	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	やや不良	大木10（新）	
235	29	60	調査区南端棟表面	深鉢	口縁部片	口縁：脚：施文（L） 継縫→北側による区画文（崩消）	ナデ (鏡)	脚灰 脚灰	やや不良	大木10（新）	
236	29	60	調査区南端住居群 棟表面	深鉢	胴部片	脚：單輪捺条体第1期（L） 継縫	ナデ (鏡)	脚灰 脚灰	やや不良	大木10（新）	
237	29	60	調査区南端Ⅱ-Ⅲ層	深鉢	胴部片	脚：單輪捺条体第1期（L） 継縫	ナデ (鏡)	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	やや良好	大木10（新）	
238	29	60	II1204調査区Ⅱ-Ⅲ層	深鉢	胴部片	脚：沈縫 継縫	ナデ (鏡)	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	やや不良	大木10（新）	
239	29	60	II124調査区Ⅱ-Ⅲ層	深鉢	胴部片	脚：單輪捺条体第1期（R） 沈縫による区画文（崩消）	ナデ (鏡)	にぶい黄褐色 良好	大木10（新）		
240	29	60	II21a棟表面	深鉢	胴部片	脚：單輪捺条体第1期（L） 継縫	ナデ (鏡)	にぶい黄褐色 黒褐	不良	大木10（新）	裏面一部付着
241	29	60	II21a棟表面	深鉢	胴部片	脚：單輪捺条体第1期（R） 継縫	ミガキ (鏡)	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	良好	大木10（新）	
242	29	60	II21a棟表面	深鉢	胴部片	脚：單輪捺条体第1期（L） 継縫	ナデ (鏡)	にぶい黄褐色 黒褐	やや不良	大木10（新）	
243	29	60	II21a棟表面	深鉢	胴部片	脚：單輪捺条体第1期（L） 継縫	ナデ (鏡)	脚灰 脚灰	良好	大木10（新）	
244	29	60	II21a棟表面	深鉢	胴部片	脚：單輪捺条体第1期（R） 継縫	ナデ (鏡)	明黄色 淡黄	やや良好	大木10（新）	
245	30	60	II21a棟表面	深鉢	口縁部片	口縁：壁面上に利突を施す区画帯	ナデ (鏡)	淡黄褐色 にぶい黄褐色	良好	大木10（新）	
246	30	60	出土地点不明	深鉢	口縁部片	口縁：脚：沈縫による区画文 規則文	ナデ (鏡)	脚灰 にぶい黄褐色	良好	大木10（新）	
247	30	60	出土地点不明	深鉢	口縁部片	口縁：脚：單輪捺条体第1期（R） 継縫→沈縫による区画文	ナデ (鏡)	にぶい黄褐色 黒褐	不良	大木10（新）	
248	30	60	出土地点不明	深鉢	胴部片	脚：單輪捺条体第1期（L） 継縫	ナデ (鏡)	にぶい黄褐色 黒褐	やや不良	大木10（新）	
249	30	60	出土地点不明	深鉢	胴部片	脚：單輪捺条体第1期（L） 継縫	ナデ (鏡)	にぶい黄褐色 黒褐	不良	大木10（新）	裏面一部付着
250	30	60	T3 秋田面	深鉢	胴部片	脚：施文（LR）-沈縫	ナデ (鏡)	根 根	良好	大木10	-
251	30	60	T3Ⅱ層	深鉢	胴部片	脚：沈縫による区画文 (RL)→脚部に光地	ナデ (鏡)	にぶい黄褐色 明黄色	やや良好	大木10	
252	30	60	T3Ⅱ層	深鉢	胴部片	脚：沈縫による区画文（崩消）→施文（RL） 光地	ナデ (鏡)	根 明褐色	やや良好	大木10	
253	30	60	調査区北側跡路中	深鉢	胴部片	脚：施文（RL） 継縫→沈縫による区画文	ナデ (鏡)	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	やや良好	大木10	
254	30	61	II1204調査区Ⅱ-Ⅲ層	深鉢	口縁部片	口縁：壁面上に利突を施す区画帯	ナデ (鏡)	にぶい黄褐色 明黄色	やや良好	大木10	
255	30	61	II12b調査区Ⅱ-Ⅲ層	深鉢	胴部片	脚：施文（LR） 沈縫による区画文（崩消）	ナデ (鏡)	根 根	不良	大木10	
256	30	61	造模外排土	深鉢	胴部片	脚：施文（LR） 沈縫による区画文（崩消）	ナデ (鏡)	にぶい黄褐色 脚灰	やや不良	大木10	
257	30	61	風呂木	深鉢	口縁部片	口縁：ナデ調査による無文帶 施文（RL）沈縫による施文か？	ナデ (鏡)	脚灰 にぶい黄褐色	やや不良	織文時代中期	内部保付者
258	30	61	II20v椗出面	深鉢	胴部片	脚：施文（RL）	ナデ (鏡)	にぶい黄褐色 根灰	不良	織文時代中期	草孔による移用
259	30	61	調査区南西跡土置場	深鉢	胴部片	脚：施文（RL） 沈縫	ナデ (鏡)	脚灰 脚灰	やや良好	織文時代中期	
260	30	61	T3Ⅱ層	深鉢	胴部片	脚：施文（RL）→沈縫による区画文 施文（RL）	ナデ (鏡)	にぶい黄褐色 根	不良	織文時代中期	
261	30	61	持土中	深鉢	口縁部片	口縁：ナデ調査による無文帶 施文（RL）	ナデ (鏡)	脚灰 にぶい黄褐色	やや不良	織文時代中期	
262	30	61	T4Ⅱ層	深鉢	口縁部片	口縁：施文（RL） 口唇：施文による庄板（RL） (鏡)	ナデ (鏡)	明黄色 にぶい黄褐色	やや不良	織文時代	
263	30	61	調査区南東脚土置場	深鉢	胴部片	脚：施文（LR）	ナデ (鏡)	明黄色 明黄色	やや不良	織文時代	
264	30	61	II17a椗出面	斐	底部片	脚：ヘラナデ	ナデ (鏡)	明黄色 明黄色	良好	吉代	土器器

掲載 No	団体 番号	写真 番号	出土地点・層位	器種	残存部位	外面文様・調整	内面調整	外面色調 内面色調	焼成	型式時期	備考
265	30	61	T3Ⅱ層	灰	底部片	側: ハラナデ		内面: 横 明黄褐色 ナデ	やや不良	古代	土師器片

土製品

掲載 番号	団体 番号	写真 番号	出土位置・層位	器種	外面文様	色調	残存部位	直径 (cm)	重量 (g)	焼成	時期	備考
122	20	58	5号住居 壁上位	土製円盤	織文 (LR) ?	明黄褐色	1/2残	6.59	23.6	不良	前期	織維混入
125	24	58	3号住居 壁上中	土製円盤	織文 (L R)	明褐色	2/3残存	4.13	10.5	不良	中期	-
266	30	61	出土地点不明 横表面	土製円盤	織文 (L R)	灰黃褐色	完形	3.3	10.3	やや良好	中期	-
267	30	61	出土地点不明 横表面	土製円盤	無文	橙	完形	2.3	3.6	良好	中期	-
268	30	61	出土地点不明 横表面	土製円盤	無文	にぶい黄褐色	完形	4.3	15.9	不良	前期?	
269	30	61	出土地点不明 横表面	土製円盤	羽伏織文 (LR - RL)	浅黄褐色	1/3残 (49)	12.2	やや良好	前期	織維混入	
270	30	61	出土地点不明 横表面	粘土塊	手捏ね?	浅黄褐色	-	3.7	18.2	良好	前期?	織維混入?

石器

掲載 番号	団体 番号	写真 番号	出土位置・層位	種別	分類	残存状況	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石質 (産地)	備考
26	10	61	2号住居 壁下位	Uフレイク	II C	-	45.64	24.05	12.65	6.42	頁岩 (北上山地)	
47	13	61	3号住居 壁土上位	石礫	2類	完形	15.29	12.52	3.80	0.67	頁岩 (北上山地)	
99	18	61	4号住居 壁土上位	石鈎	1類	完形	50.23	18.83	8.81	6.52	頁岩 (北上山地)	
100	18	61	4号住居 壁土上位	直邊器類	1類	完形	42.99	34.58	25.12	54.63	頁岩 (北上山地)	
122	20	61	5号住居 壁下土坑内	直邊器類	1類	完形	35.24	31.43	21.07	31.63	アブリト (北上山地)	
135	24	61	11号土坑 壁土上位	石鈎	2類	完形	27.67	38.99	7.49	5.04	頁岩 (北上山地)	
271	31	61	7.3 II層	石鉗	2類	完形	20.20	12.18	3.59	0.62	頁岩 (北上山地)	
272	31	61	B1.18a 椚出面	楔形石器	1類	完形	39.55	53.66	15.03	29.09	頁岩 (北上山地)	
273	31	61	7.3 II層	崩裂石斧	-	刃部欠損						
274	31	61	7.3 II層	崩裂石斧	-	基部欠損	71.88	45.06	23.68	122.94	頁岩 (北上山地)	
275	31	61	7.3 II層	崩裂石斧	-	基部欠損	(63.50)	33.04	8.23	17.76	頁岩 (北上山地)	
276	31	61	7.3 II層	直邊器類	1類	完形	38.23	34.24	21.30	36.87	花崗岩 (北上山地 五葉山岩体)	
277	31	61		直邊器類	1類	完形						
278	31	62	耕土撒き場	直邊器類	2類	完形	89.82	53.39	28.89	211.60	ホルンフェルス (北上山地)	
279	31	62	T 3 II層	直邊器類	1類	完形	39.98	19.16	14.64	15.97	I	
280	31	62	風削木-1	直邊器類	1類	完形	119.74	68.54	29.54	402.95	花崗岩 (北上山地)	
281	31	62	風削木-1	直邊器類	1類	完形	76.14	53.35	985.17		頁岩 (北上山地)	

石製品

掲載 番号	団体 番号	写真 番号	出土位置・層位	種別	分類	残存状況	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石質 (産地)	備考
282	31	62	両各区街面 II層	砾石	-	完形	137.12	58.12	53.12	712.0	砂岩 (北上山地)	

VII 平成25年度調査

1 概要（第35～39図、カラー写真図版1～5）

平成25年度調査区は平成24年度調査区の西側に隣接し、南北80m、東西50mを計るいびつな方形基調（第34図）の調査範囲を呈する。地形は平成24年度調査区同様、北から南へ下る斜面地であり、標高は最も高い北側で90m、最も低い南側は60m前後を測る。なおこの斜面地は遺跡の北西に位置する大六山（514.8m）からつづき、そのまま海（越喜来湾）へとつづいていく。斜面の傾斜はちょうど調査区の北東側から中央付近にかけて緩やかになり、わずかな範囲に平坦面が形成されており、その範囲には多くの遺構が集中する。

今回検出した遺構は縄文時代中期後葉から末葉にかけての竪穴住居跡59棟、住居状遺構7棟、土坑31基、焼土遺構3基、柱穴105個である。

調査区中央と東端との2箇所には斜面に直交するように南北方向へはしる沢跡がある。沢跡は調査区中央の平坦面付近では確認できなかった。沢跡の両脇には縄文時代中期後葉～末葉（大木8b～10式期）に比定される上記の遺構群が分布する。

竪穴住居跡群は、特に調査区北東から中央部分にかけ密集し、多くは重複しながら分布する。また集落形成以前、以後の両時期において、中央の沢跡伝いに斜面上方からの落石、土砂崩れがあったと考えられる痕跡が残っており、竪穴住居群はその落石によって著しく破壊されている（第33図写真参照）。一方、調査区南側にも竪穴住居跡は分布するものの、4棟が点在するにとどまり、調査区中央ほどの遺構の集中は見受けられない。したがって別の集団による集落形成の可能性もある。

竪穴住居跡は円形あるいは楕円形を基調とした、径6～7m前後、柱穴も4～8本の主柱穴を有する規格性の高い住居群であり、またいずれの竪穴住居跡にも「複式炉」あるいは「石開炉」が付属する。

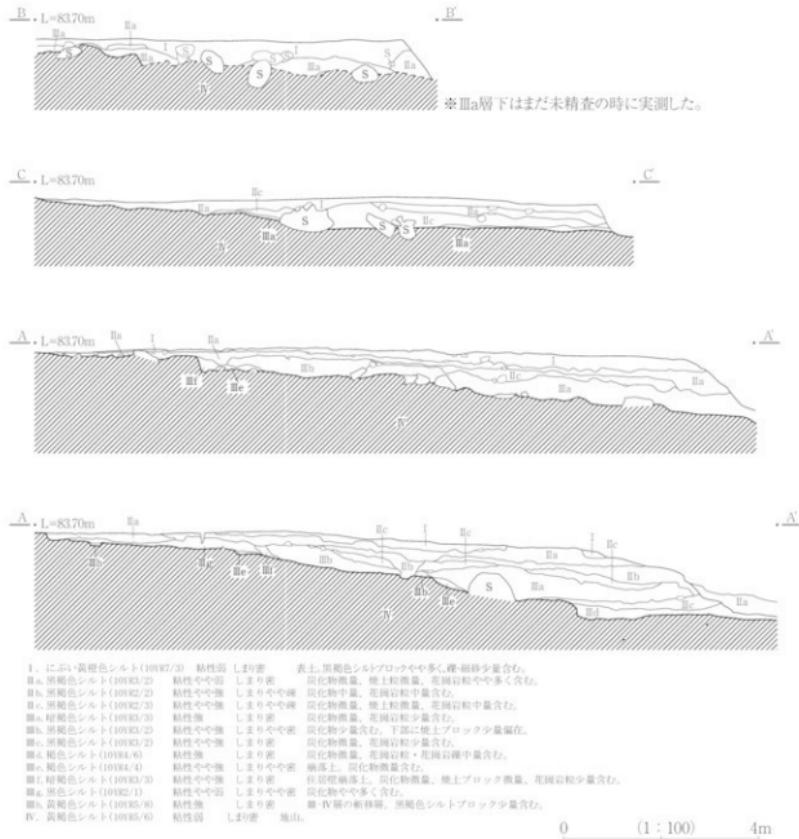
これらの遺構群の調査を通じ、中野遺跡は対象範囲全体にひろがる縄文時代中期後葉～末葉の大規模集落であることが明らかになった。また出土遺物も多く、そのなかには、石製の垂飾品やアスファルト塊など貴重なものが含まれており、周辺地域のなかでも中心的な集落であった可能性が高い。他に遺構は確認できていないが、縄文時代早期・前期の土器片も出土しているので、実際にはかなり長い期間にわたり縄文人が生活を営んだ場所であることが推定される。



第33図 遺構棟出面を覆う礫



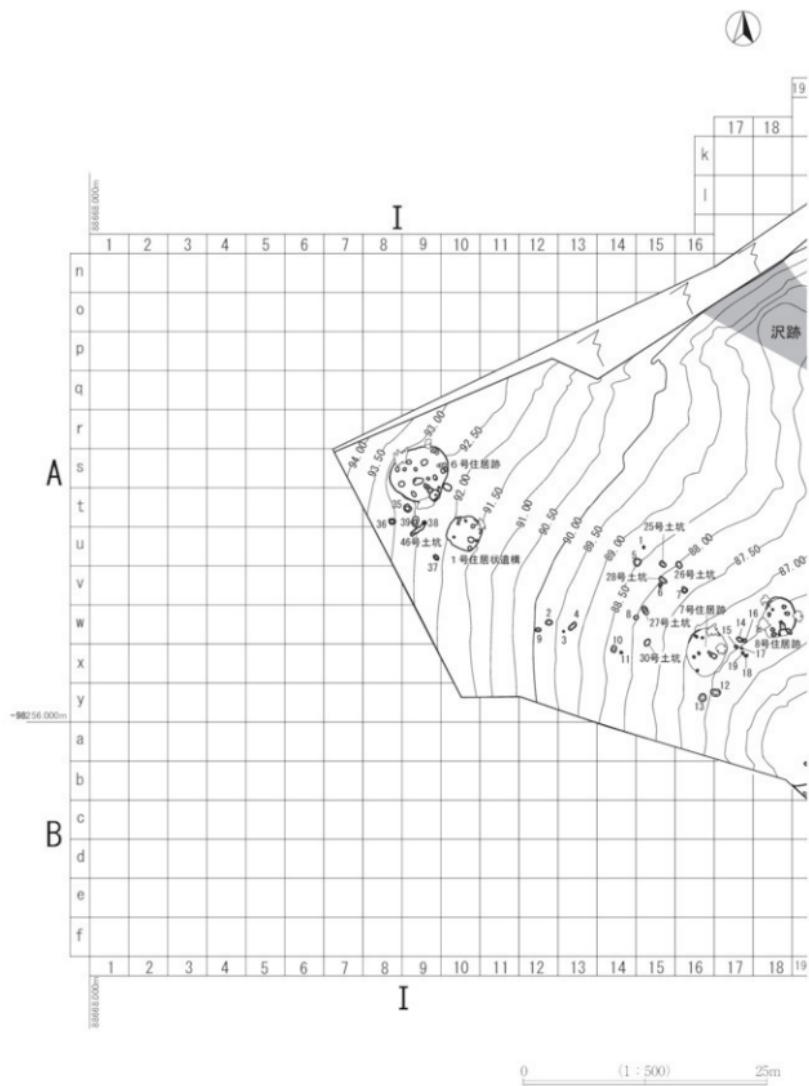
第34図 調査区地形



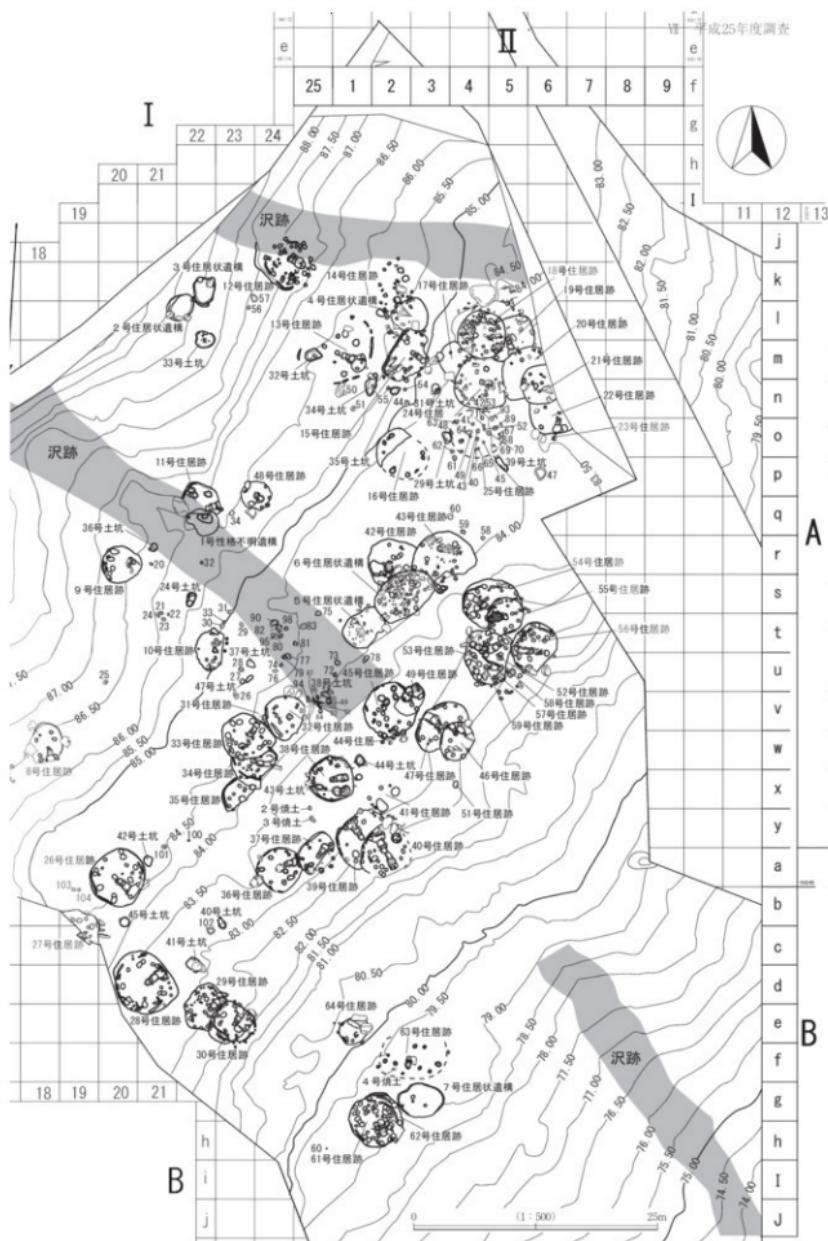
第35図 基本土層



第36図 遺構配置図(全体)



第37図 遺構配置図（分割1）



第38図 遺構配置図（分割2）

第7表 平成25年度出土遺物一覧

	陶文土器・土製品(g)					石器(点)						
	埋土上位	埋土下位	床面	室内	柱穴内	石鏹	尖頭器	石劍	石劍	両極石器	不定形石器	錐器
6号住居跡	8566.8	2525.7	760	7.7	1						1	4
7号住居跡	299.1		249.5									
8号住居跡	688.4	787.4	840.9									1
9号住居跡	123.3	253.9	170.9									
10号住居跡	919.3	682.0	347.2	273.7	12.2	1						
11号住居跡	4013.9	765.5	399.8	258.3	172.2							2
12号住居跡	1695.7	2407.3	1548.6	373.1	883.6	1		1			1	1
13号住居跡	296.8		870.5	599.6	752.4	1						
14号住居跡				998.6	178.4							
15号住居跡	6763.3	2235.3	31.9	687.0	743.5			1	1	1	6	
16号住居跡		2364.8				1						
17号住居跡	676.5	424.3	26.0		396.7						1	
18・19号住居跡	18324.9	10642.0	1632.0	471.7	338.0	1	1	1	2	8	1	
20号住居跡	2823.1	74.3						1		1		
21・22号住居跡	16275.5	19880.0		2090.4	103.5	5	3	2		4		
23号住居跡	1872.6	979.0			29.1	2	1	1	3	1		
24号住居跡	1039.5	3340.7			270.2	310.2		1			3	
25号住居跡				3845.5								
26号住居跡	1521.8	310.2	49.4	4060.5	48			2				
27号住居跡	719.0	246.6		466.3	796.8					1		
28号住居跡	1339.4	4284.4	764.7	6441.1	1116.6	2		1		1		
29号住居跡	6671.0	11979.2		2939.7		1		1		1		1
30号住居跡	47.6				265.1							
31号住居跡	325.8			142.3						1		
32号住居跡	566.1		14.7	402.5	55.5	1						
33号住居跡	7524.3	5552.2	722.8	3206.5	126.6	4		1	2	6		
34号住居跡	23004.1	25118.6	32.6	391.1		3		1		2		
35号住居跡	1946.6			89	148.8	3						
36号住居跡	500.3	2808.3			219.2	245.5					1	
37号住居跡	120.1	2008.3			203.1							
38号住居跡	8034.7	3237.6	91.3	719.0	161.7	2		1		3		
39号住居跡	6997.3	23119.0	15.3	4540.7				1		2	1	
40号住居跡	1564.3	25126		31.5	2644.5						5	
41号住居跡	10495.5	7953.8			4207.8	1		2	1	1	3	
42号住居跡	6963.3	624.5	130.3	283	31.6							
43号住居跡	11661.1	3346.1				1					1	
44号住居跡	3861.5	1802.3		79.2		1		2		4		
45号住居跡	29401.1		2032.5	1545.4	176.3	3		1				
46号住居跡	21.5	43.5			672.6							
47号住居跡	11534.6	9126.0	2632.1	2206.3		3				7		
48号住居跡	394.5				2201.8					1		
49号住居跡	36237.7	4137.4		369.9	1		1	1	1	4	1	
50号住居跡	547.5			227.5							1	
51号住居跡	341.4	116.2				1						
52・53号住居跡	25230.0	565.1	222.4	6539.7	4			1		1	1	3
54号住居跡	12833.0	2256.7	1245.9	2441.2	107.1	3		2	3	7	2	
55号住居跡	666.5		163.4	423.7	299.6	1						
56号住居跡	41223.3	3804.5		65.6	5464.1				4	3	1	
57号住居跡		9.2	415.2				1					
58号住居跡		232.5	94.1									
59号住居跡			97.9									
60号住居跡	1131.4	232.9	32.0	4582.0	260.2					1		
61号住居跡	1268.4	291.8										
62号住居跡	252.4											
63号住居跡				2211.5	25.0							
64号住居跡	366.1	64.2										
1号住居状遺構	13501.1	410.9				1				1		
2号住居状遺構	1830.9											
4号住居状遺構	30.5											
5号住居状遺構	5348.1	309.0				1						
6号住居状遺構	9566.9	524.8				3				1		
24号土塙	120.3	48.2										
29号土塙	100.3											
30号土塙	725.0	52.3										
31号土塙	114.3											
32号土塙	102.9											
33号土塙	47.0											
37号土塙	6.8											
38号土塙	9.9											
43号土塙	1610.9					1						
44号土塙	108.8											
45号土塙	644.1											
49号土塙										1		
3号墳土	104.0											
性格不明遺構	41.4	424.8	57.3			1				1		
柱穴土坑群	1059.5									1	1	
遺構外1層	1916.0					5			3	5	1	
遺構外2層	27084.95					26		3	12	4	37	6
遺構外3層上面	159411.5					17		2	15	4	20	10

2 検出遺構と出土遺物

(1) 壁穴住居跡

6号住居跡（第39～42図、写真図版12・63・109）

【位置・検出状況】調査区北西端、IA 8s～9tグリッドに位置する。IV層上面で検出した。また南壁は確認できなかった。斜面の崩落によって消失したものと考えらる。

【その他の遺構との重複】なし。

【平面形】楕円形 【規模】長軸（582）cm・短軸620cm・深さ115cm

【埋土】4層からなる。黒褐色シルトを主体とし、炭化物が混入する。埋土全体は堆積状況からみて自然堆積と推測する。また北壁寄りの埋土ほぼ中位には焼土の塊が層状に堆積している（第39図下参照）。焼土塊は二次的に堆積しており、その場で火を焚いて焼土に変化したものではない。どのような理由で堆積した（廃棄された）かは不明である。

【床面・壁】床面は炉を検出した面を床面とした。概ね平坦である。壁は消失した南壁を除き全周する。わずかに広がりながら立ち上がる。

【炉】複式炉である。複式炉は石圓部2個と前庭部で構成され、長軸205cm、短軸55cmを測る。炉石は花崗岩で比較的大きく偏平な礫を素材とする。炉内埋土は暗褐色シルトであり、住居埋土に類似する。石圓部は手前側・奥側共に床面から10cm掘り下げ、使用面を構築している。奥側の石圓部内にはほぼ全面に焼土の広がりが確認できた。一方、手前側の石圓部内は被熱の痕跡が見受けられず、使用面上に偏平な礫がはまり込んでいる。奥側の石圓部より西側に柱穴状の掘り込みが見受けられる。石圓部の掘り方に於ては小さいので、用途不明である。また炉の掘り方を確認した。石圓部よりもひとまわり大きく掘り込んでから炉石を設置し、構築されている。

【附属施設】柱穴14個を確認した。うち5個（Pit 1・2・5・12・8）は配列から主柱穴と考える。

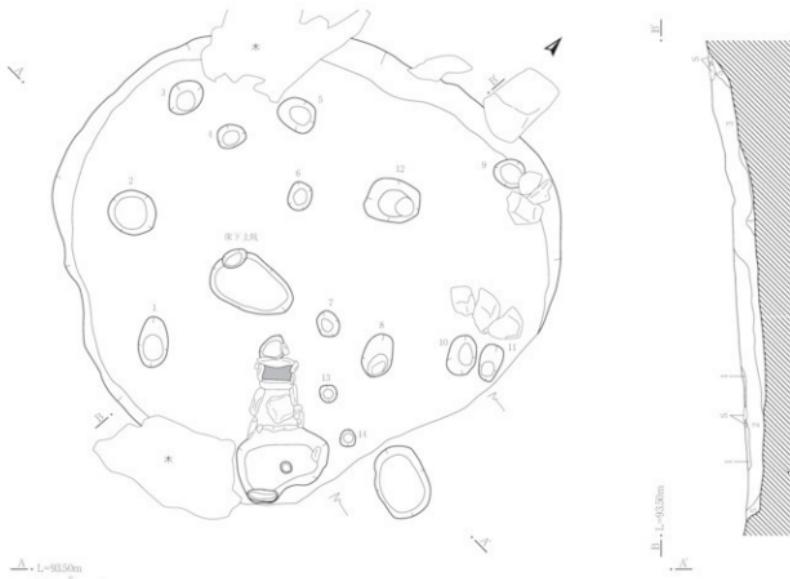
【出土遺物】縄文土器、土製品、粘土塊、石器が出土している。埋土上位・下位から出土するものが多く占めており、床面直上から出土するものは少ない。

縄文土器は大木9式が主体で、僅かにその前後の時期の土器が混じる（290・291）。283～285は口縁部に渦巻き文が残る大木9式古段階、286～289は楕円形区画文のみの大木9式新段階であり、両者は埋土中にやや混在する傾向にある。強いていえば埋土下位に大木9式新段階が多い。292～295は縄文のみが施文される粗製である。296～298は時期不明の深鉢底部片で、底面に木葉痕や網代痕が残る。

299、300は用途不明の土製品で、どちらも欠損している方の面は球状に膨らみ、もう片面は偏平に整形されている。どちらも被熱により赤色化している。301、302は土製円盤である。どちらも沈線による区画文が見受けられるので大木9式と推定される土器片を転用している。側面は一周磨減する。303、304は粘土塊である。

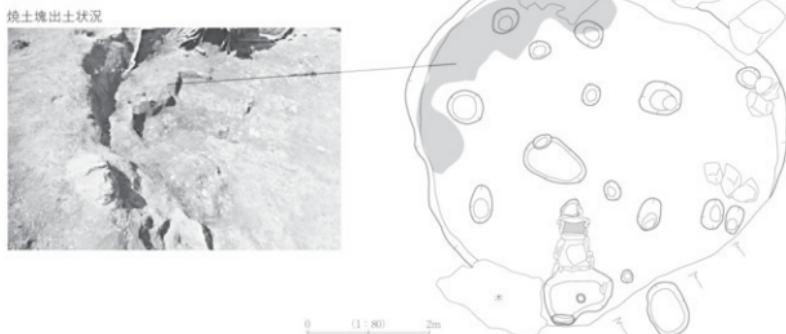
305～307は礫器である。305・307は幅10cm以上の大型剥片を利用しており、礫器の範疇とした。305は縁辺に被熱により黒色化している範囲がある。306はやや偏平な礫の片側を削り、利用している。308は敲磨器類で両面に磨痕が認められる。

【時期】出土土器の時期幅はやや広いが、埋土下位出土の土器の時期を重視し、大木9式新段階と判断した。

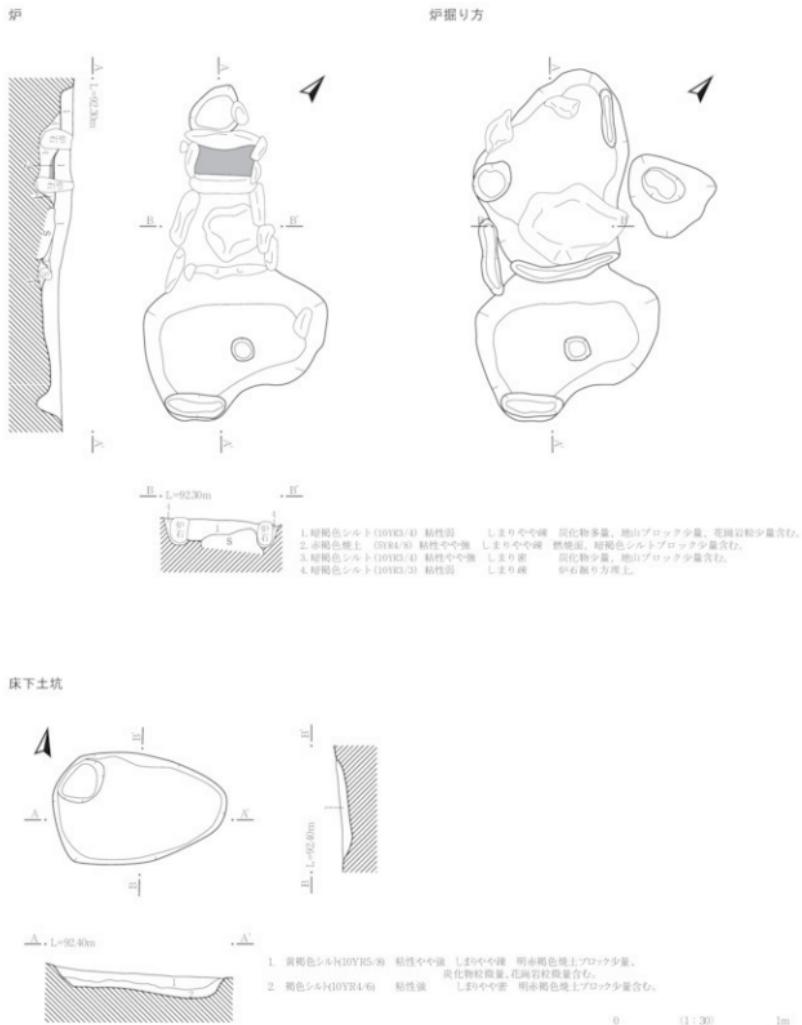


1. 黒褐色シートト(0.072m/3) 粘性やや固
しまやや峰
2. 棕褐色シートト(0.073m/3) 粘性やや固
しまやや中
3. 棕褐色シートト(0.073m/3) 粘性やや固
しまやや峰
4. 棕色シートト(0.074m/4) 粘性強
しまやや強
5. 棕色シートト(0.074m/6) 粘性強
しまやや強
6. 棕褐色シートト(0.073m/4) 粘性強
しまやや峰
7. 黑褐色シートト(0.072m/3) 粘性強
しまやや前
しまやや峰
棕褐色シート粘少量含む。
赤褐色土砂少量、炭化物微量含む。
しまやや中
棕褐色少量、地山ブロック微量含む。
しまやや峰
棕褐色シートブロック少量、地山ブロック微量含む。
しまやや前
炭化物微量含む。
赤褐色土砂少量、棕褐色シート少量。
炭化物多量、花崗岩粒少量含む。
赤褐色土砂少量、炭化物多量、地山ブロック微量含む。

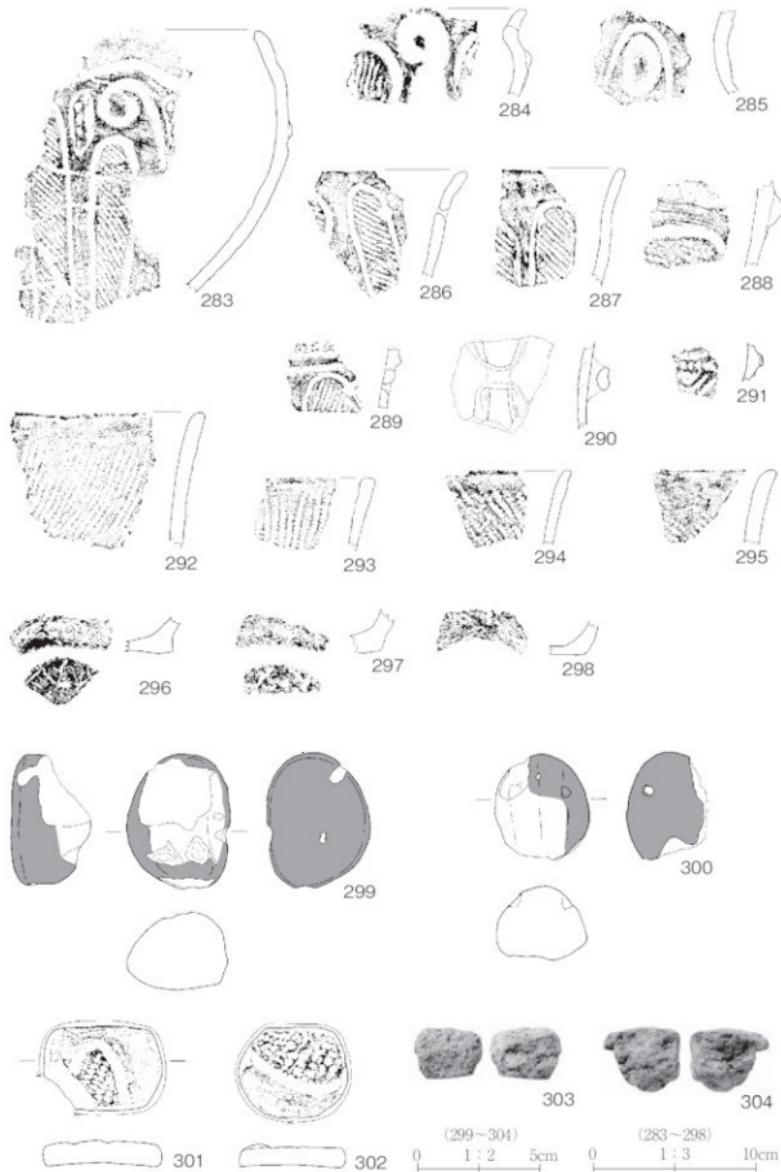
0 (1:60) 2m



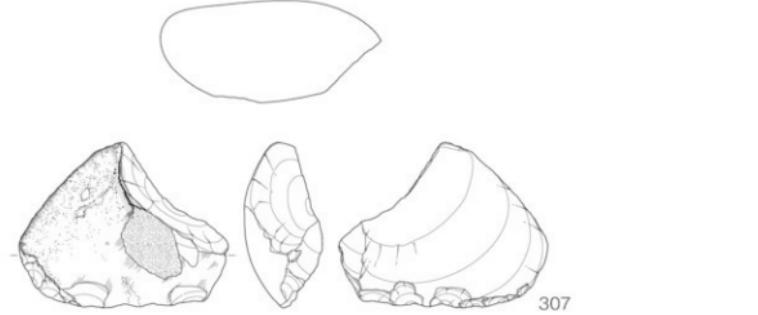
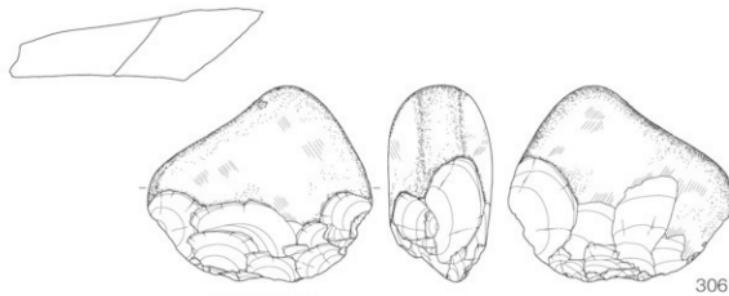
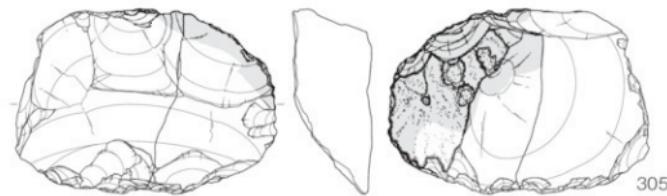
第39図 6号住居跡(1)



第40図 6号住居跡 (2)



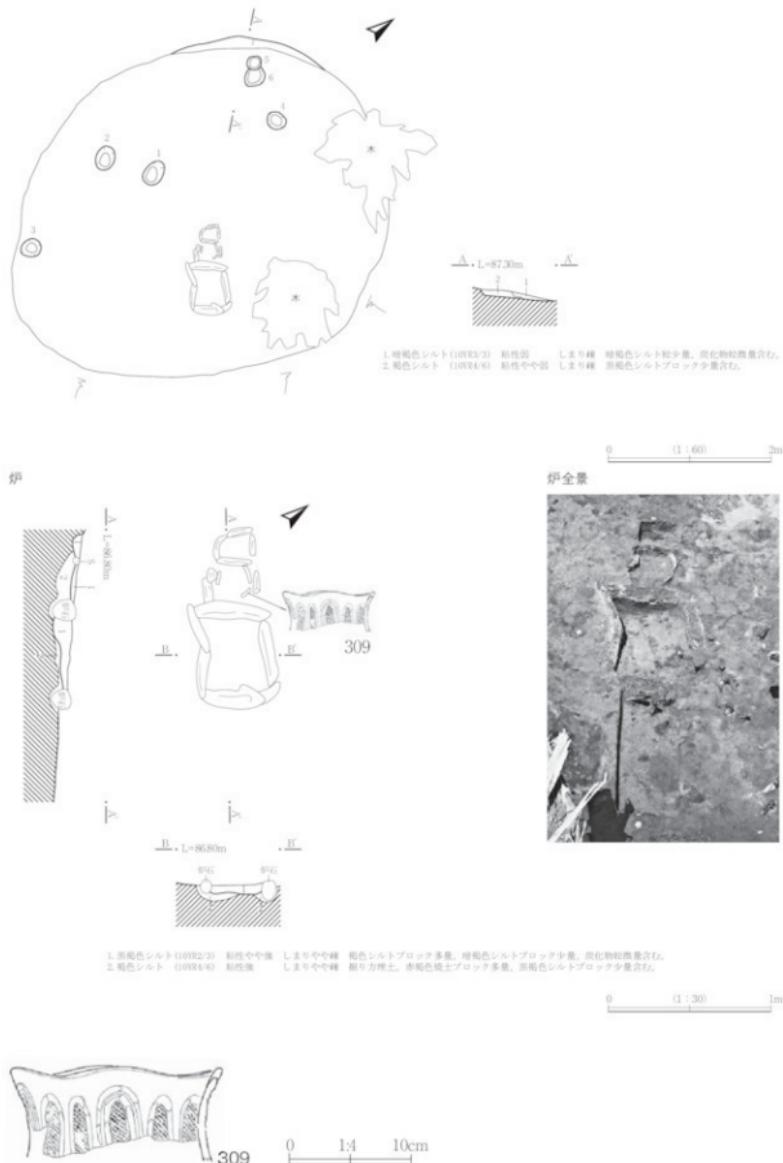
第41図 6号住居跡出土遺物（1）



0 1 : 3 10cm



第42図 6号住居跡出土遺物（2）



第43図 7号住居跡・出土遺物

7号住居跡（第43図、写真図版12・13・63）

【位置・検出状況】調査区北西側、IA16w・16xグリッドに位置する。IV層上面で検出した。斜面の崩落によるものと考えられるが、壁と床面の一部が消失している。

【その他の遺構との重複】なし。

【平面形】不明。不整な楕円形と推定する。【規模】長軸（410）cm・短軸（450）cm・深さ8cm

【埋土】残存する北壁付近の埋土は2層からなる。黒褐色シルトを主体とし、炭化物が混入する。堆積状況からみて自然堆積と推測する。

【床面・壁】床面は炉を検出した面を床面とした。概ね平坦である。壁は北壁のみ確認した。わずかに広がりながら立ち上がる。

【炉】複式炉である。石圓部3個で構成され、長軸108cm、短軸54cmを測る。前庭部は確認できていない。炉石は花崗岩で長大な礫を用いている。炉内の埋土は黒褐色シルトを主体とし、住居内埋土に類似するので、同時に埋没したと推測する。炉内には焼成面や被熱により赤色化した範囲が認められなかった。また3つ並ぶ石圓部のうち、中央のものには埋設土器が設置されている。埋設土器は、口縁部から胴部上半のみを利用し、正位の状態で設置されている。奥側の石圓部は一部約20cmの正方形に炉石を設置する。被熱の痕跡は認められない。石圓部内の底面深さは一様ではない。手前側が深く床面から12cm下で、他の2つの石圓部は3cm下と浅くなるのが特徴である。炉石の掘り方は中央と手前の石圓部で確認できた。炉よりもわずかに大きく掘り込んでから炉石を設置したものとうががえる。

【附属施設】柱穴6個を確認した。配列からみて、主柱穴とは考えられない。

【出土遺物】本遺構は削平が激しく、確認できた遺物は炉の埋設土器（309）1点である。309は炉の石圓部に設置された埋設土器で、大木9式新段階の深鉢である。口縁部から胴部上半が残存する。4単位の波状口縁で、縦位の楕円形区画文が巡る。

【時期】出土した309の時期から大木9式新段階と判断した。

8号住居跡（第44・45図、写真図版13・63・109）

【位置・検出状況】調査区北西側、IA18v・18wグリッドに位置する。IV層上面で検出した。なお遺構の南西端は斜面崩落や木根により消失し、また東壁の一部も木根によって削平を受けている。

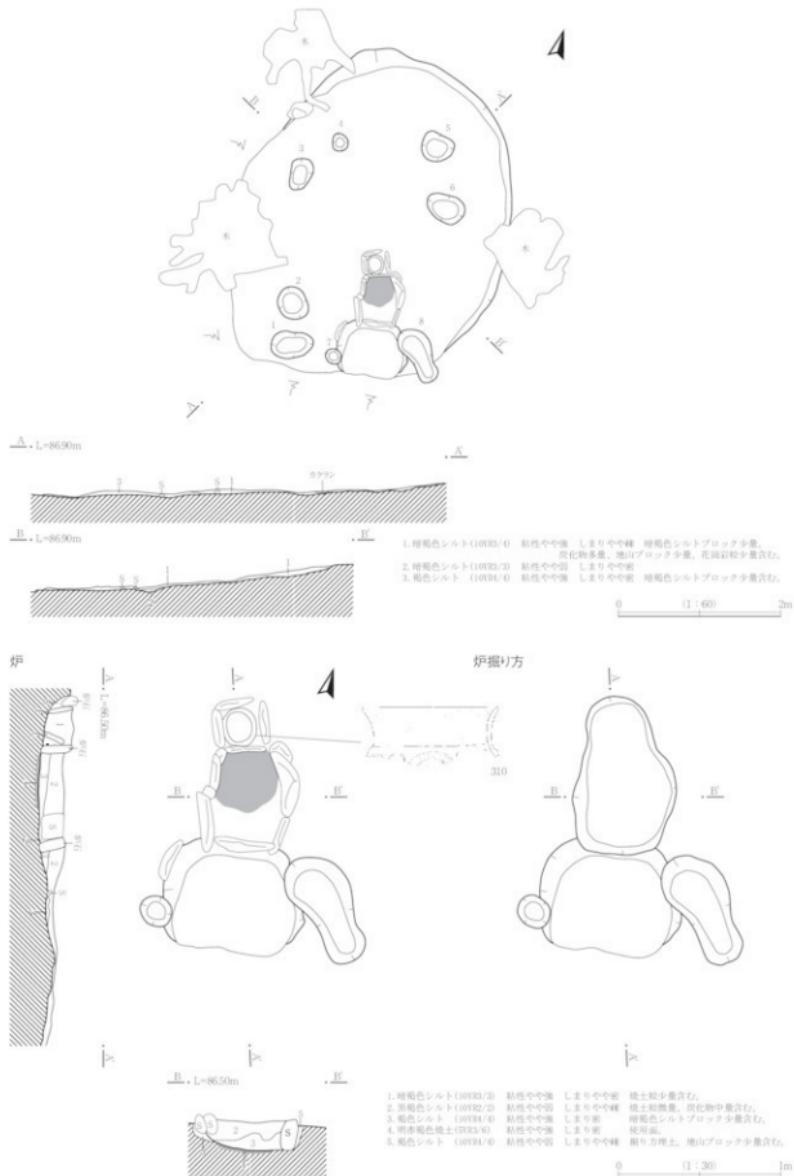
【その他の遺構との重複】なし。

【平面形】不整な楕円形 【規模】長軸（402）cm・短軸355cm・深さ3cm

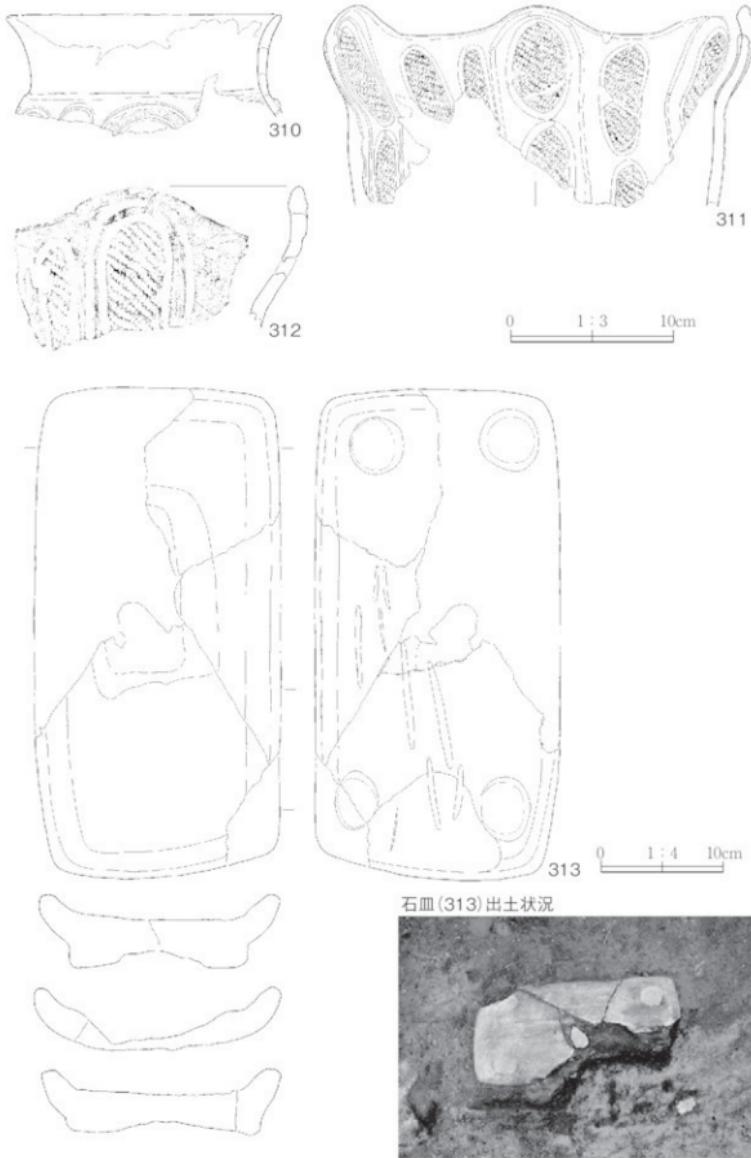
【埋土】崩落により、埋土の多くは確認できていない。検出できた範囲では3層からなる。黒褐色シルトを主体とし、炭化物や暗褐色シルトが混入する。堆積状況からみて自然堆積と推測する。

【床面・壁】床面は炉を検出した面を床面とした。概ね平坦であるがやや東から西へと傾斜しており、床面が削平されている可能性もある。壁は西～南西壁を除き確認できたが、2～3cm程度の立ち上がりである。緩やかに広がりながら立ち上がる。

【炉】複式炉である。石圓部2個と前庭部で構成され、長軸155cm、短軸62cmを測る。炉石は花崗岩で比較的大きく偏平な礫を素材としている。炉内埋土は黒褐色シルトを主体とし、住居埋土と類似する。手前側、奥側とともに石圓部内の使用面は床面を14cm掘り下げ構築している。また手前側の石圓部使用面は強く焼成し、被熱により赤色化している。奥側の石圓部には埋設土器が設置される。埋設土器は口縁部から胴部上半のみで、正位の状態で設置されている。炉の掘り方を確認した（第44図右下）。炉石よりわずかに大きく掘り込んだ後、炉石を設置している。



第44図 8号住居跡



第45図 8号住居跡出土遺物

〔附属施設〕 柱穴8個を確認した。配列からみて4個（1か2、3・5・8）が主柱穴と考える。

〔出土遺物〕 繩文土器、石器が出土している。

310は炉の埋設土器である。口縁部から胴部上半の一部のみしか残存しておらず、胴部上半の欠損部も打ち欠きではなく、ただ破損した状態のようにみえるので、このような状態に破損した土器を埋設土器として利用したと考える。胴部には充填繩文を伴う区画文が施文されるので大木10式古段階と判断している。311、312は埋土中から出土している。どちらも大木9式新段階であり、炉から出土した310よりも時期が古い。

313は方形の石皿で、床面からやや上で逆さに伏せた状態で出土した（第45図右下写真参照）。1/3程度欠損するが、円形の脚が3か所確認でき、本来四脚であったと推定する。上面（使用面）は、激しくすり減っている。また脚の付く下面には低溝が8箇所認められるので、石皿自体が破損後、部分的に砥石に転用された可能性が高い。

〔時期〕 出土土器は時期幅が認められるが、炉の埋設土器（310）を基準とし、大木10式古段階と判断した。

9号住居跡（第46・47図、写真図版14・63・64）

〔位置・検出状況〕 調査区北西側、I A20rグリッドに位置する。IV層上面で検出した。遺構の東側の一部は斜面の崩落により消失している。

〔その他の遺構との重複〕 なし。

〔平面形〕 不整な楕円形 〔規模〕 長軸375cm・短軸376cm・深さ8cm

〔埋土〕 斜面崩落に伴い、遺構上面のほとんどが消失しており、埋土の全容は定かではない。残存する範囲では2層からなる。黒褐色シルトを主体とし、炭化物や地山ブロック、花崗岩粒が混入する。堆積状況からみて自然堆積と推測するが、2層は後述する、下がっている床面上にも堆積しており、住居埋没に伴うというより斜面崩落によって堆積した可能性のある土層であると考える。

〔床面・壁〕 床面は炉を検出した面を床面とした。概ね平坦であるが、東から西へと傾斜する範囲があり（断面B-B'）、斜面崩落により床面の一部も削平を受けている可能性がある。壁は東壁を除き全周する。ただし8～10cm程度のわずかな立ち上がりを確認したにすぎない。壁は緩やかに広がりながら立ち上がる。

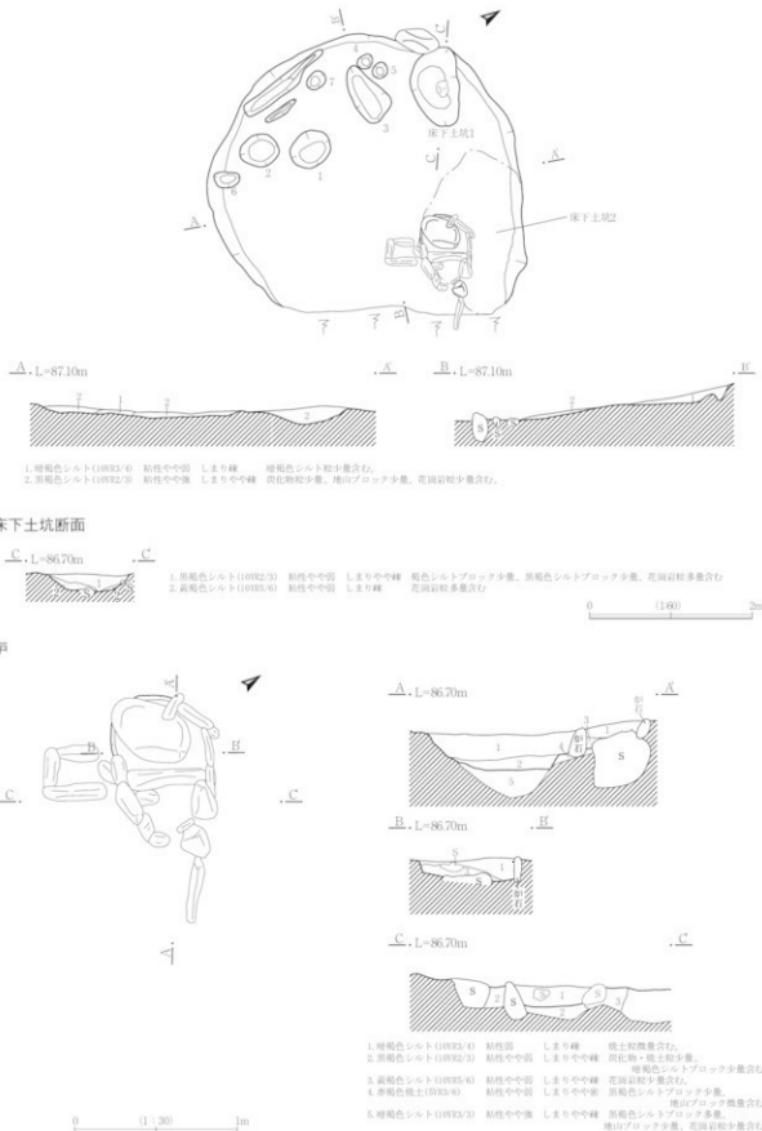
〔炉〕 石團炉と判断したが、形態が他の竪穴住居跡の炉と比べて特異である。

石團部3個で構成される。ただし、北側の最も大きな石團部は底面下から礫が露出しており、このまま炉として利用できるものか不明である。炉の東側には1個長大な礫が設置されている。この礫が前庭部があったことを示すために設置されたものであれば複式炉の可能性がある。規模は長軸94cm、短軸106cmを測る。炉石は花崗岩で、大きさや形態に規則性がない。炉内埋土は暗褐色シルトを主体とし、住居埋土とはやや異なる。炉内使用面は床面を約20cm掘り下げ構築している。炉埋土に焼土粒がわずかに混入するが、使用面には被熱の痕跡は見受けられない。炉の掘り方を確認した。炉の範囲とほど同範囲であるが、使用面を10cm以上掘りさげてから使用面を構築し、炉石を設置している。

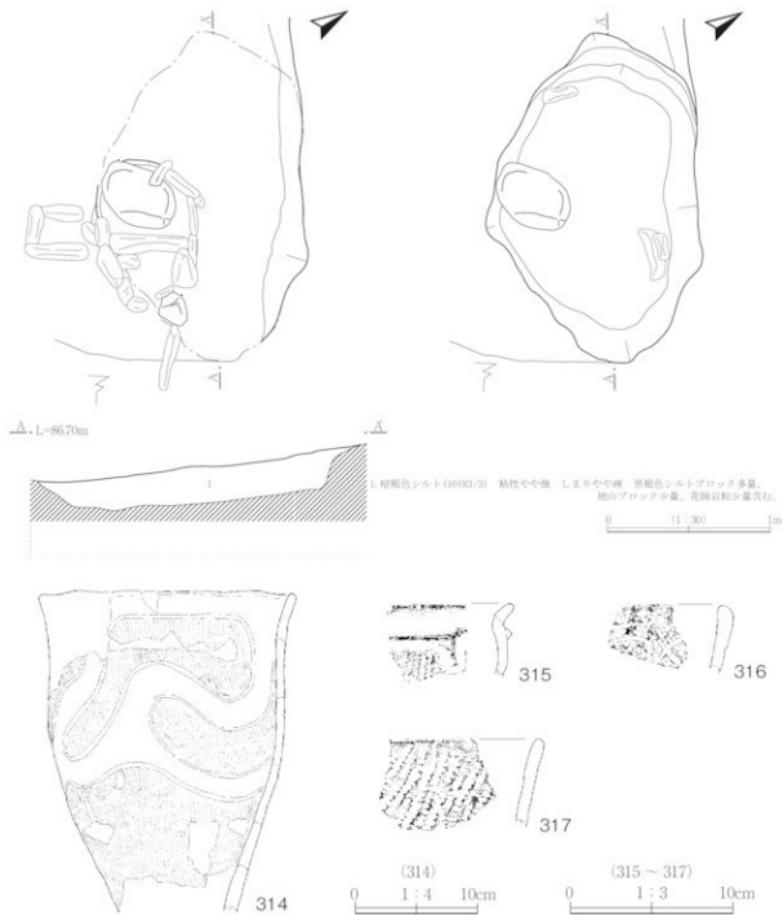
〔附属施設〕 柱穴7個を確認した。配列からみて、主柱穴とは考えらない。

北西壁際で床下土坑1を検出した。床下土坑1は98×60cmの楕円形を呈し、深さ20cmである。目立った出土遺物がないので用途は不明である。

また炉下から北側にかけての床面に、炉の掘り方とは別の暗褐色シルトのプランが確認された。便宜的に「床下土坑2」とした。この床下土坑2は200×130cmの不整な楕円形を呈し、炉から北壁の一



第46図 9号住居跡 (1)



第47図 9号住居跡（2）・出土遺物

部付近の床面下で確認できた。深さは床面から22cmを測り、暗褐色シルトを主体とする。単層であり、炉の構築前に入為によって埋められたと推測する。埋土の混入物に住居や炉の埋土と大きな差はない、また目立った出土遺物もないので、用途は不明である。

【出土遺物】縄文土器がのみ確認した。いずれも埋土中出土である。314は炉の周辺からまとまって出土した。大木10式中段階である。315は口縁部片で、隆帯が巡り、その下に区画文が施文されており、

大木8b～9式古段階に比定される。316も口縁部片で、弧状の区画文が見受けられるがやや粗雑である。大木10式であろうか。317は縄文のみ施文される粗製である。

【時期】炉周辺から出土した314を基準として大木10式中段階と判断した。

10号住居跡（第48・49図、写真図版14・15）

【位置・検出状況】調査区中央北側、IA22t～23uグリッドに位置する。IV層上面で検出した。なお立地する斜面地の崩落に伴い、遺構の東から南側にかけては消失した状態で検出した。

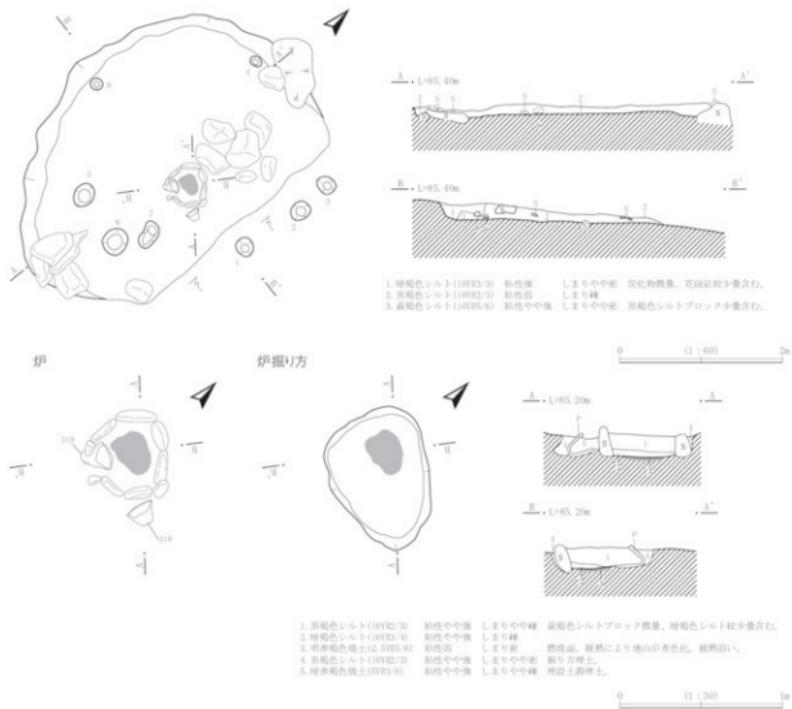
【その他の遺構との重複】なし。

【平面形】不明。不整な楕円形と推定する。【規模】長軸410cm・短軸(278)cm・深さ12cm

【埋土】斜面の崩落により遺構上部が消失しており、埋土の全容が定かではない。残存する範囲では3層からなる。黒褐色シルトを主体とし、炭化物や花崗岩粒が混入する。堆積状況からみて自然堆積と推測する。

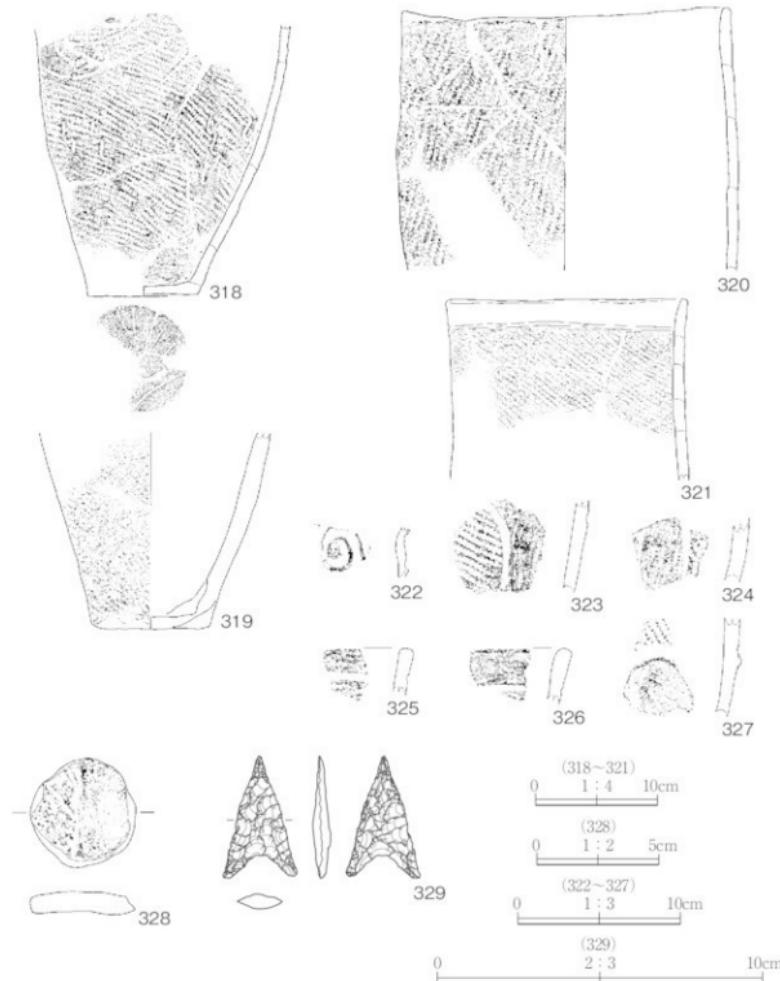
【床面・壁】床面は炉を検出した面を床面とした。概ね平坦である。壁は消失した東壁を除き、全周する。緩やかに広がりながら立ち上がる。

【炉】石圓炉である。方形基調で、54×54cmを測る。炉石は花崗岩で偏平な礫を素材とするが大きさ



第48図 10号住居跡

は不規則である。炉内埋土は黒褐色シルトを主体とし、住居埋土と類似する。炉の使用面は床面から12cm掘り下げ構築している。使用面の焼成は強く、被熱により赤色化している。また炉内と炉外に斜位で設置された埋設土器が1点ずつ見受けられる。炉内の埋設土器(319)は炉の構築時に設置され、埋められた後、土器の上にも炉石を設置している。底面が変形して安定感のない深鉢の胴部下半から底部を利用している。また炉外の埋設土器(318)も同様で炉の構築時に設置されたと推定する。胴部中央から底面まで残存する深鉢を利用する。2個の埋蔵土器に時期差があるかは不明である。炉の掘



第49図 10号住居跡出土遺物

り方を確認した。深さは炉とはほぼ同規模にまた範囲は炉よりもひとまわり大きく掘り込み、炉石を設置している。

【附属施設】柱穴を床面上で4個、床面が消失した範囲で3個の計7個を確認した。うち2個(Pit1, 6)は主柱穴の可能性がある。ただし床面の北側半分では柱穴があまり確認できず、柱穴配列は定かではない。

【出土遺物】縄文土器、土製品、石器が出土している。318、319は埋設土器であるが、他は埋土中からの出土である。

318は深鉢の胴下半から底部が残存する。わずかに弧状区画文が確認でき、大木10式中段階に比定されると推定する。地文は単節RLであるが、施文した原体の結節部分が横に巡っているのが見受けられる。底面は一部欠損するが木葉痕が確認できる。319は粗製深鉢の胴下半から底部である。底面の一部が大きく窪んで変形している。二次的な作用によるものには見えないので、土器の製作時に変形したものと考える。この窪んでいる部分を下にして埋設されていた。「不良品」を埋設土器として利用した可能性もある。320、321は粗製の深鉢である。321は口縁部が無文になり、脚部との境に沈線が1条巡る。323～327は大木10式古段階である。いずれも小片であるがわずかに弧状の区画文が確認できる。322は陸帯による渦巻き文が施文されており、大木8b式と考える。

328は土製円盤である。上面に文様(沈線)が残っており、大木9～10式の土器片を転用しているものと推定する。また表面には元々付着していたコゲが残っている。

337は石鏡である。1類に相当し、比較的大型のものである。

【時期】埋設土器(318)の時期から大木10式中段階と判断した。

11号住居跡（第50・51図、写真図版15・64・109）

【位置・検出状況】調査区中央北側、IA22qグリッドに位置する。IV層上面で検出した。なお本遺構は立地する斜面地の崩落および西側に隣接する沢跡により、西から南側にかけて大きく消失している。

【その他の遺構との重複】1号性格不明遺構と重複し、本遺構の方が古い。

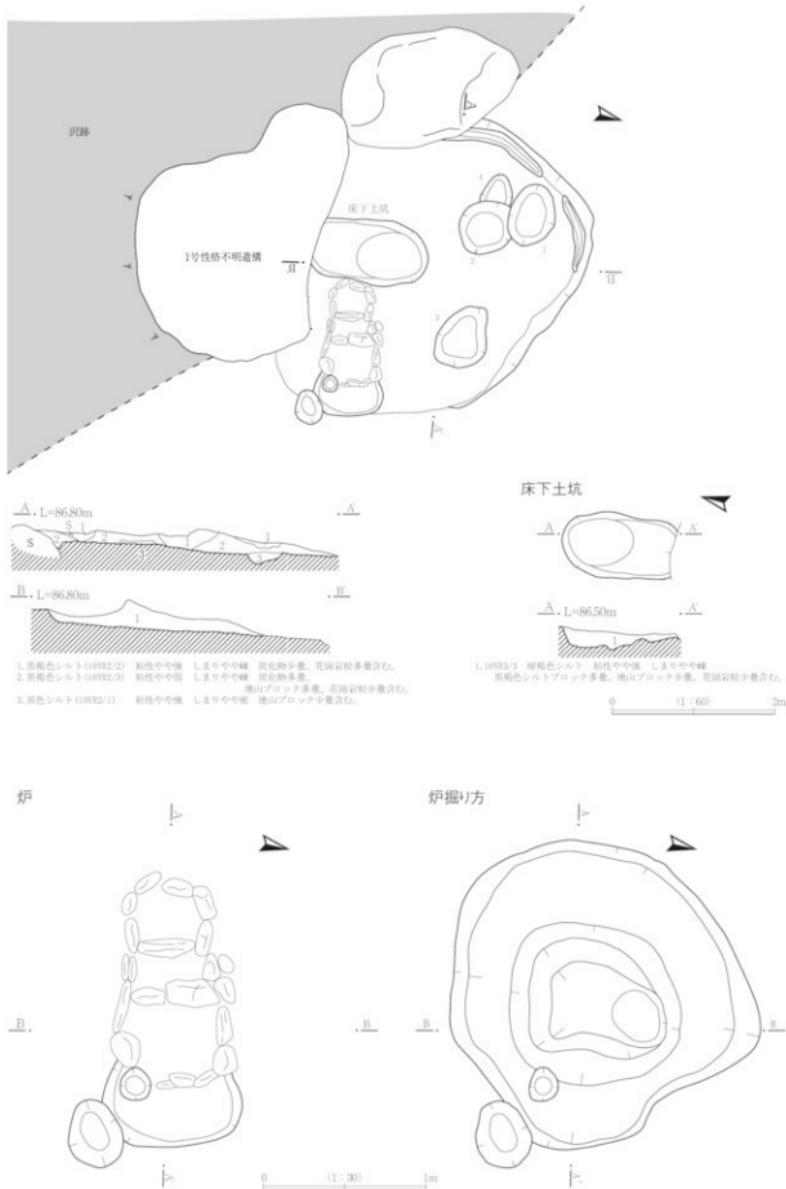
【平面形】不整な梢円形 【規模】長軸(356)cm・短軸215cm・深さ28cm

【埋土】2層からなる。黒褐色シルトを主体とし、炭化物や花崗岩粒が混入する。堆積状況からみて自然堆積と推測する。

【床面・壁】床面は炉を検出した面を床面とした。概ね平坦である。壁は北壁のみ確認した。緩やかに広がりながら立ち上がる。

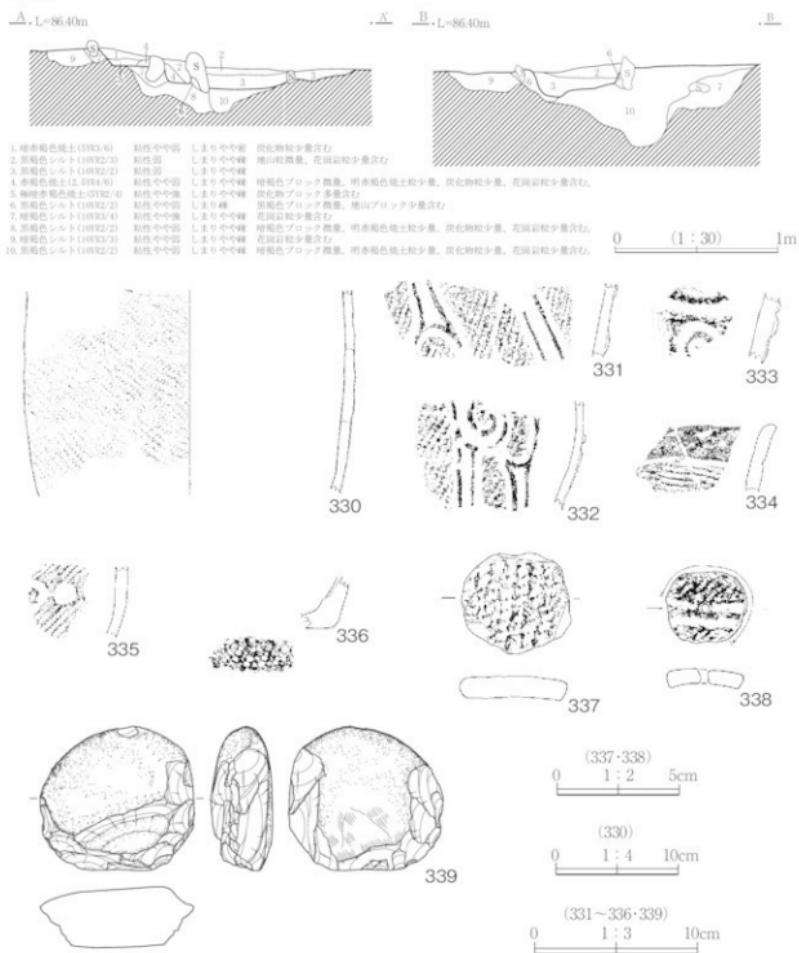
【炉】複式炉である。石圓部3個と前庭部で構成され、長軸(162)cm、短軸74cmを測る。炉石は花崗岩を利用し、比較的小型の礫を素材としている。炉内埋土は黒褐色シルトを主体とし、住居埋土と類似する。奥側の石圓部は焼土が堆積しているが、石圓部底面に被熱の痕跡は認められない。真ん中の石圓部は横長の長方形を呈しており、その使用面は床から32cm掘り込んでおり、奥側の石圓部よりも深い。同じく軸焼成の痕跡は認められない。手前側の石圓部は他の石圓部よりも大きく正方形を呈する。深さは真ん中の石圓部とほぼ同じである。同じく被熱の痕跡は認められない。炉石の掘り方を確認した。大きさ・深さとともに炉よりも大きく掘り込んでから、炉石を設置している。

【附属施設】柱穴4個を確認した。配列からPit2・3が主柱穴と考える。消失する南側の床面に同様に並んでいれば4本柱と推測する。また床面は消失しているが、炉の南西側から床下土坑1個がみつかっている。規模は50×30cm、深さ32cmで、人為的に埋められた痕跡があるが、出土遺物は認められない。



第50図 11号住居跡 (1)

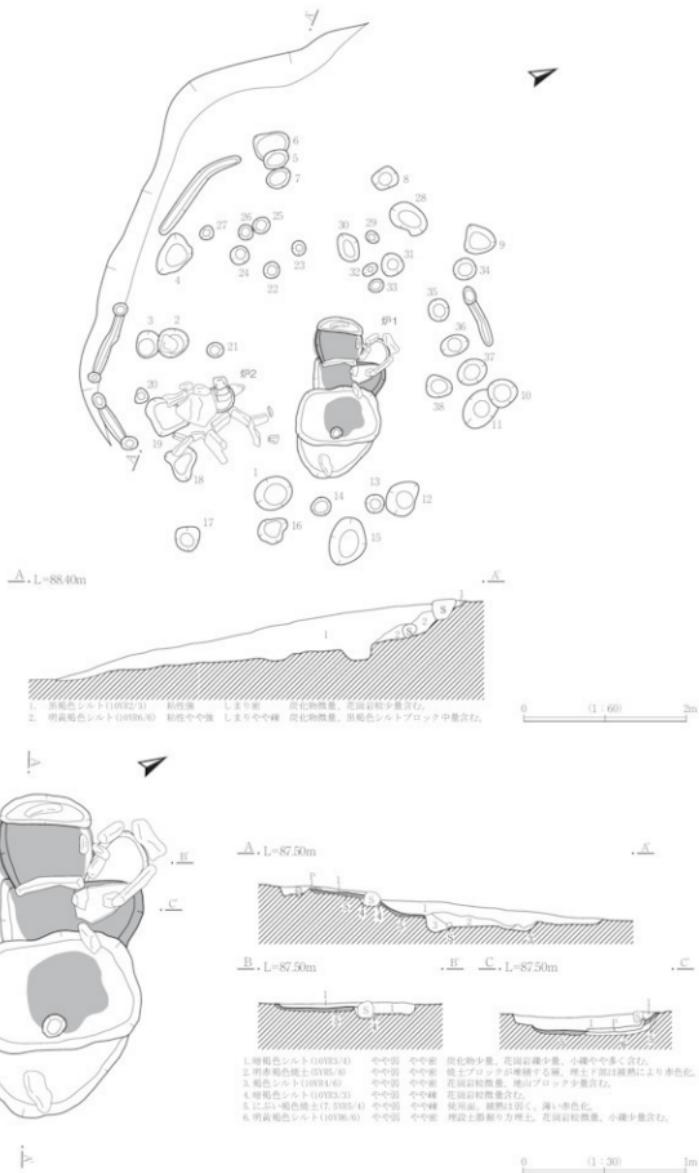
炉断面



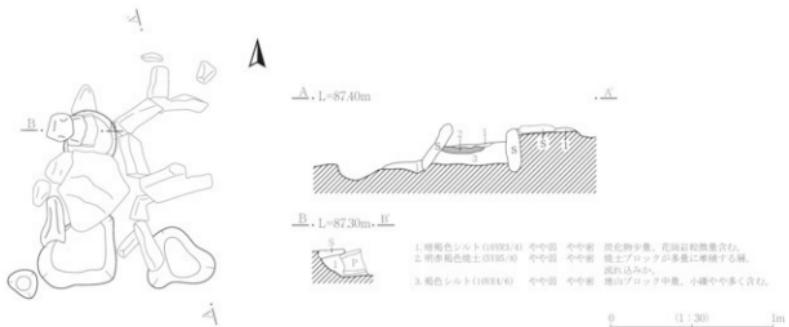
第51図 11号住居跡（2）・出土遺物

〔出土遺物〕 繩文土器、土製品、石器が出土している。いずれも埋土中出土である。

縄文土器は小片が多いが、330は唯一、形態の分かれる土器である。胴部のみで口縁部と底部を欠損する。粗製である。331～333は隆帯による渦巻き文が施文される。大木8b式である。334は口縁部片で、口縁部は無文、その下には沈線が巡り、充填縄文が施文される。大木10式古段階か。335は大木9



第52図 12号住居跡（1）



第53図 12号住居跡（2）

式と考えられる。336は深鉢の底部片で無文のため時期は不明。底面に縄文圧痕が認められる。

337、338は土製円盤である。どちらも中期の土器片の転用で、337は縄文、338は縄文施文後2条の沈線を施す。また338には中央に穿孔が1箇所認められる。

339は礎器である。やや小型の偏平な円盤を素材とし、縁辺の広い範囲に二次加工を施す。

【時期】出土土器の時期は幅があるが、時期判断できる土器片（331～333）を基準とし、また炉の形態から、大木8b式期と考える。（須原）

12号住居跡（第52～55図、写真図版16・65・109・110）

【位置・検出状況】調査区北東側、IA24j、25kグリッドに位置する。IV層上面で検出した。

【その他の遺構との重複】なし。

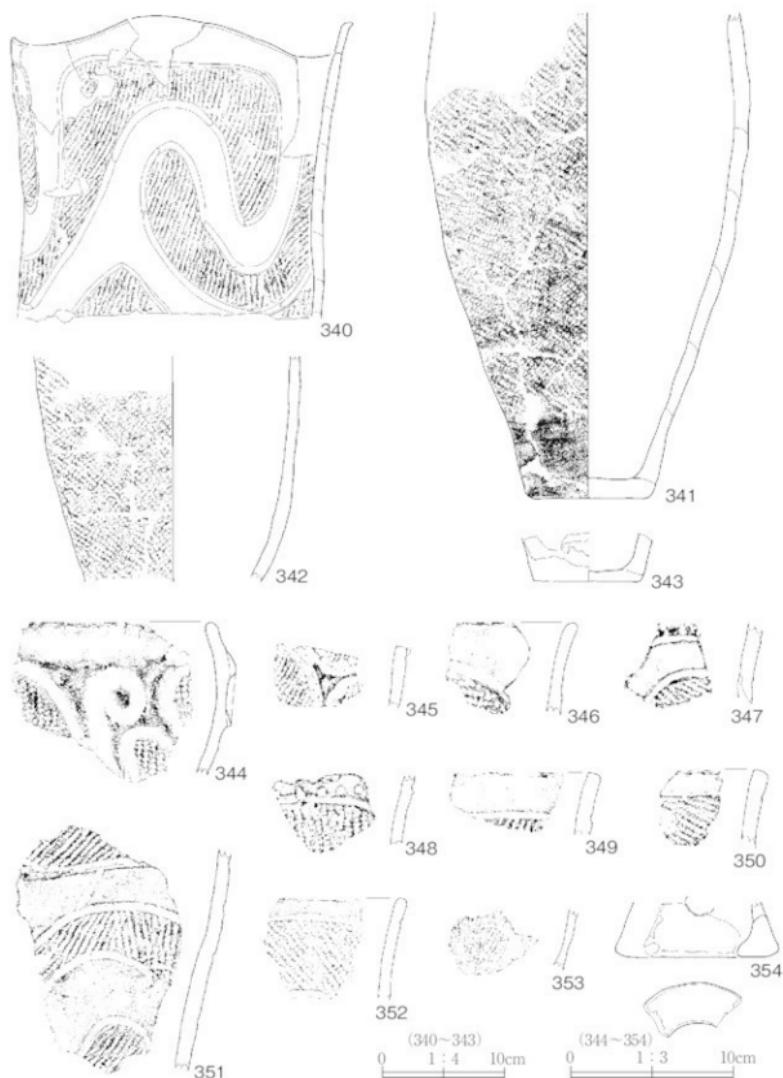
【平面形】不整な円形。【規模】長軸445cm・短軸440・深さ50cm

【埋土】2層からなる。黒褐色シルトを主体とする。堆積状況から自然堆積と推測するが、所謂「レンズ堆積」はみられない。住居廃絶後、比較的短時間で埋没した可能性がある。

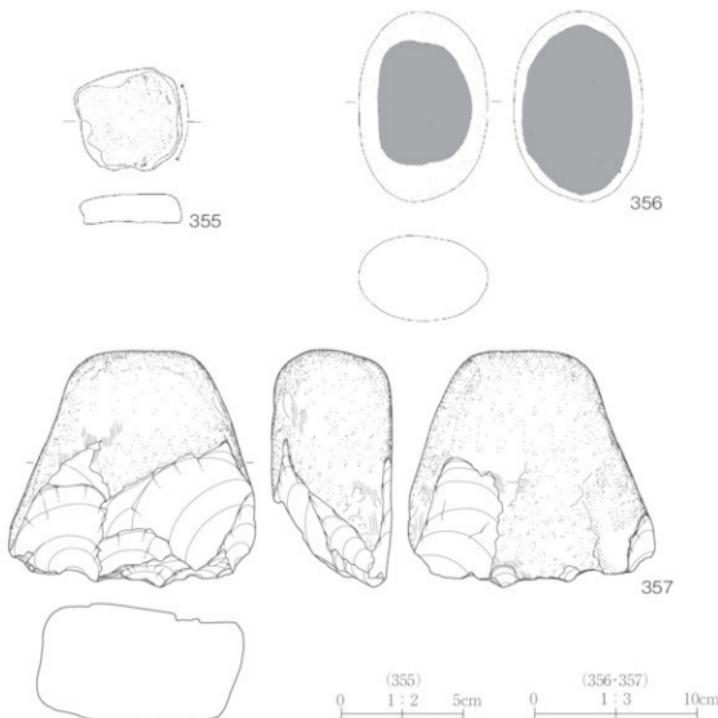
【床面・壁】床面は炉を検出した面を床面とした。南東側へ緩やかに傾斜しているが、概ね平坦である。壁は西側に残るがその他は失われている。

【炉】2つ確認された。炉1は複式炉で石圓部3個と前庭部、さらに真ん中の石圓部に埋設土器を伴う付属の石圓で構成されている。長軸198cm、短軸104cmを測る。炉石はほとんど外されていたが残存していた炉石は全て花崗岩であった。被熱による影響のためか非常にもろく、風化が激しい。埋土は暗褐色シルトを主体とし住居埋土と類似する。前庭部側の石圓部には使用面から6cmほど現地性ではない焼土が堆積している。炉の使用面は石圓部によって高さが異なっており、奥側の石圓部は床面から2cm、真ん中の石圓部は12cm、前庭部側の石圓部は20cm低く掘り下げられている。前庭部側の使用面には内径14cm、深さ20cm程の土坑が確認された。全ての石圓部の使用面は被熱により焼土化しているが、奥側の石圓部の使用面が最も焼土化している。真ん中の石圓部に付属する石圓の内側は焼土化していない。埋設土器の上に石圓部の石が載っていることからも、当初から何らかの目的でこのように構築したものと考えられる。

炉2は炉石の一部が外され、前庭部を確認できなかったが、石圓部が3個あることから複式炉と考え



第54図 12号住居跡出土遺物（1）



第55図 12号住居跡出土遺物（2）

えられる。隣接する土坑からは斜位に設置された土器が出土した。奥側の石圓部の使用面は床と同じ高さであり、わずかに焼土化している。真ん中の石圓部の使用面は床面から20cm掘り下げられ、その6cm上に厚さ4cmの現地性ではない焼土の堆積層を確認した。最も手前の石圓部は使用面の一部を残し柱穴(Pit11)により破壊されている。使用面の深さは真ん中の石圓部と同じであり、焼土化など被熱の影響は確認されなかった。

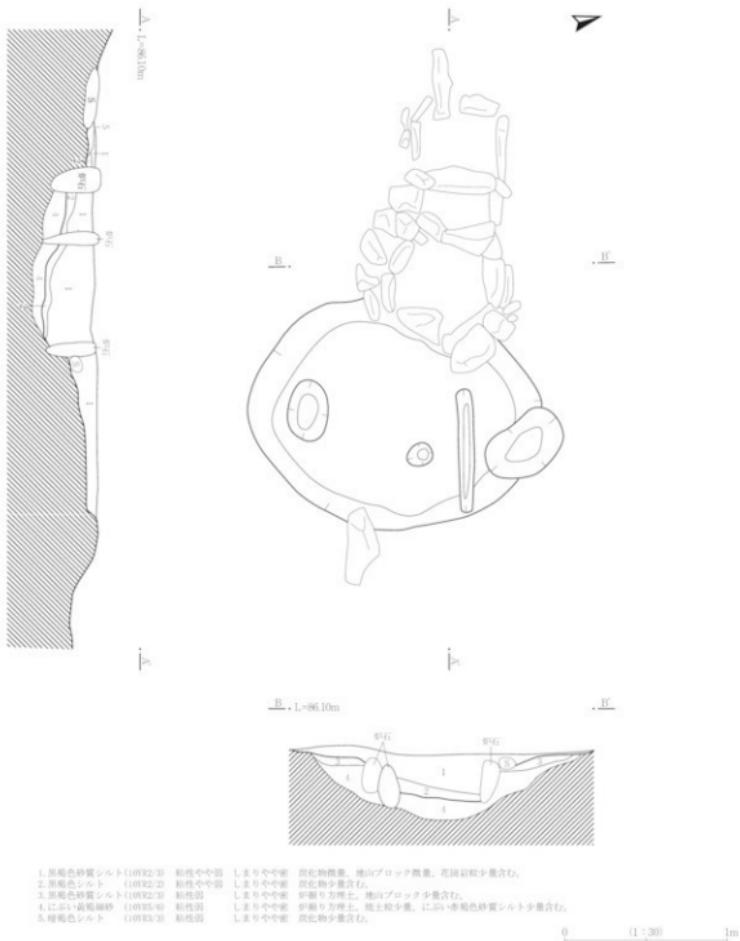
〔付属施設〕 柱穴38個を確認した。そのうち8個（Pit 1～8）は主柱穴と考えられる。

〔出土遺物〕 繩文土器、土製品、石器が出土している。埋土中出土がほとんどを占めるが、埋設土器（341・342）や床面直上出土（340）も見受けられる。

340は床面直上から出土している深鉢の大型破片で、大木10式中段階である。341は炉1、342は炉2の埋設土器である。どちらも粗製で、341は底部まで残存し、342は胴部のみである。344は大木9式古段階で、区画文に挟まれて、沈線による渦巻き文が垂下する。346～352は大木10式古～中段階で、孤状の区画文内に充填縄文が施文される。348は区画外に円形刺突文が施文される。345は大木9式古段階で隆帯による区画文が施文される。353は粗製である。354は器台の脚部破片か。胴部に円孔がある。



第56図 13号住居跡（1）・出土遺物



第57図 13号住居跡（2）

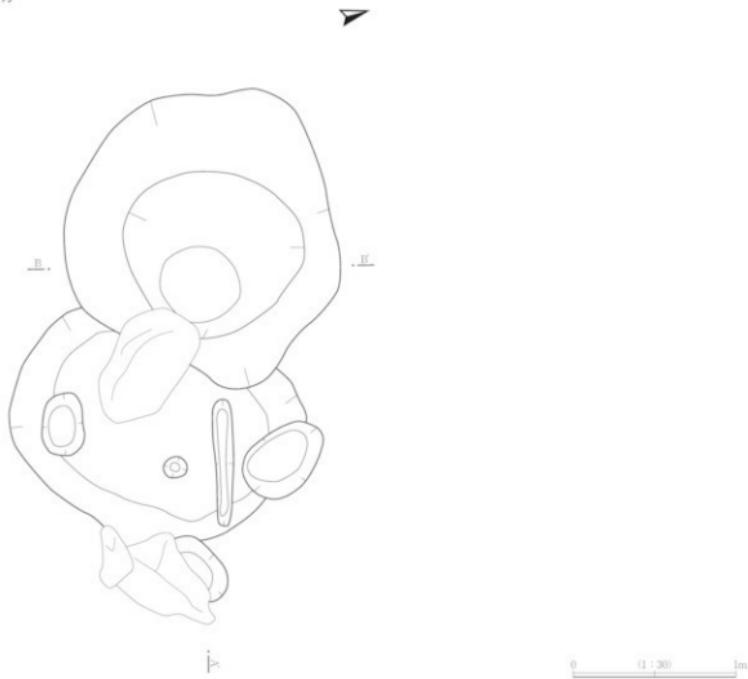
356は土製円盤である。無文の土器片を転用し側面は粗雑な打ち欠きが目立つ。側面の摩滅は一部のみで確認できた。他の土器と同様の出土状況であるので、同じ時期の範疇に収まると考える。

357は敲磨器類である。やや厚みのある円盤を素材とし、両面の広い範囲に磨痕が見受けられる。

357は礫器である。重量があり厚みのある台形状の礫の一方向の縁辺のみ二次加工が施される。

【時期】床面直上から出土した土器（340）を基準とし、大木10式中段階と判断した。（久保）

炉掘り方



第58図 13号住居跡（3）

13号住居跡（第57～59図、写真図版16・17・65）

[位置・検出状況] 調査区北東側 I A25l、25m、II A1k、1l、1m、2l、2mグリッド内に位置する。IV層上面で検出した。本遺構は後世の削平を受けているため壁は全て消失している。

[その他の遺構との重複] なし。

[平面形] 円形と考えられる。 [規模] 長軸(680)cm・短軸760cm・深さ不明

[埋土] 遺構上部が削平によって既に消失していたため住居内の埋土については把握できていない。

[床面・壁] 床面は炉を検出した面を床面とした。概ね平坦である。壁は削平によって消失しているが、壁溝が一部残存する。

[炉] 複式炉である。石窯部3個と前庭部で構成され、長軸292cm、短軸96cmを測る。石材は花崗岩を用いており、大きさ20cm大のものを主体に構成されている。真ん中の石窯部のみ細長い形を意識して作っていると思われる。炉内の埋土は炭化物を含んだ黒褐色シルトが主体である。また、西側の浅い石窯部からは使用面の約6cm上で被熱のため赤色化した焼土の堆積層を確認しており、使用面から約2cm下まで赤色化が見られる。炉の使用面は石窯部によってそれぞれ高さが異なっている。東側の石窯部より順に床面から深さ約28cm、16cm、4cmといった階段状の構成になっている。炉の掘り方

についても確認しており、西側の石圓部で1段、真ん中から東側の石圓部にかけて1段深く掘り込まれている。更に東側の石圓部は円形に掘り込まれる。いずれも炉に対し規模が大きく、炉の検出段階でも掘り方の存在を明確に確認することができる程他の竪穴住居跡と比較しても特徴的である。掘り方の埋土としては炉石の外側にのみ堆積している黒褐色砂質シルトがある。また、炉内では前庭部側と真ん中の石圓部の下部にはにぶい黄褐色砂の堆積が見られる。この層は炉石の下部を取り囲むように堆積していることから炉石の掘り方の埋土であると推測される。前庭部は楕円形で掘り込みが浅く、東側へと緩やかに立ち上がる。前庭部内には柱穴3個と細長い炉石の抜取痕とみられる痕跡が確認できた。

[付属施設] 柱穴10個を確認した。うち4個（Pit1・3・5・9）は主柱穴と考える。1個は搅乱により確認できなかったが、主柱穴5個による構成であったと推測される。燃焼した痕跡のある石圓部と隣接する北西側にある穴は底部から土器が設置されたような状態で見つかったため床下土坑である可能性が高い。

[出土遺物] 繩文土器が出土している。本遺構は埋土が消失しているため遺物量が少ないが、床下土坑と炉の掘り方の埋土から出土しているのを確認している。

358は床下土坑の底面より出土した粗製である。胴部下部～底部が残存する。底部には網代痕が施される。359・360は炉の掘り方の埋土から出土した粗製である。359は真ん中の石圓部の外側から横倒しの状態で出土した。胴部下部～底部が残存する。底部には木葉痕が施される。他の住居と異なり、炉石の下に固定されるような状態ではなく、埋土中に埋没していたため埋設ではなく、廃棄されたものと考えられる。ただ、比熱を受けているため1度使用した後に廃棄されたと考えるのが妥当である。360は外へと開く形態の土器で、口縁部が残存する。外面には煤の付着も認められる。

[時期] 出土した土器が少なく、詳しい時期の判別が難しいが、炉の形態及び他の住居との比較により中期末葉の範疇に収まるものと判断した。（野中）

14号住居跡（第59・60図、写真図版17・66・110）

[位置・検出状況] 調査区北東側II A2j、3j、2k、3kグリッド内に位置する。IV層上面で検出した。本遺構は当初の検出段階で確認できなかったが、残存していた炉の一部を確認したことから存在が明らかとなった経緯がある。壁は後世の削平によって失われており、床面のみが残存する。また、東側は旧河道の範囲に収まるためその影響を受けており、床面、壁は共に消失している。

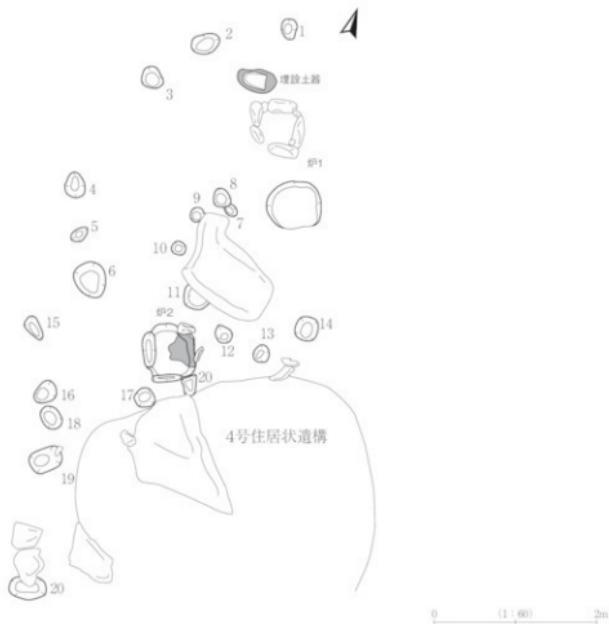
[その他の遺構との重複] 13号住居跡と重複するが、前述した状況のため新旧関係においては定かではない。また、当初は2つある炉跡を同一住居内のものとして1棟のみとして捉えていたが、柱穴の配置から複数の住居跡が重複する場合も考えられる。

[平面形] 不明。 [規模] 長軸（344cm）・短軸（318cm）・深さ不明

[埋土] 遺構上部が検出時には既に消失していたため住居内の埋土については把握できていない。

[床面・壁] 床面は炉を検出した面を床面とした。北西側から南東側に緩やかに傾斜する。東側は沢跡により消失している。壁は全て消失している。

[炉] 推定される住居の範囲内から石圓部を伴う炉跡を2箇所確認している。1つは北側に位置する炉跡（炉1）で、石圓部1個が残存する。断面図はこちらの炉跡を示している。付近には四角く掘りくぼめた箇所が確認できるため複数の石圓部を伴った複式炉であることが推測される。残存部分は長軸33cm、短軸33cmを測る。石材は花崗岩を用いている。炉内の埋土は黒色シルトが主体である。この土は本遺構の東側に位置する旧河道の堆積土に由来するものであると捉えている。旧河道が堆積する



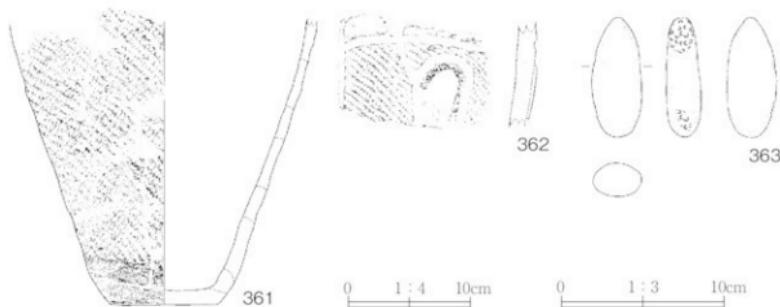
炉1・埋設土器



1. 黒色シルト (108R1/7/1) 粘性やや硬 しまりやや硬 花崗岩少量、地山ブロック微量含む。
 2. 黒褐色細粒シルト (108R2/3) 粘性弱 しまり柔軟 花崗岩少含む。
 3. 黄褐色細粒シルト (108R3/4) 粘性やや弱 しまり柔軟 地山ブロック少含む。
 4. 黄色砂質シルト (108R4/4) 粘性やや弱 しまり柔軟 伊豆綿り方堆土。
 5. 黄色砂質シルト (108R4/4) 粘性やや弱 しまりやや硬 伊豆綿り方堆土。花崗岩少量含む。



第59図 14号住居跡



第60図 14号住居跡出土遺物

過程で上方から流れ込んできた土が本遺構の東側を押し流し、その際に堆積したと考えられる。黒色シルトが一部、落ち込む箇所があるのはその部分の炉石が何らかの理由で抜き取られた後に堆積したためと考えられる。炉の使用面は床面から9cmである。石壇部の北側には埋設土器が横倒しの状態で見つかっている。その周辺は強い被熱による焼土化が見受けられる。他の住居の状況から察するに炉に伴うものとして捉えて間違いはないなさそうである。また、炉石周辺には掘り方の埋土も確認できた。もう1つの炉跡は南側に位置する(炉2)。炉石が一部残存するだけで、掘り方のみ確認した。掘り方は長軸36cm、短軸33cmを測る。残存している炉石の直下が燃焼しており、被熱を受けている。当初は同一住居内のものとして捉えていたが、柱穴の並びを考慮すると、重複する他の住居のものである可能性も否めない。

[付属施設] 柱穴20個を確認した。Pit1~14までの円形の配置で1棟、Pit15~20までの配置で別の1棟が重複する場合が考えられる。

[出土遺物] 繩文土器、石器が出土している。本遺構は埋土が消失しているため遺物は炉内より出土したものと確認した。

361は埋設土器である。外へと開く形態の粗製で胴部～底部までが残存する。全体に強い被熱を受けている。362は炉内より出土しており、隆沈線による区画文が施される。大木10式段階の土器であると推測される。

363は敲打磨器類で側面の上下に敲打痕が認められる。

[時期] 炉内埋土から出土した土器の時期から大木10式段階と判断した。

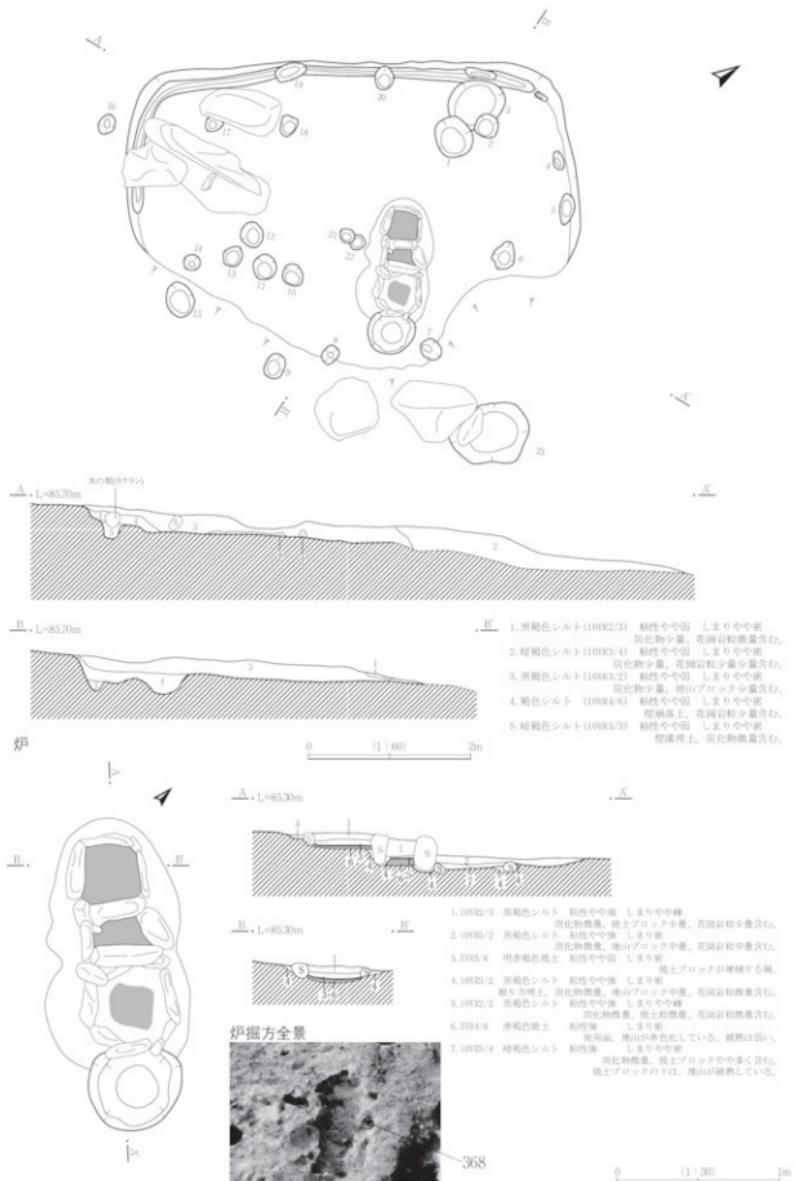
15号住居跡（第61~63図、写真図版18・66・110）

[位置・検出状況] 調査区北東側、II A 21~3mグリッドに位置する。IV層上面で検出した。本遺構は重複する17号住居跡によって南東側を消失している。

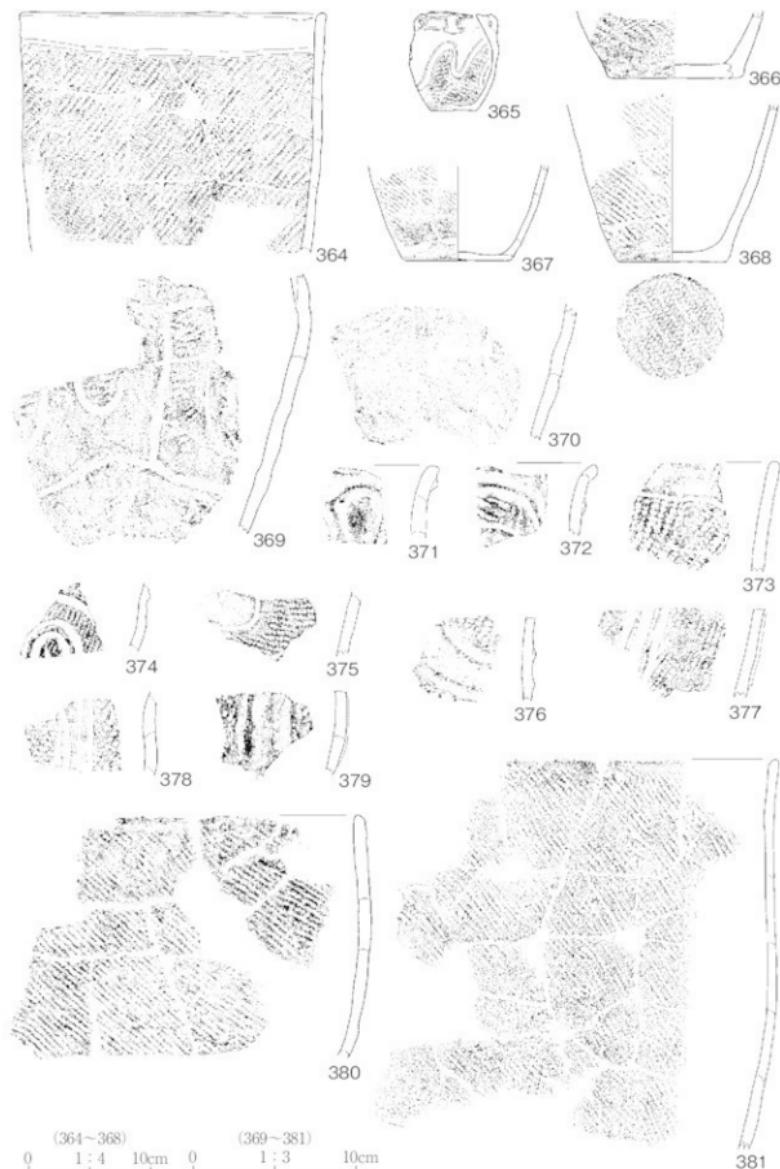
[その他の遺構との重複] なし。

[平面形] 隅丸方形 [規模] 長軸(372)cm・短軸500cm・深さ22cm

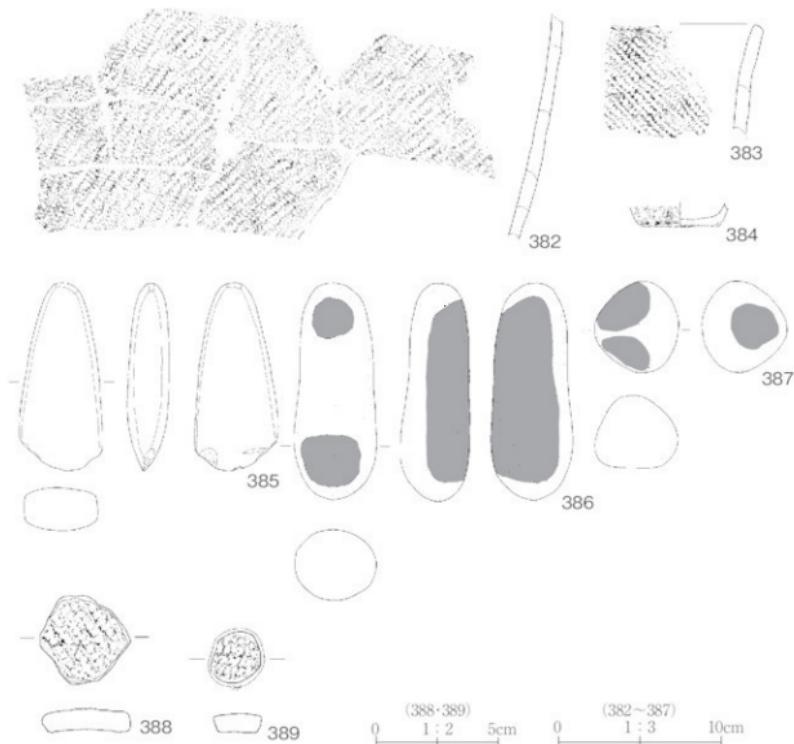
[埋土] 2層（第61図3・4層）からなる。黒褐色シルトを主体とし、褐色シルトや炭化物が混入する。堆積状況からみて自然堆積と推測する。なお、本遺構の上部には崩落によって堆積したと推測する土



第61図 15号住居跡



第62図 15号住居跡出土遺物（1）



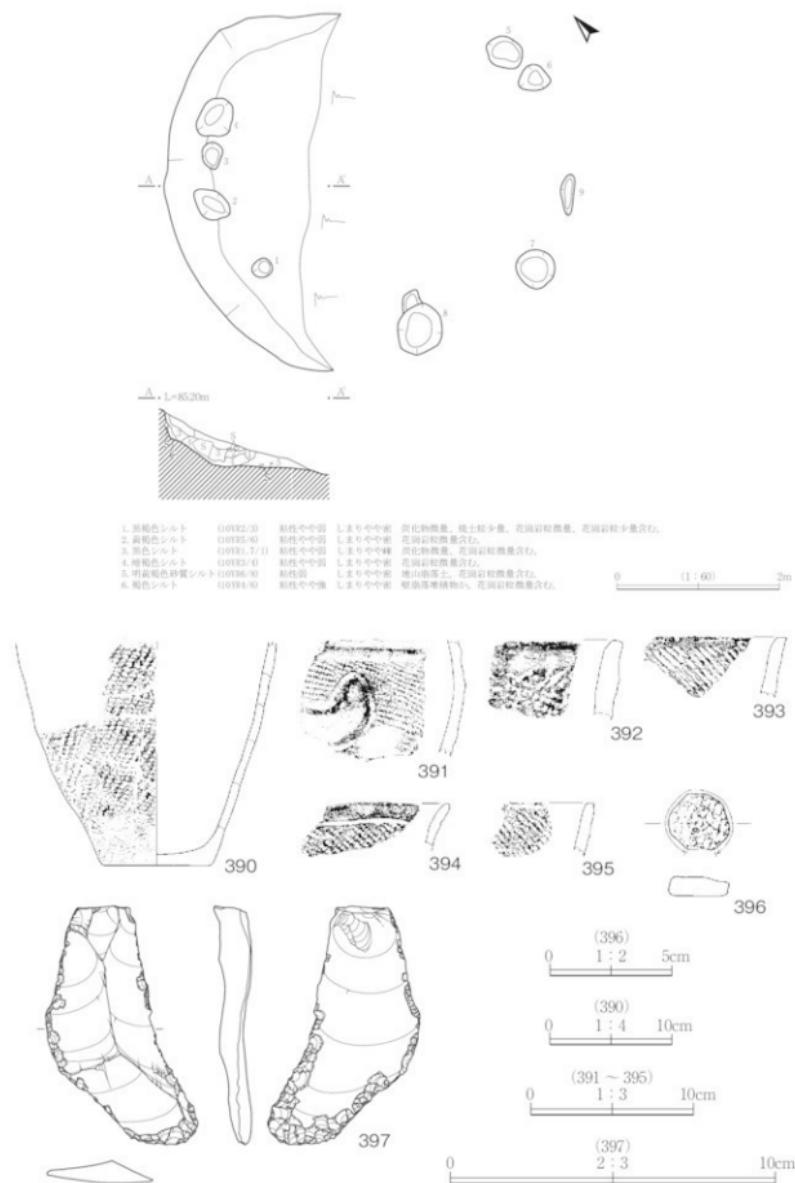
第63図 15号住居跡出土遺物（2）

層（第61図1・2層）が確認でき特に2層は本遺構の床面下にも堆積していることから1・2層が本遺構を削平しつつ埋没したことが推測される。

【床面・壁】炉を検出した面を床面とした。概ね平坦である。壁は崩落によって消失した東壁を除き全周する。緩やかに広がりながら立ち上がる。

【炉】複式炉である3つの石開部で構成され、長軸183cm、短軸56cmを測る。炉石は花崗岩を利用し、偏平で比較的大きな礫を素材としている。炉内の埋土は黒褐色シルトを主体とし、住居埋土と類似するので、同時に埋没したものと推定する。使用面の深さは石開部で異なり、奥側の石開部は床から比較的浅く、他2つの石開部は深く掘り込まれている。各石開部とも使用面は被熱しており、焼土の広がりを確認した。炉の掘り方を確認した。深さは使用面と同じであるが、大きさは、炉よりやや大きめに掘り込んだ上で炉石を設置し構築している。

【附属施設】柱穴23個を確認した。そのうち3個（9・15・23）は消失した床面の範囲でみつかっている。6個（Pit 1・6・9・10か12・18）は主柱穴と考える。また壁沿いに並ぶもの（4・5・19・



第64図 16号住居跡・出土遺物

20) もある。また遺構外に1個ある (16) が本遺構に伴うものと考えている。他に北壁沿いに壁溝が巡る。

〔出土遺物〕 繩文土器、土製品、石器が出土している。

364は粗製である。口縁部は無文で、胴部との境に沈線が1条巡る。365は小型の深鉢でほぼ関係である。口縁部に4単位の把手が付く。胴部下半には弧状の沈線と充填繩文が施文される。366~368は粗製深鉢の底部である。368は炉の掘り方埋土中から出土した。出土状態(61図下写真)からも埋設土器ではない。底面に網代痕が見受けられる。369~375、379は大木10式中段階の破片である。376~378は大木9式新段階である。380~383は粗製の大型破片である。384はミニチュア土器の底部片で繩文のみ施文される。

388、389は土製円盤である。どちらも土器の胴部片を転用し、繩文が施文されている。また396は打ち欠いたのみ、397は側面全周が摩滅する。

385は磨製石斧で刃部が欠けるのみではほぼ完形である。386、387は敲磨器類である。

〔時期〕 出土土器の多くの時期から大木10式中段階と判断した。(須原)

16号住居跡 (第64図、写真図版18・19・65・110)

〔位置・検出状況〕 調査区北東側、II A 20グリッド内に位置する。IV層上面で検出した。なお、本住居は後世の削平により一部の柱穴を残し床面・壁ともに南東側2/3以上が消失している。

〔その他の遺構との重複〕 なし。

〔平面形〕 不明。円形か。〔規模〕 長軸(535)cm・短軸(259)cm・深さ68cm

〔埋土〕 5層からなり、明黄褐色砂質シルトを主体とする。堆積状況から自然堆積と考える。

〔床面・壁〕 床面は若干硬化した面とした。概ね平坦である。壁は70cmほどの高さがあり、床から緩やかに立ち上がる。

〔炉〕 後世の削平により失われているものと思われる。

〔付属施設〕 柱穴9個を確認した。うち6個(Pit 2・4・5・6・7・8)は配列と規模から主柱穴と考えられる。

〔出土遺物〕 繩文土器、土製品、石器が出土している。遺構埋土の多くが消失しており、出土遺物も少ない。

390は粗製で、胴下半から底部が残存する。391は深鉢の胴部分で、繩文を地文とし、曲弧状の区画文が見受けられる。大木10式新段階の範疇に収まる。392~395は粗製で、394は口縁部が無文であり、胴部との境に沈線が巡る。

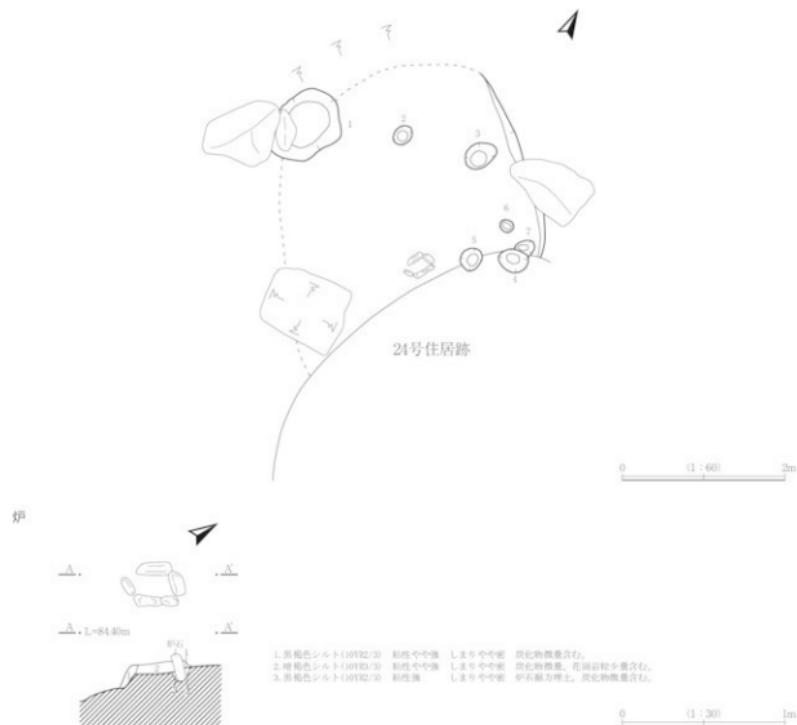
396は土製円盤である。繩文のみ見受けられる土器片を転用し、側面の広い範囲が摩滅している。

397は不定形石器である。細長い素材剥片の縁辺に両面から二次加工を施している。

〔時期〕 出土土器の中で391の時期から大木10式新段階と判断した。(久保)

17号住居跡 (第65・66図、写真図版19・67・110)

〔位置・検出状況〕 調査区北東側、II A 4mグリッドに位置する。IV層上面で検出した。24号住居跡を精査中、その西北壁で別遺構と推測されるプランを確認した。24号住居跡の北西側は比較的急な斜面であるが、黒褐色シルトの不整形なプランは認められ、またその黒褐色シルトを掘り下げて、石窯炉を検出した。掘り上げたところ、北壁の一部と炉のみで、床面も傾斜しているが、竪穴住居が崩落によって削手を受けたものと判断し、24号住居跡とは別の竪穴住居跡とした。



第65図 17号住居跡

【その他の遺構との重複】18号住居跡と24号住居跡と重複する。本遺構が最も古い。

【平面形】不整な楕円形と推定。 【規模】長軸 (300) cm・短軸 (280) cm・深さ15cm

【埋土】崩落による消失で不明。図示していないが、黒褐色シルトを主体の土層を確認した。斜面崩落土の可能性もある。

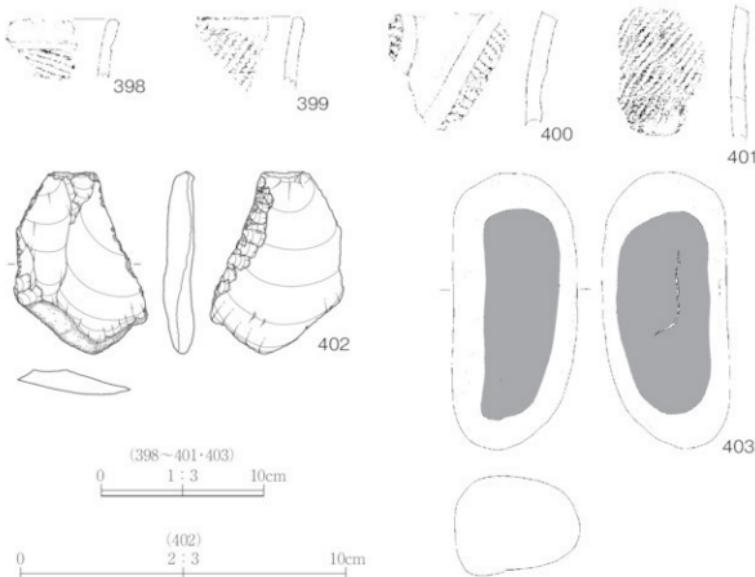
【床面・壁】床面は炉を検出した面を床面とした。概ね平坦だが、南へと傾斜する。壁は東西壁の一部を確認した。大きく広がりながら立ち上がる。

【炉】炉石5個のみを検出した。炉石の大きさからみて石圓炉と想像されるが定かではない。炉石は花崗岩である。炉の埋土は黒褐色シルトを主体とし、炭化物の混入は認められるが、焼土粒は見受けられない。炉内使用面は床面とほぼ同じ高さである。被熱の痕跡はない。炉の掘り方は確認できなかつた。残存する炉石の在り方からみて、炉石は床面に設置する程度であったと推測する。

【附属施設】柱穴7個を確認した。配列は不規則であり、主柱穴とは考えられない。

【出土遺物】縄文土器、石器が出土している。

398、399、401は粗製である。398・399は口縁部で、口縁部が無文、その下には縄文が施文される。



第66図 17号住居跡出土遺物

401は胴部下半の破片と考えられ、下部がわずかに縄文が施文されていない。404は深鉢の胴部片で、太めの沈線により、弧状の区画文が描かれている。大木10式中段階と判断した。

402は不定形石器である。自然面の残るフレイクを素材とし、片面から二次加工を施す。403はやや大きめの敲磨器類である。厚みのある棒状の礫を素材とし、両面に磨面が認められる。

【時期】出土した土器の中で400の時期を基準とし、大木10式中段階と考えている。

18号住居跡（第67・68・71～74図、写真図版19・20）

【位置・検出状況】調査区北東側、II A 51、5mグリッドに位置する。IV層上面で検出した。本遺構の北側は斜面崩落により流入した巨礫により削平され、また遺構の東側の一部も消失している。

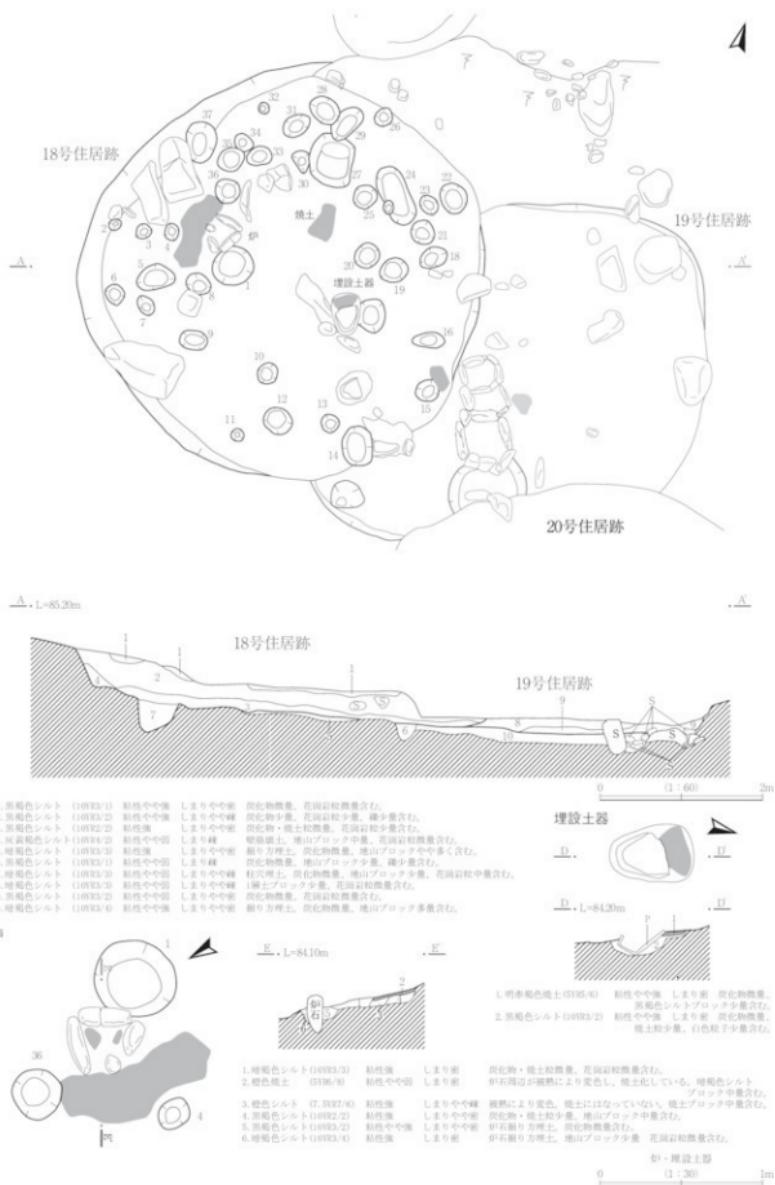
【その他の遺構との重複】19号住居跡と重複し、本遺構の方が新しい。

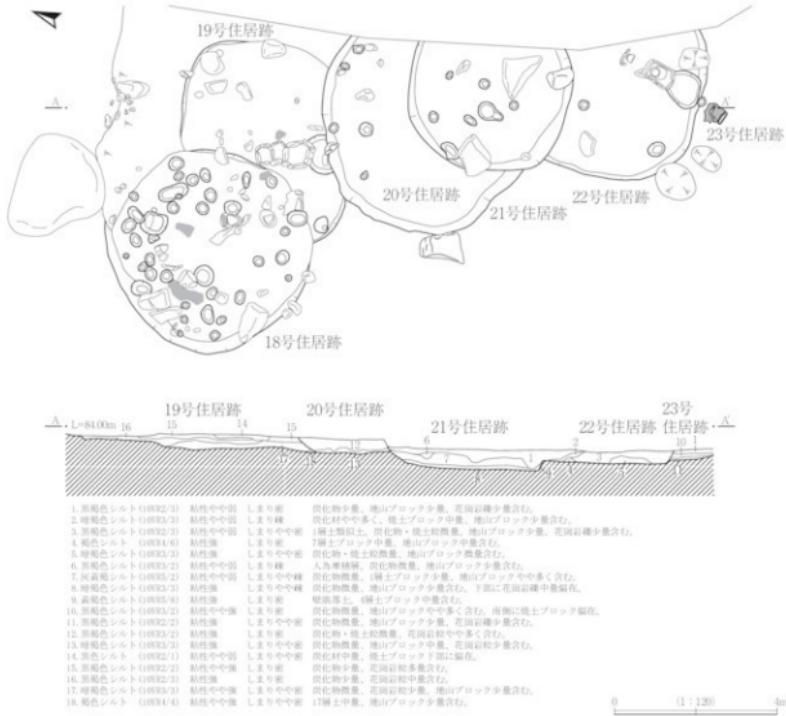
【平面形】不整な円形 【規模】長軸(404)cm・短軸(470)cm・深さ50cm

【埋土】4層（第67図1～4層）からなる。黒褐色シルトを主体とし、炭化物や花崗岩粒が混入する。堆積状況からみて自然堆積と推測する。

【床面・壁】床面は炉を検出した面を床面とした。概ね平坦であるが、基盤に混じる花崗岩が露出している。壁は西壁の一部を確認した。緩やかに広がりながら立ち上がる。

【炉】石開炉である。炉石は花崗岩で、3個の炉石が「コ」字状に配されており、規模は40×48cmである。炉内の埋土は確認できていない。使用面は床面と同じ高さである。炉内は強い被熱により焼土





第68図 18～23号住居跡の重複関係

が広がっている。また炉外にも被熱範囲は広がっており、むしろ炉外の方が強い被熱で赤色化している。掘り方を確認した。炉とよりもわずかに大きく掘り、また深さは床面より約7cm掘り下げてから炉石を設置している。

【附属施設】柱穴37個を確認した。主に壁際に配されているが、主柱穴配列は不明である。また埋設土器がみつかっている。炉とは反対方向の壁寄りに位置し、斜位に埋設されている。埋設土器にはその外側が被熱により赤色化している。

【出土遺物】本遺構は当初、19号住居跡と同一遺構と考え、同時に取り上げ、両者で分けていない。19号住居跡と共に、縄文土器、土製品、石器が出土している。

404は埋設土器である。胴下半から底部が残存する。胴部に隆帯による弧状文が施文される。大木10式中段階である。405も埋設土器で、粗製の深鉢で、胴部中央から底部が残存する。器面には単軸絡条体1類が縱位に施文される。406、407は埋土中から出土した、縄文後期初頭に比定される土器である。406は口縁部がわずかにふくらみ、その上は屈曲する形態で、4単位の波状口縁を呈する。波頂部

からは蛇行する隆帯が垂下し、また口縁部は無文であるが穿孔されている。胴部には花弁状刺突文が充填される。三十編場式系統と判断した。407は粗製の範疇に収まると考える。器面全体に縄文が施文されるが、口縁部に隆帯が横位で巡り、またその末端が胴部へと垂下する。隆帯に施文される刻みは、406の隆帯上の刻みに類似しており、同時期のものと推定する。408は大木9式新段階。口縁部に円形刺突文が巡る。409、410は微隆帯による弧状の区画文が施文される大木10式新段階である。413は大木9式古段階か。欠損しているが口縁部に小さい把手が付される。414～420は大木9式。421は大木10式古段階である。423は粗製か。口縁部に隆帯が巡り、縱位に穿孔される。422は棒状工具による刺突文が口縁部に充填される。後期初頭か。424は口縁部が無文、胴部との境に隆帯が巡り、隆帯上には刻みが施される。425は大木10式新段階の胴部片である。429は407と同様の隆帯が施文される。後期初頭か。430は注口土器の注口部である。431～445は粗製である。431や441は口縁部が内湾するが、432～434、439、440は口縁部が外反する。435は底部片で底面に木葉痕が見受けられる。444は補修孔が見受けられる。

446、447はミニチュア土器の底部片である。450～454は土製円盤である。胴部片の転用が多く、また縁辺の広い範囲が摩滅しているものが多いが、453や454はほとんど打ち欠いただけのものである。455、456は不定形石器である。455は両面、456は半片面に二次加工を施し、刃部を作出している。457は磨製石斧である。長さ5cm弱と比較的小型である。刃部がわずかに欠損する。466はUフレイクである。横長のフレイクで、剥離面の縁辺に微細剥離が並んでいる。459、460は敲磨器類である。459は比較的厚みのある円礫を素材とし、側面にも磨痕が認められた。460は偏平で小型の円礫を素材とし、両面と側面の一部に磨痕が認められた。

【時期】埋設土器（404）の時期から大木10式新段階と判断した。

19号住居跡（第69～74図、写真図版20）

【位置・検出状況】調査区北東側、II A 51、5mグリッドに位置する。IV層上面で検出した。18号・20～22号住居跡の精査中にそれらとは別となる複式炉を検出し、本遺構とした。

【その他の遺構との重複】18号住居跡と20号住居跡と重複し、本遺構が最も古い。

【平面形】円形　【規模】長軸（376）cm・短軸（455）cm・深さ30cm

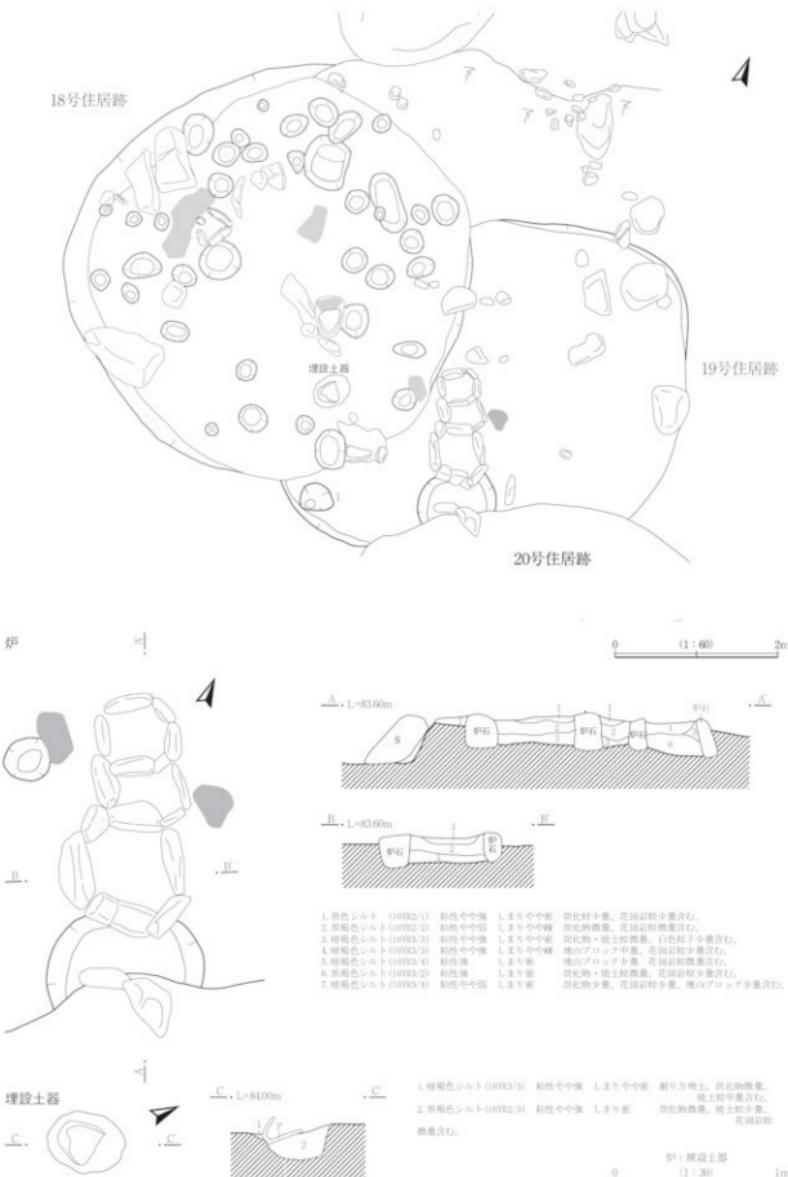
【埋土】5層（第68図14～18層）からなる。黒褐色シルトを主体とし、炭化物や花崗岩粒が混入する。堆積状況からみて自然堆積と推測する。

【床面・壁】床面は炉を検出した面を床面とした。黒褐色土層上を床面としており、他の遺構とは異なる。概ね平坦である。壁は西壁の一部のみ確認した。直立気味に立ち上がる。

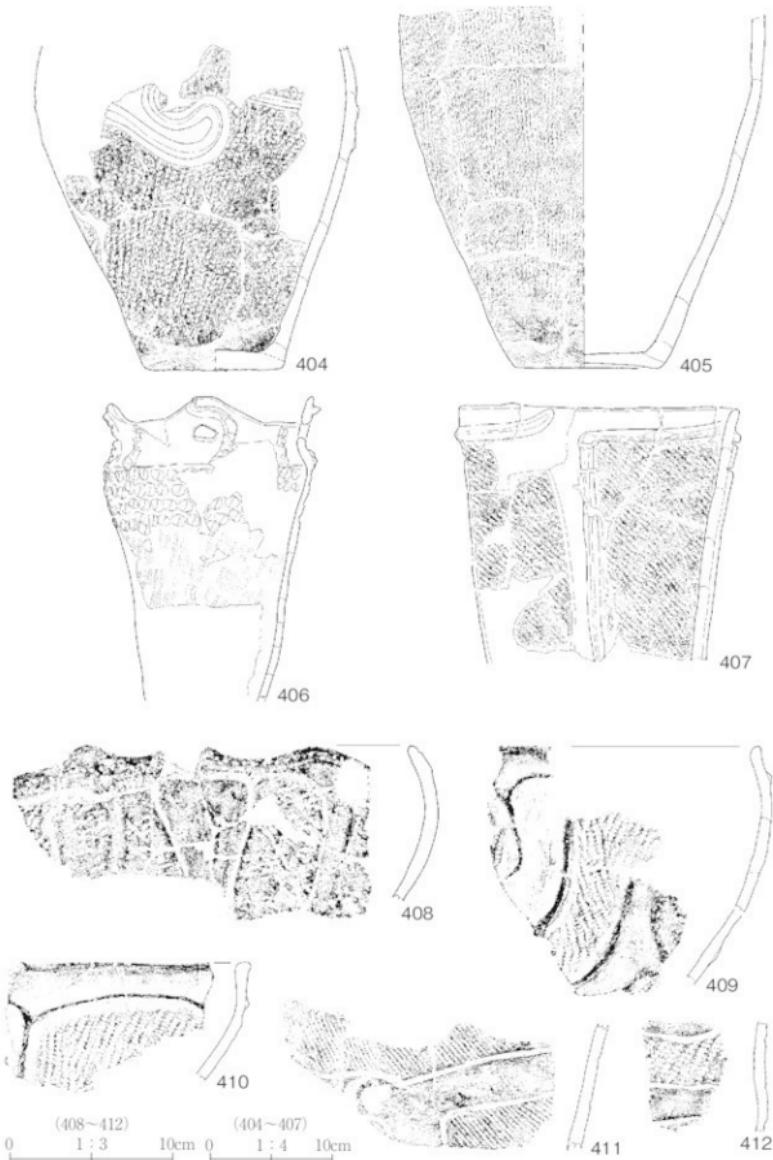
【炉】複式炉である。石開部3個と前庭部で構成され、長軸178cm、短軸68cmを測る。前庭部は一部20号住居跡によって壊されている。炉石は花崗岩を利用し、比較的大型の礫を素材としている。3個の石開部の並びは奥側、真ん中と手前側とで長軸方向がずれており、炉を一度作り変えられている可能性がある。炉内の埋土は黒褐色シルトを主体とし、燒土粒が混入している。炉の使用面は床面より深く掘り下げられており、床面から18cmを測る。石開部内の被熱は弱く、炉の使用面に焼土は確認できず、炉石にも被熱痕は認められなかった。炉の掘り方は確認したが、炉の大きさに掘り込み、構築しており、掘り方埋土もない。前庭部は不整形で掘り込みも浅く、また硬化面も見受けられない。

【附属施設】炉の北西側に埋設土器1個が設置されている。土器は斜位に埋設されている。

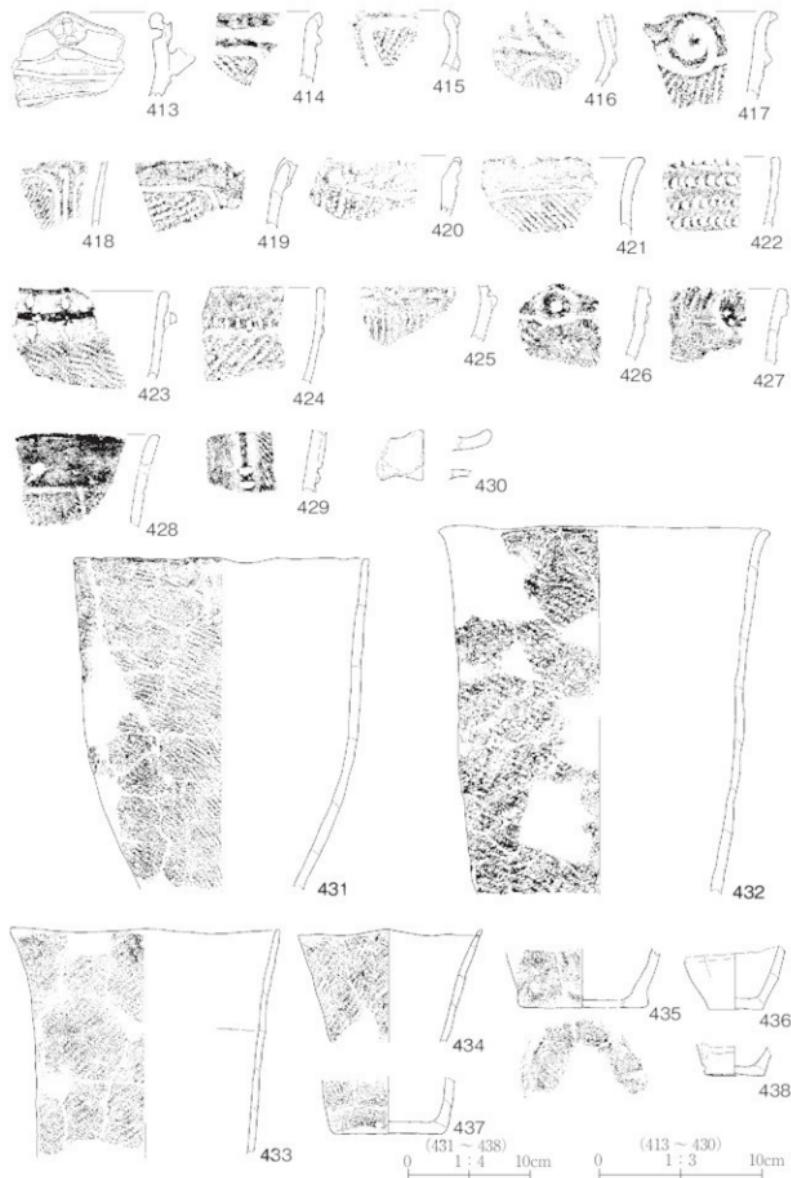
【出土遺物】縄文土器、土製品、石器が出土している。精査時は19号住居跡と同一住居と考え、遺物も取り上げており、厳密には両住居で出土遺物を分けられていない。



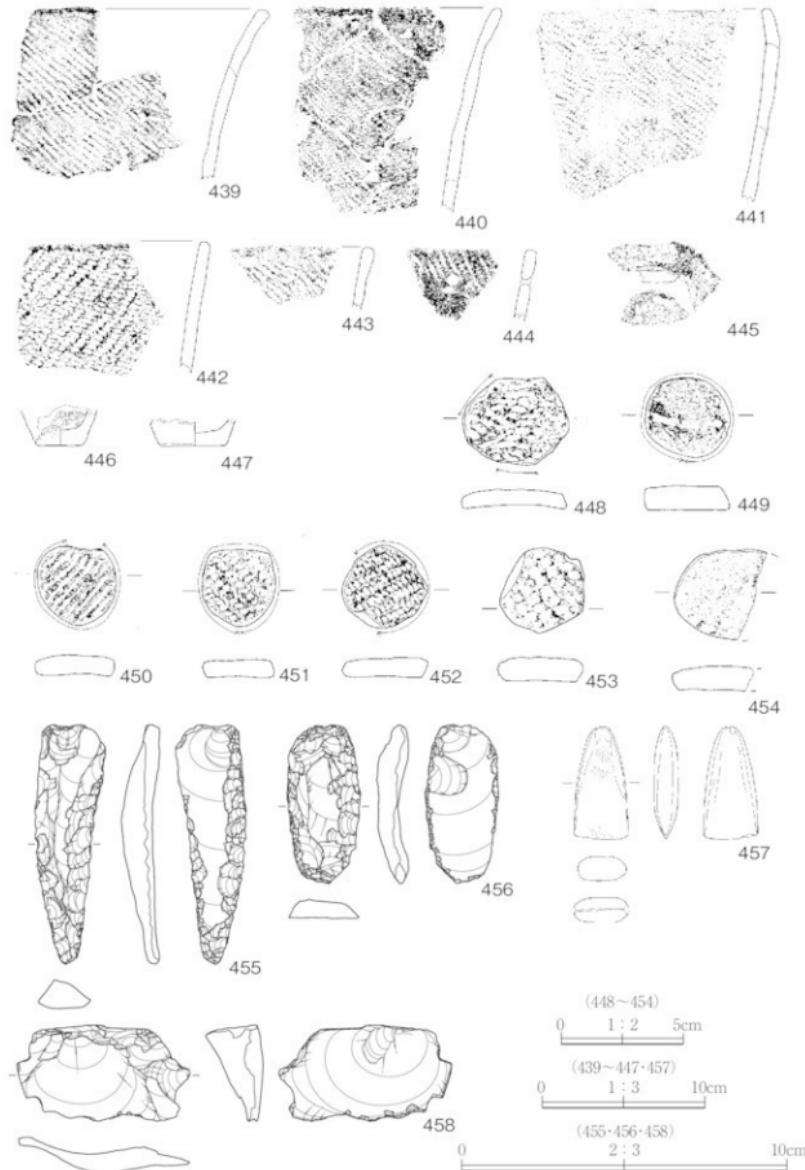
第69図 19号居住跡



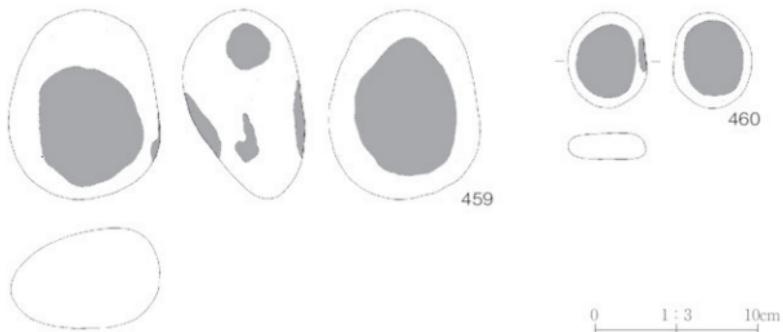
第70図 18・19号住居跡出土遺物（1）



第71図 18・19号住居跡出土遺物（2）



第72図 18・19号住居跡出土遺物（3）



第73図 18・19号住居跡出土遺物（4）

【時期】 遺構の重複関係および出土土器の時期から大木10式古段階と判断した。

20号住居跡（第74図、写真図版20・69・110）

【位置・検出状況】 調査区東側、II A 5m・6mグリッドに位置する。本遺構は19・21・22号住居跡を精査中に、断面による土層観察で別の遺構が両者の間に存在することを確認し、炉はみつかっていないが、検出した範囲の形態と規模から竪穴住居跡と判断した。

【その他の遺構との重複】 18号住居跡と21号住居跡と重複する。本遺構は21号住居跡より古く、18号住居跡より新しい。

【平面形】 不明。円形か。 【規模】 不明。

【埋土】 2層（第68図12・13層）からなる。黒～暗褐色シルトを主体とし、炭化物が混入する。堆積状況からみて自然堆積と推測する。

【床面・壁】 床面はIV層土が露出した面を床面とした。概ね平坦である。壁は北壁の一部のみ確認した。直立気味に立ち上がる。

【炉】 なし。21号住居跡により壊されているものと推定する。

【附属施設】 柱穴5個を確認した。配列からみて主柱穴とは考えられない。

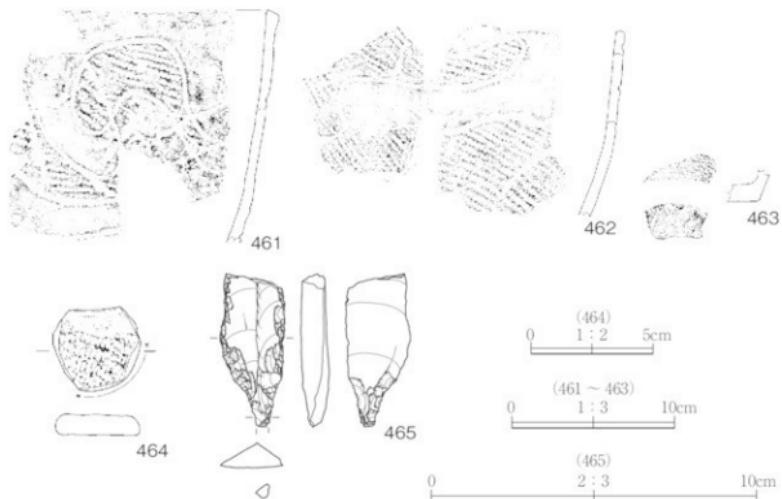
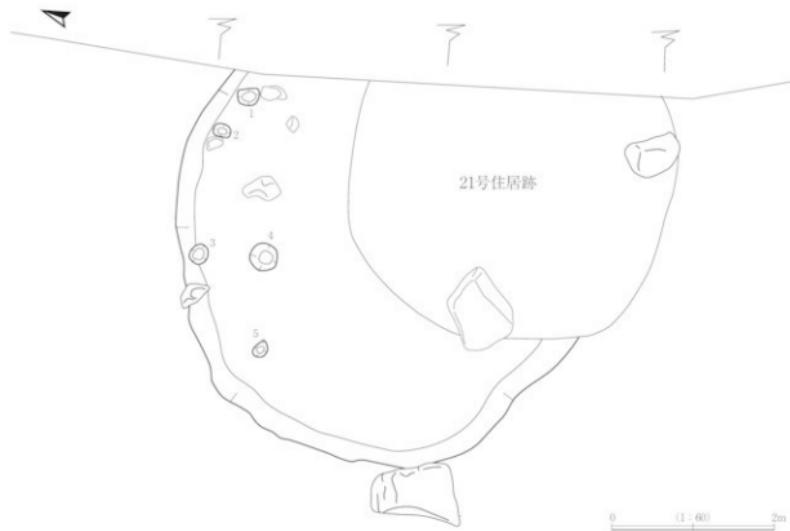
【出土遺物】 繩文土器、土製品、石器が出土している。遺構の大部分を重複する21号住居跡遺構により削平されているため、出土遺物量は少ない。

461、462は大木10式中段階である。461は口縁部片、462は胴部片で、どちらも弧状の区画文が描かれ、区画内には縄文が充填される。463は深鉢の底部片で、外面は無文、底面には木葉痕が認められる。

464は土製円盤である。他のものと比べて珍しく粗製深鉢の口縁部片を転用し、側面のうち欠損部にあたる部分のは摩滅している。

465は石錐4類で、錐部先端が欠損する。摘み部は細長く片面の両側縁に二次加工が施される。

【時期】 出土土器の中で、461・462の時期を基準とし大木10式中段階と判断した。



第74図 20号住居跡・出土遺物

21号住居跡（第75～79図、写真図版21）

【位置・検出状況】調査区北東側、II A 6lm、6 n グリッドに位置する。IV層上面で検出した。遺構の東側は調査区外に及んでいる。22号住居跡精査中に、断面による土層観察から本遺構を検出した。炉などの付属施設はないが、規模や形態から竪穴住居跡と判断した。

【その他の遺構との重複】20号住居跡、22号住居跡と重複し、本遺構が最も新しい。

【平面形】円形 【規模】長軸（500）cm・短軸（450）cm・深さ20cm

【埋土】2層（第68図7・8層）からなる。黒褐色シルトを主体とし、炭化物が混入する。堆積状況からみて自然堆積と推測する。また遺構上部には斜面崩落により堆積したと推測される土層（第68図1層）も確認した。

【床面・壁】床面はIV層が露出した面を床面とした。概ね平坦である。壁は調査区外に及ぶ東壁をのぞき全周する。ほぼ直立気味に立ち上がる。

【炉】なし。調査区外に及ぶ遺構東側に設置されている可能性はある。

【附属施設】なし。

【出土遺物】縄文土器が小片で出土している。いずれも中期後葉～末葉に比定される土器である。

【時期】出土した土器の年代から縄文時代中期後葉～末葉と判断した。

22号住居跡（第75～79図、写真図版21）

【位置・検出状況】調査区北東側、II A 6n、6oグリッドに位置する。IV層上面で検出した。遺構の東側は調査区外に及んでいる。

【その他の遺構との重複】21・23号住居跡と重複する。23号住居跡より新しく、21号住居跡より古い。

【平面形】不整な楕円形 【規模】長軸（500）cm・短軸（520）cm・深さ15cm

【埋土】3層（第68図3・4・5層）からなる。黒～暗褐色シルトを主体とし、炭化物や褐色シルトブロックが混入する。堆積状況からみて自然堆積と推測する。また本遺構上部には斜面崩落によるものと推測される土層（第68図1・2層）が確認された。

【床面・壁】床面は炉を検出した面を床面とした。概ね平坦である。壁は調査区外に及ぶ東側と21号住居跡に削平された北壁をのぞき全周する。緩やかに広がりながら立ち上がる。

【炉】複式炉である。石壠部2個と前庭部で構成され、長軸132cm、短軸60cmを測る。炉石は花崗岩を利用し偏平でふぞろいな蝶を素材とする。炉内埋土は黒褐色シルトを主体とし、住居埋土と類似する。石壠部内の使用面は床面を15cm掘り下げ構築している。手前側の石壠部には正位の埋設土器が設置されている。埋設土器の周囲を中心に強い焼成を受け被熱により赤色化している。奥側の炉石は2個のみ残存して他は抜き取り痕も確認できなかった。焼成の痕跡は認められない。また土器の底部が斜位で設置されている。炉石掘り方は確認できなかった。したがって炉石は床面に差し込んで設置したものと推定される。

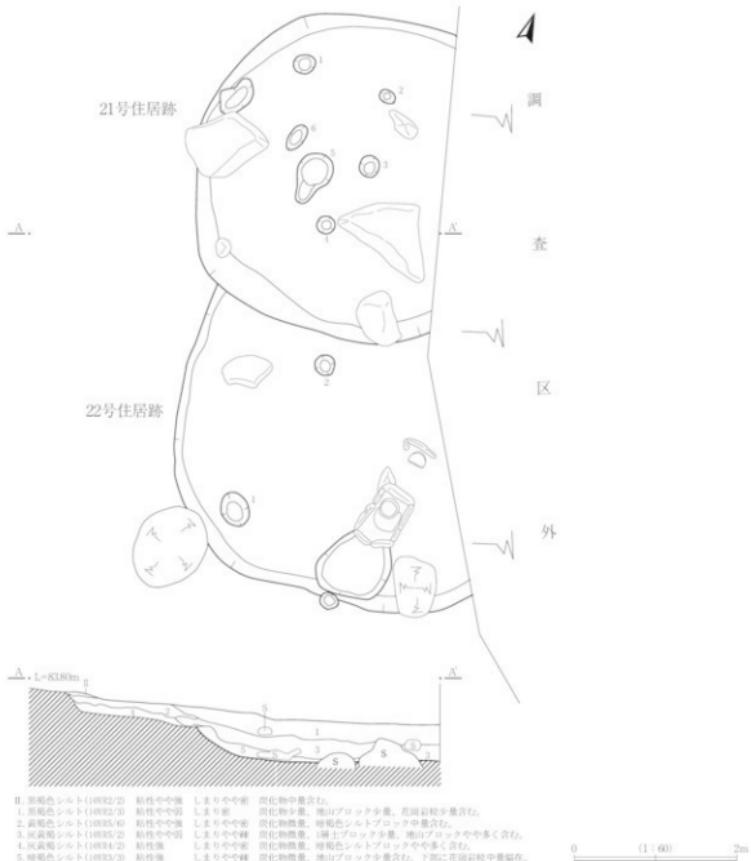
【附属施設】柱穴3個を確認した。Pit 1・2配列からみて主柱穴と考えられる。また壁外で1個（Pit 3）がみつかっている。

【出土遺物】縄文土器、土製品、石器が出土している。埋設土器以外は全て埋土中出土である。

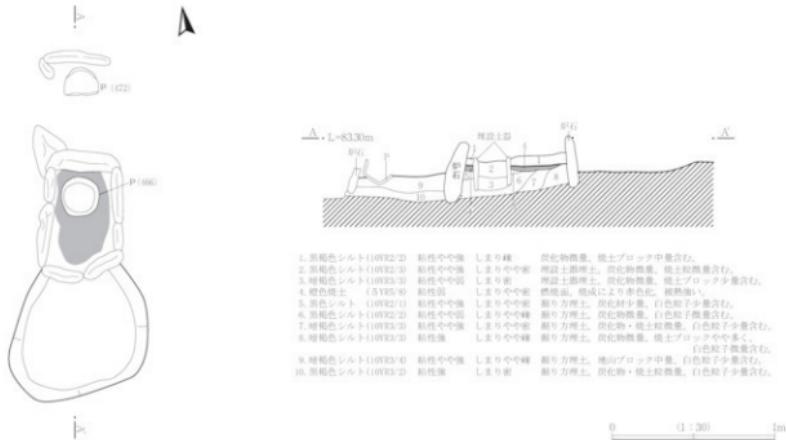
466は炉内の手前石壠部に設置された埋設土器で、口縁部から胴部が残存する。大木10式古段階とを考える。口縁部に押引き上の刺突文が横位に巡る。467、468は大木10式中段階で、468はアルファベット状の区画に縄文が充填される。469～473は粗製である。胴部半ばが膨らみ口縁部でわずかに外反

する形態が多い。472は炉の奥側石開部に設置された土器である。胴部下半から底部のみで、外へと大きく開く形態である。483、484は大木10式で、微隆帯による区画文が施文される。474~480は大木9式新段階で、楕円形区画文が描かれている。485、487~490は大木10式である。497~504は粗製の破片である。498、501、504には補修孔がある。501は補修孔を両面から穿孔しているが貫通する前にやめている。

505、506は土製円盤である。505は今回出土した土製円盤の中で最も大きいものである。どちらも縄文のみが施文される胴部片を転用し、また側面の広い範囲に摩滅している。



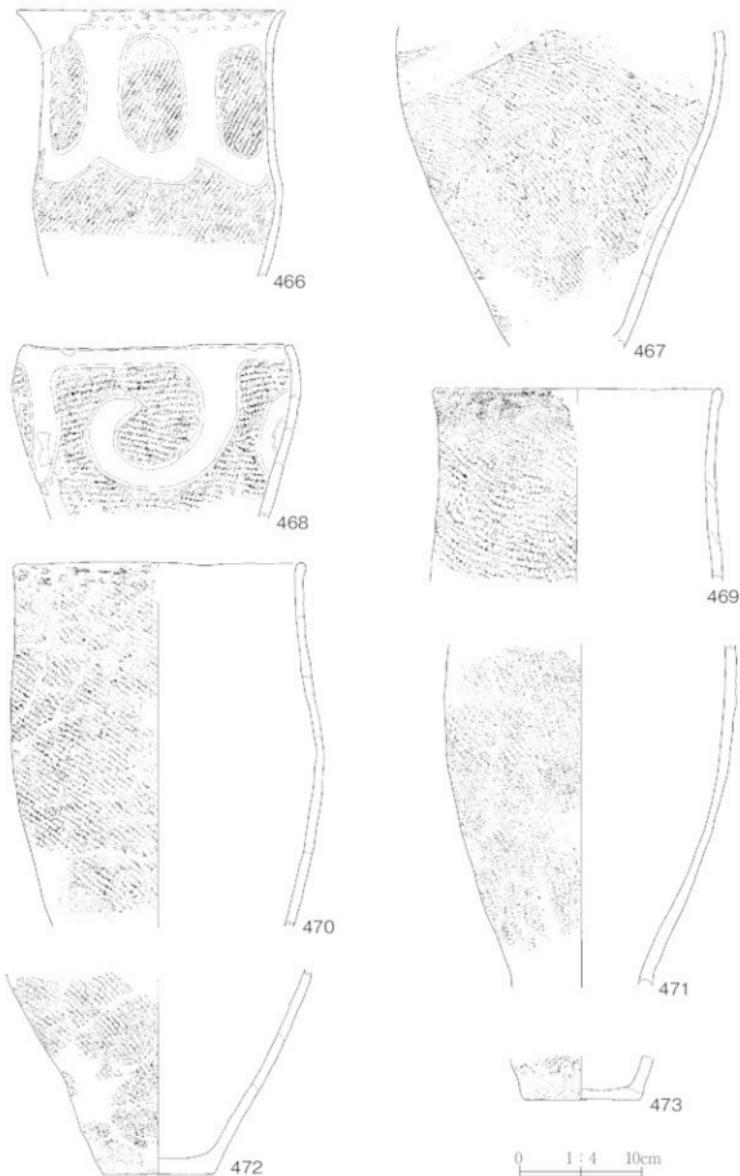
第75図 21・22号住居跡（1）



第76図 21・22号住居跡（2）

507は石錐で、比較的小型である。錐部は両面から二次加工を施すが、摘み部は片面の縁辺のみ加工する。508は不定形石器で側縁のほぼ全周、両面に二次加工を施し、刃部を作出している。509は2類の石匙で刃部は片面のみに二次加工を施し、刃部を作出している。

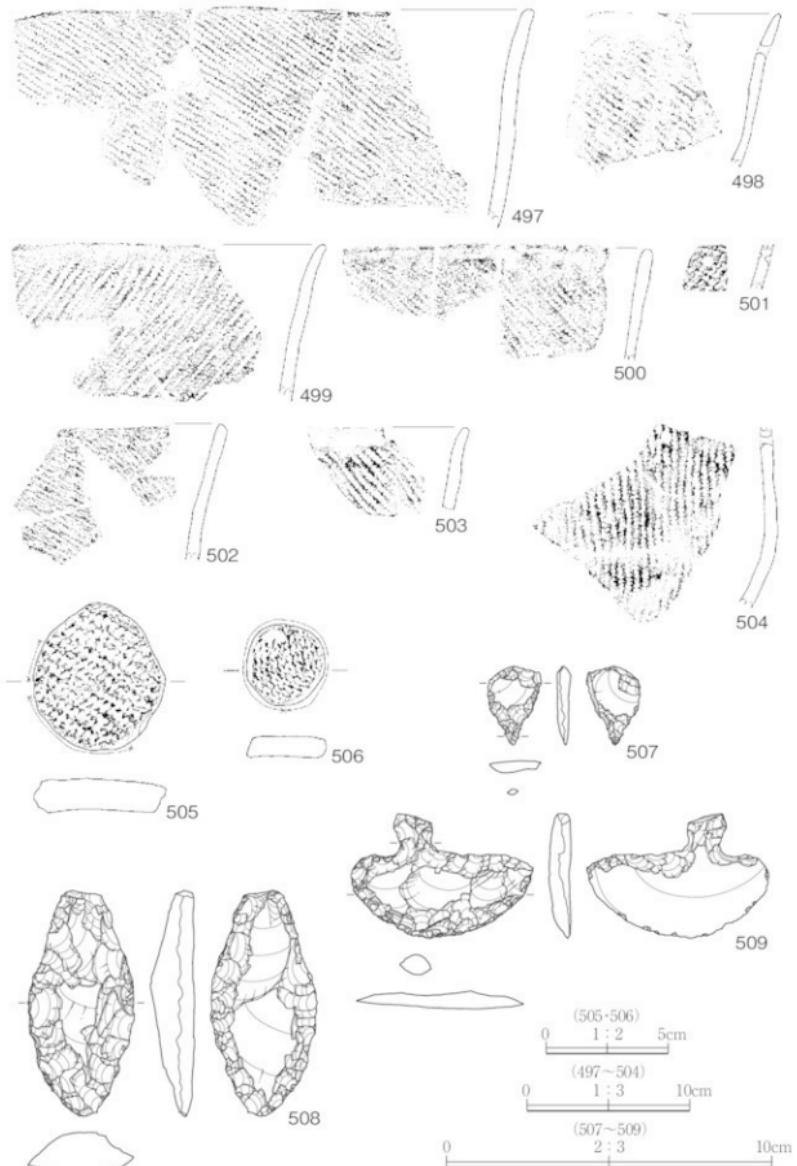
【時期】埋設土器（466）の時期から大木10式古段階と判断した。



第77図 21・22号住居跡出土遺物（1）



第78図 21・22号住居跡出土遺物（2）



第79図 21・22号住居跡出土遺物（3）

23号住居跡（第80図、写真図版21・72・111）

【位置・検出状況】調査区北東端、II A 60グリッドに位置する。IV層上面で検出した。本遺構は22号住居跡の精査中に、その南側で別の炉を検出し、本遺構と判断した。斜面の崩落により、炉のみが検出できた。

【その他の遺構との重複】22号住居跡と重複する。本遺構の方が古い。

【平面形】不明。 【規模】不明。

【埋土】崩落により消失しているが、炉上の2層（第68図10・11層）を確認した。黒褐色シルトを主体とし、炭化物や地山ブロックが混入する。自然の堆積と考えるが斜面崩落による堆積の可能性も高い。

【床面・壁】床面は炉を検出した面を床面とした。検出範囲が限られているが、概ね平坦と考える。壁は確認できなかった。

【炉】焼成による被熱痕とそれを圍む3個の炉石を検出し、残存状態は良くないが石圍炉と推定する。炉の南側には炉石の抜き取り痕が確認された。炉石は花崗岩である。炉石の内外が被熱し赤色化している。掘り方は確認した。炉の範囲に合わせて、土坑状に掘り込み、炉石を設置している。

【附属施設】炉の周辺で柱穴1個を確認した。検出できた床面の範囲外であるが、炉との位置からみて、本遺構に伴われる柱穴と推定できる。ただし主柱穴ではない。

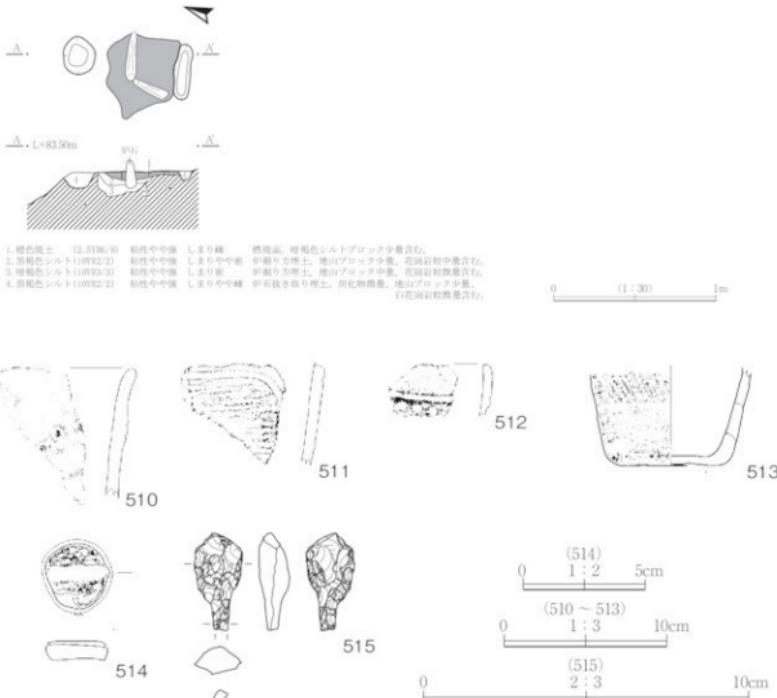
【出土遺物】縄文土器、土製品、石器が出土している。本遺構は炉とその周辺のみしか残存しておらず、したがって出土遺物が少ない。

510～512は大木10式である。510は口縁部片で弧状に竹管状工具による円形刺突文が巡る。300も口縁部片で沈線文下に刺突文が巡る。513は粗製の深鉢底部である。

514は土製円盤である。胴部片を転用しており、側面全周が摩滅している。表面にはコゲが残存する。

515は石錐で、錐部先端が欠損する。錐部、摘み部共に両面から二次加工が施される。また摘み部は厚みがあるのが特徴である。

【時期】出土土器のなかで510や511の時期から大木10式と判断した。



第80図 23号住居跡・出土遺物

24号住居跡（第81～83図、写真図版22・72・111）

【位置・検出状況】調査区北東側、IIA 4m・4n グリッドに位置する。IV層上面で検出した。斜面の崩落により、遺構上部は消失しており、床面周辺しか確認できなかった。

【その他の遺構との重複】18～22号住居跡と重複する。本遺構が最も古い。

【平面形】不整な円形 【規模】長軸(545)cm・短軸(515)cm・深さ18cm

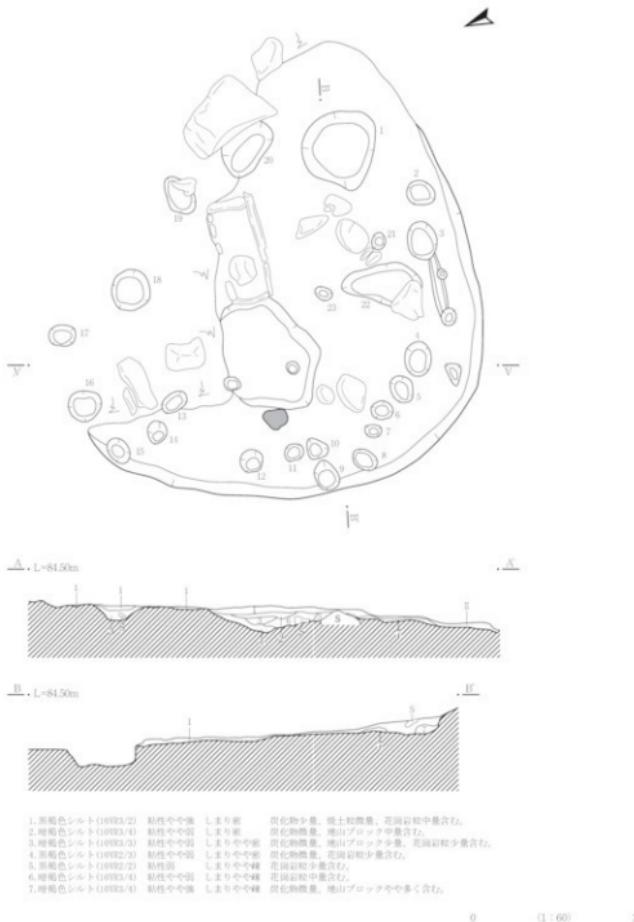
【埋土】斜面の崩落による削平で遺構上部が消失しているが、7層を確認した。黒褐色シルトを主体とし、炭化物や地山ブロックが混入する。堆積状況からみて自然堆積と推測する。

【床面・壁】床面は炉を検出した面を床面とした。概ね平坦である。壁は北西～南壁のみ確認した。ほぼ直立気味に立ち上がる。

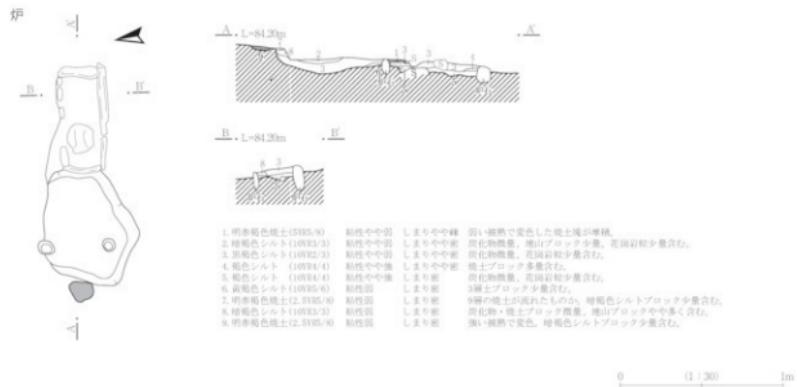
【炉】複式炉である。長方形の石開部と前庭部で構成され、長軸132cm、短軸30cmを測る。炉石は花崗岩を利用し偏平だがふぞろいな砾を素材とする。埋土は黒褐色シルトを主体とし、住居埋土と類似する。石開部の使用面は床面をわずかに掘り下げ構築されているが、被熱の痕跡はあまり見受けられず、焼成による赤色化ではなく、埋土に焼土ブロックがわずかに混入するのみである。掘り方を確認し

た。炉石を直接床面に差し込んで構築している。前庭部は床面をわずかに掘り込むのみで構築し、また硬化面は見受けられない。

〔附属施設〕 柱穴23個を確認した。うち5個（1・5・13・18・22）を配列からみて主柱穴と考え、消失した東側床面に柱穴があれば6本柱と推測する。他の柱穴は壁際に配されるものが多い。



第81図 24号住居跡 (1)



第82図 24号住居跡（2）

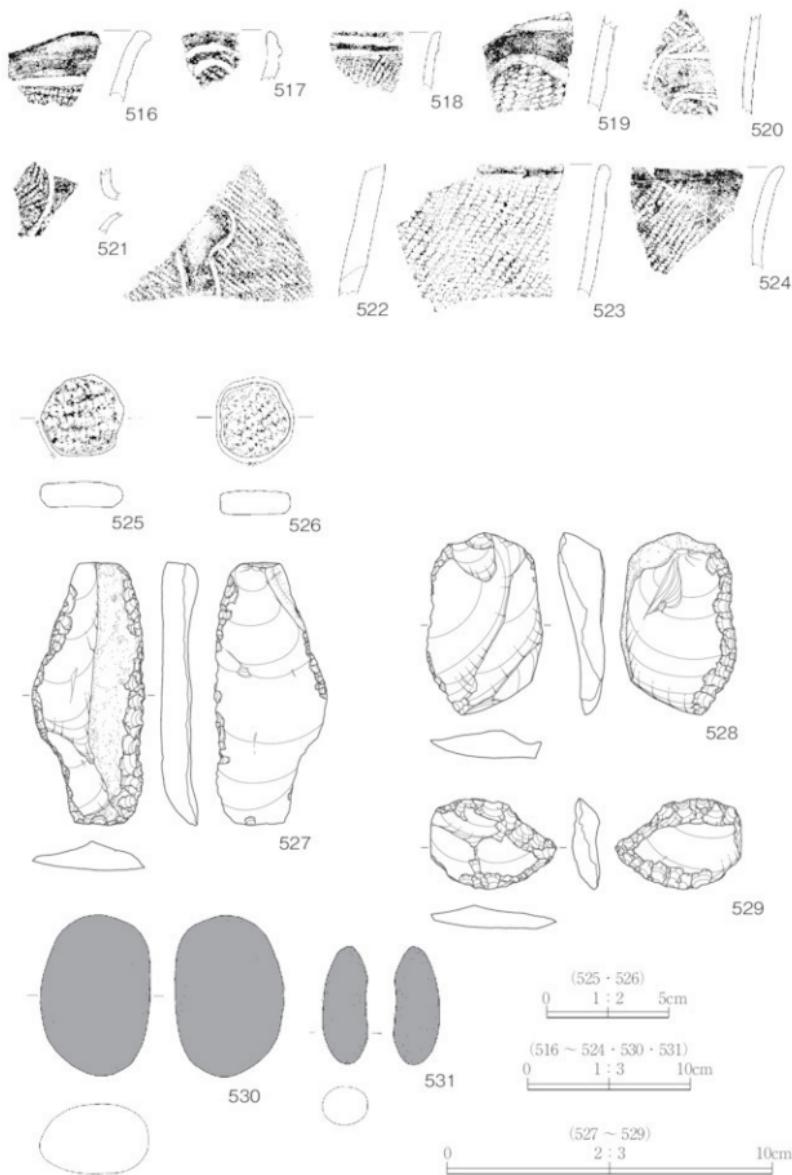
【出土遺物】縄文土器、土製品、石器が出土している。削平により遺構上部を消失しているため、出土する遺物は概ね床面上から埋土下位の一部から出土したもの、また柱穴内から出土したもののみである。

516~522は大木10式古～新段階である。517、519は弧状の区画文、520はクランク状の区画文が施文される。521は注口土器の注口部である。531、532は粗製深鉢の口縁部片である。

525、526は土製円盤である。縄文のみが施文される側部片を転用する。525は側面の一部、526は側面全周、摩滅する。

527~529は不定形石器である。527・528は細長のフレイクを素材とし、縁辺の片面に二次加工を施す。529は横長のフレイクを素材とし、両面から二次加工を施す。530、531は敲磨器類である。どちらも表面全体に磨痕が見受けられる。

【時期】出土した土器のなかで516~522の時期を基準とし縄文時代中期後葉～末葉と判断した。



第83図 24号住居跡出土遺物

25号住居跡（第84・85図、写真図版22・23）

【位置・検出状況】調査区北東側、II B 40グリッドに位置する。IV層上面で検出した。本遺構は周開地も含め、水田地造成に伴う後世の削平により地山ごと消失しており、埋設土器とその周辺に並ぶ柱穴のみで竪穴住居跡と判断した。

【その他の遺構との重複】不明。24号住居跡と重複している可能性がある。

【平面形】不明。【規模】不明。

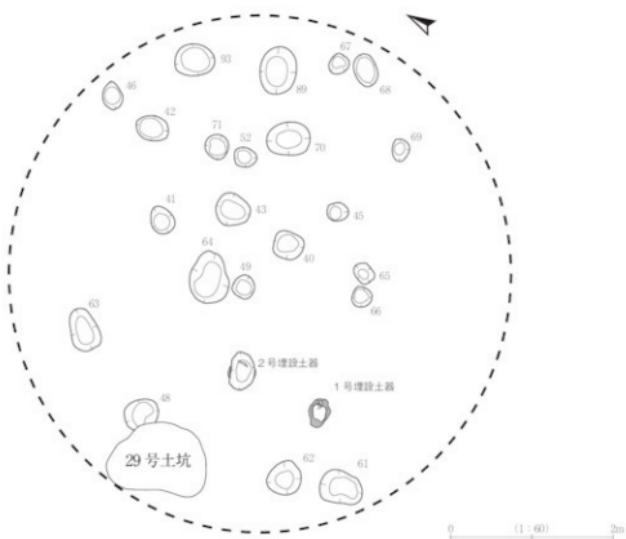
【埋土】後世の削平により消失しており、確認できなかった。

【床面・壁】後世の削平により消失しているものと考えられる。壁も消失している。

【炉】不明。

【附属施設】埋設土器2個（1号・2号埋設土器）と柱穴22個を確認した。

埋設土器はどちらも上部に削平を受けており、非常に残りの悪い状態である。1号埋設土器は深鉢の胴部下半から底部で、斜位の状態で埋設されている。土器の周辺は広く焼成を受け、被熱により、赤色化している。炉の可能性もあるが、焼成は弱く、どちらとも判断が困難である。掘り方は規模



第84図 25号住居跡（1）

25×24cmを測り、深さは20cmでは土器の大きさに掘られ設置されたことが窺える。

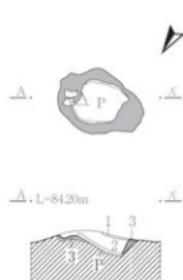
2号埋設土器は深鉢の胴部片とその掘り方のみしかみつかっていない。掘り方の規模・形態、また土器片の出土状態から1号埋設土器と類似するので、2号埋設土器とした。土器片は掘り方の底面にわずかに差し込まれて出土しており土器自体は正位の状態で埋設されていたと推測する。掘り方は規模32×26cmを測り、深さは15cmで概ね土器の大きさに掘られ、設置されたものと推定する。

また1・2号埋設土器の周辺には、後述する柱穴状土坑が特に密集する傾向が受けられる。これらのうち、22個については本遺構に伴う柱穴と考え、第84図に示した。これらの柱穴は埋設土器の周囲、訳6mの範囲、主に埋設土器の東側に分布する。ただし、その配置状況からは本遺構の柱配置等を窺うことは難しい。柱穴は径30~50cmを測り、概ね埋土は黒褐色シルトであった。遺物の混乳は見受けられない。

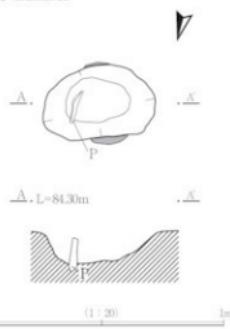
【出土遺物】埋設土器（532）と埋設土器内から出土した土器片（533）のみである。どちらも粗製である。532は口縁部と底面を欠損する。

【時期】埋設土器の時期から縄文時代中期後葉～末葉と推定する。

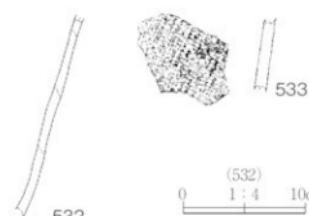
1号埋設土器



2号埋設土器



1. 黒褐色シルト(10B3/2) 剥離や中空 しまりやや密 腐食物微量、燒土粒微量含む。
2. 黑褐色シルト(10B3/3) 剥離や中空 しまりやや密 腐食物微量、花崗岩粒少含む。
3. 未確認焼土 (5B4/6) 剥離弱 しまりやや密 烧山土が被熱により赤色化している、被熱弱い。



第85図 25号住居跡(2)・出土遺物

26号住居跡（第86～89図、写真図版23）

【位置・検出状況】調査区西端中央側 I B20a、20bグリッド内に位置する。IV層上面で検出した。なお本遺構は立地する斜面地の崩落流出により、遺構の北東端と南側の一部は消失している。

【その他の遺構との重複】なし。

【平面形】不整な楕円形 【規模】長軸540cm・短軸578cm・深さ30cm

【埋土】6層（第86図1～6層）からなる。黒褐色シルトを主体とし、炭化物や地山ブロック、また焼土粒の混入が確認された。埋土の堆積は自然堆積と考えるが、斜面の上方（北）から下方（南）へと流れるような状況で堆積しており、所謂「レンズ堆積」ではない。住居廃絶後に起こったと想定される斜面の崩落により、遺構の壁ごと流れている可能性が高い。

【床面・壁】床面は炉を検出した面を床面とした。概ね平坦である。壁は消失した北東壁、南壁を除き残存する。緩やかに広がりながら立ち上がる。

【炉】複式炉である。石開部3個と前庭部で構成され、長軸310cm・短軸90cmを測る。炉石は花崗岩を利用し偏平だがふぞろいな礫を素材とする。3個の石開部は長軸方向がわずかにずれており、また炉の奥の浅い掘り込みが炉石を設置した掘り方の可能性があることから、炉は一度作り変えられている可能性がある。

炉内の埋土は黒褐色シルト主体とするが、使用面の約5cm上で強い被熱のために赤色化した焼土の堆積層を確認している。炉の使用面は石開部によって高さが異なっており、奥側の石開部は床面から7cmとやや浅め掘り込まれており、ほかの2つの石開部は床面から15cmと比較的深い。石開部内の被熱は弱く、どの使用面も焼土の広がりは認められない。

真ん中の石開部は横長の長方形を呈し、右脇には埋設土器が横位の状態で設置されている。炉の掘り方を確認した。炉の状態、規模に合わせて掘り込んだ上、炉石は設置されている。前庭部は不整形で掘り込みも浅い。また南側は住居の壁につながっている。

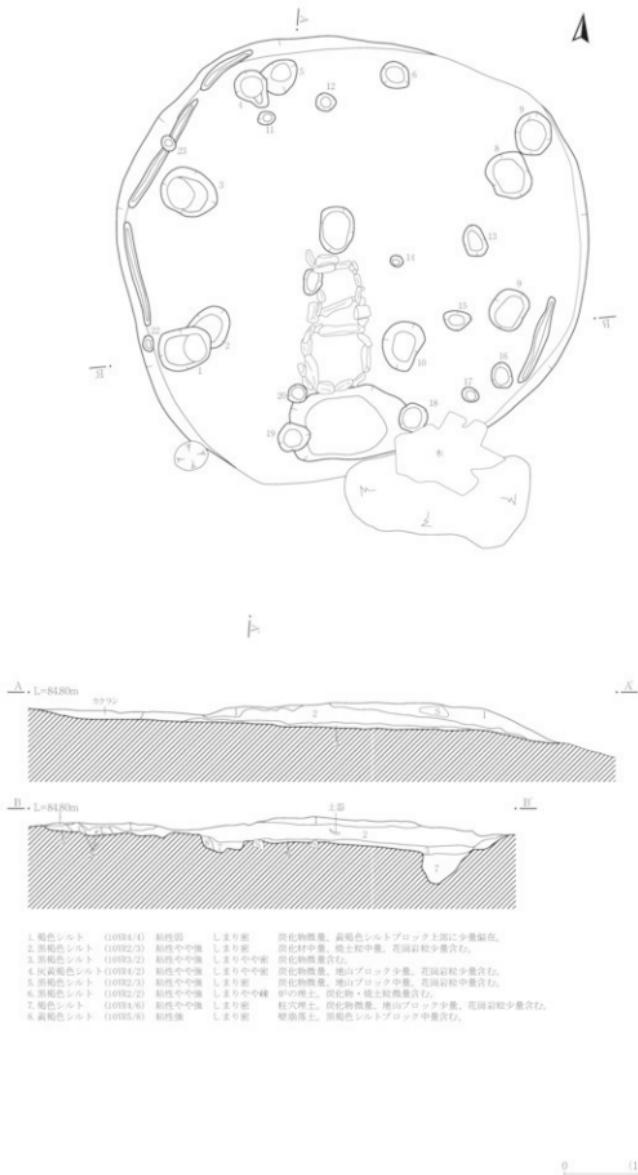
【附属施設】柱穴20個を確認した。そのうち6個（Pit 1・3・5・6・8・9）は主柱穴と考える。他の柱穴もその周辺に配されており、本遺構は建て替えがあった可能性がある。また東・西壁際で部分的に壁溝が見受けられる。

【出土遺物】縄文土器、石器が出土している。遺構埋土から出土するものは少なく、炉内からは比較的多く出土している。

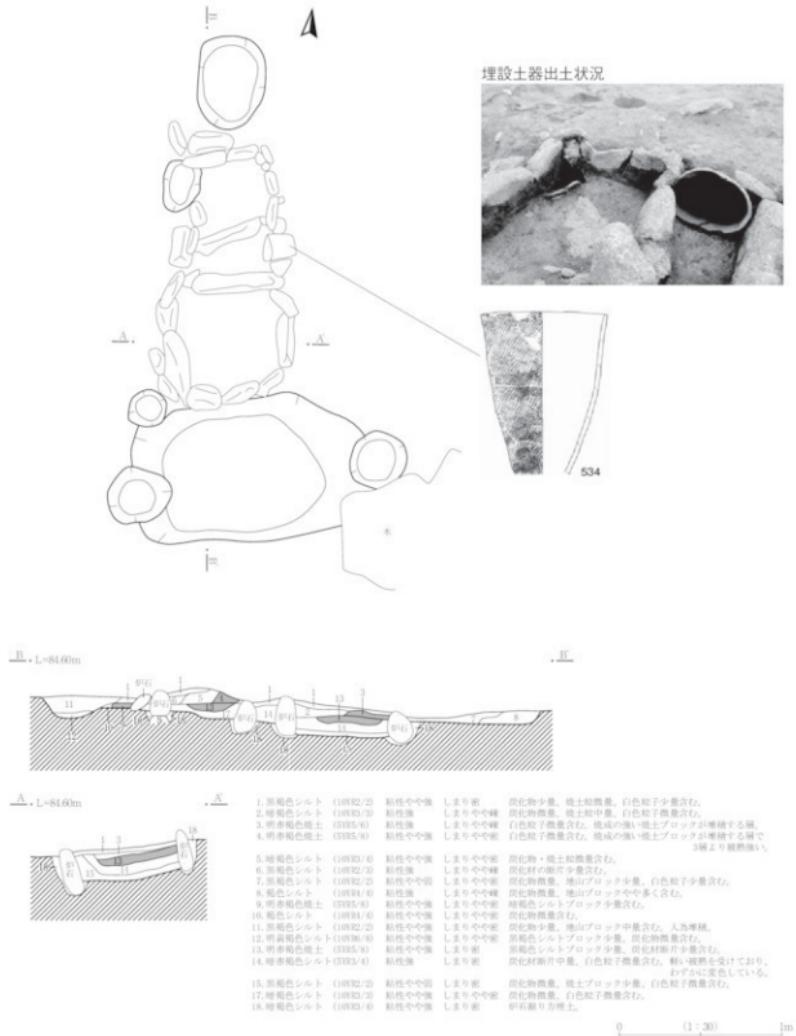
534は炉の埋設土器である。外へと聞く形態の粗製で、底面以外は残存する。535は炉の石開部内から出土した粗製で、口縁部以外は残存する。536～538は埋土中から出土している。537は深鉢の胴部片で微隆帯による弧状の区画文が見受けられる。また538は深鉢の胴部片で、沈線による弧状の区画文が描かれ、区画内には縄文が充填される。いずれも大木10式中段階である。539は深鉢の口縁部片で、口縁部は無文、胴部は縄文が施文される粗製である。

540は1類の石匙である。刃部は片面からのみ二次加工を施し刃部を作出している。541は磨製石斧である。小型で刃部が一部欠けているが、概ね完形である。542は敲磨器類で偏平な楕円形の礫を素材とし、両面に磨痕が認められる。543～545は軽石製石製品である。543は偏平な円形、544は厚みのある楕円形、545は偏平な楕円形に整形されている。

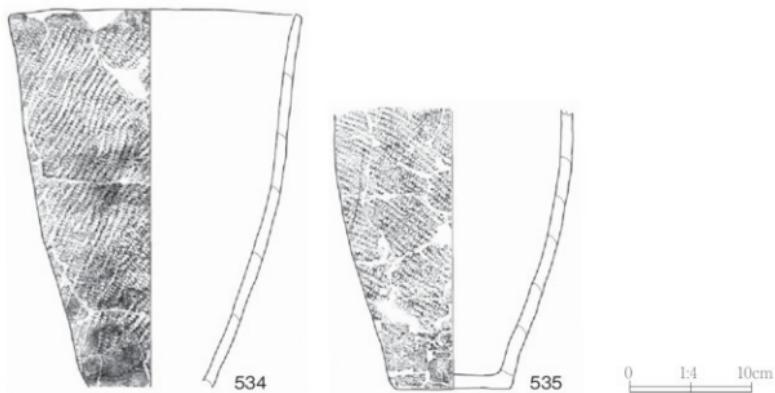
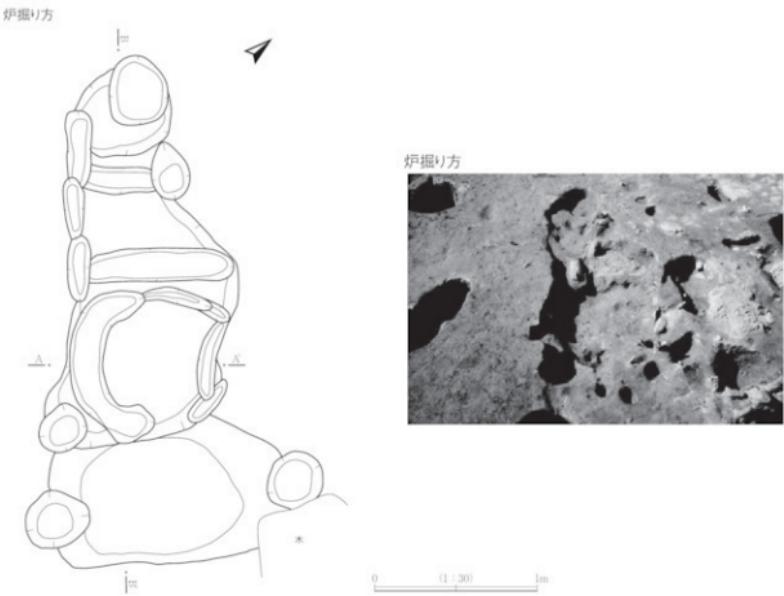
【時期】遺構埋土から出土した土器（536～538）の時期から大木10式中段階と判断した。



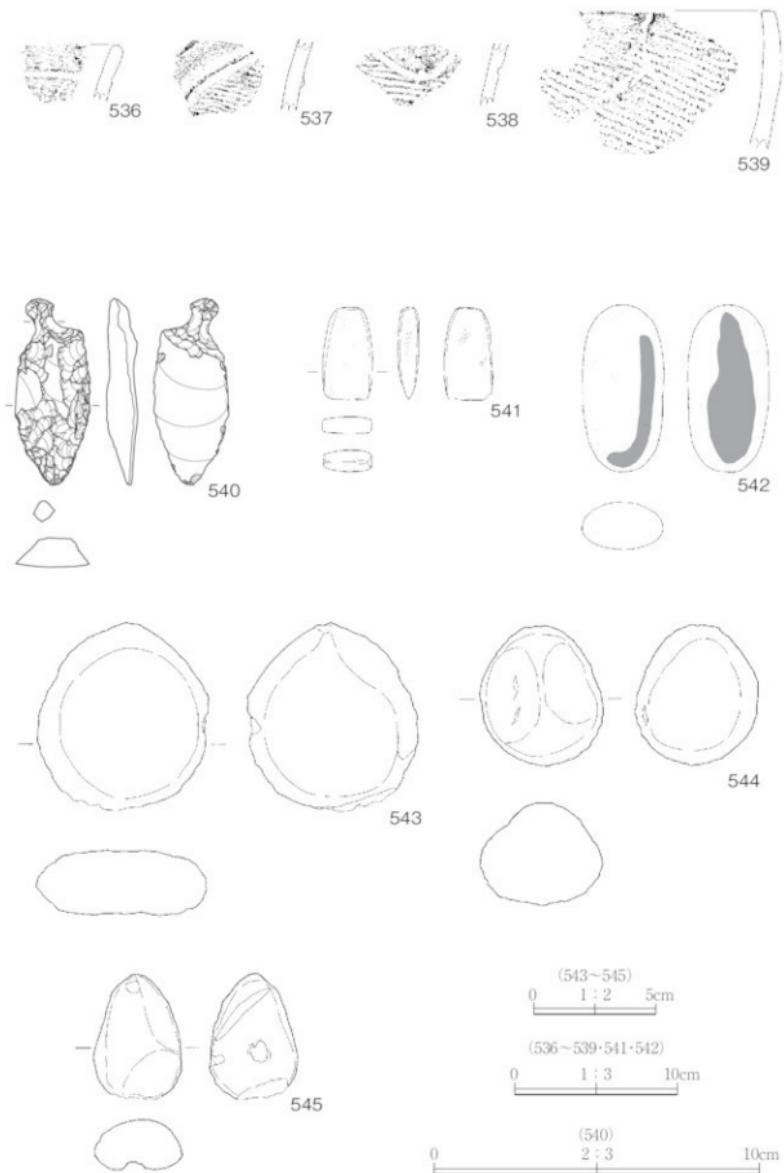
第86図 26号住居跡（1）



第87図 26号住居跡（2）



第88図 26号住居跡（3）・出土遺物（1）



第89図 26号住居跡出土遺物（2）

27号住居跡（第90・91図、写真図版24・73・111）

【位置・検出状況】 調査区西端ほぼ中央、IB19b、19cグリッドに位置する。IV層上面で検出した。本遺構の半分以上は調査区外に及んでいる。なお斜面崩落によって本遺構の東側一部は消失しており、また北壁や床面上に大きな礫が点在する。

【その他の遺構との重複】なし。

【平面形】不整な円形か。 【規模】長軸（370）cm・短軸（362）cm・深さ21cm

【埋土】3層からなる。黒褐色シルトを主体とし、炭化物や花崗岩粒が混入する。堆積状況から自然堆積と推測する。

【床面・壁】炉を検出した面を床面とした。概ね平坦であるが、わずかに南へと傾斜する。壁は北壁の一部のみ確認した。やや直立気味に立ち上がる。なお東壁は斜面の崩落により消失したものと推定する。

【炉】一部調査区外に及んでいるが、検出できた範囲から石閉部2個と前庭部で構成される複式炉と推測する。長軸は検出できた範囲で147cm、短軸は83cmを測る。炉石は花崗岩を利用し、大きさも形態もふぞろいな礫を素材としている。

炉内の埋土は黒褐色シルトを主体とし、焼土ブロックが比較的多く混入する。炉の使用面は床面よりも5cmほど掘り下げて構築している。石閉部内の被熱は弱いが、図示していないが使用面はわずかに赤色化している。

炉の掘り方を確認した。炉の規模よりわずかに大きく掘り込み炉石を設置している。深さは使用面より下には掘り下げてない。

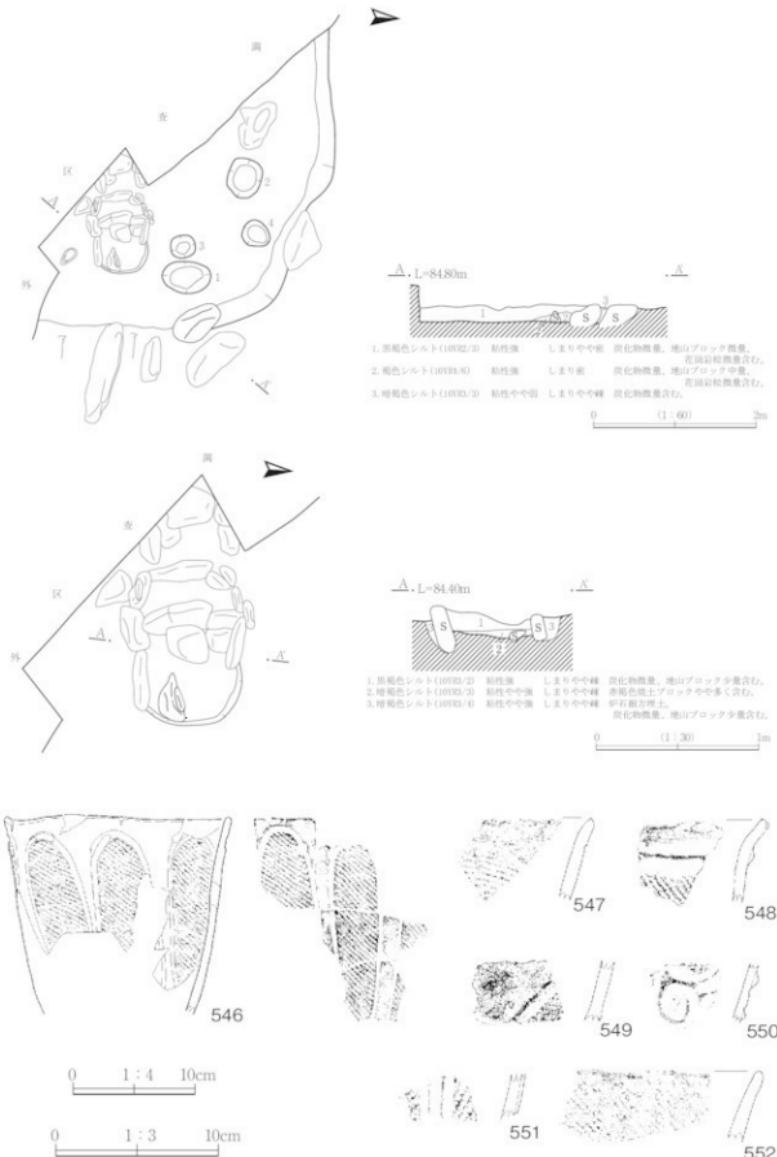
前庭部は南側の脇に1個礫を設置し、石閉部とほぼ同規模の円形を呈する。深さは床面から3～5cm程度と浅く、硬化面は見受けられなかった。

【附属施設】柱穴4個を確認した。うち2個（Pit 1・2）は主柱穴と考えている。

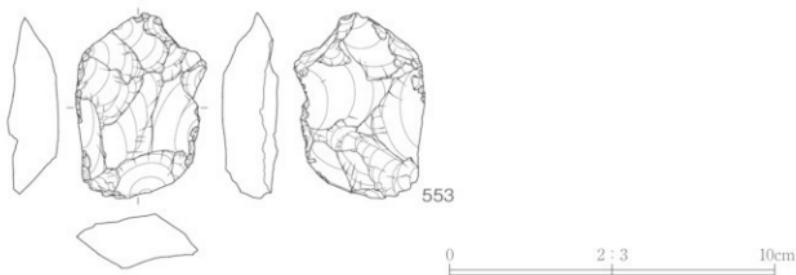
【出土遺物】本遺構の半分は調査区外のため出土量は少ないが、縄文土器、石器が出土している。概ね埋土中出土である。

546は柱穴内から出土した。大木9式新段階である。接合部は見つからなかったが、大型の破片があり、それには2個一対の補修孔が口縁部に見受けられる。548、549は大木10式古段階と判断した。550、551は大木8b～9式古段階である。552は粗製深鉢の口縁部片である。553は楔形石器である。上下左右の四方向から打撃を加えられ剥離している。

【時期】柱穴内から出土した土器（546）の時期から大木9式新段階と判断した。（須原）



第90図 27号住居跡・出土遺物（1）



第91図 27号住居跡出土遺物（2）

28号住居跡（第92～95図、写真図版24・25・73・74・111）

【位置・検出状況】 調査区北西端、IB20d、21dグリッド内に位置する。IV層上面で検出した。

【その他の遺構との重複】 なし。

【平面形】 不整な楕円形 【規模】 長軸655cm・短軸560cm・深さ25cm

【埋土】 3層からなる。暗褐色シルトを主体とし、炭化物が混入する。堆積状況から自然堆積と推測するが、西から東へ流れるような堆積がみられ、住居廃絶後に起こったと想定される斜面の崩落の影響を受けている可能性がある。

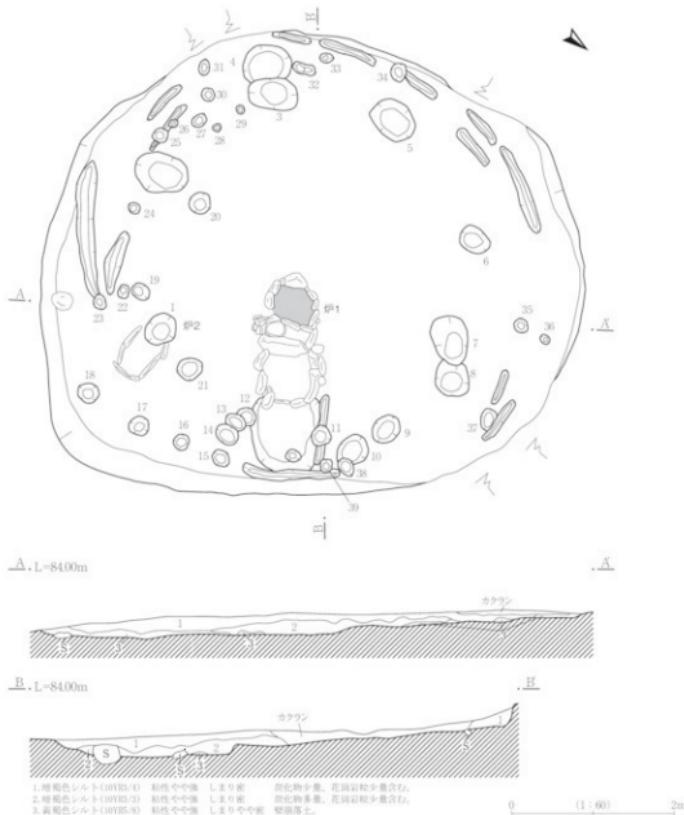
【床面・壁】 床面は炉を検出した面とした。概ね平坦であるが、東側（谷側）への傾斜がみられる。壁はほとんど失われているが残存部においては床から緩やかに立ち上がる。住居廃絶後、斜面の崩落などにより失われたものと考えられる。

【炉】 2つ確認された。炉1は複式炉である。石壠部3個と前庭部で構成され、長軸250cm、短軸76cmを測る。炉石は花崗岩を用いており、被熱の影響から風化が激しい。炉内埋土は主体となる暗褐色シルト層の他、前庭部側石壠部の使用面の約2cm上で現地性ではない赤色化した焼土の堆積層を確認した。炉の使用面は石壠部によって高さが異なり、奥側の石壠部が最も浅く床面から4cm掘り下げられていた。炉床は赤色化が激しい焼土に覆されている。炉石は小さめで掘り方が浅い。真ん中の石壠部は横長の長方形を呈し、使用面は床面から12cm掘り下げられ、左側には土器が斜位に設置されている。前庭部側の石壠部の使用面は床面から26cm掘り下げられ、正方形を呈し最も広い。真ん中と前庭部側の石壠部の使用面は奥側の石壠部の使用面に比べると被熱の影響が小さく赤色化はわずかである。前庭部は不整形で、床面には硬化面が認められた。口径20cm、深さ15cmの穴（Pit22）も前庭部から確認された。掘り方は大きく掘られ、掘り方土を多量に用いて炉石を設置したことがうかがえる。炉2は石壠と使用面の一部が柱穴（Pit1）により壊されおり、28号住居跡のものではないと考えられるが重複する住居跡は確認されなかった。長軸92cm、短軸50cmを測る。埋土は暗褐色シルトを主体とし、炭化物と焼土粒が混入する。使用面はわずかに焼土化している。炉石は全て花崗岩である。

【付属施設】 柱穴39個を確認した。そのうち8個（Pit 1～8）は主柱穴と考える。壁溝が部分的に二重に確認された。

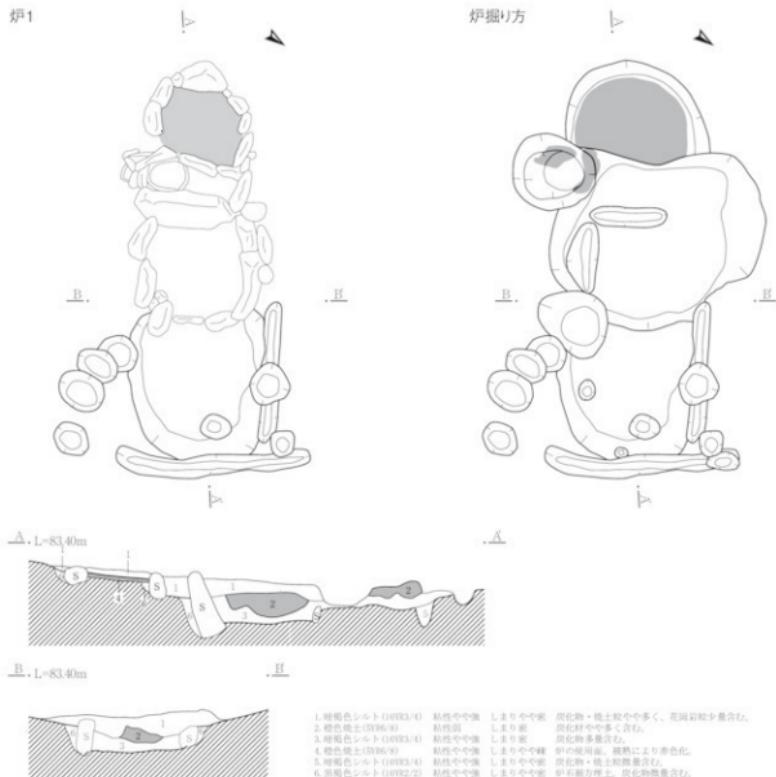
【出土遺物】縄文土器、石器が出土している。遺構上部が削平により消失しており、出土遺物は概ね埋土下位から床面上である。

554は炉の周辺床面上から出土した大木10式新段階の深鉢で、胴中央から底面までが残存する。隆帯による弧状の区画文が施文される。555は柱穴から出土している。小型であるが554と同様の紋様であり、大木10式新段階と判断した。556～562は粗製である。557は胴部中央に1箇所補修孔を確認した。563～566は大木9式新段階である。567～569は大木10式中～新段階である。567、568は微隆帯に



第92図 28号住居跡 (1)

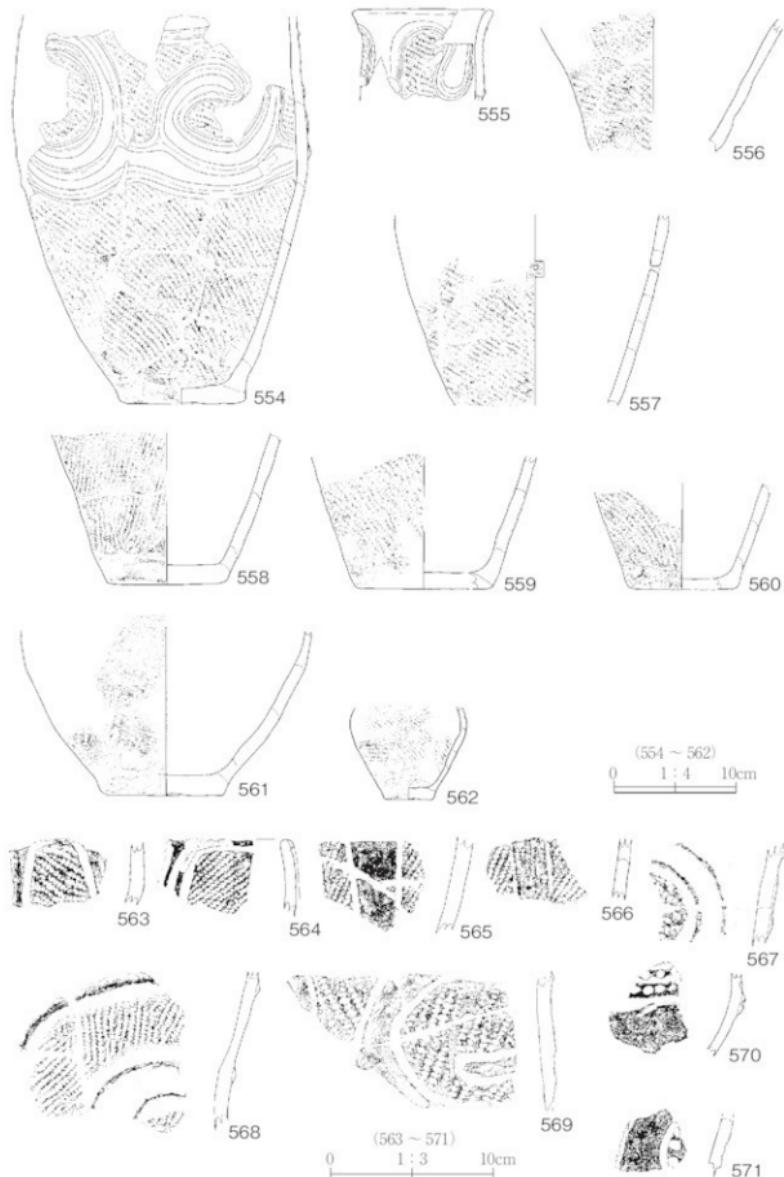
炉1



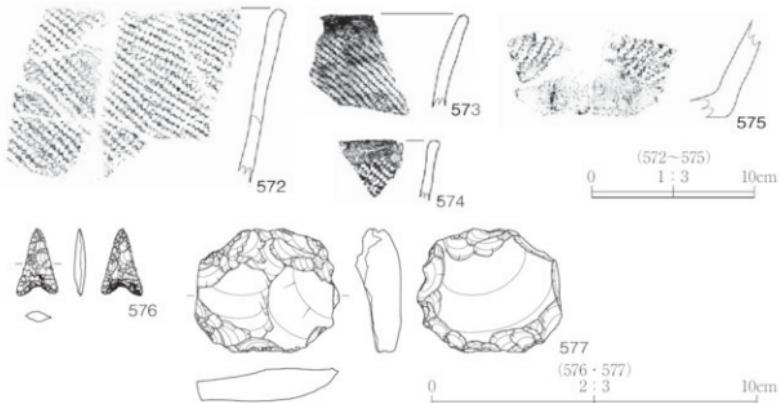
炉2



第93図 28号住居跡 (2)



第94図 28号住居跡出土遺物（1）



第95図 28号住居跡出土遺物（2）

よる区画文が施文される。570、571は大木10式の範疇に収まる土器か。隆帯や区画文内に棒状工具による刺突文が巡る。572～575は粗製である。

576は石錐で1類である。末端の片面にはアスファルトの付着が確認できた。577は不定形石器である。やや丸味のあるフレイクを素材とし、側縁の広い範囲の両面からやや粗い二次加工を施し、刃部を作出している。

【時期】炉周辺の床面上から出土した土器（554）の時期を基準とし、大木10式新段階と判断した。

29号住居跡（第96～101図、写真図版74～76・111・112）

【位置・検出状況】調査区南西側、I B2d、22eグリッドに位置する。IV層上面で検出した。重複する30号住居跡により東側を大きく消失する。

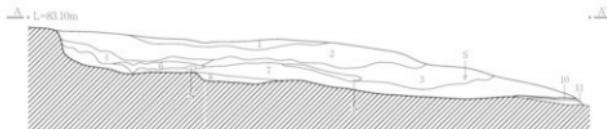
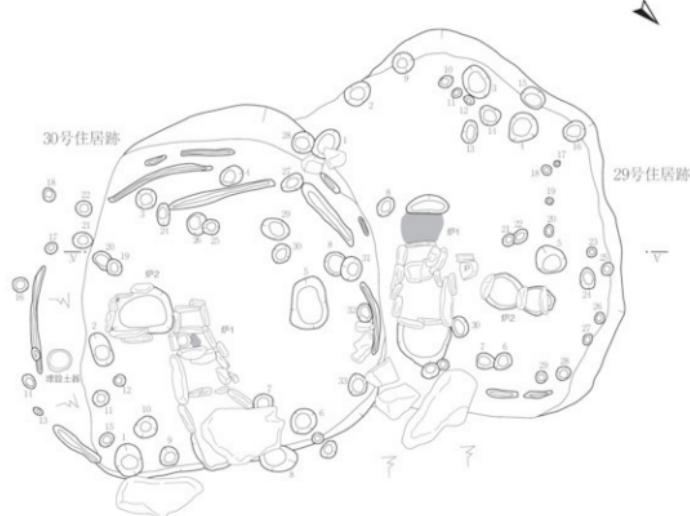
【その他の遺構との重複】30号住居跡と重複し、本遺構の方が古い。

【平面形】不整な楕円形 【規模】長軸（500）、短軸（430）、深さ50cm

【埋土】3層からなる。黒褐色シルトを主体とし、炭化物が混入する。堆積状況から自然堆積と推測するが、西から東へ流れるような堆積がみられる。所謂「レンズ堆積」ではない。住居廃絶後に起こったと想定される斜面崩落の影響を受けている可能性がある。

【床面・壁】床面は炉を検出した面を床面とした。概ね平坦である。壁は30号住居跡により削平され、東壁を除き全周する。直立気味である。

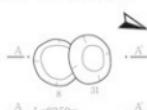
【炉】2つ確認された。炉1は複式炉である。石圓部3個（奥側は炉石が抜き取られ、使用面のみ）と前庭部で構成され、長軸220cm、短軸68cmを測る。炉石は1つ（炉石b）を除き花崗岩を用いている。炉内埋土は黒褐色シルトを主体とし、住居埋土と類似する。炉の使用面は石圓部によって高さが異なっている。奥側の石圓部の使用面は床面と同じレベルであり、掘り込んだ形跡が認められなかった。使用面は赤色化が激しく焼土化している。真ん中の石圓部は床面から10cm掘り下げられ横長の長方形を呈している。前庭部側の石圓部の使用面は正方形に近く最も広い。使用面は床面から16cm



- | | | | |
|--------------|-----------|-----------------|-----------------------|
| 1. 黒色シルト | (1002/1) | 粘性や少弱
しまり硬 | Ⅱ崩壊土。 |
| 2. 黒褐色シルト | (1002/2) | 粘性や少弱
しまりや中硬 | 花崗岩粉少量含む。 |
| 3. 黑褐色土 | (1002/3) | 粘性や少弱
しまりや中硬 | 花崗岩粉少量含む。 |
| 4. 明る褐色地上 | (5102/4) | 粘性泥 | 地上ブロックが埋植する層。炭化物少量含む。 |
| 5. にじみ黄褐色シルト | (1002/5) | 粘性や少弱
しまりや中硬 | 花崗岩粉少量含む。 |
| 6. 暗褐色シルト | (1002/6) | 粘性泥 | 土壌化物多量含む。 |
| 7. 暗褐色シルト | (1002/7) | 粘性や少弱
しまりや中硬 | 花崗岩粉少量含む。 |
| 8. 黑褐色シルト | (1002/8) | 粘性や少弱
しまりや中硬 | Ⅲ崩壊土。塊山ブロック中少量含む。 |
| 10. 黄褐色シルト | (1002/10) | 粘性や少弱
しまりや中硬 | 黄色い色の土壌化物ブロック多量含む。 |
| 11. 暗褐色シルト | (1002/11) | 粘性や少弱
しまりや中硬 | 花崗岩粉少量含む。 |

0 (1:60) 2m

柱穴 8・31重複関係



1. 増褐色シルト(1003/1) 粘性や少弱 しまりや中硬 30号住居跡21壁土。炭化物微量含む。

2. 増褐色シルト(1003/2) 粘性や少弱 しまり硬 29号住居跡79理土。塊山ブロック含む。

0 (1:30) 1m

第96図 29・30号住居跡重複関係



第97図 29号住居跡（1）

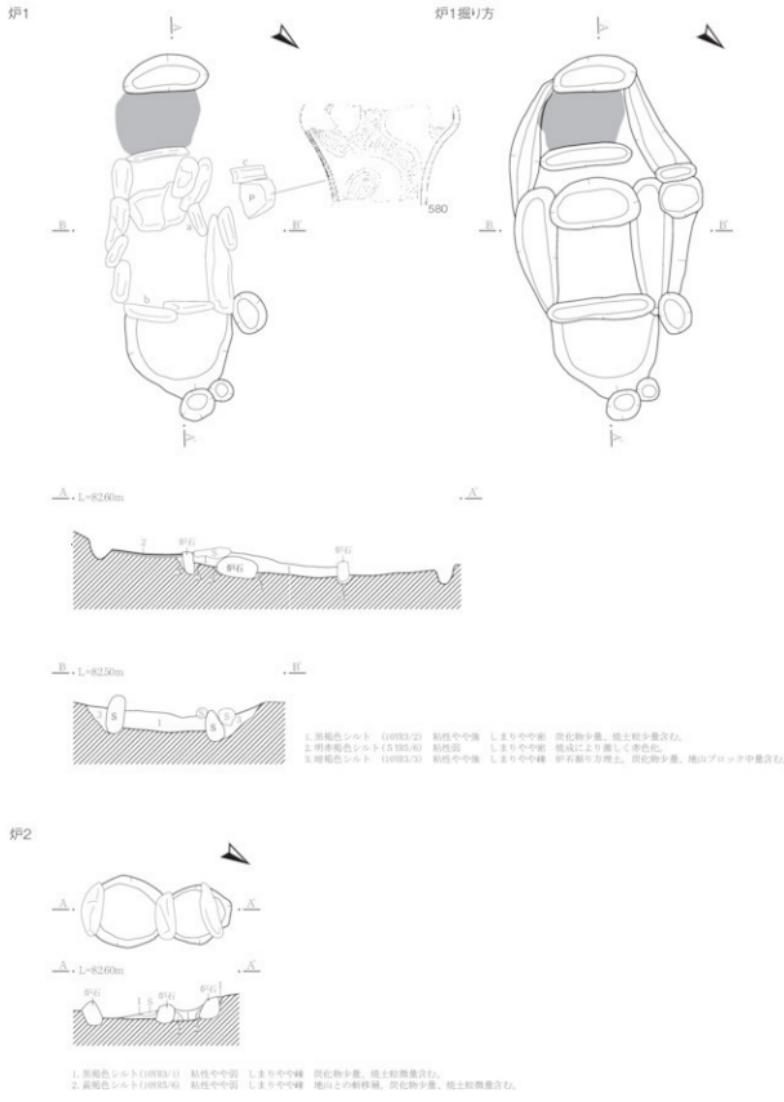
掘り下げられている。真ん中と前庭部側の石圓部の使用面は被熱が小さくわずかに赤色化している。掘り方は炉より大きく掘り込み、掘り方土を埋めながら、炉石を設置していったものと推測される。炉石aと埋設土器(P)に隣接する石(c)は接合することが確認された。炉石bのみ石質は緑色凝灰岩であり、その他は全て花崗岩であった。

炉2は炉の長軸方向に平行する石のみが抜き取られた状態で検出された。石圓部は2個あり、長軸92cm、短軸46cmを測る。前庭部は確認されなかった。埋土は黒褐色シルトを主体とし、使用面は床から4cmほど掘り下げて構築している。使用面はわずかに赤色化している。

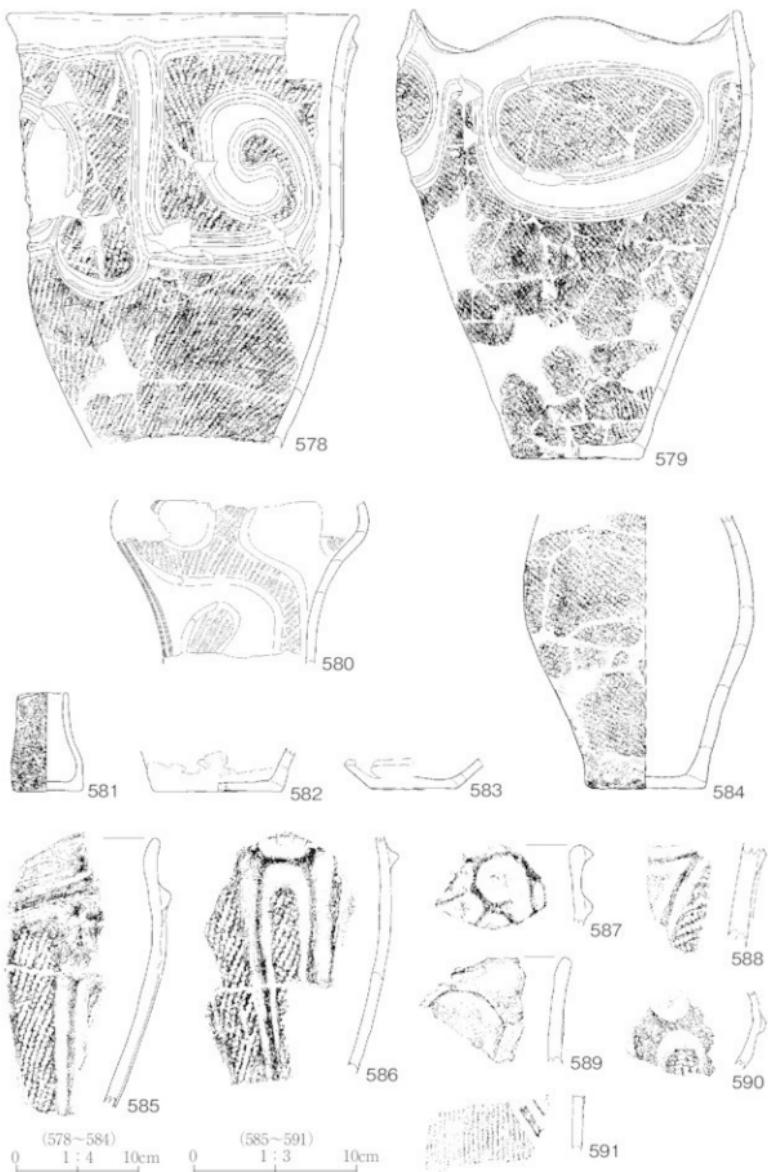
【付属施設】柱穴29個を確認した。うち6個（Pit 1～6）は配列からみて主柱穴と考えられる。

【出土遺物】縄文土器、土製品、石器が出土している。炉周辺や床面周辺では大木10式古段階の土器がまとまって出土しているが、埋土中は大木9式も混在している。

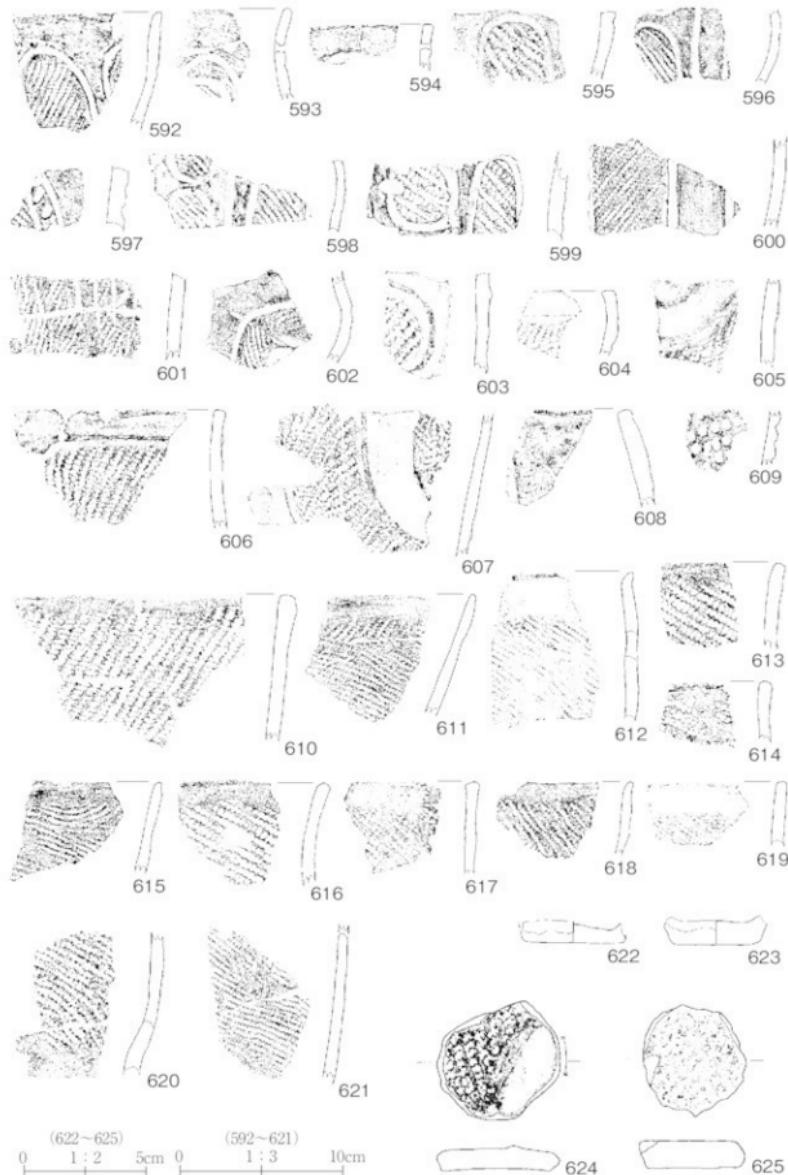
578は炉の周辺で出土した大木10式新段階で、口縁部～胴部下半までが残存している。縄文を地文と



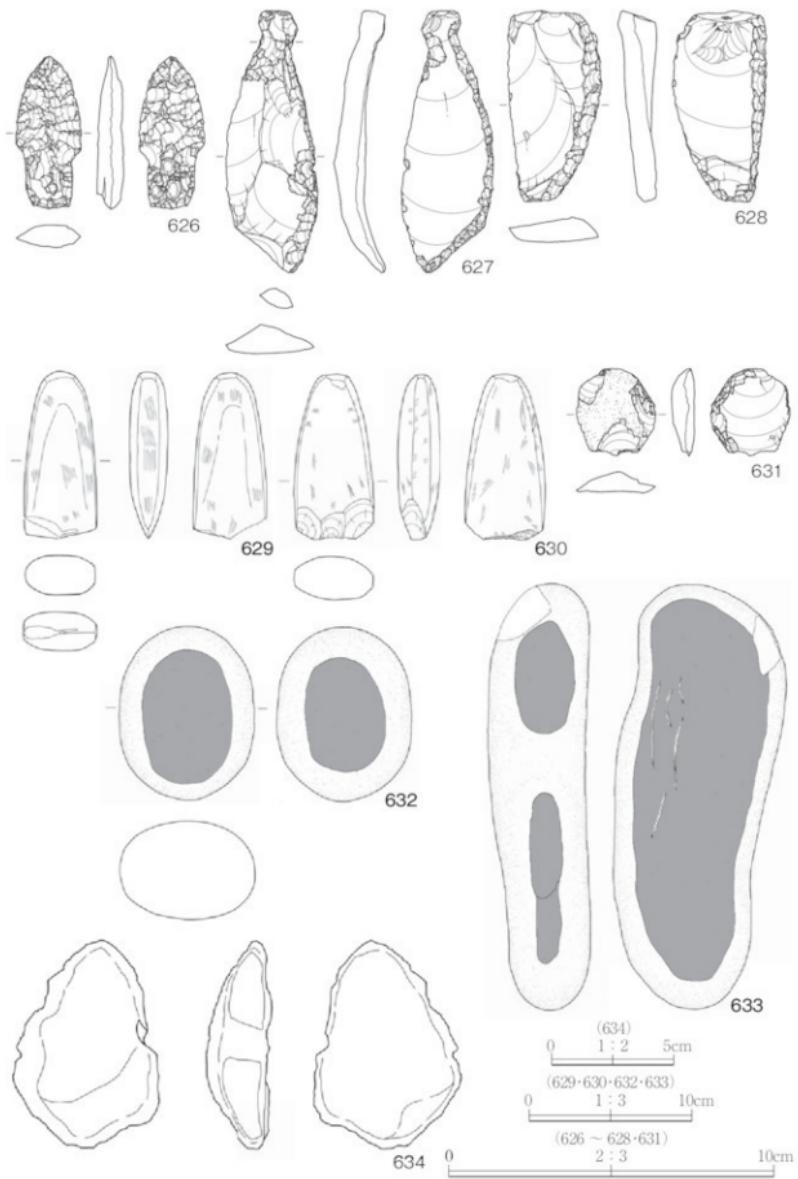
第98図 29号住居跡 (2)



第99図 29号住居跡出土遺物（1）



第100図 29号住居跡出土遺物（2）



第101図 29号住居跡出土遺物（3）

し、無文の区画文が施文される。579は全体の形態が復元できた4単位の波状口縁で胴部上半に隆帯による円状の区画文が施文される。大木10式古段階。580も埋設土器である、口縁部と胴部下半を欠損する。大木10式中段階。581～584は粗製である。581はとっくり状を呈した小型の土器で、ほぼ完形である。582、583は底部片。584は炉周辺で出土した。口縁部以外は残存する。585から591は大木9式古段階で隆帯による区画や渦巻き文が見受けられる。592～603は大木9式新段階である。604～609は大木10式中～新段階である。609は刺突文が充填される。606～621は粗製である。

622、623はミニチュア土器の底部片である。624、625は土製円盤で縄文のみが施文される胴部片を転用しており、どちらも側面は打ち欠いたままで、632でわずかに摩滅の痕が認められた。

626は石鎚か。茎部の太さからみて石鎚の形態とは異なり、異形石器の可能性もある。627は1類の石匙である。縁辺の片面から二次加工を施し、刃部を作出している。628は不定形石器で同じく縁辺の片面から二次加工を施し、刃部を作出している、629、630は磨製石斧でどちらも刃部が欠けている。631はRフレイクとした。剥離面に刃部を作出したように見えない二次加工が巡るのでRフレイクの範疇に収めている。632は敲磨器類で厚みのある円錐を素材とし、両面に磨痕が見受けられる。633は台石で、偏平な梢円形の礫を素材として、側面と上面に磨痕が見受けられる。634は軽石製石製品である。三角形に整形し、また側円に穿孔したような挿りが認められた。

【時期】 炉から出土した土器（580）の時期から大木10式中段階と判断した。

30号住居跡（96・102～104図、写真図版26・76）

【位置・検出状況】 調査区南西側、IB22d、22eグリッドに位置する。IV層上面で検出した。29号住居跡と重複する。

【その他の遺構との重複】 29号住居跡と重複し、本遺構の方が新しい。

【平面形】 不整な梢円形 【規模】 長軸430cm・短軸405・深さ55cm

【埋土】 3層からなる。暗褐色シルトを主体とする。堆積状況から自然堆積と推測するが、西から東へ流れるような堆積がみられる。所謂「レンズ堆積」ではない。住居廃絶後に起こった想定される斜面崩落の影響を受けている可能性がある。

【床面・壁】 床面は炉を検出した面を床面とした。東側へ緩やかに傾斜しているが、概ね平坦である。南東側の床面は後世の削平により失われている。壁は南西側と北側に若干残るがほとんどが失われている。

【炉】 2つ確認された。炉1は複式炉で石圓部3個と前庭部で構成され、長軸204cm、短軸70cmを測る。炉石は全て花崗岩を用いている。前庭部が石圓部の長軸方向からずれているが、炉を設定した当初からそのように構築したものと考えられる。埋土は暗褐色シルトを主体とする。真ん中と前庭部側の石圓部の使用面から8cm上の位置に現地性ではない赤色化した焼土の堆積層を確認した。炉の使用面は石圓部によって高さが異なっている。奥側の石圓部は床面から6cm掘り下げられており使用面は被熱している。真ん中の石圓部と前庭部側の石圓部はともに床面から14cm掘り下げられ、ほぼ同じ高さであった。真ん中の石圓部の使用面は赤色化が激しく焼土化している。歪んだ横長の長方形を呈し、左側には埋設土器が斜位に設置されている。前庭部側の石圓部は他の石圓部に比べ最も広い。使用面は被熱の影響でわずかに焼土化している。前庭部は巨礫が占めており、当時からの原位置をとどめているものと考えられる。

炉2は石圓の一部が失われた状態で検出された。埋土は住居埋土と類似する。床面から12cm掘り下げられ、使用面から被熱し焼土化した土壤は検出されなかった。

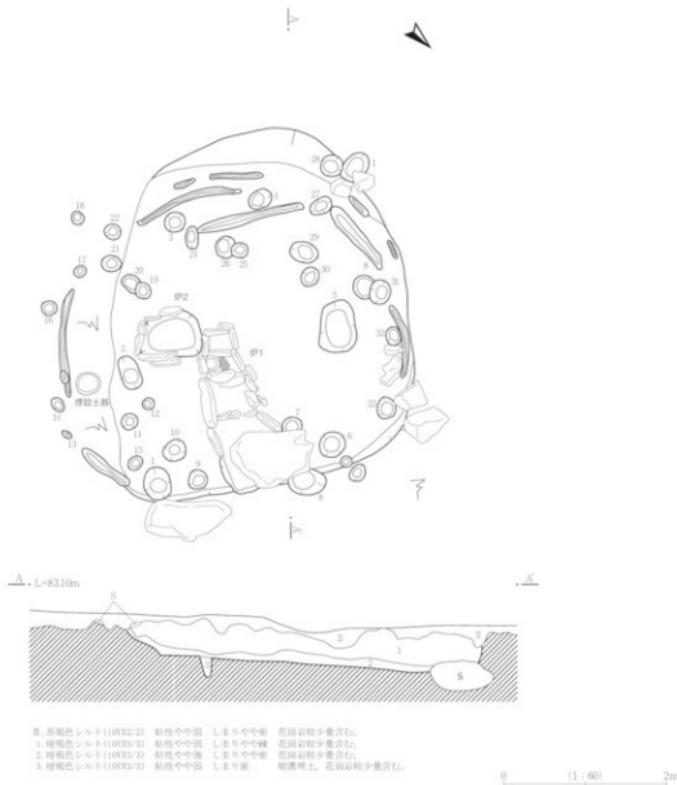
【付属施設】柱穴33個を確認した。そのうち6個（Pit 1～6）は主柱穴と考えられる。

【出土遺物】縄文土器、土製品が出土している。埋設土器の他、炉の周辺から出土するものが多い。

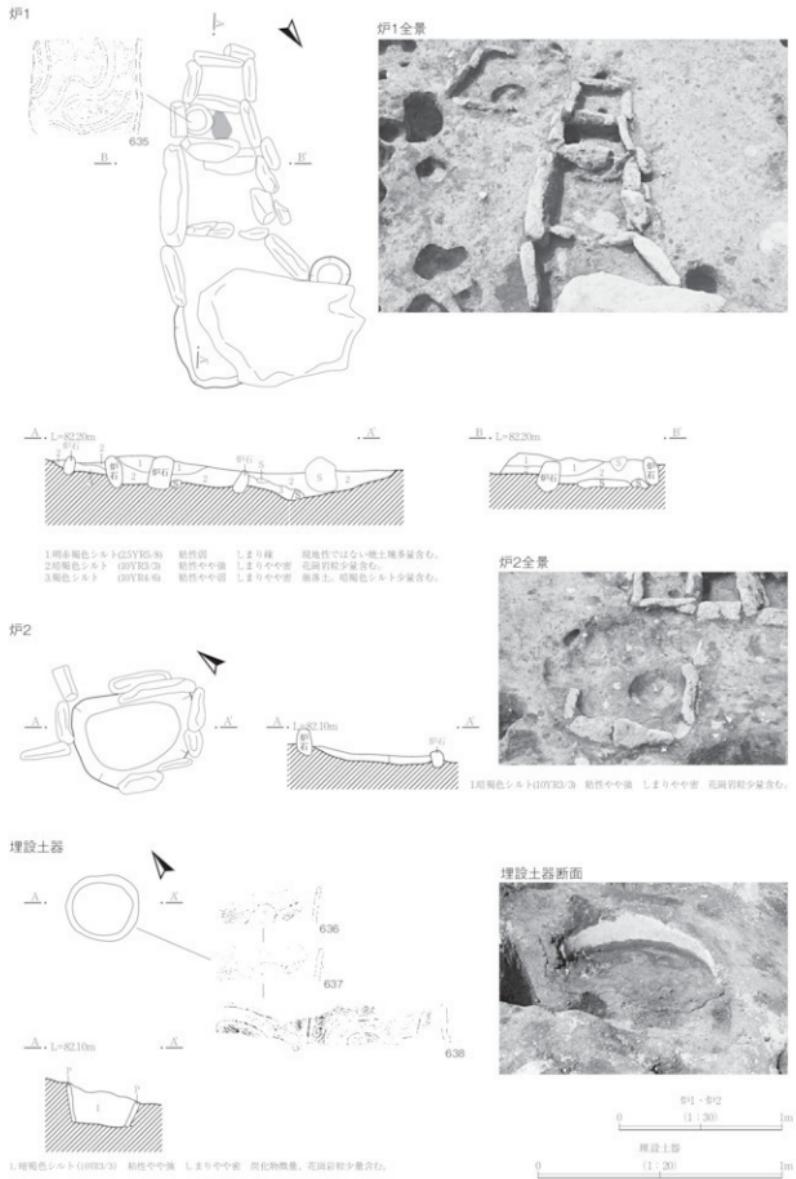
635は炉の埋設土器で、胴部のみ残存する。大木10式中段階である。636～638は同一個体で、埋設土器である。残存状態が悪く、大きく3点の破片としてしか取り上げられず、接合部分が見当たらなかった。大木10式中段階である。639、640は粗製である。

641は土製円盤である。胴部片を転用し、側面の広い範囲が摩滅している。

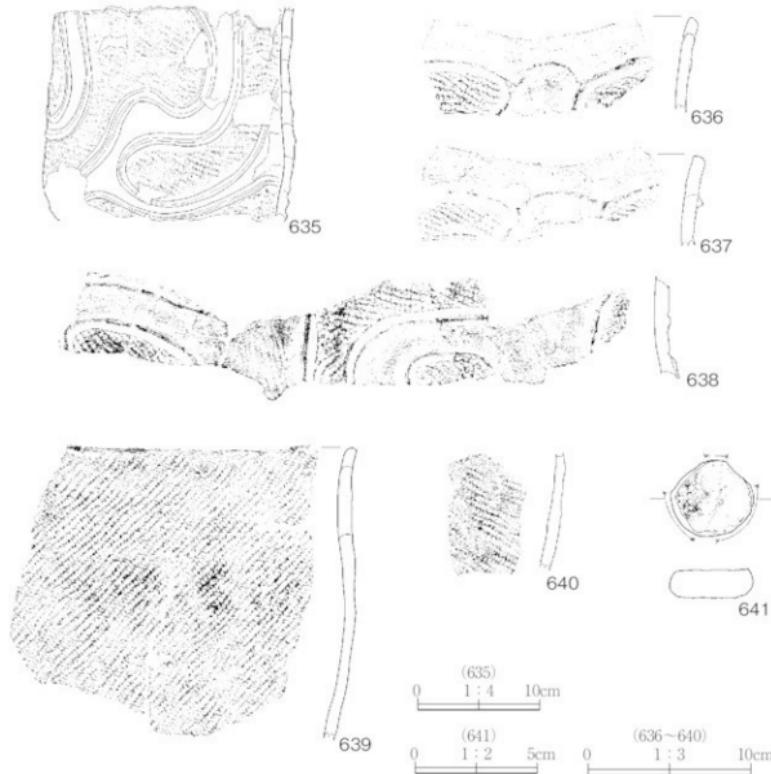
【時期】炉の埋設土器（635）の時期から大木10式中段階と判断した。（久保）



第102図 30号住居跡（1）



第103図 30号住居跡（2）



第104図 30号住居跡出土遺物

31号住居跡（第105図、写真図版26・76・112）

【位置・検出状況】調査区中央、I A24vグリッドに位置する。IV層上面で検出した。斜面崩落と重複する32号・33号住居跡によって遺構のほとんどが削平されており、炉の一部のみを検出したにすぎない。

【その他の遺構との重複】32号・33号住居跡と重複する。本遺構が最も古い。

【平面形】不明。【規模】不明。

【埋土】検出できていない。炉の上面に堆積する土層はすべて基本土層のⅡ、Ⅲ層類似土であることから、遺構上部は、崩落によって壊されていることが窺える。

【床面・壁】床面は炉を検出した面を床面とした。炉の周辺のみの検出であるが概ね平坦であると推測される。壁は確認できていない。

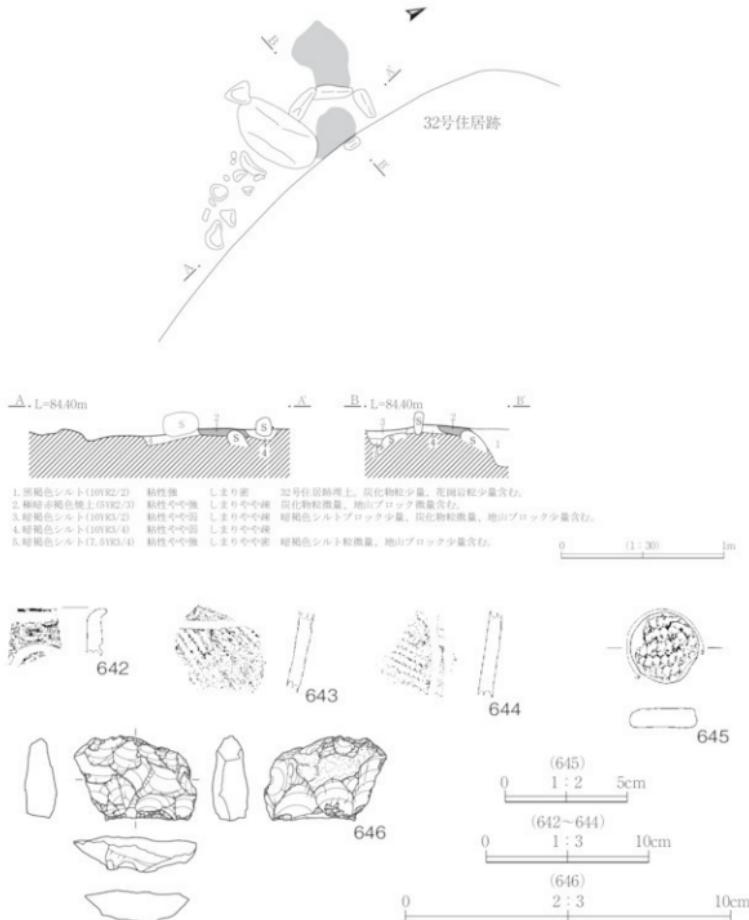
【炉】石開部と推定される。ただし炉石の一部を検出したにすぎず、全容は定かではない。方形基調

と推定され、 $51 \times 41\text{cm}$ を測る。炉の東側の一部は32号住居跡によって削平されている。炉内埋土は確認できていない。使用面は概ね床面と同じ高さに構築される。弱い焼成の痕跡が認められ、焼土の広がりを確認した。また炉外の炉石に接する範囲で、弱い焼成の痕跡が認められ、被熱により、不整形な焼土の広がりを確認した。

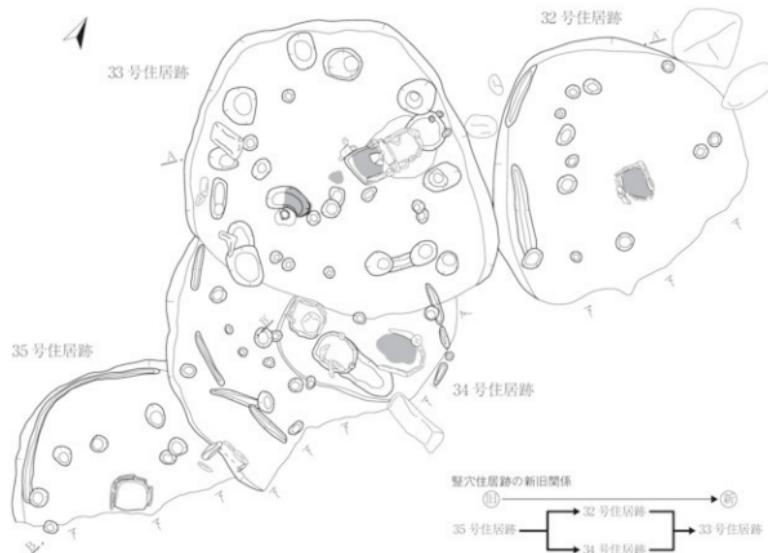
〔附属施設〕 不明。

〔出土遺物〕 繩文土器、土製品、石器が出土している。本遺構は炉とその周辺のみ検出しており、したがって出土遺物も少ない。

642は深鉢の口縁部片で、口唇部が外へと屈曲する。口縁部には沈線による区画文が見受けられる。



第105図 31号住居跡・出土遺物



32号住居跡と33号住居跡の重複関係



34号住居跡と35号住居跡の重複関係



第106図 32~36号住居跡重複関係

大木10式の範疇に収まる。643・644は胴部片で弦線による区画文と縄文が見受けられる。縄文は充填技法で施文されており、したがってどちらも大木10式の範疇に収ると考える。

645は土製円盤である。縄文のみを施文した胴部片の転用で側面の広い範囲が摩滅している。

646は楔形石器で上下二方向から剥離している。

【時期】 時期判断できる遺物が少ないが、出土した土器（642~644）の時期を根拠とすれば、大木10式期の範疇と推定する。

32号住居跡（第107～110図、写真図版27・76・112～114）

【位置・検出状況】調査区中央、I A24vグリッドに位置する。IV層上面で検出した。なお、本遺構は斜面の崩落により、本遺構の東側一部が消失している。

【その他の遺構との重複】33号住居跡と重複する。本遺構の方が古い。

【平面形】不整な梢円形 【規模】長軸（408）cm・短軸438cm・深さ30cm

【埋土】2層（第106図2・3層が相当する）からなる。黒褐色シルトを主体とし、炭化物や暗褐色シルトブロックが混入する。堆積状況からみて自然堆積と推測するが遺構の残存状況から見て斜面崩落時に流入した堆積土とも考えられる。

【床面・壁】床面は炉を検出した面を床面とした。概ね平坦である。壁は消失した東～南壁を除き、北～西壁が残存全周する。緩やかに広がりながら立ち上がる。

【炉】石圓炉である。方形で一边60cmを測る。炉石は花崗岩を利用し偏平だがふそりいな礫を素材とする。炉内の埋土は黒褐色シルトを主体とし、住居埋土に類似する。炉内の使用面は床から15cm掘り込んで構築している。使用面の被熱は弱い、焼土は炉内全体に広がるものわずかに赤色化する程度である。炉の掘り方は小さく、炉石も概ね使用面に設置するのみで構築している。

【附属施設】柱穴12個を確認した。配列からみてPit 1・3・7・9は主柱穴の可能性がある。

【出土遺物】縄文土器、土製品、石器が出土している。また壁溝内からフレイク類17点が集中的に出土している。

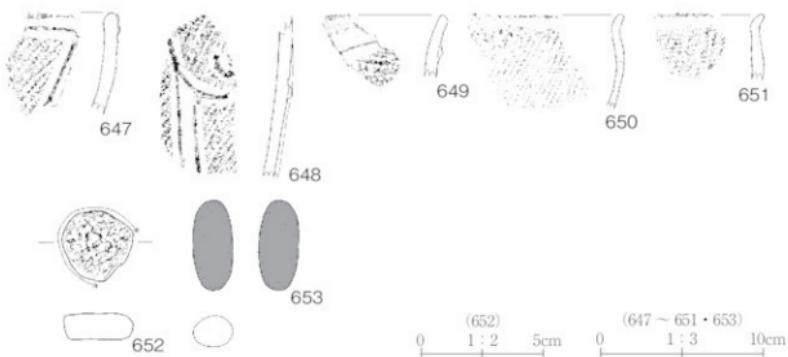
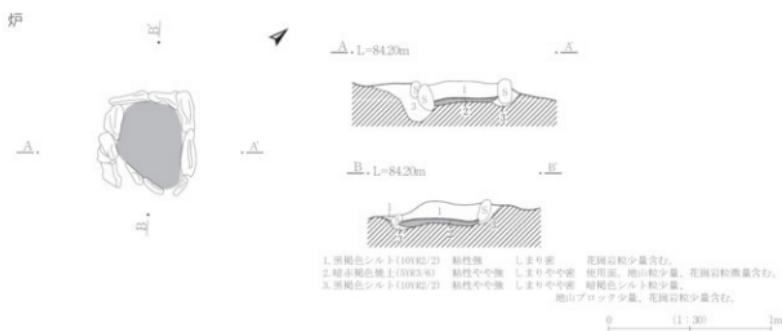
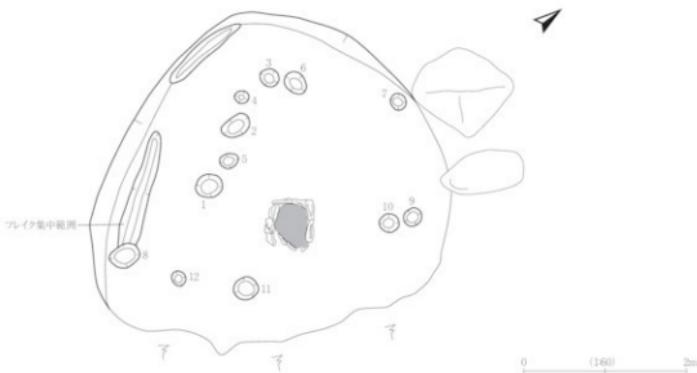
647、648は大木8b式である。細い隆帯が口縁部および胴部上半を横位に巡り、また胴部下半へと垂下する。649は大木10式か。微隆帯による区画文が施文される650、651は粗製である。

652は土製円盤である。胴部片を転用し、側面の半分以上が摩滅している。

653は敲磨器類である。小型で棒状の礫を素材とし、全体に磨痕が認められる。

654～670は壁溝内から出土したフレイク類17点である。フレイク16点とUフレイク1点からなり、3つの母岩で構成される。3母岩とも色調は類似しており、灰色を呈する。これらのうち、フレイク10点が接合している（接合資料①～④）。接合資料①・②はフレイク2点が接合した。どちらも自然面を打面とし、同一方向から剥離作業を行っている。接合資料③はフレイク3点が接合した。自然面が残るフレイクで、同一方向からの剥離作業であるが、打面が調整されている。接合資料④はフレイク3点が接合している。自然面が残る。少しづつ打面を変えながら、概ね同一方向から剥離作業を行っている。

【時期】出土した土器は小片が多いが、そのなかで647・648の時期を基準とし、大木8b式と判断した。



第107図 32号住居跡・出土遺物（1）